
東方水竜宮

亥紙 辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方水竜宮

【Nコード】

N6701H

【作者名】

亥紙 辰巳

【あらすじ】

12/17 第二十八幕 幕裏三を投稿

お陰様で六萬アクセス

読みは『とうほうすいりゆうぐう』時系列的には地霊殿の後の話、霊夢さんが頑張る予定。ストーリー物ですがキャラいっぱい出したので、寄り道と脱線が多いです。

原作設定に出来るだけ忠実にとは思ってますが、最近無理だと諦めました、オリジナル要素多……、魔法体系や魔術観、世界解釈等の原作に描写の薄いものに関してはオリジナル要素多。

序幕 ｛Daily life ｝（前書き）

東方二次創作です。

そういったものが嫌いな方にはオススメ出来ません。
東方よく知らない方にはあまりオススメ出来ません。

序幕 〈Daily life〉

博麗神社の巫女の朝はわりと早い。

雀の声で目を覚まし、馴染みの巫女装束に袖を通して身支度を整える。

米を炊き、お味噌汁とお新香をおかずに簡単な朝ごはんを済ませると改めて今日が始まった事を実感する、こつやつて気分を切り替えるのは大切だと常日頃から霊夢は考えていた。

そんな感じで巫女としての仕事が始まる、博麗神社の巫女、博麗霊夢は竹箒を片手に境内に向かった……。

ちよつと眠かったが朝露に濡れキラキラ光る八分咲きに差し掛かった桜を見ると少し元気が出てくる、今日も頑張ろう、そう思える。

それなりに広い境内でも半時（約1時間）程経てば掃き掃除は終わる。今日はこのくらいにしよう、そう思い一つ伸びをする。

「さて、今日は何をしようかしら」

ふと塩が切れそんな事を思い出す。

「ん〜麓の村へ塩を買いにいかないかね、中途半端な時間だし昼からにしましょ」

一人暮らしが続くと独り言が増える、霊夢もその例に漏れる事なく虚空に向かって話し掛けるのだった。

「そろそろ裏のタラの芽も食べ頃よね、後で取りにいきましょう」

などと今日の予定を考え、ご機嫌だったが、ふとその視界に賽銭箱が入る……。

軽いとは言えない足取りで賽銭箱の前に立ち、軽く揺すった。

賽銭箱からはチリンとも音はしない、分かっただけはいた、分かっただけはいても改めて確認すると霊夢の口から溜め息が盛大にもれる。

お賽銭の量は信仰のバロメーターである。

そして信仰とは神社のステータスだと、霊夢は思っている。

まったく自慢じゃないが、この博麗神社には参拝客はほとんど来ない。

それは霊夢にとって最大の悩みだった、どちらかと言うと信仰云々よりもお賽銭が入っていないと言う事実が誰に負けた訳でも無いのに負けた気がして気に入らないと言うのが本音だった……。

最近、神奈子の分社を建ててから、“参拝客がまったく来ない”から“参拝客がほとんど来ない”に進歩した、雀の涙とは言え多少は喜びたいがプライドのせいかな素直には喜べなかつたりする、でも信仰は信仰、お賽銭はお賽銭と、心の健康のためにそう思うようにしていた。

「は……」

霊夢が本日二回目の溜め息をついた時、そんな霊夢に上空から声をかける者がいた。

「賽銭箱に溜め息をかけると、賽銭が増えるのか？」

見上げるとそこには箒に股がり空を飛び、ニヤニヤと笑う少女がいた。

少女の名は霧雨魔理沙、大きな黒いトンガリ帽子に、黒のドレスタイプのワンピースに白いエプロン、長い癖のある金髪に金細工のような金色の瞳、少女は俗に言い“魔法使い”だ。

「……増えるわよ」

眉に皺を寄せてそう言うが、勿論、増えるはずはない、それでもそう言ってしまうのは霊夢の性格なのだろう。

「溜め息についても、幸せが溜め息と一緒に逃げるだけだぜ」

「私の幸せは余ってるから、賽銭箱に分けてあげてるのよ」

「そんな事が出来るのか、そいつは知らなかったぜ」

そう言うつと堪えるようにクツクツと笑い出す、霊夢はからかわれるのが腹立たしくはあったが、いつもの事だし気にしない、そのうち仕返ししてやるうと思うのだった。

「魔理沙、見上げるのも首が痛いわ、いい加減降りてきなさい」

「はいはい……よっつ」

そう言い少女はゆっくりと高度下げ、慣れた動きでフワリと着地する。

「ところで魔理沙、今日は何しに来たのよ」

「ん〜……、いつもと違う華麗な着地に気付いて欲しかったんだがな」

そう言っつて魔理沙は唇を尖らせる。

「はあ？何が違うのよ？」

「いつもはビュンと飛んで、スタッと着地するんだが、今日はフワツと着地したんだぜ」

魔理沙は無駄に自信ありげに無駄の無い扁平な胸をそらせる。

「何よそれ？」

「この前パチュリーに借りた本に、箒から優雅に華麗に着地するのが魔術の腕の見せ所って書いてあったんだぜ」

「ふ〜ん、そうなの」

「そうなんだぜ」

魔理沙はそう言い、更に無駄の無い胸を反らせる。

「もしかして、それを見せに来たの？」

「そうだけ」

「……魔理沙……暇なの？」

「そうとも言っぜ」

「はあ……」

霊夢は本日三回目の溜め息をつく。

「どうした霊夢、悩み事でもあるのか？」

「はいはい、今から裏にタラの芽を取りに行くから手伝いなさい」

流石に呆れてきた、今日の予定の軌道修正をする。

「構わないぜ」

「ザルを取ってくるから魔理沙は先に行ってて」

「わかった、先に行ってるぜ」

すると魔理沙はフワリと箒に股がると、ヒューッと神社を飛び越えの奥へと消えて行った。霊夢はそれを目で追い、どうせ直ぐにそんな事忘れるだろう、魔理沙は単純だし……とちよつと失礼な事

を思う。

魔理沙が視界からいなくなると、気分を切り替え取ったタラの芽をどうやって食べようか思案する。

「お味噌汁に入れるのもいいけど、やっぱり天麩羅よね、ん〜ふ〜ん　楽しみ〜」

鼻歌まじりに足取り軽く台所へと向かう、色気より食い気、霊夢も余り人に言えないくらいには単純だった。

二人分のザルを用意し、さて一頑張りするかと思ったその時、神社に爆発音が響く。

「なっ何？　何事よ!？」

更に続く爆発音、嫌な予感がする、ざわざわする気持ちを抑え、霊夢は爆発音の元へとザルを片手に駆け出した。

裏山の空を飛び交う、カラフルな光弾や拡散する幾重もの空気の鎌を見て、霊夢は今年の花火大会が楽しみだわ〜、と現実逃避をする。

勿論、花火ではない。

「ん〜！ 激写ですね。

見出しはこうです！

『霧雨魔理沙！ 博麗神社のタラの芽を盗む！ 友情を隠れ蓑にした、霧雨魔理沙の黒い思惑を暴け！！』
うん、良い記事になりそうです」

「まったく失礼な話だぜ、私はまだ盗んでないぜ！」

「わかりました。

今から盗むのですね？ ささ！ どうぞどうぞ、景気良く盗んじや
つて下さい。

綺麗に撮ってあげますから」

霊夢は頭痛と軽い目眩を覚えた……。

神社の裏で景気良く弾幕を展開し、ヒュンヒュンと飛び回るのは
魔理沙ともう一人、いや、もう一匹の鴉天狗だった。

短く揃えた黒髪に頭襟を被り、白いシャツと黒いミニスカートに
一本歯下駄、カメラ片手に余裕綽々、葉団扇を振り空気の鎌で魔理
沙お得意の星形弾幕を次々と相殺している。

「ちよっと！ アホ魔理沙にアーパー天狗！ 人ん家の裏で弾幕ら

ないですよ！ 他所でやんなさい！ 他所で！」

そんな霊夢の叫びも弾幕ごっこに夢中の二人には、さっぱり届かない、こめかみをヒクつかせながら、今日はいいい日になると思ったのに……と一人ごちる、怒りの堤防は決壊寸前だ。

「我慢……我慢よ霊夢、私は楽園の素敵な巫女よ」

そう自分に言い聞かせる、とりあえず結界で二人の弾幕を潰して止めよう、背中から玉串を取り出そうとする。

金だらいを頭にぶつけた様な突然の音と頭部への衝撃、霊夢の視界が反転し、それに続く後頭部への衝撃。

流れ玉が額を直撃、そのまま仰向けに倒れ後頭部を強か打つただ。

「痛い……痛いわ……とつても痛いわ……」

弾けるように起き上がり、普通の人間の力では不可能な動きをみせる。

巫女服の裾がはためき、袖が舞い上がる、スペルカードを取り出しスペルを唱えるとスペルカードは白煙をあげ燃え上がった。

「……頭きたわ……」

霊夢の指先が光る軌跡を残し空を斬り、印を結ぶ、そして玉ぐしを魔理沙と天狗の間の空間に向け術を発動させた。

けりを着けようと距離を詰める魔理沙と天狗の間に濃く張り巡らされた弾幕が一瞬で消滅する。

「あ？」

「おや？」

二人が謎の現象を不審に思った瞬間、半間弱（約50m弱）ほど離れていな二人の距離が突然0になる。

ゴスツ……。

急な出来事に二人は対応できる訳はなく、自慢のスピードもそのままにお互い激突、墜落した。

「ふん」

あの二人には罰として妖怪の山から、ありつたけのタラの芽を採らせよう、そしてタラの芽の天麩羅をつまみに今夜は夜桜でも楽しもう、霊夢はそう思うのだった。

気持ちがすっきりすれば、もう次の事を考える、霊夢は気分の切り替えが早い、影で頭が春、と呼ばれる由縁である。

「よし、墜落した二人を見付けてタラの芽を採らせたら、麓に塩を買いにいかないと、忙しい忙しい」

霊夢はザルを片手に揚々と裏山に入っていた。

「ひゃっ」

機嫌のなおつたのも束の間、ぬかるみに足を取られ派手に転ぶ、今日はどうやら厄日のようだ。

「いたたたたく、お尻打ったー、も……、最近雨降ってないのに、何でぬかるんでるのよ！」

苦言吐き、立ち上がり泥だらけになった服を叩く、随分と情けない恰好になった自分に今日4度目のため息をつく。

そこで、周りの不自然に気付いた。

「山が……水浸しね……」

最初は日陰とコケなんかのせいで水がずっと残ってたのだろう、そう思っていた、山の光の差さない所では別に珍しい事ではない。

でも、最近雨は降ってないはずだ。

明らかにおかしい、水の量と範囲が広すぎる。

「ん……、昨日の夜中にでも雨降ったのかしら、まっ……そんなところですよ」

霊夢は若干の引っ掛かりを覚えたが、深く考えない事にした、頭が春、あくまで能天気なのだ。

ただ、その引っ掛かりが、これから起こる異変の前触れである事は今の霊夢には知るよしもない事だった。

序幕 ｛Daily life ｝（後書き）

はい

そんな感じの東方水竜宮です。

東方っぽくしたいのですが、なかなか難しいものです。

わりと行き当たりばったりなので、こんな展開とかどうよ？

なんて意見をもらえたら執筆燃料になるかもしれません。

ちなみに

魔理沙と射命丸に向かって使った霊夢の術、あれなんだよ

訳わかんねえよ

と言う意見もあるかと思いますが

それは次回の話という事で…

第一幕 異変起 (Natural phenomenon) (前書き)

長編ははじめてだったりします。

遅筆わりに早く書けたと思いますが、人よりは遅いのです。

第一幕 異変起 〈Natural phenomenon〉

雑木が生い茂る山の上空を人間が空を飛ぶ。

肩から二の腕を露出した特徴的な紅白の巫女装束に身を包み、赤い大きなリボンで黒髪を束ね、颯爽と空を飛ぶのは博麗霊夢である。

「やっぱり、天気の良い日は気持ちがいいわ」

春の空気が頬を撫でる、麓までは歩いて行けるのだが、単純に距離があるので、飛んだ方が早い……。

というのもあるが、途中で妖怪に出会うのは面倒だからと言いのが多分にある。

博麗神社の主な収入は妖怪退治の報酬だったりする。

だからと言って闇雲に妖怪を退治しても報酬がある訳ではないし、そもそも妖怪退治が好きないでもない。

あくまで博麗神社の巫女としての仕事であり、けして趣味ではない。

出来れば遭遇したくないので、普通の人間同様、妖怪との遭遇は極力避ける為に妖怪がよく出没する山道や森の中を最短最速の空路を使うようにしている。

そんな事情はあるにしろ空の散歩が好きというのが多分にある、そんな理由で霊夢は空を飛んで村へ行くのだ。

「魔理沙と射命丸にはザルがいつぱいになるまでタラの芽を採ってこさせるように言ったし、今日の花見は楽しくなりそうね、ついでは輝夜に竹の子でも貰いにいこうかしら、花見、楽しみだわ」

季節を感じる為に花を愛でる、季節の移り変わりを縁側でお茶を飲みながら、のんびり眺める、そんな時間が霊夢はとても好きだった。

勿論、季節を感じるには、旬を食べる事はとても大切である。

そしてお茶の代わりは酒でも良い、それが霊夢の持論である。

ゆっくり飛んでも四半時（約30分）もすれば麓の村が見えてくる……。

ハズだった……。

「あ……れ……？」

村があるはずの場所にあったのは春の陽射しを受けキラキラと輝く、青い水面をたたえた大きな湖だった。

それも巨大なと表現するに値する程大きかった、何せ対岸が見えない。

家の屋根だろうか、水面から小島のようにポツポツと出ている藁葺きや瓦らしきものが見える、何とも奇妙な光景だった。

「異変ね！」

調べてみよう、先ずそれをしない事には始まらない、そうと決めると行動は早い、霊夢はスピードを上げ、村だった場所へと向かった。

「村が完全に沈んでるわね……」

日の光を反射させキラキラと光る水面が広がっている、水底には屋根が並んでおり、背の高い木や矢倉だけが水面から頭をだしてい

る、よく見れば『やきとり』と書かれた看板がプカプカ浮いてたりする、塩はどつやら買えそうにない。

つい最近まで人が住んでいた場所が水の底というのは不気味なものだった。

「村の人はどうしたのかしら……」

少なくとも人の気配はないし、この場で気配のない人間は土左衛門だろう。

出来れば第一発見者にはなりたくないのですが、見つからない方がいいな〜などと思う。

「お前は……博麗霊夢か」

声のする方に振り向くと、裾に穴の開いた変なデザインの青いワンピース、青い宝石のような膝まで届く長髪に弁髪帽のような帽子を被った女が水面に立っていた。

「あつ！ 慧音じゃない、何やってんのよ！ ちゃんと村を守りなさいよ」

「開口一番その言い種か……、相変わらず失礼なヤツだ、まあ……、村は守れなかったが、村人は無事だ、安全な場所に隠した」

心底呆れたようにため息を吐き、上空の霊夢を睨み付けた
霊夢も負けじと睨み返す、慧音にはまったく睨まれる筋合いはない。
この女とまともに付き合っても疲れるだけだ、そう思うと慧音は
先に口を開く事にした。

「ところで霊夢、何か心当たりはないか？」

「犯人は現場に戻ってくるものよ！ だから慧音！ あんたが犯人
よ」

この女は、なんでこんなに人の話を聞かないのだろう……、慧音
は頭痛を覚え、こめかみを押さえる。

「異変が起これば、見掛けた妖怪を片っ端から退治するのは止める、
後、現場はここじゃない、この湖の中心は霧の湖の方だ、それと私
は半分妖怪だが人間側の妖怪だ、少しは考えろ」

「え！？ 霧の湖まで続いているの！？ じゃあ、またレミリアがや
ったの？」

「そんな訳あるか……、水を嫌う吸血鬼がわざわざ水を増やすはず
ないだろ……、今頃、魔法使いに結界を張らせ、館に引き込もつて
るはずだ」

「じゃあ、誰よー！」

何故、怒鳴られないといけないのだろうか、あまりにも理不尽と言えよう。

慧音は心底理解出来なかったが、ぐつと堪える事にする。

自分は村の人間を守らないといけない、妹紅は水とは相性が悪いし、妹紅は人目にふれさせたくないから、任せきりには出来ないの、自分で異変を解決とはいかない……、ならば、霊夢に任せるのが得策だろう。

「生憎、それは私にも分からん、ただ霧の湖が怪しいのは確かだ、この水の出所は霧の湖だ、間違いない」

「そうね……霧の湖ね……、まあ、場所が分かれば簡単ね、サクサク異変を解決するわよ、ありがと、行ってくるわ」
「そう言いと霊夢はさっさと飛び立とうとする。」

「霊夢」

慧音はそれを引き留めた。

「何よ？」

まだ何かあるの？ そう言いたげな顔で霊夢は振り返った。

「……頼んだぞ」

「頼まれるまでもないわ」

そう言いと踵を返し、何の未練もないかのように、霧の湖の方角

へ飛び立っていった……。

そんな霊夢の姿を見ていると慧音は不安な気持ちになる。

ただ、それは異変の事ではない。

霊夢という人間は人間にしては飛び抜けて強い、幻想郷全体から見ても上位の部類に入る。

レミリア・スカーレットによる『紅霧異変』

西行寺幽々子による『春雪異変』

蓬莱山輝夜、八意永琳らによる『永夜異変』

伊吹萃香による『三日置きの百鬼夜行』

比那名居 天子による『異常気象』

小さなものも色々あるが主だったものだけで、これだけの異変を霊夢は解決している。

慧音自身、二度にわたって霊夢と戦い、敗れている、余談だが、大妖怪八雲紫のサポートがあつたとはいえ、満月の夜に負けるとは思っていないかった。

そんな慧音だからこそ、霊夢の実力に疑いを持つ要素などないし、慧音が思つ不安はそんな事ではない。

博麗霊夢は何故あんなに、異変の解決に駆り立てられるのか？

人の行動原理というのは単純だ、人は自分が望む事しかしない。

例え過酷な労働であろうと、人はそれをしようと望まない限り、手足が動く事はない。

そして、その動く為のエネルギーが心だ。

親子関係なら愛

復讐なら恨み

そういった心のエネルギーで人は動き出す。

だが、霊夢からはそのエネルギーが感じられない。

霊夢に聞けば「私は巫女よ、異変を解決するのは当たり前よ」と答える。

ただ、そこからはプロ意識や職業意識のような、ある種の義務感を感じられない。

慧音はそれが不気味でならなかった、熱い鉄に触れば、意識をしなくとも手を引っ込めるように、何かの衝動に突き動かされるように博麗霊夢は異変を解決する。

そう思えてならなくて、慧音はとても不安だった。

だが、慧音には守るべき村の人、そして誰よりも大切な守るべき友、妹紅がいる。

特に親しい訳でもない霊夢を優先させる事は出来ない。

霊夢の事は後ろ髪を引かれるところはあったが、慧音には慧音が決めた自分の義務がある。

私はこんなところでじつとはしていられない。

妹紅は腕っぷしは強いが心まで強い訳じゃない。

死なないせいで、人に不気味がられ、疎まれ、弾圧された
それでも妹紅は人を恨めない、人を恋しがる。

どんな強かろうと、どんな身体になろう、彼女は人だ。

人は孤独に耐えられない。

妹紅とはじめて会った満月の夜、雨の竹林の中、隠れるように膝
を抱えて縮こまる妹紅の怯えるような、それでも人が恋しくてたま
ならい、そう訴えかけるような瞳、その瞳は今でも忘れられない。

この人間を私は守ろう、私は自分にそう誓った。

私は誓いを果たさなければいけない。

米粒のように小さくなった霊夢の後ろ姿を目で追う、そして、決
意した様を守るべき者達の元へと飛び立っていった。

第一幕 異変起 (Natural phenomenon) (後書き)

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。

そして申し訳ございません。

序幕の後書きで霊夢の術の正体が云々言って結局書いてないです。

話が中途半端になりそうになったので、ずらしちゃいました。

そんな訳で今回は慧音登場です。

慧音さん長々と語ったわりに今後の出番の予定はなかったりします。

実際どうなるかわかりませんが…

ちなみに

次は霧の湖ですが

突然現れた湖沿いに湖に行かせるか

ショートカットして魔法の森の上空を行かせるか迷ってます。

前者ならチルノや美鈴や咲夜が出るかも知れませんが

後者ならアリスや霖之助、魔理沙が出てくるかも知れない

さて…どれにしましょうか…

第二幕 氷と結界 〈Trifling thing〉 (前書き)

この辺から変な設定が追加されます。

第二幕 氷と結界 〈Trifling thing〉

湖の上を飛ぶのも気持ちがいいものだ。

私、博麗霊夢は空を飛ぶのが好きである。

例えばそれが異変解決の為の道中だとしても、気にしなければいい。

異変は異変、楽しみは楽しみ。

何事も割りきると言うのはストレスを貯めないコツだ。

ただ気掛かりが若干ある、こついった規模の大きな異変、特に今回のような自然に関わるような異変の場合、その異変と一緒に自然の具現である妖精達が活発に動き出す。

そして小生意気にも弾幕を向けてくるのだ。

どうせ、たいした弾幕じゃなし寸単位で避けるだつて難しくもない。
面倒臭い事に代わりはないが、今回は妖精がまったく出てこない。

そう……文字どおりまったく出てこない。

異変がなくても外に出て妖精を見掛けない事はない、本当にいいのだ。

「ここまでいないと逆に気持ち悪い。」

でも、面倒臭いのがないんだし、いいわよね、何事も発想の展開が大切、ものは考えようだ。

「良く来たな！ 霊夢！ 今日こそ最強のあたいがお前を倒してやる！」

「……………」

前言撤回、面倒臭いのがいた……。

そこには幼稚な台詞を吐く、幼稚な容姿の、幼稚な妖精がいた。

「ふっふっふー！ この湖はあたいの場所、湖もビッグになって、あたしもビッグよね！」

湖がビッグなのは分かるが、このバカがビッグになった気配はない。

「いくよ！ アイシクルフォーール！」

相変わらずの弾幕、代わりばえもせず、飽きもせず毎回アイシクルフォーールを撃ってくる、私のスペルカードでもないのに名前も覚えてしまった。

左右から鋭角に飛んでくる氷弾を最小限の動きで避ける、そして懐から御札を取り出し一気に加速、距離を詰める。

「あたいの弾幕を避けるとは、やるな霊夢！」

バカが次のスペルカードを構える。

だが、させない。

「パーーーフェクト……」

一息で間合いを詰め、スペルを発動させる為に構えた手を掴み、懐に入り込む。

そして御札を目の前に突き付ける。

「あ……う……う……」

勝負あり。

流石のバカでも今の状況は理解出来るようで、スペル詠唱の途中のまま、バカっぽく口を開けたまま固まっている。

「私の質問に答えなさい、あなたはこの湖にいつもいるんでしょう？
この異変について何か知らない？」

そしてバカはハツとした顔をしこちらを見上げる。

「異変が起きたって本当なのか!？」

このバカが何を言ってるのか、しばらく理解出来なかった文字どおり目を丸くしている私に向かって、このバカはまくし立てる。

「何があつたんだ霊夢、最強のあたいが異変なんてパツパツと解決してやる」

このバカがここまでバカだったとは知らなかった、それともこのバカに聞いた私がバカだったのか、まさか異変そのものに気が付いていないなんて……、そもそもこのバカはさつき私に負けた事をもう忘れているのだろうか、自信がどこから湧いてくるのか甚だ疑問だ。

全身の力が抜けていくのを感じる……、このまま湖に落ちてしまいたい気分だ……、落ちないけど……。

「……迷いの竹林で妖怪兔が暴れまくってるのよ……、だからさ、懲らしめてきて……」

「よし！ あたいに任せな！ さっそく懲らしめてやるわ」

そう言つとバカはヒューと飛んで行った。

言うまでもなく嘘だ、そもそも妖怪兔がどんなに暴れても異変とは言わない。

あのバカの事だきつと竹林で迷うから、しばらく戻ってこないだ

ろっ。

これでしばらく静かになる、さっそく調査を続行しよう。

高度下げ水面に着地する、微かな風が髪を揺らす、穏やかな湖はサイズさえ目をつぶればいつもどおりだ。

水面をよく見ると見慣れない鮮やかな色の魚が泳いでいる、霊夢は水面にしゃがみこむ。

「美味しそうね……、夕御飯に一匹持っていこうかしら……」

袖をまくり丸いどんくさそうな魚に狙いを付け、集中する。

神経を研ぎ澄まし、そして水中の魚に素早く手を伸ばす。

「よし！ ゲット！ 意外と上手くいくものね」

丸くて不細工な顔だが、どこと無く愛嬌があるような気がする魚だった。

だが……。

「ひゃっ！ 何これ!?!」

その魚が突然膨れ出した、びっしりし魚を放してしまう、霊夢の手を逃れた魚はもう手の届かない湖の奥底へと姿を消していった。

「あゝあ……残念……何なのよ、あの魚」

自分の失態は全部魚のせいよ、と言うように、その視線を湖の底に投げ掛ける。

そんな霊夢の背後の空間に突然二つリボンが現れる、それは上下に伸び、ずるりと空間が裂けた。

そのスキマの中は底の見えない赤黒い空間に手が漂い、無数の不気味な目がこちら側を覗いている。

霊夢はその気配に反応する、半回転、体を轉身、そして後方に跳躍、離れ様にさっきまでバカに突き付けていた御札をスキマへ向かって放つ。

御札は霊夢の霊力により加速度を得て、高速で飛びスキマに入ると同時に爆発。

するはずだった。

スキマから霊夢が放った御札を指に挟み一人の女が現れる。

「巫女つて随分珍しい挨拶をするのね。

それと異変が起これば、見掛けた妖怪を片っ端から退治する癖、そろそろ治した方がいいと思うわ」

日の光を受け輝くブロンドにヘッドドレスをのせ、ポリウームのある白いドレスに紫色の八卦模様の入ったドレスを重ねる、紫色の瞳を怪しく光らせ、その女は大きな日傘を差し佇んでいた。

美しいというより妖しいという表現がぴったりくる、笑っている

のに笑っていない、不思議で不気味な雰囲気を持っていた。

それは幻想郷に住まうものなら誰もが知る存在、境目に潜む妖怪、妖怪の賢者、それは大妖怪八雲紫だった。

第二幕 氷と結界 (Trifling thing) (後書き)

チルノ登場チルノ退散

そして紫登場です。

ジヨジヨならゴゴゴゴゴと音が鳴るシーンです。

今回は話が長めになったので、途中で切ったのでショートサイズです。

出来るだけ暇な時にサラッと読める流さで書きたいので

そんな感じですよ。

東方っぽさって難しいですね。

正直諦め気味です。

ちなみに

霊夢が捕まえた魚は皆さんがよく知る魚です。

魚の正体がわかれば、異変の正体が見えてきたりします。

第三幕 永遠と刹那の境界 〈Boundary of moment〉(前書)

相変わらずの二次創作ですが、東方っぽさとか、どこかに飛んでいった気がします。

ついでパロディまで入ってたりします。

第三幕 永遠と刹那の境界 〈Boundary of moment〉

「巫女つて随分珍しい挨拶をするのね。

それと異変が起これば、見掛けた妖怪を片っ端から退治する癖、そろそろ治した方がいいと思うわ」

霊夢の放った御札をただの紙切れのように扱い、まるで何事もなかったかのように、八雲紫は現れた。

「ごきげんよう霊夢、二、三日ぶりかしら？」

小首をかしげ、ヒラヒラと手を振り、いつものニコニコとした信用ならない笑顔を向けてくる。

霊夢と紫は知らぬ仲ではない、それでも霊夢は警戒を解かない、日常なら色んな酒や食べ物を持って来たり、適度にお喋りなので縁側でお茶を飲む相手には丁度いい。

仲がよいと表現して差し支えない間柄だ。

だが、異変が絡めば話は別……。

私は人間、紫は妖怪、その線引きを忘れてはいけない。

ただの妖怪ならば、いつもの事……、でもこの異変に紫が一枚噛んでいるのなら、厄介以外の何者でもない。

正直戦いたくない、さつき放った御札は触れれば起爆する術式を

込めてあった、それを受け止め瞬時に解呪している。

解呪という術はデリケートな術で、術式を瞬時に判断する能力と知識、それに対応する術のバリエーション、そしてそれらを瞬時に行う術の高速施行、更に解呪する側は施術する側より術者としての力量が上回っていないといけない。

これらの問題をクリアしてはじめて解呪は成功する。

それを難無くこなす紫の実力はそれだけでレベルの高さをつかげる。

「どうしたの霊夢？ そんな怖い顔をして……もしかして……、この異変、私が一枚噛んでるとか思ってる？」

紫は妖しく笑う。

唾を飲み込む、玉ぐしを握る手の汗が煩わしい、紫の探るような心の読めないような雰囲気は苦手だ。

「違つとも言つなの？」

紫を強く睨む、ここで強気に出なければ、日頃の強気は強気の無駄使いだ。

「そつだとしたら……どうするの？」

「こつするまでよー！」

先手必勝

弾幕勝負は先手を取った方が有利だ。

袖から御札の束を抜き出し放ち先制攻撃を仕掛ける。
靈力を込めた御札は高速で紫へと飛来する、その数三十。

対する紫は余裕の表情を崩さない、空いた片手で扇子を振るい、
針状の弾幕を放つ、その数三十。

それらは全て御札に着弾、誘爆、相殺する。

爆発の煙が二人の視界を遮る。

先制攻撃はホコリを払うようにいなされた。
だが、靈夢に動揺はない、これも計算の内、この程度で倒せるはず
がない。

コンマ5秒は時間が稼げる、紫相手に油断も手加減も出来ない、
甘さを見せた瞬間ゲームオーバーだ。

最初から全力で行く、印を結び秘宝 陰陽玉を喚び出す。

靈夢の両サイドに両儀を表す白と黒の太極模様の球体が音もなく
出現する。

陰陽玉は靈夢が神仙術や靈力の放出などを行う際のデバイスの役
割を果たし、靈力運用効率の飛躍的上昇を可能とし、靈力の増幅装
置としての役割も果たす。

（畳み掛けるッ！）

靈力で御札を編みあげ投げ放つ、片手に四十、片手に四十

敵へ向かって一直線に飛ぶ八十の御札は各々が二つに分裂、更に分
裂、更に分裂、総数六百四十の御札が拡散、視界を奪う程の弾幕の

雨となって紫を襲う。

乾いた爆発音が湖面を震わす、辺り一面を白煙が覆う。

普段なら勝利を確信する会心の弾幕、だが相手は紫。

「アイツなら避ける」

呆けていても待っているのは反撃、ならば、やるべきは一つ、更なる追撃。

陰陽玉に霊力を注ぎ、新たな御札を編み上げる。

『霊符』 夢想封印

展開される大量の光球、あらゆる物理法則を無視し対象を追尾し襲う封印術式。

白煙の向こう側に向かって光球が殺到する、だが光球は途中で急激に軌道を変え上昇した。

「ッ……、上ね！」

弾かれるように上を向く、それは夢想封印の対象が高速で移動した証、大方スキマを使つての移動だろう。

そこにあつたのは霊夢を愕然とさせる光景だった。

そこには空を埋め尽くす太陽の群れ、数える事が馬鹿らしいほどの特大の光球が紫の背後の空を一色に染め上げる。

「上手く避けなさい、そうすれば骨一、三本ですむんじゃないかしら？」

『結界』 天と地の境目

扇子をゆるりと振るう、それを合図に無数の光弾が霊夢へと殺到する。

防護結界を展開する、この結界があの手球相手にどこまで機能するのかあやしいところ、だが避け切れなかった時の保険にはなる、当たれば敗北、守ればじり貧。それなら攻める、前に出て反撃の態勢を取るしかない。

霊夢は飛来する光球の群れへと自ら飛び込んで行った。

眼前に迫る光球、これから先はまばたきすら自殺行為。体の軸をぶらさないように必要最低限の動きで避ける、大きく動けばバランスが崩れ咄嗟の動きが出来なくなる。第一そこに潰れ込まれたら、じり貧どころでは無い、将棋のように詰まされるだけだ。

ならば、引き付け避ける、迫る光球を引き付け避ける、寸単位での最小の避け。

ガリツ……ガリリ……。

光球が結界をカスる音が耳をつく、時間で言えば、ほんの数秒。いや、それよりも短いだろう、だが、霊夢にとっては永遠にも感じられる長さ。

その永遠の中の刹那、頭の中から全ての雑念が消し飛んだ。体はとう限界、精神力で体の舵をとっているような状態だったの、もう駄目か……、白む視界の先に霊夢はそう思う。

否、

そんなはずはない、これが限界のはずがない、幾ら弾幕が濃かろうと、幾ら弾幕が速かろうと、避けられぬはずがない、避けられないはずがない。今までだって避けてきた、そしてこれからも。ならば、抜ける、絶対に抜ける、そして勝つ！

(もう……少し……)

最後一つを避ける。

光球が覆い隠していた太陽と青空が視界いっぱい広がる、一瞬目を奪われるがすぐに紫を見付ける。

余裕の笑みをたたえ一步も動かず、そこにいた。

「余裕ね、紫」

余りの余裕ぶりに些か腹がたつ、ならば怒りをぶつけるまで。それに次の弾幕は控えてない。

「次は私の番よ」

上空の敵を睨み付けた、紫はそれに応えニッコリ笑う。

「残念……まだ私の番よ」

そう言つと紫は霊夢の足下を指差す。

ゾクリとした、紫に背後を見せる、そんな事も忘れ振り返った。

（油断した！ 戻り弾幕！）

さっき避けたはずの弾幕が、急角度で飛びすさる燕のように向きを変え、眼前に迫っていた。

（無理だ……避けきれない）

目をつぶる。

つんざく爆発音、霊夢の全身を衝撃が打ちのめす。

はずだった。

「あれ……？」

目を開けた霊夢の前に広がったのはいつもの青空。

状況が飲み込めない、さっきまで視界を埋め尽くしていた弾幕は

影も形もない。

「ウフフフ……霊夢をからかうのは面白いわ〜」

振り返ると口に手を当てコロコロと笑う紫がいた。

何を言ってるのかしばらく理解出来なかった、そして数瞬で今までの勘違いに気付く。

「あんた！ からかったの！？ じゃあ何！ 今回の異変ってあんた関係ないの！？」

「そうに決まってるでしょう。」

私は幻想郷が大好きなのよ、こんな事する訳ないじゃない。

それなのに貴女ったら勘違いして、ウフフ……可笑し〜」

霊夢は一瞬怒鳴りつけてやろうかと思ったが、よく考えたら有無を言わさず攻撃したのは自分だ、それじゃただの八つ当たり。

しかも弾幕ごっこの結果はあれだ、カッコ悪いにも程がある。

でも、気がすまないの何か言ってやろう、それくらい神様だって許してくれる、許してくれないなら神様を倒す。

そう結論付けた時、扇子でピシリと頭を叩かれる。

「なっ！ 何すんのよ！ 痛いじゃない！」

「さっきの弾幕は貴女への罰よ」

紫の雰囲気が変わる、コロコロと笑いのらりくらりと掴み所のないいつもの雰囲気とは違う。

あっ……今の紫ちょっと怖い、まずいわ……何か怒ってる……。

「私は異変の事について貴女に話があつて来たのよ、ゆっくり話が出来る場所に行きましょう」

そう言つと紫は霊夢の後ろ襟をむんずと掴んで、スキマへと放り投げた。

「イヤーーーーー！」

目と手が漂つ赤黒い空間を落下する。

下に落ちてるのか上に上っているのかわからない、気持ち悪い浮遊感。

あゝ無間地獄ってこんな感じかしら……。

「うわ！ さっき目が合った！」

ちょっと気分が悪くなってくる、もう色々どうでもいい気がするくる。

その時霊夢の後頭部を衝撃が襲つ。

「いったゝ……も〜！ 何よこれ！」

痛む後頭部をさすり、立ち上がる、スキマを抜けたのだろう、周り見回すと見慣れた光景。

「……ん？ ここは……」

そこは博麗神社の茶の間だった。

第三幕 永遠と刹那の境界 〈Boundary of moment〉(後書

読んで頂いた皆さん、ありがとうございます。

話のバランス無視して勢いで戦闘描写を書いってしまったので、よく分からない事になってます。

何だか霊夢が戦闘のプロのようです。

本当はもっと東方らしく楽しげに愉快地避けて欲しいんですけど、シリアスっぽくしたので難しそうです。

ちなみに

目下の不安は次の戦闘描写をどうしようかと言うところです。

さて、次回異変の真相について触れたいと思います。

第四幕 夢幻議 〈Fantasy chat〉 (前書き)

オリジナル設定が出てきます。設定の穴とかあんま気付かないでく
れると嬉しいです。

第四幕 夢幻譚 〈Fantasy chat〉

「貴女、着地が下手ね」

そう言いスキマから顔を出した紫は私の顔を覗き込んだ。

「うるさいわね！ もう少し優しくしなさいよ！」

抗議の声を上げても素知らぬ顔でのらりくらり、スキマを抜けた紫は抗議の声など耳にも入ってない様で何食わぬ顔でちゃぶ台の横に座布団を敷き座る。

「そんな事はいいのよ、座りなさい霊夢、後お茶を用意して」

いったいどつちなのよ、お茶っ葉ぶちまけてやろうかと思うが、素直にお茶を用意する事にした、お茶っ葉勿体無いし、たぶん……真面目な話なのだよ。

ここは素直に聞いておこう、そして仕返しはいつかしよう、そう思い形だけでも浩浩と台所へと向かった。

湯を沸かし、使い込んだ古い盆にお湯を注いだ急須と湯飲みを二つのせ居間に戻る。

「遅いぜ霊夢」

「お邪魔します」

「……………」

何であんた達がここにいるのよ……」

茶の間には魔理沙と射命丸が紫と共に丸いちゃぶ台を囲んでいた。

「霊夢がタラの芽ザルいっぱいにして来いって言ったんだぜ」

「右に同じくですね」

確かに二人の前にはタラの芽でいっぱいになったザルが二つ並んでいた。

妖怪の山とここを往復してきたのだ異変の事は知っての事だろう、自分と紫の分のお茶を注ぎ分けながら、ニヤニヤ笑う二人をジツトリとした目で見る。

こいつ等絶対首を突っ込むつもりだ。

異変の解決は私の仕事、文句の一つくらい言ってやりたい気分だから勿論こいつらに出してやるお茶等ない。

「霊夢が言いたい事は解けど、この2人はまったく無関係じゃないのよ」

「どついつ事よ」

「魔理沙と天狗が弾幕つてたのを止めるのに、どんなスペルを使ったの？」

「え？ えくと……、確か空間を削り取って、魔理沙と射命丸を正面衝突させたのよ」

「あれは痛かったぜ」

魔理沙は口を尖らせ抗議の視線を向けてくるが無視をする。

「やっぱり……、空間を削り取ったのね……」

紫はため息をつき、頭を押さえた。

「何よ、ちゃんと説明しなさいよ」

「霊夢、空間を削り取ったらどうなるか知ってる？」

「そんな事知らないわよ」

紫が一瞬すごく哀れむような目をする。

そしていつものすまし顔に戻り話し出す。

「空間を削り取れば、削った分その空間は小さくなるわ。

でも、そうそう空間が小さくなるような事態は起こらない。

この空間、つまりは幻想郷は小さくなる代わりに外の世界から空間を頂戴したのよ」

「それが何だって言うのよ」

「そうね、空間を頂戴するくらいなら別にどうと言う事はないわ。でも、今回は別、空間と一緒に余計なモノまで頂戴しちゃったのよ」

「余計なモノ？」

「そう余計なモノよ、物凄く希なパターンだけど、誰かさんのせいで空間と一緒に幻想郷に紛れ込んだのがいるのよ、……誰かさんのせいだね」

紫のじとつとした、やたらに湿度の高い視線が刺さる。どうも今回の件は私が原因なのを怒ってるようだ……。

「わっ悪かったわね……、そんな事より、そいつが湖を大きくしたってわけ？」

「そういう事、でも今回の異変は言う程単純じゃないのよ。最悪の場合、幻想郷があの湖で塗り潰されてしまうわ」

「塗り潰される？」

紫以外の三人の頭に疑問符が飛ぶ。

「あの湖は大きくなってわ、このままだと幻想郷は水の底よ、そしてあの湖はその余計なモノが呼び込んだモノよ。しかもあれは完全に外の世界のモノ、幻想郷のモノじゃないわ」

「そんな！」

射命丸は信じられないという顔で腰をあげ紫を見詰める、その顔

は驚愕の色で染まっていた。

「そんな大袈裟な事なのか？ 幻想郷に物が入って来るなんてしょっちゅうなんだぜ？」

それを受け魔理沙は答える。

どんな異変でも出歯亀根性でいつも他所から素知らぬ顔で静観する射命丸がここまで困惑する、その事に魔理沙は困惑を示した。

「よく考えて下さい、この幻想郷には紫さんの結界、『幻と実体の境界』があります。

外の物が入ってくる事はありますがあくまで大した量じゃありません。

ですが今回は量が多すぎます」

「鳥のくせに意外と天狗は頭の回りがいいみたいね。

簡単に言えば、そういう事よ、貴女達も妖精が極端に少なかったのは気付いているでしょ？ あの湖は完全に外のモノ、外のモノのまま幻想郷に現れた。

幻想郷の自然から見ればあれは完全に異物、幻想郷の自然は警戒している。

そして幻想郷の自然の具現である妖精が警戒して隠れているのよ」

「妖精がいらないと思っただらそんな理由だったのね。

ま……、とにかく、異変の原因がわかったんですし、そいつを退治すればいいのよね。

簡単じゃない、いつもの事よ。」

「……………確かにそうよ」

大きく一拍開け紫は答える。

「そうと決まれば早速成敗してくるわ、紫、湯飲み洗っというて
そういつと霊夢は一度も振り返らずに、神社を出ていった。

「私も負けてられないぜ」

魔理沙も箒に股がり後を追う、そして二人の姿が空の彼方へ消えていく。

「天狗、貴女は行かないの？」

「本気で飛べばすぐ追い付くんで取材はそれから大丈夫です。
それより少し話がしたいのですが、構いませんか？」

「あら？ インタビューかしら？」

紫は冗談がましい笑顔で答える。

「いえ、記事にはしませんよ、個人的興味です。」

自分の目で確かめますし」

「構わないわよ」

そう言いスキマに手を差し込み切り分けられた羊羹を取り出しお茶をすする、つくづく便利な力だと感心する。

「今回の異変の犯人、もしかして紫さん並に巨大な力を持つてるんじゃないですか？」

「そうね、単純な力の大小なら少なくとも私と同等かそれ以上と言っても差し支えないんじゃないかしら」

何でもないような事のように答える。

だがそれが何でもない訳がない、本気になった八雲紫に勝てる者は幻想郷にはいない、そう認識して間違いないのが幻想郷の常識だ。

もしかしたら、そうなのかもしれないと思っていた射命丸でも本人の口から聞けば、やはり驚嘆する。

「そうですか……紫さんの『幻と実体の境界』と霊夢さんの『博麗大結界』その二つを無視してあれだけ大量の水を呼び寄せる、並ではありませんよね……」

私は少々の事では動じない、そう思っていたが自分がここまで動揺している事に戸惑いを感じていた。

我々天狗は組織社会を作り生きていく種族だ、上下関係を重んじ、規律を重んじ、何より仲間を重んじる。

そんな中で自分は変化を嫌うようになったのだろうか？

よくよく考えると今の状況が変わってしまう事を考えてみると、とても不安な気持ちになる、妖怪は人間を食べ、人間は妖怪を退治する。

そんな幻想郷の中で天狗社会の中の一人の天狗として、幻想郷の変化を面白可笑しく見詰めながら生きる。

それが変わってしまう事を恐れているのだろうか……。

変化がないと面白くないが変化するのは不安、随分と矛盾した感情だが、変化も適量があるのだろう。

新聞記者として紅い霧や冬が終らない程度の異変は歓迎するが、あの湖には何か危ないモノを感じる。

あの湖は幻想郷を塗り替えてしまうような気がしてならない。

もしかして取材などと言っている場合ではないのだろうか？ そう思えてならない。

「そつだ、貴女にいい事教えてあげるわ」

そう言うと紫は空の湯飲みを手にスキマに手を差し込み、何かを取り出し私に突き出して来た。

「……………何ですか……………これは？」

差し出された湯飲みは水で満たされていた、透明で特にへんてつ

もない、ただの水に見える。

「あの湖の水よ、毒じゃないし、身体に悪いなんて事もないわ」

「……あの湖の水……ですか」

私にそれを飲ませて何になるのだ？ そう思いつつも本気で毒殺の可能性も考えるが、そんな事をしても得はなさそうですし、除外して考える。

結局飲んでみる事にした、恐る恐る湯飲みを受け取りそっと口を付ける。

「……？……しょっぱい？」

「しょっぱいでしょ？ それはね海水っていうのよ、海の水と書いて海水」

「海……水？」

「そう海の水よ、外の世界はね、その七割が海と言う湖が占めてるの、それはその湖の水、海の水よ」

「海……ですか……」

「この塩水で満たされた途方もなく大きなモノよ、幻想郷を1000集めても何の足しにもならない程巨大なね」

「……にわかに信じられませんか」

「信じる信じないは貴女の自由よ」

ここで私をからかっても、何の得もないだろう、信じてもいい情報だろう。

世の中、私が思うよりも広いという事なのか……。
ポジティブに取材のしがいがあると思う事にしましょう。

「最後の質問になりますがいいますか？」

紫はいつもの妖しい笑顔で首肯する「構わないわ」と言う事だろう。

「私はあの湖、海をとても危険なモノだと考えています。

何故かと問われれば、まともな答えは持ち合わせていませんが、私の本能が危険だと、そう訴えかけるのです。

貴女はこの不安の正体がわかりますか？」

「……古い妖怪ほどそう思うでしょうね。

貴女の不安は正しいわ、あの海は幻想郷を沈めてしまう以前に在るだけで危険だわ、海というモノは全てが生まれる場所なの、始まりの場所なの。

海からは様々なモノが生まれる、生命しかり、概念しかり、そして海から生まれた大量の様々なモノが幻想郷に溢れる、外の世界のモノとしてね、そうなればどうなると思う？」

「幻想郷が外の世界のモノで溢れる……。のですか……。、検討もつきませんね……」

「幻想郷が外の世界のモノで溢れる、そうなれば内と外の区別の意味がなくなるわ、それは幻想郷の意味の死、“幻の意味の死”よ。

幻と実体の境がなくなる、そうなればあつと言う間に幻想郷は外の世界の人間達に塗り潰されてしまう、そうなれば貴女達天狗は勿論ほとんどの妖怪、神の類いですら、存在する事も出来なくなるでしょうね」

“幻の意味の死”？幻想郷が塗り潰される？変化どころの話ではない、異変なんてレベルじゃない。
—大事じゃないか！

私はすぐにも飛び立とうとする、それを紫は腕を掴んで止めた。

「何をするんですか！ 早く大天狗様に知らせないと！」

「知らせるのは構わないけど、一つ追加で伝えなさい。
敵は間違いなく海の底にいる、でも私達妖怪はあの海に長く浸かると外の世界に染まってしまう。

それは私達妖怪の意味の死“幻の意味の死”をまねくわ」

紫さんの手を振り払い私は叫んでしまった。

「なんですか！ じゃあ私達は幻想郷が無くなるのを指をくわえて見ているしかないんですか！」

「それしかないわ、私は指をくわえながらも智慧を巡らせるつもりだけだね。

それに霊夢達がいるわ、人間達は海によって意味が死ぬ事はない、他人任せは不安だけどいつものように見守るわ」

霊夢がいつもどおり異変を解決する、数々の異変は実は博麗霊夢の手によって解決されている。

その噂は度々耳にする、裏が取れないので記事にした事はないが、わりと本当かもしれないとは思っていた。

霊夢を信じていいのだろうか？ 紫の事を信じていいのだろうか？

紫は何か企んでいて全て嘘っぱちかもしれない、そんな考えがよぎる。

解らない、何を信じればいいのか分からない。

紫の瞳を見詰める、相変わらず信用ならない笑顔で笑う、答えが出ない、不安が渦巻く。

「……大天狗様に報告に行きます……」

ふわりと神社の空に舞い上がる、一つ大きく羽ばたくと音速を超えた空気の破裂音を残して射命丸は妖怪の山へと消えていった。

紫はその姿を哀れむように見詰めていた、小さくため息をつき、羊羹の最後の一切れを口に運ぶ。

紫は幻想郷がなくても生きていける。

射命丸が最後まで紫を信用しきれなかったのは、きっとその部分があるだろう、紫はそう考えた、またため息をつく、私ほど幻想郷を愛している者はいないのに。

「さあ……忙しくなるわね」

幻想郷の青い空を見つめながら、紫は眩き立ち上がるのだった。

第四幕 夢幻譚 〈Fantasy chat〉（後書き）

オリジナル用語解説

『幻の意味の死』

オリジナル設定なので原作と緒設定の解釈が違います。

幻想郷の存在は紫の『幻と実体の境界』により外の世界と区別され
ます。

内が幻、外が実体

幻想郷の存在は幻の存在であるが故に物理的存在理由より、自身の
意味的な存在に依存します。

神奈子や諏訪子など神は人から信仰される事によってその存在価値、
存在理由を確立されます。
自身の意味に依存する幻の存在である神は信仰されなければ神とし
ての神の意味がなくなり、存在の意味がなくなり、この世に存在す
る事が出来なくなります。

それが『幻の意味の死』です。

今は『幻と実体の境界』が張られた当初に比べ遥かに科学が発達し
人間の勢力は強くなり、更に非科学的な事象は「迷信」として世の
中から排除されています。

根っからの幻想郷の妖怪にとって外の世界は毒そのものなのです。

そんな感じですよ。

難解のうえに説明も下手ですが理解してもらえたと助かります。

次はゆかりんが悩みます。

第五幕 神社にてまどふ く Table game く(前書き)

いつもの二次創作、基本地味な話です。最近霊夢は活躍無し、と言
うか暫く予定なし…

第五幕 神社にてまどふ 〽Table game〽

春の木漏れ日の中、優雅に緑茶を楽しむ、侘び寂とは素晴らしいものだ、博麗神社の縁側で春の心地よい陽射しを浴びるとそう思う。

一口お茶をすする、微かな甘味と渋味、そしてお茶の香りが鼻孔を抜けていく。

霊夢つたら意外といいお茶っ葉を使ってるのね。

普段はお賽銭を入れる入れるとケチ臭いののに、こういったところにはちゃんとお金をかけるようだ。

私、八雲紫は『忙しくなる』とは言ったものの、今すぐ忙しくなる訳ではない、既に忙しくなった後というものもあるが、この先の『忙しくなる』まで縁側でゆっくりする事にした。

今私がすべき事は動く事ではない、休む事だ。

『事は急いては仕損じる』

『今日出来る事は明日やるな、明日出来る事は今日やるな』

人間もなかなか巧い事を言う、何事においてもタイミングというモノは大切だ、タイミングよく動くと自ずと効率もよくなる、すぐに死んでしまう人間なら尚更大切な事だろう。

それにしても今回は厄介な事になったものだ……、幻想郷を侵食する外の世界の海、ほとんどの妖怪達は外の世界からの異物である海に長時間触れる事は出来ないの、本意であれ不本意であれ人間の手に委ねるしかない。

今までの異変なら妖怪達は可能不可能は置いておいて、『本当は異変に関われるけど、人間に譲ってやるよ、せいぜい楽しませてくれ』

などと嘯けば良かったが、今回の異変はどんなに関わりたくても関わる事すら出来ない、今回は異変に対する考え方が違っただろう。

古い妖怪は皆、あの天狗のように海に対して本能から警戒を示しているはずだ、そして不安は伝染する。

焦り出す妖怪がいなければいいが……。

それが目下の不安だ、例えば地底の妖怪達には直接的に死活問題だろう……。

単純な話、あのまま水位が上がれば地底は水没してしまう。

そうなるようなら、地上と地底との盟約などにかまっている場合ではなくなるだろう。

地底の妖怪達が大挙して地上にやってくる、そうなれば幻想郷はパニックになり、地上と地底の全面戦争が起こる事は目に見えている。

いや、まだ戦争の体を取れるならましだろう、きつと戦争より酷くなる。

ここは借りを作っても、さとりと鬼に話を付けた方がいいだろ

うか……、交渉役を萃香に頼んだ方がいいだろう。

地上と地底を好きに行き来出来る数少ない妖怪だ、萃香にとっても戦争なんて萃まり方をするのは本懐じゃないだろうし、引き受けてくれるはずだ。

紅魔館は動かない、スカーレット姉妹はそもそも水が苦手、唯一人間のメイドはこの状況で主人の元は離れないだろう、魔女も紅魔館に水が入らないように結界を張るので手一杯でしょう。

幽々子はどうかだろうか？ 幽霊の類いは妖怪と違って外の世界でも臆気に畏れの対象だ、わりと親和性があり他の妖怪達には比べれば海に強い可能性がある。

半分幽霊の庭師の子は尚更、何か動きがあるかもしれない。

次は永遠亭、神話とお伽噺の住人に海は耐えられないだろう、月の頭脳が上手くやってくれば下手を打ってはこないはずだ。

次は山の神、最近こちら側に来た連中だ、海の事は知ってるだろうし理解もしているだろう、そして解っているだけに動けない。

あの海の前では神性はがた落ち、神通力もまともに使えないだろう、そうなると人間である山の巫女が何らかの動きを見せるはずだ。

後は天狗を筆頭とする山の妖怪達、海の危険は本能で分かる、大天狗は賢い、間違った判断はしないはず。

深く深く思考に没頭する、考えをめぐらせ先を読む、これらを骨子に乱数を踏まえ可能な限りこれからの事象を推測する。

心が有るモノの先を読むのは難しい、無間の深さを計算する方が

遥かに楽だ。

様々な統計を元に考えても気まぐれや天然まで計算に入れるのは難題、天才は天然には勝てない、よく言ったものだ。

ただ、それは最善を尽くさない言い訳にはならない、今回は最善でも足りないくらいだ。

私の愛する幻想郷、それをどうしても守りたい。

正直な話をするとなら自身はあの海などどうと言う事はない、そもそも内と外という区別自体が私にとって意味をなさない。

そんな私に“幻の意味の死”はない、一人一民族唯一無二のスキマの妖怪は伊達ではないのだ。

そう考えると萃香が『紫は存在自体が反則』と言っていた気持ちがよく分かる。

それでも直接自分でいけないのが苛立たしい、今、私の力のほとんどを藍を介して『幻と実体の結界』の修復に使っている。

天狗には敵が外の世界から幻想郷に海を呼び寄せた、と言ったが実は違う、敵は『幻と実体の境界』と『博麗大結界』に大穴を開け、幻想郷と外の世界の海を空間的に繋げたのだ。

しかも、それは広がるうとして、藍の力だけでは抑えが効かなくなつて、私自ら動く事になつたのだ。

事態はかなり深刻、少なくとも結界の修復が終わるまではまともな弾幕なんて出来ない、霊夢に使った張りばと幻の弾幕で手いっぱい、スキマを開けるのだからかなりしんどいだ……、本当は自分で行けるのなら敵を今すぐ叩き潰してしまいたい。

そう思っても出来ない、その気持ちを誤魔化す為にもこうやって
思考し続けるのだ。

思わずため息がでる。

こんな気持ちになったのも久しぶりだ、面白可笑しく生きていく
つもりだったのに、その為の幻想郷でもあったのに、平静を装うの
に苦労する程腹立たしい。

少し落ち着こう……、予想ではそろそろ霊夢達が戻ってくるはず
だ。

そう思えば早速、霊夢と魔理沙が帰ってきた、2人と頭から足
の先までびしょ濡れである。

「2人とも海水浴は楽しかった？」

縁側に着地した二人に声をかけると霊夢は返事の代わりにくしや
みをよこし、私が悪い訳はないのに物凄く不機嫌な視線を投げ掛け
てきた。

「海水浴ってなんなんだぜ？」

釈然としない顔、一度絞ったのだろうシワシワの帽子を被り直し
魔理沙は訊ねてきた。

「湖しよっぱかったでしょ？ あれは海水って言うのよ。」

そして水浴びの海水版が海水浴び、海水浴よ、外の世界では夏になると海水浴に行くのよ」

「こんな塩水浴びて何が楽しいんだ？ 霊夢、風呂に入ろうぜ」

そう言うつと魔理沙はスタスタと玄関へと向かった。

「そうしましよ、準備してくるから待ってて、間違えても濡れたまま畳に上がらないでよ、脱いでから上がりなさい。」

ずぶ濡れのまま上がろうとする魔理沙に釘を刺す。

「はいはい、分かってるぜ」

何でもなかったかのように半分上げた足を引っ込め、玄関で服を脱ぎドロワーズ一枚になり中に入ると自分の家かのようにタオルを取り出し体を拭くのだった。

そんな態度を霊夢はまったく気にしていない様子、いつもの事になれているのだろう、シタシタと水を滴らせながら神社の裏へ消えて行った。

「ところで魔理沙、何で引き返して来たの？」

「あ？ 海水浴には早すぎたんだぜ」

濡れてシワシワの帽子はお気に召さなかったのか不機嫌そうに答える。

水の中では呼吸は出来ない、基本的に水に潜る機会の無い幻想郷では水中で移動する魔法も発達しない、霊夢の能力、物理的概念的に浮くという能力はベクトルが上方向に向くから水に潜るのには向かない。

八方塞がりになって戻ってきたのだろう、とりあえずは予想どおりだ。

「泳ぎは得意じゃないみたいね」

「河童じゃないんだ、人間は風呂に入れば十分だぜ」

ちょっと悔しそうに唇を尖らせる。

「そのへんの対策は貴女達のお風呂が終わってから話をしましょう」

「何とかなるのか？」

「勿論よ」

「信じられないぜ」

「私に出来ない事はあんまりないわよ」

「なに妖夢みたいな事言ってるんだ？」

「事実よ、そろそろ博麗神社名物、旧地獄温泉の準備が出来たんじ

やない？」

「そつだな行つてくるぜ」

そう言つと魔理沙は大きな風呂敷を体に巻いて、神社の裏にある、地底の騒動の後に河童に頼んで造らせた間欠泉を利用した温泉へと向かった。

温泉はちよつと羨ましい、この異変が解決したら私も入ろう。

さて……、粗方の方針はまとまった、霊夢達が敵を攻めてる間に色々なところに根回しをしないといけない、今回は完全に裏方、深く関わってるのに手が出せないというのは本当にもどかしいものだ。

次の仕事に入ろう永遠亭宛に手紙を書かなければいけない。

早速、作業に取り掛かる、本来ならスキマを使って直接行けばいいのだが、結界の修復、これからやる霊夢達の海対策を考えると妖力の無駄使いは出来ない。

小さなスキマを作る分には大した事はないのだが、一人一人分になるそれなりに妖力を食うのだ。

我ながら燃費は良くないのだ、伊達や酔狂で睡眠時間が長い訳じやない。

「これでいいわね……」

書き上げた手紙を読み返す、後は月人がどう出るかだ……、手紙を包み封をする。

「橙」

「はい、紫様」

何処かで控えていたのだろう、幼い少女が音もなく現れた、橙色の服に帽子を被りクリクリとした目は可愛らしいが、帽子から覗く2つの黒い獣の耳とスカートから延びる2本の尻尾、そして明らかに洒落とは違う長い爪が少女が人外である事を示していた。

「この手紙を永遠亭まで届けてきなさい、出来るだけ急いで、竹林に入ったら兎を探しなさい案内をしてくれるはずよ、そして必ず返事受け持ってきてきなさい」

「わかりました。紫様」

そう言っ手紙を受け取ると橙は風のように駆け、神社を出ると山を降りていった。

これで一区切り、霊夢達がお風呂から上がれば、次は海に潜る為の対策をすればいい。

「まったく魔理沙ったらお風呂で暴れないでよね」

「いいじゃないか、あんなに広いんだぜ」

「も……」

考え事をしてたら2人はもう戻ってきた、随分と早いけど、いいのかわ女として……。

霊夢はいつもの巫女服、魔理沙は霊夢から借りたのだから霊夢とお揃いの巫女服を着ていた。

ちなみに、魔理沙は袖は付けていない。

「早速だけどいいかしら？」

「何の話よ？」

「何の話だぜ？」

「魔理沙には早急いったじゃない……」

「そんな昔の事は忘れたぜ」

「まあいいわ、水に潜れなかったんでしょ？ それなら私がなんとかするわ」

「何とかなるの？」

「エラを付けてくれるとかなら勘弁だぜ」

「何とかなるわよ、難しい事じゃないわ、まずはこの丸薬を飲んで
紫が差し出した手には2つの大豆程の大きさの茶色い丸薬があっ
た、2人はそれぞれ手に取る。」

霊夢は怪しい物を見る目で丸薬と紫を見比べ、魔理沙は興味深げ
に丸薬を観察し、すぐ飽きたのか紫に視線を投げてきた。

「毒じゃないから早く飲みなさい」

そう言うつと2人は渋々といった感じに急須に残った冷めたお茶で
丸薬を飲み下した。

「ちなみに、これはなんなんだぜ？」

「飲んでから聞くのはどうかと思うわね……、私の髪の毛とかに靈
的な処理を加えて丸薬に練り込んだものよ」

「うげ……」

霊夢はお茶を吹き出し、魔理沙はゲーと舌を出す、二人は露骨に
嫌な顔をする。

「文句言わない、それは私と貴女達を靈的なパスで繋ぐ為の薬よ、
本当は式神契約をした方がいいんだけど、貴女達嫌でしょ？」

「嫌に決まってるでしょ」

「人間をやめる気はないぜ」

「そう言うと思ったからよ、単純にいろんな儀式を簡略化させるに

は、さっきのを使うのが一番早いしね。

今、私と貴女達の魂に近い部分にパイプが出来てるはずよ、そうする事で私の力の影響を受けやすく出来るわ」

「んで、結局どうするのよ」

「貴女達の空と海の境界を取り除く、そうすれば、海の中を空と同じように飛ぶ事が出来るし呼吸もできるわ」

「へ」

「そりゃ便利だな、後でその丸薬の作り方教えてくれよ」

「じゃあ、早速やるわよ」

魔理沙は無視してそう言うと二人の額に手を当て、目を閉じ、一つ大きく深呼吸をすると紫の手が淡く輝いた。

「痛くは……ないみたいね……」

「おお」

各自どうでもいい感想を漏らしたところで光は消える。

「ふ」……これでいいわ……」

大きく息を吐き、紫は2人から手を離れた。

「意外と呆気ないんだな」

魔理沙は手を握ったり開いたりし何か変化がないか確かめてるよ
うだが、これと言った変化の実感はないようで、少し残念そうな顔
をする。

「ん？ 紫どうしたの？ 変な汗かいて？」

「何でもないわ……、さあ！ 異変が待ってるわよ！ 早く行ってらっしゃい」

「言われなくてもそうするぜ！」

早く効果が知りたいのだろう、魔理沙は景気よく箒に股がると砂ぼこりを巻き上げ飛んで行った。

「くら！ 魔理沙！ 待ちなさいよ」

そう言うと霊夢は一度振り返る、多少強引に促したのを怪しんではいるのだろう……、少し心配そうな視線を向けるとすぐに魔理沙の後を追った。

霊夢達が見えなくなると私はそのまま崩れるように倒れた。

「……………しばらく動けそうにないわ……………」

ほとんどの妖力を藍に回し、なけなしの妖力で霊夢達に能力使った。

もう指一步動かす事すら億劫だ、今ならチルノにだって殺される

自信がある。

橙が戻って来るまでに妖力のある程度回復させておかなければならない、仕事はまだ終わりじゃない、たぶん、萃香も来るだろう、この異変で萃香が私のところに来ないはずがない。

せめてそれまでは……。

そして、私は深く深く泥のように眠った。

第五幕 神社にてまどふ ｝Table game｝(後書き)

そんな感じの東方水竜宮です。

紫の思惑、そして各勢力が少しずつ動き出します。

本当は全勢力動かしたいのですが難しそう…

出る出ないは置いといて、幻想郷勢力は

人間(個人) 霊夢とか魔理沙、紅魔館、白玉楼、紫組、永遠亭、人間の里側(慧音、妹紅や里の人)、妖怪の山、八坂神社、地底及び地霊殿、天界、地獄
後は妖怪や神様の個人がいっぱい

こんなところでしょうか、このお話では更に黒幕組が関わってきてますがオリジナルを何人だすか…(多分MAX三人)黒幕は決まっていますが、どうしたものか…

頑張つて無い知恵絞って考えたいと思います。
ご意見、ご感想お待ちしております。

第六幕 荒ぶ妖怪の山 ｾ before the storm ｾ (前書き)

いつもの二次創作、主人公なのに霊夢の影がどんどん薄くなります。
原作がそうなのでいいかなと…

第六幕 荒ぶ妖怪の山 ｋ before the storm ｋ

樹々は風に揺れ、不吉にざわめき、妖怪の山は鬱々とした空気と喧騒で満たされていた。

「嫌な風……」

杉の細枝に腰掛け会議を遠目で眺めながら私、ブン屋射命丸はそう呟いた、樹上の天狗会議、四本あるナラの巨木の一番大きな枝にどっしりと構えるのが大天狗長、その枝より低い位置の枝にそれぞれ大天狗達が構えていた。

「どうなるのでしょうか……」

紫の話を聞いて韋駄天の勢いで妖怪の山へ戻った私は、その話全てを大天狗様に報告しました。

何せ一大事です。

大天狗達は大層頭を悩まし、結局は主要な天狗を集め会議を開く事にし、そして噂は回り回ってほとんどの仲間達が会議に参加せずとも、その場に集まった、よく見ると河童を初め、獣の变化等、様々な山の妖怪が集まってきていた。

やはり、私と同じで他の妖怪達も、あの海には不穏なものを感じ

ていたようです。

主要な天狗達が集まったら私はその場で経緯を話した、その時の皆の動揺は名状し難いものです。

天狗達は冷静さを失い、慌てふためいていました。

目上の者として落ち着いた態度を示して欲しいと思いましたが、きつと話す側でなければ私も同じ反応をした事でしょうね、それだけ今回の異変は非常事態だという事でしょう……。

幻の存在、意味や概念を抛り所とする我々にとって絶対の死

『幻の意味の死』

死に至る病より恐ろしい死神の鎌、雑草のように魂すら残さず存在を刈り取られる。

幻想郷で死神と言うとまったく恐ろしいイメージはないので語弊が生まれそうな気がするので不適切な気はしますが……。

それにしても、回りが慌てれば慌てる程、自分は冷静になったりするもので今は会議の場から離れ一歩引いた視点でこの会議を眺めている訳です。

正直、天狗の沽券にかけて、これを会議とは言いたくはないのですが……。

大天狗達を始めほとんどの妖怪達は明らかに冷静さを失っていますし、『人間などにまかせてられるか』『こちらから討つてでるべきだ』『そもそもあのスキマ女は信用ならん』と言う者もあれば、『もっと慎重になるべきだ』『人間の巫女の様子をみよう』等と主張する者もいる、そして『怖じ気づきよったか』と罵声を返せば『馬鹿はすぐに死にたがる』と返し収拾がつかなくなっています。

それを見て大天狗の長は頭を抱える有り様。

大天狗様がいくら声を張り上げても聞きやしない、天狗の社会は組織社会、その中に厳しい上下関係があり、そのナンバー2大天狗の長の力は絶大、普段なら大天狗の長の一喝で黙らない者はいないのですが、今回はまったく効果なしです。

それだけ一つの命として『幻の意味の死』というものに恐怖を隠せないでしょう。

大天狗達がそうなのですから、下の天狗達がそうでないはずはなく、もつと酷い有り様、中には殴り合いを始める者すらいて、こつやってみるとスペルカードによる決闘システムというのはよく出来たものなのだと思う。

会議がまとまる様子はないが、雲行きは怪しい、大雑把に穏健派と強行派に分かれるが強行派が今は若干優勢だろうか……、大天狗様は様子見を主張するので状況は先が見えない。

本能が知らせる恐怖が皆をそうさせるのでしょうか。

私としては少なくとも霊夢達人間の様子を見て、ダメだった時に討つて出る。

仲間達が死ぬ事は避けたい、正直我々妖怪に打つすべがあるのか疑わしい。

敵がわざわざ海から出てくると言つのは考えにくい。
さて……どうしたものでしょうか……。

「射命丸さん……」

声を便りに下を向くと癖のある水色の髪を2つに束ねレインコートのような服にリュックを背負った小柄な少女が立っていた。

「にとりさん」

ふわりとその少女の隣へと着地する、少女の名は河城にとり、河童である。

「お久しぶりです、話は聞いてましたよ、大変な事なっていますね……」

いつも陽気で明るいのが河童だが、如何にも沈鬱といった表情、天狗と同じ幻想郷と共に長きに生きてきた種族だ。

天狗と同じように本能から感じるものがあるのでしょうか。

「いちよ裏は取れてませんから信用は出来ませんどね、あの八雲紫に聞いただけです」

末端の末端でも事を荒立てるのは得策ではありません。

こうでも言っておきましょう、焼け石に水でしょうが……。

「……いえ、正しいと思いますよ、海……でしたっけ？ 湖が大きくなりだした頃に調べに潜った仲間が未だに戻って来ないそうです……」

「そっ……そうですか……」

被害者が出ていた、この話も瞬く間に噂となって拡がるでしょう、そうなるかと強行派の追い風となる、“まだ信用出来ない”という部分で様子見を主張する者は多かったですしね……。

手は出せなくても危険ならば何らかの対策を取る、そう思う者は少なくともないでしょう、大天狗の長の采配次第……。

「射命丸さん……私達……消えてしまっくんですか……？」

彼女は俯き眩く、にとりさんには私の一眼レフの事もあって、それなりに浅からぬ関わりのある間柄ですが、ここまで気弱な姿を見るのは初めてです。

ここで励まさなければ、何が友でしょうか。

「大丈夫ですよ、いつもみみたいに霊夢達が解決しますよ。あの大妖怪八雲紫も動いてますし」

そう言っつて私は彼女の背中を撫でた、そんな彼女の背中中は小刻みに震えていた。

「にとりさん？」

顔を上げた彼女は涙を溢すまいと、必死に堪えていた、それでも堪えきれず大粒の涙が頬を伝い落ちる。

彼女は崩れるように私の胸に体を預けてきた。

「行方不明の仲間って……私の友達なんです……、昨日だって……一緒に飲んでたんですよ……？ あんなに元気だったのに……それなのに……こんなのって……こんなのって……ないですよ……」

全て言い切る頃には彼女の顔は涙でグシャグシャだった、嗚咽混

じりの訴えに答える言葉もなく、私はただただ抱きしめ、その頭を撫でるだけだった。

人間なら神にすぎる事だろう、人は実体、我々は幻、人は実体故に幻である神にすぐれる、それは実体故に幻は幻でその正体が分からないからだ。

そして幻である我々は幻である神を知っている。

神通力や奇跡があっても、どんなに強大な力があるうとも、一つの弱い命である事を知っている。

そんなものに益を求め信仰する事はあってもすぐれる事は出来ない、出来ようはずがない。

今は人間が羨ましくすら思う。

私はどうすればいいのでしょうか……私達はどうなるのでしょうか……。

『フフフフ……、そういう時は難しく考えないで素直に神にすぐればいいのよ』

直接頭に響くような声、警戒し周りを見回す、だが見回したところでそこにあるのは相変わらずの天狗達の混乱ぶりである。

「どうしたんですか？ 射命丸さん？」

彼女は不安そうにこちらを見上げてきた、彼女には早急の不気味な声は聴こえていない様子だ……。

『不気味とは失礼ね、私は貴方達のすぎるべき神よ。難しい事考えないで、すがればいいのよ、神とは本来そういうものよ……、とりあえず用件だけ伝えるわ射命丸文、今から山の神社に来て頂戴、一人でね』

山の神社？ 神？ この前の引越して来た例の神か？

「何を考えているのですか？ 答えなさい」

私は虚空に向かって喋りかけたが返事はない、そんな私の姿を彼女は不安そうに見詰めている。

罨かもしれない、でも何の罨だ？

私に罨を仕掛ける理由なんて皆目見当もつきませんが、罨でなければ現状を打破する一つの可能性だ。

虎穴に入らずんばなんとやら、行ってみる価値はあるはず。

彼女を見下ろし改めて、その顔を見詰め、その涙を拭う、不安を顔にだしているのかいないのか、彼女と私の差なんてその程度だろう。

なら、その小さな差で出来る事をやろう。

彼女の頭を撫でる。

「にとりさん、私は前に進みます。

自分に出来る事をやろうと思います。

貴女も何かを初めましょう、きつと縮こまっているよりいい。

本来我々天狗はお調子者の怠け者なのですけどね……、では私は行きます」

そう言うにとりから体を放し、大きく羽ばたき舞い上がった。
目指すは守矢神社、きつと何か変わる切っ掛けがある。

そう思うと少し力が湧いてきた、その力を翼に込め、大空へと疾走した。

にとりはその姿が見えなくなるまで見詰めていた、今度は自分でその涙を拭う。

「私に……出来る事……」

見上げる空はどこまでも青かった。

第六幕 荒ぶ妖怪の山 ｛ before the storm ｝ (後書き)

今回は射命丸視点

動く団体が複数あるので視点はコロコロ変わると思います。

射命丸について私見

射命丸はいつも一つ離れた場所から他人事のように物事を見詰めるキャラだと思います。

そう言い意味では紫と同じく霊夢に近いものがあると思います。ならば、他人事じゃすまなくなってもらいましょう。という事です。

豆

東方での天狗社会

トップにいるのが天魔、管理職として大天狗、その下に鼻高天狗、烏天狗、白狼天狗、山伏天狗などがいます。

88

日本では場所によって天狗は神として崇めるところもあり、鬼と並ぶ知名度を持ち、風を操る強力な妖怪です。伝承には鼻の長くする葉団扇とかあるそうです。ちなみに

日本の妖怪史的には神隠しを起こすのは八雲紫ではなく天狗です。

第七幕 風神と風神少女 \ good day and good night

いつもどおりの二次創作、今回も射命丸メイン

風を切る感触はいつ感じても気持ちがいい。

幻想郷最速である私が少し飛ばせば山頂までは数秒で着く、谷を越え滝を通り越し、長い石段と鳥居を越え石畳に着地する。

「呼びつけておいて、出迎えもなしですか……」

待っていても仕方ないですし、それなら勝手に上がらせてもらう事にしましょう。

どうせなら取材で来たかったのですけどね。

私を呼びつけたのは恐らく守矢の神、まだ一度も会った事がないのでどんな人物（神物？）か楽しみではある。

やはり、神なら本殿にいるのだろう。

上空から見た見た構造から考えて、正面から入り、そのまま奥に向かって進めば本殿のはず。

守矢神社は幻想郷の建物ではかなり広い部類に入る、日本家屋独特の風と採光を効率良く取り入れた設計でなかなか居心地がよい、同じ住居でも前にお邪魔した紅魔館とはえらい違いだ、あそこは暗くて風通しが悪い、あれは住処にする気が知れない。

さて……話を戻してその長い廊下を進めば予想どおり本殿に着きました。

なのですが、予想に反してそこには誰もおらず鏡や鉄器など様々な物が奉られているだけだった。

「誰かいませんか？」

呼べども反応もなく、私の声は柱や壁に吸収され、シーンと静ま
りかえるばかりだ。

やけに静かだとは思いましたが、建物自体が音を吸収するような
造りになってるのですね……、なるほど……。

などと感心している場合ではない、私は住宅見学に来た訳ではあ
りません、呼ばれて、例の神に会いに来たのです。

「ごめん下さい、誰かいませんか？」

「お待ちしておりました、射命丸文さん」

数拍おいて背後から返事が返ってきた、振り返ると本殿の入り口
に一人の女性が立っている。

緑色の長髪に蛇と蛙の髪飾りを付け、白と青の日本式の服、どこ
となく霊夢の巫女服に似ている、年の頃は同じく霊夢と同じくらい
だろう、雰囲気からして人間、間違っではないはず。

その女性は私の黙考を余所にニツコリと笑うと会釈をする。

「私は東風谷早苗、守矢神社の巫女をしています。

八坂様がお待ちです。こちらへどうぞ」

そう言うつと踵を返し、私の来た廊下を引き返していった、着いてこい、と言う事ですか……。

黙ってついて行くと雰囲気からして居住スペースだろうか？ 本殿などと比べると随分と生活臭のある場所に通された。

「こちらです。どうぞ」

そこはどこから見ても茶の間だった、襖で仕切られた広いと言い難い部屋、山の景色を存分に取り入れた間取りは見事だが、部屋の真ん中には庶民臭のする四角いちゃぶ台があり、そのちゃぶ台に湯飲みを片手に二人の女性がついていた。

一瞬、余りの庶民臭さに計り間違えかけたが、ちゃぶ台の二人は明らかに違う、山にゴロゴロいる神とは明らかに、それだけの存在感があった。

「まあ座りなさい」

そう私に話しかけて来たのは赤い服の女性、肩まで伸びる弛いウエーブの入った青い髪、胸には鏡の飾りをつけている、何もしていなくとも尊大、いるだけで威圧感を感じる。

これが力のある神という事なのだろうか？

「神奈子、そんなにピリピリしないでよ、お茶が美味しくなくなる。」

そんな青髪の女性に話し掛けたのはもう一人の神、目玉のついた市女笠に蛙の絵の画かれた壺装束、頬を膨らませ睨んでいる姿とみようちきりんな恰好、そして見た目が幼いせいで、逆に可愛らしく見える、が見た目に騙されてはいけなのが幻想郷、中身はもう一人と同じかそれ以上はありそうだ。

「いいじゃない、初対面の山の妖怪でしょ、ちょっと神っぽくしてみたのよ」

それに答えた青髪の女性の雰囲気は消沈していき威圧感がなくなっていく、神力の類이었다のだろうか……。

「最近はフランクな方が信仰が集まるって自分で言ってたのに、調子がいいな、早苗、おかわり。」

「はい、洩矢様」

準備がいいのだろう、東風谷さんはいつの間にもやら用意してあったお茶を注ぎ足し、一緒に私にもお茶を出してくれた、会釈をすれば作りではない笑顔を返し、座る事をすすめてくれる。

同じ巫女でも霊夢とは随分違う、巫女は縁側でお茶を啜りながらだらける仕事、という認識を改める必要があるかもしれない。

「じゃあ、自己紹介くらいしておきましょうね。」

私は八坂神奈子、好きなように恭しく呼んで頂戴」

「私は洩矢諏訪子、神様っぽく呼んでね」

自己紹介をするあたり、わりとまとまな部類に入るのだろう、特に神の類いは名を名乗る事は少ない、雰囲気は飲まれていたが同じ幻想郷に生きる者だ変な気後れは不要だ。

「ご存知なのでしょうけど私は射命丸文、新聞記者をやっています」

そう言い会釈をする、地味だがこの名前の交換というのはとても大切な事だ、相手の名を知り、自分の名を知ってもらう、対象を個人として認める為の最初の作業と言えよう。

それを解つてか解らずかは知らないが2柱と1人は三者三様に頷き返してきた。

「じゃあ、早速本題にはいるわよ。

射命丸、私達の計画に協力しなさい」

八坂さんは私を射抜くように見つめてくる。

……が勿論、私の答えはイエスではない。

「私は天狗の社会に属する者ですよ？そんなホイホイとは協力出来ません。

しかも今は一丸となって動く時、それに貴女方はこの前天魔様と和解したばかりと聞きます、その状態でそんな迂闊な事をしていいの

ですか？」

当然だ、組織とは団結が大切、例え一人でも団結を乱せばそこから崩れる事だつてある。

八坂の神には興味があつたが期待はずれだつたのかもしれない、そのせいだろう今は少しムツとした気分だ。

「そうね射命丸、貴女の言うとおりよ、この状況で貴女をこちらへ引き込むのは誉められた事じゃないわね。

でも今の状況は非常事態、あの海が幻想郷に入ってきた事の意味は外から来た私達は十分にわかるわ。

正直、私達神では手を出せない、貴女達妖怪と一緒にね……、そしてこのまま放置すれば、間違いなく幻想郷は消えてなくなる、でも私達は手を打たなければいけないのよ。組織の枠に囚われてる段じゃないわ」

「我々天狗だつて、策を考えています。ならば勝手に動ける訳がないでしょう！」

私は腰を浮かせ思わず叫んでいた、何故だろうかとてもイライラする、八坂さんはそんな私の様子に動じる事なくこちらをしっかりと見詰めてきた。

「射命丸、貴女は気付いているはずよ、山の妖怪はどうやってもあの海に対抗出来ない事、そして不安と恐怖で染まった天狗達が文字どおり烏合の衆である事を……」

「ぐっ……ですが！ ですがそれなら私一人動いたところで何になると言つのですー！」

八坂さんの言う事は凶星だった、妖怪がどんなに束になってもあの海に手の出しようがない、きつと敵わない、そして強行派が優勢の今、沢山の仲間達が犠牲になる事だつて考えられる、この恐慌状態なら玉碎覚悟で動きそうな奴等は何人も知っている。

「いいや違う、貴女にしか出来ない、幻想郷最速の貴女と私達の力があれば可能よ。」

貴女の翼があれば幻想郷は救える、幻想郷の為に私達にその翼を貸して欲しい」

八坂さんは私をまつすぐに、そして力強く見つめてきた、確かな意志のこもった瞳に私は目をそらしてしまった。

迷っているのだ、仲間が犠牲になるなんて事は耐え難い、でも組織に属する私がそんな事をしていいのか……、裏切るような事をしていいのか……、でも、多くの仲間を救えるのならば、そんな方法があるのならば……。

「天魔様に……いえ……、大天狗様と一度話し合つて、それから組織として動く訳には……いかないのですか？」

「駄目だわ、それじゃ遅すぎる……、組織の力は巨大で強い、その反面動きが遅く自由な身動きが難しい、そして何より天狗の強行派達はもう止まらないわ……、諏訪子、天狗の会議の様子はどうか？」

それを受け洩矢さんはそっと目を閉じる、何をしているのだろうか……。

「千里眼ですよ」

私の心の疑問に東風谷さんが答えた、一瞬ドキツとしたが読心術ではなく、ただ察しがいだけのようなようだ。

その手の嫌らしさは感じない。

「ん……大方の予想どおり強行派が主導みたいね、あ……考え
てたパターンの中で一番最悪だよ、決戦を仕掛けるみたい、しかも
今夜、ろくな策もないのにな。」

このままでは何人死ぬかわかったもんじゃないよ」

「は……そうね……、最悪のパターンって私が一番苦労するのよ
ね……仕方ないか……。」

そう言う事よ、時間もないわ、天狗の決戦は今夜、そして私達の策
も今夜、新月の夜じゃないといけない。

射命丸、貴女の不安は分かるわ、でも不安に自分の判断を鈍らせて
はいけない、迷いは何も生まない、否定に前進はない！ 射命丸文
！ 貴女の力を私達に貸しなさい、そして幻想郷を救いなさい！」

八坂さんは立ち上がり私に向かって手を差し出してきた、本当に
私の力で幻想郷を仲間達を救えるのだろうか？

私は何も救えないかもしれない、でもそれは救おうとしない言い
訳にはならない。

ならば、やろつ……。

八坂さんの手を強く握る、すると満足そうな笑顔で手を握り返し
てきた。

「一つ条件を出していいですか？」

「どんな？」

一瞬怪訝な顔をするが私の表情を見て、愉快そうに笑顔をみせる。

「事件が解決した時は独占取材、よろしく願いしますよ」

「いいわよ、ついでに八坂神社の宣伝もよろしくね」

「わかりました。これで契約成立です。」

それを受け洩矢さんも立ち上がり、八坂さんの背中を景気よく叩く。

「さあ！ そうと決まれば作戦会議だよ、神奈子も射命丸も座って座って！」

そう言い洩矢さんは私と八坂さんの背中を叩き、急かす。

「それではお茶のおかわりを用意しますね」

皆が腰を据えたところで東風谷さんは動きだす。

「私はお饅頭が食べたいわ」

「わかりました、八坂様」

そうして東風谷さんは台所へと消えていく。

迷いはある、それでも私は前に進む、どんな曇天も雲を突き抜けた先には青空がある。

この家族のような2柱の神と1人の巫女は所帯染み過ぎて不安なところもあるけど、きっと大丈夫、根拠もないものを信じるのはジャーナリストらしくからないですが。

私は私の翼にかけて成すべきを成しましょう。

何せ約束してしまいましたからね、にとりさんに……。

私は前に進むと……。

第七幕 風神と風神少女 く good day and good night

最終まで読んで頂きありがとうございます。

今回まで八坂神社組と射命丸の話でした、次回は場面が変わりま。

いちよ補足すると神様は柱で数えます。

なかなか面白い文章は難しく、納得のいく文章が書けません、頑張らないといけませんね。

第八幕 魔法使い達の森 } Witch in mystic forest }

いつもどおりの二次創作、今回は二次創作独特のカップリング要素を含みます。無理だなくという人にはオススメ出来ません。

第八幕 魔法使い達の森 〽 Witch in mystic forest 〽

『私は前に進みます』

『決戦は今夜！ 我々天狗の力！ 山の妖怪の力！ 存分に振るお
うぞ！！！！』

『うっ海！？ さっ鮫はいないですよね！？』

『霊夢〽服を取りに一回家に戻るぜ』

『レミィ、外に出られないからって家具に当たらないで』

『お嬢様！ 「困ったわね」 「じゃありませんよ！」』

ほの暗い水の底、異形の深海魚が泳ぎ回るそんな場所に似つかわしくない、白い壁の大きな建物の最奥、少女はそこにいた。

日本式でありながら、所々に取り入れられた龍のデザインや調度品、どこか大陸の影響を思わせる建築様、豪華なそれらは華美でありながら品を損ねない正に一級品と呼ぶに相応しいものだった。

少女はそれらをたいして価値の無い物かのように指先で弄ぶ。

一つため息をつくると少女は目を閉じさっきまで聴こえていた声を記憶の底から呼び起こす。

「ここは幻想郷というのか、幻と実体の共存する世界、懐かしい、昔はそうであったな、妾はこんな世界が在るとはついぞ知らなかった、面白いところじゃ」

少女は水の底から耳をそばだて幻想郷の全てを聴いていた、様々な音を聴き様々な事を知った。

「ただ、わらわに刃向かおうというのは許されないの、フッフ…でもそれはそれで楽しそうじゃ」

少女は妖しく笑う、手首の連輪がシャラリと音を立てる。

ここはほの暗い水の底、少女は一人、ただずむ。

「霊夢く服を取りに一回家に戻るぜ」

「そう」

霊夢は少しだけこちらに顔を向けると二度とこちらを見る様子
なかった。

霊夢はいつもここで、異変が関わると輪にかけて冷たい、こっ
つ冷たいと気分が滅入る。

「服ありがとうな、後で返すぜ」

そう告げ体を傾け魔法の森へと方向を変えた。

今回の異変解決の旅は静かだ、妖精達が沸いてこないってのが
一番にある。

そして、意味もなく難癖を付けて邪魔をする妖怪達もいない。

いつもと勝手が違うので正直気が抜ける、紫の境界を操る力の効果が早く知りたくはあったが、一旦着替えて出直したい、着慣れない霊夢の服というのもあるが、帽子がないと落ち着かないし一度着替えて気持ち切り替えたいのだ。

やっぱり魔法使いは黒い帽子に黒い服、そうじゃないと決まらない、何事も形から入らないと……。

別に私が形に執着している訳ではない、魔法ってのは形が大切なのだ。

儀式魔法なんてのがその例、一定のやり方に則って一定の事を成す。

突き詰めれば魔法とは一種の学問なのだ、魔導書を読み先人の知恵を拝借し、そして様々な実験を繰り返して新しい魔法を開発していく。

それを永遠に繰り返すのが魔法という学問であり、それを成すのが魔法使いだ。

だから、アリスやパチュリーも暇があれば魔導書を読みふけるし自分の魔法の研究を怠らない……。

私は霊夢と違って縁側でお茶をしばいてるだけじゃない。

そんな黙考も束の間、暫くすれば、魔法の森の近くにある香霖の店が見えてきた、魔法の森は海の影響はなさそうだ。

「もし家が海に沈んでたらショックで三日は寝込みそうだけぞ」

よく見ると沢山の人が香霖の店の近くにいる、村人はこんなところに来てたのか……、少し寄って行こう。

自由落下に身を任せ高度を下げ香霖堂の店先にスタツと着地する。

「魔理沙じゃないか、紅白だったんで、一瞬霊夢かと思ったよ」

「よう！ 香霖、景気はどうだぜ？」

「ボチボチだね、それよりも優雅に着地するのはもう止めたのかい？」

「世の中、形ばつかりに拘ってちゃダメだぜ」

「そうかもしれないね。それよりも魔理沙はまた異変解決に行くのかい？」

「勿論そのつもりだぜ、私の華麗な活躍を期待するといいぜ」

「そうさせてもらうよ、でもくれぐれも無茶はするんじゃないよ」

「心配無用、余裕だぜ」

そう言って薄い胸を反らした。

「どうせ魔理沙は無茶をするに決まってるだろ……」

嘆息混じりに魔理沙と霖之助に話しかけるのは上白沢慧音だった。いつもの青いワンピースドレスに弁髪帽を被り、長い青髪を手櫛ですき、呆れた様に顔でこちらを見てくる。まったく失礼なヤツだ。

「よ！ 慧音」

「どうかしましたか？」

「ああ、霖之助に頼みがあつてな食料の調達に行つてくるから私のいない間、村人に何かあつた時の事を頼みに来たんだ」

「そんな事なら構いませんよ、どうせ店番のついでですし、村の人にうちの店をアピールしたいですね」

「そう言つてくれると助かる、じゃあ行つてくる。

魔理沙、早く異変を解決してくれよ、こっちは食料の調達だけで手一杯だ」

「食料なら森にキノコがあるぜ？」

「村人は普通の人間だぞ」

「私だつて普通だぜ」

「普通の人間は魔法使いになんかになりはしないだろ、まったく…
…、無駄な時間をくつた気分だ、ちなみに魔理沙、避難してきた村人の中にお前の両親もいるからな、じゃあ行つてくるぞ」

「いつ!? それは不味いぜ、じゃあな霖之助、私も行くぜ」

慧音は飛び立ち、私は慌てて筭に股がった、勘当された手前あまり顔を合わせたくないのだ。

「そうだ、ちよつと待つて魔理沙」

霖之助が何かを思い出したのか呼び止めてきた。

「あ? なんだぜ?」

「ちよつとお使いを頼まれてくれないか、アリスの家に届けて欲しい物があるんだ」

「私は忙しいんだぜ」

「そう言わないでくれ、どうせ通り道だろ? 魔理沙が欲しがってた星の欠片をあげるからさ」

「星の欠片? ん〜……、まあどうしてもって言うなら頼まれてやらないでもないぜ」

「じゃあよろしく頼むよ」

そう言つて霖之助は店の奥へと行き直ぐに戻つてきた。

「この小瓶をアリスに渡してくれ」

小瓶と黒い石を受け取る。

「これは何なんだぜ？」

「一時的に魔力を補充する薬さ」

「そりゃいい薬だな」

「ちなみに人間用じゃないからな」

「残念だぜ、じゃあな」

「気を付けるんだよ」

手をヒラヒラと降りながら魔理沙は風のように去って行った。

薄暗く、じめじめした森を突き抜けていく。

アリスの家は香霖堂からそう遠くはない、飛ばせばほんの数分だ、とっとと用事を済ませて海へ行きたい。

やはり異変解決の旅は楽しいワクワクする、私にとっては一種の娯楽なのだろう。

暫く飛んでいると見慣れた後ろ姿が見える、肩まで伸びたブロン

ドの癖っ毛に水色のワンピースと白いケープ、あんな格好で森をうろつくヤツなんて一人しかいない、アリスだ。

「おーい！ アーリースー！」

振り返ったアリスは一瞬怪訝な顔をし、ちよつと嬉しそうな顔をしたかと思うと、今度は不機嫌そうにしかめる。

なんだ？ 百面相か？

追い付こうかという時、突然アリスの体がグラリと傾き、そのまま糸が切れた人形のようにうつ伏せに倒れてしまった。

「え？ あっ！？ おいアリス！」

流石に突然の事なので慌てる、箒から飛び降りアリスの元へ駆け寄る。

「おい！ アリス！」

揺すつても反応はなく息はしてるが顔色が悪い、頬を叩いてもやつぱり反応はない。

「死んでるなら置いて行くんだがな〜仕方ないか……」

何が原因か知らないけどこのまま死なれても困る、私はアリスを背中に担ぐと箒に股がり、アリスの家に行く事にした。

背中に人を乗せて飛ぶなんて初めての事だ、多少ふらついたが無事アリスの家に着いた。

勿論、誰もいないのでノックもせず堂々と入らせてもらう、寝室に向かいアリスをベッドに下ろし一息つく。

インドア派というだけあって軽い私より身長はあるからやっぱり重い。

よく見れば森でぶっ倒れたせいだろう、あちこち泥だらけだ。

「あー……仕方ないか……」

靴を脱がせ、ワンピースを脱がせる、思ったより眠っている人の服を脱がせるのは重労働だ。

今度服を脱がす魔法でも研究しようかとさえ思える。

スリップとドロワーズ姿のアリスをベッドの中央に寄せ、布団をかける、アリスの薄い胸が浅く上下する、呼吸が少し速い、あくまで人間の基準の話だが、見るからに楽そうに呼吸をしてはいない。

何があつたのだろうか……、風邪か？

こういう時はおでこをおでこを合わせて熱をみるのが一番だ。

ん……魔法使いがどうかは知らんが、平熱だな。

「ひゃうっ!」

ゴスッ

変な悲鳴をあげアリスの体が小さく跳ねる、その拍子に額と額を強か打つ。

「なっ々なな! 何やってるのよ魔理沙!」

「イタタタ……、急に起きるな痛いぜ!」

痛む額を押さえ訴えるがアリスはまったく聴いている様子はない、相当びっくりしたのだろう、ベッドから跳ね起きると一気に壁際まで後ずさる。

速いな、ゴキブリか。

「そっそんな事よりもなんなのこれは……キャっ!」

どうやらアリスは自分が下着姿だという事にやっと気付いたのだろう、ベッドのシーツをひっぺがすと体に巻き付けしゃがみこんだ。

「なっ々なな何でこんな恰好なのよ!」

もの凄い顔で睨んでくる。

私は悪くないだろ、それに女同士なんだし。

「アリスが森でぶっ倒れたからここまで運んできてやったんだぜ?

それに泥だらけのまま寝かせる訳にはいかないだろ……」

私にしては至極真つ当な事を言ってるはずだ。

それなのに『う』と顔を真つ赤にして睨んでくる。

礼くらい言ってもいいだろうに、抗議の声を上げようかと思ったその時、アリスの体がグラツと傾きコテンと横に倒れてしまった。

またぶっ倒れたやがった、何なんだいったい、忙しいヤツだ。

仕方ないのもう一度ベッドに抱えあげる、こういうのお姫様抱っこって言うんだっけな、アリスが重いから踏ん張らないといけな
いから、がに股でまったく様にならないけど……。

うん……重い……。

アリスを寝かせ、一息ついてベッド横に椅子を引き寄せ座る。

それにしてもアリスのヤツどうしたんだろう……。

幽々子の異変以来の付き合いで長い付き合いとは言えないが、アリスの家はわりと行く場所の一つだ。

パチュリーのところと違ってお茶だけじゃなくて、たまに晩御飯が出る時もあるしな。

そんな感じで付き合いがあるからアリスについてはそれなりに知っている。

先ず第一に滅多に弾幕らない、本当に必要な時しかやらないし、やっても本気にならない、それどころか本気になるくらいなら負け
てもいいや〜と思ってる節がありそうだ。

私は負けるのが嫌いだから、まったく理解出来ん。

弾幕を例に出したが弾幕に限った話ではない、何事においても本気にならない。

そういう性格なのだろうか？

わからん

あゝ……そうだ、人形作ってる時は本気っばい、それでも余裕みただけだな。

正直、あの手先の器用さは羨ましい、あのくらい器用だとマジックアイテムを作るのもきつと楽なんだろうけどな。

いかん、脱線した……。

えゝと……、アリスの話だ……。

とにかくアリスは本気にならない、根をつめない、でもアリスはぶっ倒れた。

しかも森の中で。

たぶん、何か無理をしたんじゃないだろうか……。

「何なんだぜ……」

魔理沙の問いに人形のように眠るアリスは答えるはずもなかった。

閲覧ありがとうございます。
オリジナルキャラにちよつと触れつつ今回は魔理沙視点での話でした。

魔理沙とアリスのカップリングは東方二次創作では筆頭のもので、実際のところ魔理沙は魔法使い達からはよく思われておらず、永夜抄時点で魔理沙とアリスは仲が悪いとなっていますが、やり取りを見る限り仲が良さそうに見えたりと、その辺りがマリアリ要素に繋がった一因と言われたりしているそうです。

ちなみに

霖之助について、東方香霖堂を読んだ事が無いので完全にイメージで書きました、霊夢や魔理沙との関係を見るからにいいお兄さんイメージです。

でも、霊夢の巫女服を季節毎に作ってるのは霖之助なのですよね…デザインに関しては霊夢の趣味なのか霖之助の趣味なのか不明ですが、巫女服にフリルやパニエを入れてる姿は実にシユールだと思います。

魔理沙について

妙な言動が多く勢いのあるキャラというイメージがありますが、地霊殿でのさとりとの会話を見る限り、口で言っている以上に色々考えているのだと思います。

なので、ふざけたような素振りが多いが頭がよく回るキャラというイメージです。

イメージは人各々ですし、皆さんも色々なイメージがあるのでしょ

うね、そういうのも二次創作の良さかなとも思います。

次はアリスについての話、カップリング要素が強くなります。

第九幕 人形の館 〔Melancholic Alice〕（前書き）

いつもの二次創作です。今回もマリアリ要素を含みます。

第九幕 人形の館 〈Melancholic Alice〉

最悪の気分と自己嫌悪に包まれ私は二度目の目覚めを向かえた、流石に一度目の時のように大騒ぎはせず、ベッドの中で平静を装う事が出来たので良しとはしたい。

「恥ずかしいところ見られたからってそう睨むなよアリス、とりあえず霖之助からの預かり物だぜ」

魔理沙は懐から小瓶を取り出し私に突き出した。

「あつ……魔理沙が届けてくれたのね、ありがとう……、その……ついでで悪いけど水を汲んできてくれない？」

小瓶を受け取る、届けてくれたのに随分な対応をしてしまったとすまない気分になる、それでも何か癪な気分ではある。

「別に構わないぜ」

そう言い魔理沙は椅子から立ち上がり水汲み場へと向う。

ドアの向こう側へと消えていく魔理沙の後ろ姿を眺めながら私は物思いにふけた。

私は魔理沙が好きだった。

どのへんが好きか？ と聞かれれば即答出来る答えはなく、気付いたら好きになっていた。

何故好きになったんだろう？

こうやって横になり天井を見てみると、つい条件反射のように魔理沙の事を考えながら自問自答してしまう、どんなに考えても答えは見付からないし、ため息を量産するのが関の山でまったく建設的じゃない。

「昔はこんなじゃなかったのにな……」

基本的に他人に対して無関心だ、森に迷った人を泊めたり、森の外に案内したりするが、あくまで森に厄介事を持ち込んで欲しくないので予防策的なものだし、たまに人の話を聞いてみると意外な収穫もあったりするのだ。

そう、私にとってそれらは結局は自分の為、積極的に人に関わろうとしたり、人のために動くこうとするなんて、自分で自分が信じられなかった。

今回森で倒れてしまったのも、その関係、つまり魔理沙の為だっ

たりする……。

その事については思い出すだけで頭が痛くなる。

私が湖の異変に気付いたのは偶然だった、湖の畔でしか取れない薬草を取りに行った際に湖が多少だが大きくなっている事に気付いた。

不審に思い人形を潜らせたところ、湖が知らぬ間にとつともなく深くなっている事、湖の水が大量の塩分を含んでいる事、糸を通して人形に魔力を流してもまったく伝わらない事……。

そして何より重要な事、人形を潜らせた、ほんの十数分という間に湖の水かさが増している事

この湖は危険過ぎる。

即座に非常事態と判断し、その場で行動に出た。

森の各所に結界の起点を置き、水かさが増し森が湖に飲まれてしまわないように森全体を結界で囲う大掛かりな結界術式を行ったのだ。

結界術というのは魔法使いの基本スキルと言える、結界と言っても様々で霊夢が得意なループする閉鎖空間や単純に結界の境界を跨いだ者を閔知する結界、他人に知覚させない結界、例えばマヨヒガ何かもその一種なのだろう、そんな感じの結界術なのだ。

魔法使いという者は自分の魔法研究の為に最適の住処を用意する、私の屋敷やパチュリーの書斎、魔理沙の魔法店だってそうで、大なり小なり何等かの結界術をかけ研究を最適に行う為の工夫がされて

いる。

私の場合には森に特定以上の魔力、特定以下の魔力を持つものが侵入した際に関知する結界、そして屋敷に近づく者を関知する結界を使っている。

特定以上のものは厄介な妖怪で特定以下は無力な人間だ。

とりあえず、それだけ解れば後は自分自身で対処出来る。

と言うのもあるが単純に私は結界術が余り得意でなく、初歩の初歩と言える関知結界くらいしか出来ないのだ。

正確には他の結界術も出来はするが魔力の効率的な運用が出来ない為、やたらに魔力を食ってしまう。

そんなモノを張っていたら魔力が幾らあっても足りないからだ。

結界術が下手な私が森を水から選択的に守るなんていう大掛かりな結界を張っていたのは魔理沙の為だ。

あの大量の塩分を含む湖の水が森に入ったら間違いなく森の植物は枯れ、何年も、もしかしたら何十年もまともに植物は生えてこないだろう、勿論、魔法使いにとって重要な森の茸もだ。

何年何十年という時間は魔法使いである私にとって大した時間じゃない、その間は魔法研究に遅れが出るだろうが、必死になって結界を張るレベルの痛手ではない。

だが、人間である魔理沙は違う、魔理沙は魔法使いになる事を目標としている、茸が枯れば確実にそれは遅れるし最悪の場合、魔法使いになる前に死んでしまうかもしれない。

人間の寿命は短すぎるのだ。

私は魔理沙が先に死んでしまう事に耐えられる自信がない。
魔理沙に早く魔法使いになって欲しい。

その為に森を守らないといけない、だがその結果がこれ……。

私の魔力量では結界を張り終わる前に底をついてしまつと予想し、途中で人形を送り香霖堂に一時的に魔力を増幅させる秘薬を頼んだが結局間に合わずに倒れてしまい魔理沙に拾われ今にいたる。

まったく情けない話だ。

無茶をした上に倒れて魔理沙に助けてもらつたなんて恥さらしもないところだ……。

自己嫌悪になつてもやつてしまった事は戻らないし、何よりまだ結界を張り終わつてない。

薬を飲んだら続きをやりに行かなきゃ……。

「アリス、持ってきたぜ」

魔理沙はベッドサイドのテーブルに水の入ったコップを2つ、ついでに何枚かクッキーの乗った皿を置いた。

「ありがとう……」

相変わらず図々しくも勝手にクッキーを持ってくる神経もどうか

と思う、よく見れば頬つぺたにクッキーの屑が着いてるので何か一言言っただけ、言いたい気分だったけど、感謝の気持ちを忘れてはいけない、ここは素直にいきたいところだ……。

私はそう言っただけで体を起こそうとする、だが思うように肘に力が入らず途中で体勢を崩すしてしまった。

まずい、ベッドから落ちる。

「アリス！」

寸でのところで魔理沙に抱き止められる、胸に抱き寄せられるような体勢になり、びっくりして突き飛ばしそうになったが力が入らずもたれ掛かったまま動けない。

やだ！ どうしよう、どうしよう、恥ずかしい。

何か言おうにも、しようにも頭の中はパニックで、いい考えなんて浮かびやしない。

「大丈夫か？ 顔が真っ赤だぜ、風邪引いたんじゃないか？」

「いや……その……ああ……あう……」

魔理沙が心配そうに私の顔を見詰めてくる、心配してくれているに私は何をやっているのだろう……。

手で触れなくても分かる程、頬が熱い、鏡を見ればきつと林檎のように赤いはずだ。

もう恥ずかしくて恥ずかしくて仕方がない。

「しょうがないな」

そう言い魔理沙は私をベッドに下ろし私が握り締めていた小瓶を取った。

「この薬を飲むんだろ？ 私が飲ませてやるぜ」

「え！？ そっそんな！ 悪いよ、自分で飲めるから」

「病人が遠慮するんじゃないぜ」

いつになく優しい魔理沙に戸惑いつつ仕方なく首肯すると思いの外丁寧な薬を飲ませてくれた。

最後にコップの水を口に含み薬の苦味を洗い流す、薬自体は魔力の物質化によって作られた物なので、渴いた体に水が染み込むように、全身に魔力が充ちるのが分かる。

「やっぱり魔力切れでぶっ倒れてたのか、世話がやけるぜ」

「わっ悪かったわね……」

実際のところ凶星に他ならないので反論のしようもなく、布団を鼻まで被り、眉をへの字にし目をそらす。

「まっ熱もかなりあるみたいだしな、寝るのが一番だぜ」

そう言い私の額へと手を伸ばす、額で熱を診るのだろう、恥ずかしさに逃げてしまおうとも思う。

でもあの手に、好きな人に触れられる感覚、あの心地よい感覚を

思つと羞恥心を誘惑が上回る。

手の行方を目で追う、魔理沙の手が前髪をさらりとかき分け、私の額にそつと触れる。

私の手よりちよつと小さい手が額を包む、手から伝わるちよつとひんやりとした魔理沙の体温。

なんとも言えない気持ちがじんわりと胸に広がる。

「結構、熱があるみたいだぜ」

そう言い魔理沙はそつと手を離す、その手を名残惜しそうに目で追う。

「ところでアリス、結局何してたんだ？」

「えっ！？ うん……、結界張つてたのよ、森の草が枯れちゃったから私が困るからね」

「それで魔力切らしたのか？ まったくドジだな」

「悪かったわね、魔理沙が早く薬を持ってくれば問題なかったのよ」

「なんだ？ 私のせいか？ 可愛くない野郎だぜ」

可愛くないか……、可愛くはないだろう、こんな女……魔理沙の

言葉がそう言う意味ではない事は分かるし、冗談みたいな言葉の掛け合い、たいした意味等無い事、それでも私の心を暗くさせる。

随分と感傷的になったものだ、恋は人を変えらるというのとは本当なのだろう。

「まあいいか、じゃあ大人しく寝てろよ、私はパパッと異変を解決してくるぜ」

そう言い椅子から立つと踵を返しドアに手をかけた。

「まっ！ 待つて！」

「あ？ 何なんだぜ？」

「もしかして……あの湖に入るの……？」

「当然だぜ、今回の黒幕は湖の底にいるんだぜ」

「霊夢も行くんでしょ？」

「ん？ そりゃなあ、異変解決は霊夢の仕事らしいしな、先に行ってるはずだぜ」

「じゃあ、わざわざ魔理沙が解決する必要ないんじゃない？ 霊夢が行くんだし、行く必要ないと思うわ、あんな湖に」

嫌な予感がした、底の見えないあの深く暗い水の底に行ってしまう事が不安だった、何故だかそれっきり魔理沙が戻ってこないような気がした。

きつと気のせいだろう、底の見えない穴は恐怖心を駆り立てる、それが原因だと思う、でもそれだけでは説明のつかない何とも言えない不安感が胸に渦巻く。

「面白そうだから行くに決まってるぜ、それに私は強いんだぜ？心配いらないぜ」

ニカッと笑うと腰に片手を当て、親指を立てポーズを取るとドアの向こうにそそくさと消えていった。

「まつ……！ 魔理……沙……」

ドアの向こうでパタパタと廊下を早足に歩く音がする、もう私の声は届かないだろう。

不安はビンの底に溜まる澱のように心の底に沈殿する、不安を振り払えずモヤモヤとする。

ベッドから立ち上がりクローゼットから服を取り出し着替え、鏡の前で髪の毛の乱れを整える。

「魔理沙……」

無事であつて欲しい、会った事もない、いるかも疑わしい神に祈る。

こんな祈りはおまじないみたいなもの、魔法使いが神頼み、呪でもないまじないをするなんてお笑いものだ。

それでも祈つてみたかった。

「結界……早く終わらせないと……」

まだまだ残りがある小瓶を懐にしまい、ドアを引き部屋を出る。

私には待つ事しか出来ない、ならば魔理沙を信じて森を守ろう、
きつと大丈夫、きつと大丈夫。

異変が解決すれば博麗神社で宴会をすればいい、そして、魔理沙
と楽しく飲むんだ。

私の得意料理を持って行こう、魔理沙はきつと美味しいと喜んで
くれるはずだ。

私そう自分に言い聞かせ、重い扉を開き屋敷を後にした。

第九幕 人形の館 〈Melancholic Alice〉（後書き）

閲覧ありがとうございます。

次話辺りから更新頻度が下がります。申し訳ないです…

ただ間隔をあけてしまうだけならもったいないので、これを機会に色々考えてみたいので、意見を募集したいです。

この子を出して欲しいとか、あの子を活躍させるべきだとか、そんな感じで…

勿論、他の意見もお待ちしております。

東方の魔法使いは捨食の術や捨虫の術等で魔法使いになるとかかないとか、魔理沙はあくまで職業が魔法使いであって種族は人間である。

アリスと白蓮は元人間の魔法使い、アリスは公開されてる設定ではグレーみたいです…

今回の話では結界の話が出てきますが、言うまでもなくオリジナル要素です。

解る人には解る程度に型月的な要素を取り入れています。

さて…

次回は時系列的な意味で話がちょっと進みます。

つまり、やっと霊夢の出番です。

第十幕 その者、魚にして人に非ず 〈Ripply song〉(前書き)

我等が霊夢さんが久方ぶりに活躍します。
そしてオリジナルキャラの登場です。

第十幕 その者、魚にして人に非ず 〈R i p p l y s o n g〉

ぼかぼかとした春の陽気とは対照的に湖の水は冷たい。

私、博麗霊夢は水の冷たさと服がへばりつく不快感をその身で経験しているので、水に入る踏ん切りがつかず湖の上を旋回していた。

今日だけで三回目も湖に来ている、一回目は調査、二回目は魔理沙と来て、今が三回目だ。

二回目はひどかった。

異変解決の為に魔理沙と湖まで来たものの水に潜る方法を考えていなかったという行き当たりばったりぶり。

魔理沙のアホが『弹幕は火力だぜ』と意味不明の発言をし水柱を上げて豪快に水に突っ込んだら、ぷかぷかと気絶して浮いてくる始末だった。

その後、逆上した魔理沙のアホに湖に放り込まれたりして一通り無駄な時間を過ごし、作戦会議の為に一回家に戻って紫の力でどうにかしてもらって今に至る……。

今になって紫のイタズラで水に入って酷い目に合うとは思えないけど……。

水面ギリギリまで降下し水に手を入れてみる、水の中で手を回してみるが水の抵抗を感じない、手を抜いても手は濡れておらず何とも不思議な感じがする。

念のために袖を水につけたがやっぱり濡れなかった。

「大丈夫……みたいね……」

何度見ても紫の力は不思議だ、でも水に入るのはやっぱり不安な訳で足からそそっと水に入ってみたりする。

「貴女は何をしているのですか？」

霊夢が振り返ったそこには水面から突き出る首があった。

透明感のあるエメラルドグリーンの長い髪をたたえ、髪と同じ色の優しい瞳が霊夢を見つめている。

「あなたこそ何やってるのよ、そんなところから首を出して」

「え？ 私ですか？ 天気がいいから泳いでるのですよ、後はパトロールです」

水面から首を出した女はにこやかに答えた。

「寒くないの？」

「寒くなんかありませんよ、温かいくらいです」

「冗談でしょう？ 春先に水泳なんて正気の沙汰じゃない……」。

「春になると色々出るのね、ところでこの湖を大きくしたのあんた？」

「湖……？ あゝ海の事ですね、違いますよ、私はそんなたいそれた事出来ません。」

「そう言う貴女は何をしているのです？」

「この湖を大きくした犯人を退治しにきたのよ」

「湖を大きく犯人を……退治……？」

その瞬間、女の目付きが変わる、いや正確には目付きではなくその優しい瞳の奥に宿る何かが変わるのを感じた。

霊夢は危険を感じ後方に跳び距離を取りその瞳を見詰める。

女は静かに水面に消えていく、この雰囲気は何度も感じてきた間違った闘いになる、相手は本気でくる、あの目は何度も見た事が

ある。

紅霧異変での咲夜の目、春雪異変での妖夢の目、永夜異変での永琳や慧音の目。

あの目と同じ目、油断すればやられる。

玉ぐしを構え周囲を見回す、静かな水面も今は不気味に感じた。

敵は水面の何処かから現れる、霊夢はそう確信し全神経を集中させ水面を凝視した、何が出るかわからないというのはやはり不気味だ。

背後の水面で何かが跳ねた、音に反応し体を反転、後退し距離を取る。

そこには水柱を上げ上空に舞い上がるさっきの女がいた、女は空中を蹴り急角度でこちらに突進してくる。

速い！？

避けられないと判断し素早く防護障壁を前方に展開する、だが女はそんなモノには構いもしないとも言つように、障壁ごとその下半身の大きなヒレを叩き付けてきた。

崖から飛び降りたらこんな衝撃を受けるのだろうか、そう思わせ

る程の衝撃が障壁越しに伝わってくる、後ろに飛んで誤魔化したかほとんど吹き飛ばされたと言っても過言じゃない。

水面ギリギリで持ちこたえ、霊夢は相手を睨み付ける。

霊夢にとってそれは今までに見た事の無い妖怪だった、何せ下半身が魚なのだ、恐らくは半獣の類いなのだろう。

半獣の類いはそのほとんどが身体能力が非常に高い、叩かれたのは痛かったが距離が離れたせいで、広い視角の中に相手を捉える事が出来るので逆によかったかもしれない。

見失いでもしたら致命的だ。

「王女様に楯突く賊は私が全て取り討ちにして差し上げます。ですが今引き返すと言つのならは見逃してあげましょう」

女は魚の様に空を泳ぎ、そう告げる。

「冗談じゃないわ、誰が引き返すものですか、第一取り討ちに合うのはあんたよ」

玉ぐしを突き付けそう言い返す、負ける気など更々ない。

「ならば仕方ありません。

海の藻屑となって消えなさい！」

その言葉と同時に大量に現れる人の頭程の水球、振り下ろす手と同時に水球は霊夢へと左右から弧を描き襲ってくる。

「誰が当たるものですか！」

横風ぎに手を払い、お札を放ち水球の半数以上を相殺する、数さえ減らせばどうという事はない、確実に避けれる。

最小限の動きで避け、相手を視界に捉え逃さない。

弾幕を抜けようかとする、その時だ女はこちらに高速で突進し一気に距離を詰め、大きくヒレを振りかぶる。

「くっ！」

急停止し障壁を張る、なんとか間に合うか？

直後に襲う衝撃、ミシリと結界が悲鳴をあげる、だが二度も吹き飛ばされてなどやらない、内側から更に結界を作り弾き返す。

女は弾かれる衝撃を殺し後ろに飛んだ。

「ちよつと！ あんた！ ちゃんと弾幕りなさいよ！ それが幻想郷のルールでしょ！」

スperlカードルール、弾幕勝負で物事の白黒を付ける、幻想郷唯一の公平にして平等の決闘ルールなのだ。
それを守らないなんて事は霊夢にとって許せる事ではなかった。

「弾幕？ ルール？ なんなのですかそれは？」

「はあ！？ あんたそんな事も知らないの？ どこの野良妖怪よ！」

「今日来たばかりなのです。そんな事知ってるはずが無いでしょう、まあ知る必要もないと思いますが……」

女は腕を振り上げる、それを合図に天に届くかのような水の壁が湖からほとばしり、360度の包囲網を作り出した。

全方位面攻撃、まったくふざけた攻撃だ。

こんなものは弾幕じゃない、絶対に避けられない攻撃なんて弾幕じゃない。

霊夢は一瞬、ルール無視してやるうかとも思ったが、自分で作ったルールを自分で破ってたら示しがない、第一ここでルール無視したら何か負けた気がするのだ。

ならばあくまで弾幕勝負して勝つ、水面に向かって降下加速度をつけ水中へと飛び込む。

360度攻撃とは言いつつ何の事は無い、よく考えれば下ががら空きだったのだ。

普段水中を避けるに使える範囲だなんて考えた事もなかった、避け方としては馬鹿らしいけど……まあつくづく紫の力は便利だ、霊夢はそう思った。

こうやって水中で息も出来るし移動するにも抵抗を感じない。

「水中でそれだけ動けるとは貴女凄いですね。ですが、私に水中戦を挑もうとは無謀ですよ」

余裕なのだろう、わざわざ正面に現れた。

「ふん、水行くくらい出来なくて何が巫女よ！ あんた今更泣いて謝っても許さないから」

「」冗談を」

そう言い女は一直線に向かってくる、予想はしていたが、やはり魚だけあって飛ぶより速い。

でも、接近戦を仕掛けてくるなんて予想済み、そうそう何度もくらってやらない。

霊夢はスペルカードを取り出しその意味、概念と共に宣言する。

『境界』 二重弾幕結界

女のヒレが頭部を目掛け肉薄する、だが完全に当たったかに見える攻撃は空振りに終わる、女は自分の与える打撃の感触が無い事に戸惑う、空振り、文字通り敵が消えた。

「驚くのはまだ早いわよ」

背後からの声に女は振り向く、その顔には明らかな焦りの色が見てうかがえた、高速移動なら目で追えずともまったく見えない等と言ふ事はない、だがさっきの移動は明らかに見えなかった。

「さあ、反撃開始よ」

霊夢は横凧ぎに玉ぐしを払い楔型の弾幕を放つ。

だが霊夢の弾幕は拍子抜けしてしまう程のあまりにも普通の何のへんてつもない弾幕だった、特別速くも無ければ癖もない、ただのまっすぐ弾幕。

あの瞬間移動はなんだったのだ？ こけおどしか？ それとも移動しか能が無いのか？

逆に嘗められたのかと苛立ちさえ覚える、こんな弾全て避け叩きふせる。

そう思うも束の間、目の前の弾幕が突然消える、またしても突然の消失、だがその困惑も背中の中痛烈な衝撃に寸断される。

女はその痛みの正体が弾幕である事を知るのに数瞬かかった、背後で弾幕が発生したのなら、その発生時のノイズを水の波動で感じる事が出来る。

だが、弾幕は元々そこに有ったかのように背後から襲ってきた。

「悪いけど考えている暇なんてあげないわよ」

休む暇などない波状攻撃がくりだされる。

弾幕が突然消え、突然現れ、また消え、また現れる。

半径20M全方位弾幕

文字通り全ての方向から息つく暇もなく襲い来る弾幕、女はその隙間を縫うように避ける。

だが、そんな様子にも霊夢は余裕すら感じ勝ちを確信していた、境界『二重弾幕結界』は2つの裏返し空間を作り上げるスペルだ。空間を裏返し更に裏返すと空間がクラインの壺のように湾曲し裏と表の概念がなくなり、物事の境目、つまりは境界線がなくなる。その空間では距離が意味を持たず、瞬間移動や弾幕が消えたり現れたりなんて芸当が出来る。

瞬間移動と言っても実際のところは移動なんて1mmもしてないので、あくまで相手にはそう見えるだけだし、その空間でそんな事が出来るのは霊夢だけである。

そして、相手は見るからに弾幕慣れしていない、避ける動きに余裕がなくどんどんその避け方も危うくなってきている、このままいけば間違いないと当たる、そして一発でも当たれば後は連鎖的に着弾しゲームオーバーだ。

だが、どんなに余裕があろうと容赦も手加減も油断もする気はない、押しの一手。

緩やかなカーブを描き放射状に広がる大玉を放つ。

紫や魔理沙ならこれくらいなら避けただろう、そう思い霊夢は弾幕の行方を見守った。

その刹那、全ての弾幕が欠き消え見えな何かを靈夢の体を震わす。

「あッ！？？ がッ……………！！！？？」

激しい頭痛が靈夢を襲う。

何が起こったのかまったく分からない、体を“く”の字に曲げ苦痛に耐える、視界が軋み脳が悲鳴をあげる。

必死の思いで女を視界に捉えた。

「ッッ……………歌…………？」

霞んだ視覚と聴覚が捉えたのは歌を歌う女の姿だった。

これが攻撃の正体か？ ボヤける思考を振り絞る。

かと言って分かったところでどうしようもない、来るのが分かっていれば対処のしようもあっただろうが、頭を裂くような頭痛のせいで集中どころか思考もままならない。

だが、そんな事を言っている場合ではないようだ、女の回りに槍状の弾幕がいくつも浮かび上がる。

あれで串刺すという事だろう、本格的に不味い、手足は痺れ指一本動かない。

女の合図と共に弾幕が殺到する、文字通り絶体絶命、薄れる意識の中で靈夢は死を覚悟した。

その時、靈夢と弾幕の間に割り込む者がいた、その者は力任せに腕を振ると水流が逆巻き水面がうねる、それによって発生した波

動で弾幕ごと女を吹き飛ばしてしまった。

女は驚愕の表情でその者を見詰める。

「王女……様……!？」

「シレネッタ、郷に入っては郷に従えという言葉を知らぬのか、わらわは弾幕のルールというものを教えたであろう？ よもや忘れたとは言わぬだろうの」

「ですけど！ その者は王女様に楯突く下賤な賊にございます」

「折角面白そうな遊びなのじゃ、興がそがれるであろう、それともなんじゃ、妾の言いつけが守れぬと申すか？」

「いついえ……その様な事は……」

「ふむ、解ればよい……次から注意せよ、その紅白は岸に上げておけ、わらわは先に戻っておるぞ」

「はい、王女様」

霊夢は消えかける意識の中でその会話を聞いていた、夢か現かも分からない混濁した意識の中、思考は夢遊病のように漂う、そしてそのまま霊夢の意識は途切れた。

第十幕 その者、魚にして人に非ず 〈Ripply song〉（後書き）

閲覧ありがとうございます。

久しぶりの霊夢さんの活躍、そしてまた暫く休みです。

次の出番は次の次か、次の次の次の予定です。

ちなみに

察しのとおりオリジナルキャラは人魚で最後の辺りで出たとおり名前はシレネッタです。

詳しいプロフィールが作者ページとかから行ける活動報告に書いてますので興味のある方はどうぞ。

では、また次回。

第十一幕 猫女儿的使用 (Chen in Novella Land) (前)

いつもの東方二次創作、今回は紫にお使いを命じられた橙が永遠亭に行く話。

私は橙である、名字はまだない。

そのうち名字がもらえるのかなくとは思っけど、まだ分からない、でも藍様はきつと付けてくれるだろう。

私もいつか八雲になるのだろうか？ そんな事を考えながら私は広い幻想郷を走った。

私を使役する藍様を使役する紫様のお使いだ、紫様は偉い人で私なんて到底及びもつかない。

勿論、藍様だつてとっても偉い、それに優しいし、お料理は上手だし、何でも出来て、兎に角凄い、私の自慢の人。

そんな訳で私は紫様のお使いで手紙を永遠亭まで届け、お返事をもらって来ないといけない。

その為に博麗神社を出て山を降り、今迷いの竹林をひたすら走っている。

正直に言うと道に迷ったけど、迷いの竹林何だから迷うのは当た

り前だからそれはいい。

それはいい、それはいいのだ、だから大丈夫、大丈夫……。

いいんだけど迷うとやっぱり不安になる訳で、昼間でも薄暗くひんやりとした竹林は薄気味悪い。

猫が暗くて薄気味悪いなんて変な話だが、幻想郷は変なのが多いから例え猫でも薄気味悪いものはやはり薄気味悪い。

兎に角……兎を探し出して道案内をしてもらわないと……。

いつまでたつても永遠亭につかない、永遠亭につかないと紫様に怒られる、紫様は怒ると凄く怖いのだ、この前藍様が紫様に黙って霊夢と闘った事を怒った時は怖かった、尻の下に敷かれ傘でバシバシと叩かれ藍様はとっても痛そうだった。思い出すだけでも鳥肌が立つ、うゝ怖い怖い……。

早くお使いを終わらせないと。

「うーさーぎー！ 出てこーい！」

「ん？ 呼んだ？」

そう言っつて岩影から現れたのは薄桃色のワンピースを着た耳の垂れた兎だった。

「呼んだよ、永遠亭に行きたいんだけど場所を教えてよ」

「永遠亭ね、それなら任せな、迷いの竹林の素敵な可愛いてゐさんが案内してあげる」

そう言って、てゐはにこやかに答える、よかった親切そうな人だ。

「助かります。」

親切そうな人で良かった」

「私を見付けて良かったね、ここには嘘つきで意地悪で凶悪な兎がいるんだ、水色の長い髪で耳がピンと長いからすぐわかるから注意するんだよ」

「そうなんだ、ありがとう、んで早速道案内をお願いしたいんだけど」

「いいよ、あの大きな岩があるのわかる？ それを目印にまっすぐ……」

そうやって道案内を始めたてゐさんの言葉は上空から突然現れた人の拳骨によつて遮られた。

拳骨を受けたてゐさんはそのまま顔から地面に軟着陸しピクリとも動かない。

瓦が割れる様な物凄い音がしたけど、てゐさん大丈夫なのかな……。

「こら！ てゐ！ また嘘ついて、それに誰が嘘つきで意地悪で凶悪よー！」

てゐさんを一撃で昏倒させた人はブレザーにミニスカート、水色

の長い髪に長いピンとした耳が生えていた。
水色の長い髪に耳がピンと長い？

「あ！ 嘘つきで意地悪で凶悪な人だ！」

「違う！」

そんなやり取りをして最初はだいぶ疑いの目で見ていたが、話してみるといい人そうだし、とうのてゐさんは気絶したままだし、このままじゃ埒があかないから信じてついて行ってみる事にした。

150

「私は鈴仙、好きなように呼んでいいわ、貴女は橙だったかしら？
永遠亭に何の用なの？」

鈴仙さんはぐったりとしたてゐさんを肩に担ぎ、ヒョイヒョイと前を進んでいく。

「紫様の手紙を届けに来ました、後お返事ももらいに」

紫様の名前が出た瞬間、鈴仙さんが怪訝な顔で振り返る。

「紫……？ あの八雲紫が？ 手紙？」

「そつですよ」

「変だな〜……手紙なんて書かなくても自分で来れば早いだろうに……まあいいわ、あの藪を抜ければ永遠亭よ」

そう言って指差した藪の隙間からは古い様式の日本家屋が覗いていた。

鈴仙さんに案内され庭が一望出来る部屋に通された、姫様を呼んでくるから、それまでここで待てとの事だった。

竹に囲まれているが意外と風通しはいい、てゐさんが部屋の隅でぐったりしている事を除けばのどかだいいところだ、猫的には涼しさよりも陽当たりを優先したいところだが……、他所の家の家屋事情をどうこう言っても仕方ない、待つ間は庭を眺める事にしよう。

庭には兔がそこらじゅうにいて、庭の草を食んだり、何をしてもなくじつとしている、多分食べちゃダメなのだろう……、今すぐ追いかけて回りたい衝動にかられソワソワするが、我慢しないとけない、むむむ……これは精神衛生上よろしくない……。

でも……、一羽くらいいいよね……。

「何やってるのよ?」

「ひゃうッ!」

抜き足差し足、畳を這い兔に近づこうと縁側まで出たところで鈴
仙さんに声をかけられ、驚き脱兎の如く座布団まで戻った。

「猫はすばしっこいわね……姫、彼女が八雲紫の使いの者です」

「あら、紫の式は狐以外にもいたのね」

振り返るとそこには鈴仙さんを含め3人の人がいた。

姫と呼ばれていた人物は月や雲、桜に蝶等があしらわれた袖の長
いブラウスと床に引き摺る程長いスカートを履き、黒く腰までより
も長い髪は癖一つ無く夜の闇の様に黒いのに月に照らされた水面の
ように輝き実に見事なものだった。

流石に姫と言われるだけあって品があるような気もしてくる。

その姫の一步後ろに立っている人は星座のあしらわれた赤と青で
左右の色が違うワンピースを着て頭には青い頭巾に似たような帽子
を被り銀色の髪を大きな三つ編みにして垂らしていた。

2人はスタスタと先を行くと姫と呼ばれた人は上座に銀髪の方は
その直ぐ下座に腰を下ろし、それを追うように鈴仙さんが銀髪の人
の隣に座った。

「書状を預かってるのよね? 早速見せてもらっていい?」

そう言っ て姫は催促した、懐から手紙を取り出すと鈴仙さんが受け取り姫に渡した。

姫はそれを広げ目を通し始める、姫が手紙を読む間何とも言えないような沈黙が続く、聴こえるのは風に揺れる笹のサラサラという音だけ。

手紙の内容を知らないのもあるがこの沈黙はなかなか緊張する。

姫は最後まで目を通し手紙を畳むと堪えきれなくなったようにクスクスと笑いだす。

「姫、書状の内容は？」

そう尋ねる銀髪の人に姫は手紙を渡す。

「永琳、これは傑作よ、あの八雲紫が私に力を貸して欲しい、しかもその代わりに何でも言う事を聞くとまで書いてあるわ」

「何でも……ですか……？」

銀髪の永琳と呼ばれた人は怪訝な顔で問い返す。

「そう、何でもですって、私が過去にどれだけの難題で男達をはね除けてきたか知っての上でよ。」

随分と大きな質種を持ってきたものね、書状の前半は今の幻想郷の状況ね、内容は永琳の読みどおりよ」

姫はさも愉快そうにコロコロと笑いそう言う、紫様の力、正直な話をするとなんの力だ、本当に何でも出来る、でも紫様はあえてそれをしない事に価値を感じてらっしゃる人だ。

ホイホイとその力を使う事はない、ましてや人の願いの為など、ある意味破格の条件だ。

永琳さんも手紙を読み終わると畳んで静かに考え込む。

「永琳、貴女はどう思っの？」

「飲んでいい条件だと思います」

「そうね、私もそう思っわ、問題は八雲紫に何をさせるかね」

「これは八雲紫に死ぬと言えば死ぬという意味なのでしょうね」

その言葉に全身の毛が逆立つ、爪を伸ばし永琳を睨み付けた。

だが永琳はその殺気が解らぬはずはないのに、気にもならないとでも言うように、目をこちらに向けすらしない。

「八雲の式、そう殺気立たなくていいわ、こんな面白い事をそんな面白くない使い方はしないわ、それに永琳だって本気で言ってる訳じゃないんだし」

そう言う姫の言葉でいちようは爪を引っ込めるが、やっぱり感に障るのもう一度永琳を睨み付けてから視線を姫に戻す。

「んっ……っやっぱり迷っわねっ」

姫はそう言いながら立ち上がり縁側に出る、庭を跳ね回る兔達に目配せをし空を見上げる。

「そう言えば鶯が鳴くにはもう遅いわね、来年の為に梅を植えようかしら……」

そう呟くと振り返りにっこりと笑う。

「決めたわ、さあ博麗神社に行くわよ、永琳出掛ける準備をしましよ」

そう言ってから姫は私の方を向き言葉を続ける。

「八雲の式、返事の手紙の代わりに私が直接行くけどいい？」

「はっはい」

「よし、貴女は先に主人の元に行つてなさい、そして夕にはそつちに着くと伝えて頂戴、ウドンゲ！ 竹林の外まで案内してあげなさい」

「はい」

そう言い鈴仙さんは立ち上がると私を手招きすると先を歩き出した、私はそれについて行く。

鈴仙さんのは竹林の外まで案内してくれた、その途中で鈴仙さんは語った。

「あんな楽しそうな姫を見るのは久しぶりよ、月を隠してその後霊夢達とどんちゃんした時以来かしら……、でも助かったわ、海に閉じては永遠亭とちやんもお手上げだったから、見守りましようって事になっただけど、やっぱりやっとな手に入れた自分達の居場所のピンチを黙って眺めてるだけってのは精神衛生上よくなかったんでしょね。姫の機嫌が悪かったのよ、鉢を投げたり杖を振り回したりする訳じゃないけど……、雰囲気悪くなるのよね、特に私はそういうのが波長で解るし……」

そんな感じのちよつとご機嫌な鈴仙さんの愚痴ともつかない話を聞いていた、彼女が嬉しそうなのは姫の機嫌がなおったからじゃないんだろ。

多分彼女も姫と同じ気持ちなのだ、姫も永琳も鈴仙さんも月から逃げてきたのだと話してくれた、そして幻想郷で居場所を見付けた、きつと彼女も指をくわえて黙っていたくなかったのだ。

私だつてその気持ちは分からなくもない、猫だからわりと無頼に生きてきたけど妖怪になる前は縄張りを追われ行き場もなく不安な夜を過ごした事だつてある。

まあ、そんな感じ……、もしかしたら幻想郷に生きる者は案外みんな同じように考えているのかも知れない、なんとなくだけでも思う。

多分私もそうだからだろう。

そんな気分も何だか悪くない、でもいい気分とは言ってもらえない事もある。

今回の異変の内容はだいたい聞いていて大事だつてのは知ってた

けどまさか紫様が何でも言う事を聞くなんて条件を出す程の事だとは思っていなかった。

それを思うと不安ではある、それにあの永遠亭の姫がどんな事を言い出すかも気になる、紫様と姫は一度異変絡みで争った事もあるし、1000年以上前にあつたという幻想月面戦争の首謀者は紫様だって藍様が言ってたし恨みとは言わなくても、よく思われていないかも知れない。

それはとても不安だ。

でも、紫様の計画だ間違いないはず、私はすきま妖怪の式の式、紫様を信じないで何を信じる。

私はそう不安を振り払い博麗神社へと駆けた。

ここまで読んでくれた方ありがとうございます。

ここまで読んでくれなくてもありがとうございます。

今回は橙の話でした、書いてたらやたらといい子になってました。

この世界の幻想郷は藍の教育がいいという事にしてもらえれば助かります。

兎は一羽二羽と数えます。

四足の動物は食べちゃダメ！という教えがあつたのですが、ある偉い人がどうしても兎が食べたくて「兎はああ見えて鳥、鳥だから四足じゃなくて二足、だから食べていい」といい加減な事を言い出した事から始まつたそうです。

さて、次は地霊殿のお話、大きくなったり小さくなったりする幼女が大活躍するかも。

第十二幕 怪異 鬼 (Underground mysterious st

今回は萃香の話、

鬼はそもそも能天気な種族なのだ。

以前霊夢に「萃香はいつつも酒の呑んで酔っ払って、昼寝してふよふよ漂って能天気なものね、本当にぐうたらで怠惰で穀潰しよ」、なんて言われたけど、それは鬼という種族がそもそもそんな種族な訳で別に私という存在が能天気な訳じゃない、鬼だから当たり前なのだ。

と言うか霊夢は相当酷い事言ってないか？ 今更だけどムカツ腹立ってきたぞ。

まあいいや、博麗神社は宴会に最適だし霊夢は準備と片付けをししてくれるし大目にみてやる、私は寛容なのだ。

そんな寛容な私が何をしているかと言うと紫に頼まれて地底の更に奥の地霊殿に向かっている。

何でそんな事になったか説明するにはちょっと遡らないといけない、昨日遅くまで呑んで気持ち良くなったから木の上で寝てた訳だ。それで昼過ぎかな、お尻が冷たいな〜と思って起きたら、寝てた木がほとんど水に沈んでてこりゃ大変だと紫のところに行ったら、斯く斯く然々な訳。

本当は犯人ぶっ飛ばしてやりたいけど、紫の言うとおり地上の妖怪で地底との交渉役になれるのは私くらいだろうし、古くからの馴染みだ、紫の頼みを引き受けた訳だ。

地上と地底の戦争なんて真つ平ごめん、何が悲しくてそんな詰まらん事をする理由があるものか、私は早く異変を終わらせて宴会がしたい。

その為には勇儀や地底の管理者さとりと話をつけないといけない。

こうやって地底に続く縦穴を下って行けば基本的に一歩道なので迷わずに着く、まあ一本道じゃなくても迷わないけど……。

それにしても……、例の海の水が小川程度の水量で下へと流れ落ちていく、水量的に大した事はないのだが、紫曰く、どんどん水量は上がっていくそうだ、だから楽観出来ない。

出来るだけ早く終わらせたいもんだ。

暫く下れば橋が見えてきた、あの橋が地底の境界線になっていて、そこには地底と地上を繋ぐ縦穴の番人である、橋姫、水橋パルスイがいるはずだ。

境界線がある事に何か意味があるから知らないし、滅多に通るヤツなんていないから番人がそもそも必要なのかもわからない、まったくもっていらぬ気がする、結局のところは縦穴自体の入口が境界線になってるんだし……、まあ、世の中そういうふうに出てくるみたいだから、深く気にする事じゃないだろう。

そんな事を考えているうちに橋に着いた、流れ落ちる水と泥のせいで橋は水浸しの泥だらけの酷い有り様だ。

いつもはたぶんだけどパルスイがマメに掃除してるのかいつも綺麗

麗だし、欄干には埃一つないのに今はこれだ、まあ水没してないだけよしとするべきだろうか……。

そう言えば当のパルスイがない？

いつもなら欄干に詰まらなそうに頬杖をついているのだが…

「ん…事前に地底の様子を聞いておこうと思ったんだけどな」

見回してみると少し離れた岩場の上にペルシアドレスに光沢のあるオレンジ色のカールした髪から覗く尖った耳の少女が何をすることもなく腰掛けていた。

「おーい、パルスイ」

その岩場に飛んで行く、こちらに気付いたパルスイは少しこちらに視線を寄越すと露骨に嫌な顔をして二度とこちらを振り返る素振りはないかった。

相変わらずだな。

隣に着地し、座り込んで話す程の時間はないので立ったまま話し掛ける。

「相変わらずだな」

「相変わらずはお互い様よ」

「もう少し取り合ってもいいと思うぞ？」

「私は貴方達、鬼が嫌いなの、厚かましくて馴れ馴れしくて傲慢で奔放で我が儘、本っ当に妬ましいわ」

貴方達……ねえ……。

「何だ？ 勇儀と喧嘩でもしたのか？」

「そつそそそ！ そんな訳ないでしょ！」

凶星か……。

「じゃあ、仲良くやってるんだ」

「だッ！ 誰があんなヤツなんかと！」

仲がよろしい事で……。

「まあ、それはいいんだけど旧都の様子はどうなんだい？」

納得がいかないと言っても言うようにパルスィはこめかみをヒクつかせる、ただこのまま言い返してもおちよくられるだけなので、色々なものを飲み込む。

「ふん、知らないわよ、何だか随分な騒ぎになってるみたいだけど、私の知った事じゃないわ」

「ふん、そうかい……」

やっぱり、穏やかにはいつてないようだ。

「よし！ ありがと、じゃっ！ またな」

「二度と来るな」

私が別れの挨拶をし飛び立っても振り返る様子はなかった、まあいつもの事だし……、そして私は旧都へ向かった。

さて……、旧都とは旧地獄の繁華街で今は地底の中心地、元地獄というだけあって非常に広く住む妖怪達の数も多い、そして地上から半ば押し込められるように嫌われ者達が集まって出来た町、旧都は爪弾き者と鬼の楽園だ。

旧都はどんな様子だろうか？ そんな疑問も旧都に着けば分かるだろうと思っていたが、予想に反してその遙か手前で旧都の様子を知る事が出来た。

旧都が燃えているのだ。

事態は思っていたより悪い方向に向かっている、早急にどうにかしないといけない。

更に加速を付け、旧都へと急いだ、元々最高速で飛んではいたので、加速と言っても気持ちの問題、少々力んでも着く時間なんて秒も変わりはないが地底の皆は仲間なのだ、やはり居ても立ってもいられないというのはある、勇儀のヤツ何やってんだ。

旧都の中心にある大通りに着地する、下は流れてきた水で水びたし、上は火事ときた。

どっかの謎々とは逆だな、まったく冗談じゃない。

ただ、火は出ているが火の海という訳ではなく何か所から火が出ているようだ。

今から消せば深刻な被害とまではいかないだろう、どのみち迅速な鎮火が第一だ。

だが、問題はそこではなさそうだ。

地底の皆は殴り合い弾の飛ばし合いの喧嘩、悪く言えば殺し合いとでも言える争いが行っていた。

しかもそれが旧都のそこいら中で行っているのだ、争いがこの火種になつてるのだろう。

「勇儀のヤツ何やってんだ！」

まず第一は暴動を治める事、回りで争ってる連中を片っ端からぶん殴って黙らせる。

明らかに目が血走ってまともにも言っても耳に入るような雰囲気じゃないし、こういう時は殴るに限る。

だが2〜30人殴り飛ばした辺りで気付いた、このペースだと旧都のヤツ等を全員殴り飛ばしたら日付が変わってしまう。

いかん、火事と喧嘩は何かの花とは言うが多少興奮し過ぎたかもしれない。

そう言えばさっき勢いで隅で怯えているヤツまで殴り飛ばした気もする、まあ……酔っ払いに絡まれたと思って諦めてもらおう、実

際そうだし……。

でも、どうしたもんか？

旧都全域に至るレベルの百万鬼夜行じゃ修復不能レベルまで壊滅してしまつ、それじゃ元も子もない。

ん……。

「萃香……さん？」

すると後ろから声をかけられる、勿論私は振り返った。

んが、誰もいない、いるにはいるが皆のびて呻き声を上げるのが精々だろう。

念のため近くにいた数人を揺すってみたが声は上げるところか目を開ける気配すらない。

「萃香さん、ここですよー」

やはり誰かいるようだ……、でも声がする方を向いても、そこには井戸くらいしかない。

ん？ 井戸？ もしかしたらと思ひ井戸を覗き込む、そこにはキスメがいた。

「こ……こんにちは……」

そう言つて遠慮がちに井戸からツーテイルの頭を覗かせる。

「キスメじゃないか」

「キスメだけじゃないよ」

その声と共に井戸の中から糸をスルスルと手繰り、金髪をポニテールに束ね、茶色いゆつたりとしたワンピースをきた少女、土蜘蛛、黒谷ヤマメが出てきた。

「ヤマメも無事みたいだな」

「まあ、何とか……」

「なあヤマメ、この有り様はいつたいなんだ？ 勇儀はいつたい何をやってるんだ？」

「勇儀さんは今は地霊殿に行ってます。

さとりと今後の方針を話し合うとが……、勇儀さんが睨みを効かせてる間は皆大人しく待機を守ってましたが、勇儀さんが出発し旧都を離れた途端に、この暴動です。

地底が水没するなんて最初は誰も信じない噂話だったんですけどね、時間を追うように増える水に噂が真実味を帯びてきて、恐怖が感染症のように広がり……この有り様です……」

ヤマメは井戸の縁に腰掛け、苦いものを食べるような顔でそう語る、その横でキスメがうんうんと首肯していた。

「勇儀がいなくなった途端に、と言う訳か……」

「はい……」

誰が悪い、なんて事はない事なのだろう。

誰だって死にたくはない、気持ちは分かる百年生きようと千年生きようと死ぬのは怖い、私だってそうだ。

でも。

「でもな、妖怪ってのは人間を怖がらせるもんだ、その妖怪が何かを怖がる姿なんてホイホイ見せられるか、ヤマメ、キスメ今すぐここから離れる、今すぐだ」

二人を有無を言わさね、そう言う視線で睨み付ける。

二人は困惑するものの、その意をくみ直ぐにその場から駆け去った。

妖怪が妖怪である為には妖怪とは何なのかその意味を守らなければならぬ、妖怪は個にして群に非ず、そんな妖怪でも自分以外で守らないといけないモノがあるとすればそれだ。

妖怪とは恐れの特徴だ。

妖怪から恐れがなくなった時、それは妖怪じゃなくなる、恐れこそ妖怪の意味。

恐れこそ妖怪の存在理由。

ならば見せよう、ならば思い出させてやろう。

妖怪とは何なのか、妖怪の本領を、刮目し目に焼き付けよ、お前達が何かのか、お前達のあるべき姿思い出させてやる。

妖怪の中の妖怪、妖怪ですら畏れる鬼の力、

伊吹萃

香の力を見せてやる。

『鬼符』 ミッシングパワー

その宣言と共に萃香の体は地底の天井に届くかと言う程に巨大になる、誰もが見上げるその巨体、萃香は大きく息を吸い込み一気にそれを放出する。

「お前等！ いい加減にしろー！！」

元々大きな萃香の声、鬼の力によって大きくなった萃香の声はただ大きいというレベルに止まらず、音の波は可視領域へと至り、近くの住居の瓦は吹き飛ばす。

殴り合う者はその拳を、弾幕を放つ者はその掌を自分の耳に押し当て竦み上がった。

そして旧都に住まう者の全ての視線は萃香へと集まったのだ。

「お前等いったい何をやっている？ 何なのだその不様さは！ お前等は人間か！？ 地底に降りて腑抜けたか！？ そんな様ならお前等は妖怪じゃない！ 妖怪などとは認めはしない、ならばお前等は人間だ！！ 人間ならば拐ってやる！ 生きたまま頭から喰うてやる！ 湯で煮て喰うてやる！ 魂になろうと鬨ってくれよう！」

そして地面に家一軒より遥かに大きな拳を突き立てる。

その衝撃で地面には大穴が穿ち、近くの家はその余波で瓦礫と化し、旧都全体を揺るがした。

鬼気迫る萃香の恫喝に旧都は震え上がる。

ふん、少しは薬になればいいが……。

「お前達！ 今すぐ火を消しに係れ！ 火勢の強い家は潰して類焼を止める、もたもたするな！ 今すぐ動け！ ヤマメ！ お前は指揮を取れ！ 私は地霊殿に行く、帰って来てもその体たらく見せるようなら、その時は皆殺しと思え！」

そう啖呵をきると萃香は体のサイズを戻し、地霊殿へと飛び去った。

萃香の姿が見えなくなると誰とは言わずに妖怪達は消火を始めた、鬼は妖怪の中でも別格、有象無象の妖怪は畏れるに余りある存在、水に対する死の恐怖が、鬼に対する必死の恐怖が上回ったのだ。

萃香は思った。

こんな事で地底の妖怪の体たらくは変わらないだろう、きっと変わらぬ。

彼奴等は自分達が何なのかを忘れている。

妖怪とは何なのか、妖怪の意味を、自分達が幻である事を。

このままなら遅かれ早かれ妖怪は亡びる、レゾンデートルを無くした魂に行き場は無い、萃香はそれを憂いた。

やり場のない苛立ちや焦燥感が萃香の心をざわめかせるのだった。

読んで下さった皆さん、ありがとうございます。

今回は萃香の話でした、昔は山の妖怪を束ねていたと言う事でそれなりに色々考えてるのだと思います。

さて…、妖怪とは人の恐れが生んだものです。

人の考える事なんて万国共通な訳で文化交流の無い時代から同じようにどこの国にもあります。

人は説明出来ない奇怪なモノに名前を付けて妖怪に仕立てあげます。鬼火や不知火何かが一般的です。

鬼火はリンやメタンガスの自然発火、不知火は蜃気楼に近い現象です。

昔は土葬だったので墓場はリン等が発生しやすかったですからね。

東方ならムラサ船長の船幽霊、海から現れる手だったり、幽霊船だったりと姿形を変え古今東西世界中にあります。

それは海に生きる者にとって海は恵みであると共に、全てを飲み込む海は恐れであると言う事です。

今回の小説ではそれ妖怪をこう解釈してます。

人の恐れが妖怪という概念を作る、溜まり溜まって積り積もったその思いが次第に形を作り、そして妖怪になる。

妖怪はあくまで人無しでは存在しえない、と言っ事です。

ちよつとでも踏まえて読んでもらえると少しは分かりやすくなるかも知れません。

さて…、次回も地霊殿の話
では、また。

第十三幕 猫の恩返し ～The Cat Returns～ (前書き)

引き続き地霊殿のお話です。

第十三幕 猫の恩返し ～The Cat Returns～

あたいはお燐である、名字は当然ある。

といつてもあたいの名字は長いから嫌いなよね、だから気軽に
お燐と読んでくれればいいさ。

そんなあたいの名字も嫌いだけど、目の前で繰り返り広げられている
口喧嘩に比べれば、ずっとましかな……。

「御主人様……、喧嘩なんてそのくらいでやめにしましょうよ」

それに対してあたいの御主人様は静かにだがキツと睨みつけてこ
う言った。

「いいえお燐、これは純然たる話し合いです。

ただこの分ならず屋の鬼が人の話を聞かないのが悪いのです」

「はあ？ 分ならず屋はどっちだい、てめえだって人の話聞いてな
いだろ!？」

「貴方の考えている事なんて心が読めるから手にとるように分かり
ますよ、単細胞の馬鹿鬼さん」

「何だと！ もう一遍言ってみる、その小生意気な胸の目ん玉ひっぺがしてやるぞ！」

「何度でも言っただけです、どうせ一回じゃ理解出来ないでしょうしね。」

単細胞のば・か・お・に・さ・ん」

その件の馬鹿鬼さんと呼ばれ怒り心頭といった感じの鬼は幻想郷の妖怪なら知らぬ者などいない山の四天王、力の勇儀事、星熊勇儀、勇儀姉さんだ。

そして、それを幼く大人しそうな外見とは裏腹に豪快に煽っているのがあたいの御主人様、地霊殿の主、見透かす覚りの眼、古明地さとり様だ。

ついでにその近くでオロオロしているのが、あたいの友達のお空。大きな黒い羽のマントを羽織り、片足スパークさせながらオロオロしている姿は実に微妙なものがある。

それにしても凄い、勇儀姉さんが怒って地面を踏み鳴らす度に地霊殿は揺れ、天井からパラパラと砂が落ちてくる。

鬼の力はまったくもって計り知れない、でも生き埋めは勘弁したので適度にして欲しいものだ。

ちなみに、姉さんといっても別にあたいの姉ではないので悪しからず、あたいはだいたいの女の人をお姉さんと呼ぶのだ、何かしつくりくるのよね。

まあ、それはいいんだけど……、まずは状況を整理したいと思う、この地底を揺るがす大喧嘩の原因は地底妖怪の今後の方針だ。

勇儀姉さんは「大事な事だし、さとりと話し合おう」そんな感じで地霊殿にやって来たらしい。

最初の頃は意見は違うものの、お互いに冷静に話し合っていたのに途中からいつの間にかヒートアップして、今は話し合いですらない。

拳や弾が飛ばないのが不思議なくらいだ。

それにしても……、こんな感情的な御主人様を見るのは初めてだ、いつもクールで冷静なのに、らしくない、実にらしくない。

お互いの方針はというと……、御主人様はまだ下手に地上に抜けるのは危険だ、この地霊殿より更に下の広大な灼熱地獄跡もあるのです。そうそう水没する事なんて有り得ない、下手を打って地上の妖怪と戦争になればそれこそ一大事だ。と言う意見。

んで、勇儀姉さんは、今すぐ地上に避難するべきだ、大丈夫なんて保証がどこにある、水の量は目に見えて増えている、何かあつてからじゃ遅いんだ。

といった感じ……。

まあ、あたいもお空も頭はいい方じゃないから（と言ってもお空に比べれば、だいぶみしただけだね）、口を挟む程の力も頭もなくこうやって見てくるくらいしか出来ないんだ……。

あたいは元が猫だから水はあんまり好きじゃないし霊夢姉さんのところにも行って縁側でゴロゴロしたいところ何だけどね。

ん……、どうなるんだろ……。

「貴方は本当にわからない人ですね！ 地底の妖怪が大挙して地上に行くと言う事がどんな事か解っているのですか？ お燐やお空が個人で遊びに行くのとは訳が違います。」

そんな事をしてみなさい、あの腹の黒いスキマ妖怪に漬け込まれてもしたらどうするのです!？」

「そんな事は心配するんじゃないやねえ、山の四天王である私が文句は言わせない、あの胡散臭いババア以外は私が言えば分かってくれる、どうせ水が引くまでの間なんだ、地上に移り住む訳じゃないんだ。あのババアだって一人で地底と戦争する気にはならんさ」

あ……、紫姉さん、今頃くしゃみでもしてるんじゃないかな、3回くらい……。

「くっ……!」

御主人様が言いよどむ、心が読めるから勇儀姉さんの言ってる事は嘘じゃないって分かるし、たぶん、御主人様も勇儀姉さんが言ってる方法は間違ってると思ってると思う、あたかも成功すると思っ、たぶん、恐らく……。

そう恐らくなのだ、勇儀姉さんは肝心な事を見落としてる。

そして、勇儀姉さんはその事に気付かない。

恐らく安全で何とかなる方法でも御主人様が乗り切れない理由。

妖怪から恐れられ慕われ、人間からは恐れられ、誰もが認める立

派な大妖怪の類いの勇儀姉さんにはきつと解らない。

せめて思い出してくれさえすれば分かるのだろうけど……。

御主人様の気持ちってたぶん旧都の皆と同じなのよ、本当は地上に行きたいけど、行きたくない。

それは歪みを生む理由だしね。

御主人様もその理由を説明する事は出来るけれども、御主人様あれでプライド高いから素直に喋ったりしないのよね。

そもそもあんまり会話っていうのが得意な人じゃないし……、御主人様は不器用だな……。

まあ、そこが可愛いところでもあるんだけど。

さっきから御主人様の第三の目がチラチラあたいの方を見るけど、もしかしてバレてる？　と言うかバレてるか……、ちよつとヤバいかも……。

その時だ、大砲の弾を地面に向けて放ったらこんな音がするだろうか？　そんな一際大きな音が地霊殿に響き渡る、勇儀姉さんの地団駄も最終局面のようで、顔は既に赤鬼のように赤い、堪忍袋の緒もリミットなんだろう。

「いい加減にしろ！！　さっきから要領を得ない事ばかり言いやがって、なあさとり、これは賭けとも呼ばない程度の事だろ？　お前だって分かっているはずだ？　なのに何でそうまで頑なんんだ？　私には分かん、何を躊躇ってんだよ？　なあ！　さとり！」

勇儀姉さんは御主人様の襟を握り、ギリリと絞る、御主人様は少

し苦しそつに顔を歪め勇儀姉さんから目をそらした。

少し躊躇い、目を泳がせる、躊躇いがちに小さな口を開く。

「私は……」

「勇儀姉さん」

あたいは御主人様の言葉を遮り、襟首を掴む手にそつと触れ勇儀姉さんの目を見た。

その目は邪魔をするな、そう言うかの様にあたいを睨み付けてきた、それでも、あたいは目をそらさない。

「勇儀姉さん、あたいは猫だからね。」

生まれてから死ぬまで結局は一人だから旧都の皆の気持ちは全部は分からないけど、それでも地底に住まないといけなくなった妖怪だからそれでもちよつとは分かるんだよ。

ねえ勇儀姉さん、あたいた地底の妖怪が地底の妖怪じゃなかった時の事覚えてる？」

最初こそ鬼の形相で睨み付けてきた勇儀姉さんも少しその意味を悟ったのか、怒りの色が薄まり、御主人様の襟を掴む手の力も弛む。

あたいた地底の妖怪が地底の妖怪じゃなかった頃、つまりは幻想郷で普通に暮らしていた時、どのくらい前かな、あたいは猫だから時間の感覚なんて難しいものは分からないけど、幻想郷が安定した頃、妖怪達や人間達がバランスが取れある意味平穏を手に入れた頃。

一見平和に見えたけど、その反動だろうか歪みが出てきたのだ。

紙に出来た皺を伸ばしても皺は端に移動しただけで消えな

いように、新しい歪みが出来たのだ。

そう妖怪同士の迫害だ。

『あいつは卑しい妖怪だ』

そうやって仲間に向かって指を差し始めたのだ、同じ妖怪のはずなのに……。

昔御主人様が教えてくれた話だけどある魚の群れを水槽に入れると一匹の魚をつついて苛めるそうだ。

その苛められてる一匹を別の水槽に移すと魚の群れは別の魚を苛めだすらしい、それは魚に限らず人間も同じ事をするらしい、そして妖怪も……。

そんな事が妖怪の間で起こり、分かりやすく余り良い目で見られていなかったあたい達みたいな妖怪は妖怪の山を追われ、山を下りれば人間達に追われ、どこに行っても迫害を受け、幻想郷での行き場を失った。

妖怪同士つてのは基本的には馴れ合いはしないけど、干渉もしない、それが妖怪同士の仲間関係、そうやって暮らしてるものなんだけどね。

誰が始めたんだろうか地上の妖怪達にあたい達は虐げられ、そして地底に逃げ込んだ。

あんまり思い出したくもない思い出……。

「あたい達は色々あって地底に逃げ込んだよね？ 本当は地底まで

押し入り滅ぼしてしまおう、なんて動きもあつたんだってね？ まあ……噂の話だけど……。

あたい達が逃げ込んだ後、勇儀姉さん達が地底の怨霊を地上に出さないかわりに、地底の世界を認め、地上の妖怪は地底に入っていない、そう言う確約を妖怪の賢者相手にとってきてくれたんだよね。あたいは感謝してるよ。

そりゃもう三日じゃ忘れない程にさ……」

勇儀姉さんの手が御主人様の襟から滑り落ちる、あたいの気持ちがあつたのか少し気まずそうに目をそらす。

酒ばかり呑んで喧嘩つぱやくてテレンパレンでわりと穀潰しだけどやる事はやるし頭の回転は早いのだ。

「勇儀姉さん、あたい達はね、いつまでたつてもあの時の事を忘れられないんだよ。

正直言つて地上に行くのが恐いんだ、同じ妖怪に石を投げられ、疎まれ蔑まれ、汚い物でも見るように、お前達の居場所なんてここには無い、そういう冷たい目を向けられるのが恐いんだ、勇儀姉さん」

トラウマ

今でこそ地底の皆は明るく楽しく暮らしているが、心に刺さった棘は抜けても、その傷が治ったとしても、そこには歪な傷痕が残る。

それを勇儀姉さんが知らない訳はない、鬼が地底に降りた理由の一つでもあるのだ。

それが理由のどのくらいを占めるかなんて分からないけどね。

勇儀姉さんは苦虫を噛み潰したような顔で奥歯を鳴らす。

気持ちが分かつてはいるが分かっている、と口に出して言える事

じゃないだけに軽々しくそれを口には出せない、それが分かるだけに何も言えないのだ。

結局は優しくてお人好しなんだ、この人は……。
パルスィが×××なのも分かる気がするよ。

「それにさ……」

あたいが続けようとした時、御主人様が勇儀姉さんとの間を手で遮り、言葉を止める。

「お隣、ありがとう、私は大丈夫だから……後は私が言っわ」

いつも、澄ました御主人様が微かに笑む、流星があたいの御主人様、なのかな？

御主人様は勇儀姉さんの目を見つめる、その目に迷いや焦り苛立ちはない。

「ま……恥ずかしい話だけどね、お隣の言つとおりよ……。
恐いの、地上に行くのが、私は今でも疎まれてるから多少は大丈夫だけど、他の地底妖怪達は分からないわ……、それともう一つ、私は戦争のきっかけを作るとしたら地底妖怪の方だと思ってるの、トラウマは心を守る為の自衛手段、でもその自衛を行き過ぎれば攻撃性になつたりするの、心の古傷はぶり返しやすいのよ。

これが貴方の意見に賛成出来ない理由……」

御主人様は勇儀姉さんは地上の妖怪達を抑える事は出来ても、心の自衛本能に突き動かされる地底の妖怪達を止められないと考えていたのだ。

あたかもそこまでは考えつかなかったよ、流石御主人様だね。

「でも……でもだ、さとりも分かるだろ？ あの水が何だかヤバいって事くらい、口で上手く説明出来ないが、あれはヤバいんだよ」

ここにきて勇儀姉さんは理屈も筋も無いような事を言いだす、でも言ってる事は分かるのよ、あたかも何だかヤバいってのは感じる、あえて言うなら異質、お空もそう言ってたし、たぶん御主人様も……。

御主人様は一度目を伏し、頭一つ分より更に高い勇儀姉さんを見上げた。

「ええ……私もそう思うわ、あれはきつととても危険、でもどこに逃げてても結局は危険なのよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

勇儀姉さんがここで初めて弱気を漏らした、自分一人の問題じゃない、間違えれば沢山の仲間を失うかもしれない、下手したら何もかも失うかもしれないのだ。

その重圧、水に対する不安、そして焦りが鬼を弱気にさせる、あたかも意見は言えてもね、流石にそれ以上の事は言えない。

「お困りのようだね」

そう何処からともなく声がし、その瞬間、地霊殿を霧が覆う、その霧が一ヶ所に集まるとそれは人の形を成した。

オレンジ色の髪を茜色のリボンで束ね、白のノンスリーブと青いスカート、地面に胡座をかき、大きな瓢箪を手に酒をあおる。

見た目はあたいや御主人様より更に小さいが、その体とは不釣り合いな大きなねじれた二本の角が頭から生えていた。

そう、勇儀姉さんと同じ鬼、山の四天王の一人、小さな百鬼夜行、伊吹萃香だった。

「久しぶりだな、勇儀」

「萃香」

「まっ……挨拶もそこそこだな」

そう言い瓢箪を大きく傾けグイッと口をつける。

「旧都の有り様とか色々言いたい事はあるけど、それは後でもいいや。」

私はお前達を助けに来たんだしな……。話は粗方聴かせてもらったよ、私が力を貸してやる、と言っても貸すのは知恵だけだな、しかも受け売りの……」

「本当……、なのですか？」

「鬼は嘘はつかないよ、知ってるだろ？ それに心も読めるし」

そう答え、萃香は、まあ座れとでも言うようにジエスチャーで示す、勇儀姉さんが座り御主人様が座り、あたいとお空も次いで座った。

「先ず最初に地上の妖怪の事は気にするな、勇儀は勿論だし私もその辺は抑える、そして八雲紫、あいつも大丈夫だ。

今回の件であいつがとやかく言う事はない、と言うかそもそも私は紫に頼まれて来たんだしな。

今回はほとんど伝言係みたいなものさ、まったく鬼を何だと思ってんだかね、まあ私にしか出来ない事ではあるけど……。

そして最後だ、地底の妖怪の問題、これは意外と簡単だ、私の疎める力、そしてさとり、お前の妹の力だ」

「こいし……確かにそれなら……」

「ふん、心を読むつてのは説明しなくていい分確かに便利だな」

「おいおい、私はわかんねえぞ」

「あん？ まあそうだな、私の萃と疎の力の疎める力を使えば、地上の妖怪を斥け、そもそも遭遇しないように出来るさ、それも完璧にとはいかない……。

そこでもう一つ、さとりの妹、古明地こいしの力さ、無意識を操ればトラウマくらいなら一時的に抑えられる、まあ根本の解決にはならんがね、それでとりあえず2〜3日は大丈夫さ」

「確かに……それならいける」

得心がいったと言うように、顎を擦り勇儀姉さんは御主人様を見る、御主人様はそれに頷く。

「よし、ありがとう萃香、お前にのる」

「当然だ仲間だろ？　じゃあ、始めるか！　まずは皆を萃めな、直ぐに出発する、ついでに着いたら直ぐに宴を始めるぞ、肴の用意は抜かるなよ」

萃香姉さんは勢いよく立ち上がると拳を前に突き出した、勇儀姉さんは立ち上がると馴れたように拳をゴチリと合わせる、続いて萃香姉さんは御主人様に拳を向けると御主人様は戸惑いながらも不器用に拳を合わせた、御主人様が痛そうにすると鬼のお姉さん方は「ハハハ」と笑う、あたいとお空が釣られて笑うと御主人様は拗ねたように「ふざけてないで、早く行きますよ」なんて言う、こんなに機嫌のいい御主人様は久しぶりかもしれない。

その後は齒車が噛み合ったように全てが上手く流れていった、地底の妖怪は二人の鬼に檄を飛ばされると、皆一つとなって士気を高めていった。

個人主義の妖怪達でもやれば出来るもんだと感心したもんだ。

そして、一つになった地底の妖怪の百鬼夜行は地上へと向かった。

余談になるが、肝心のこいし姉さんがフラフラどこかへ出掛けて、その搜索に時間がかかり、御主人様や鬼のお姉さん達が「きーっ！」ってなっていたのは、出来るだけ早めに忘れてしまいたいと思う。

第十三幕 猫の恩返し 〈The Cat Returns〉 (後書き)

読んでいただいた皆様ありがとうございます。

とりあえずは地霊殿のお話は終了、次は霊夢さんのお話に戻ろうと思います。

色んな要素というかパロディーを入れながら書いていますが、悪く言えばパクリと言えるので、人によっては好き嫌いがありますが、世界に一人でもにやりとしてくれる人がいれば、私としてはうれしいです。

地霊殿について、鬼たちは人との共存関係が崩れたことが地底に引っ込んだ理由だそうです。

鬼は人を食うのか？攫うのは間違いそうです。そう言う神隠し的な意味では天狗なんかも人を攫う事で有名です。

西洋では妖精が子供を攫い、戻ってこれてもアツパラパーになるそうです。

次の話は霊夢さんの話に戻りますが問題はその話の核が決まっていなかったのでまったく進みません、もしかしたらお目汚しの短編でも時間稼ぎに書くかもしれません。

第十四幕 幼き暴君に紅茶の一時を 〈Parlor and vampiro

いつもの二次創作。

霊夢はシレネッタに敗れた、その後のお話

頭痛に伴う目覚めは説明する必要もなく不愉快で不快だ。

それ以後頭部が痛い……、痛む部分を押さえてみるとリボンが結ばれたままだ、リボンをしたまま寝ればそりゃ痛い……。

そして何だかとてもダルい、体を起こす気にはとてもなれそうにない、ならば気がすむまで布団に甘えさせてもらおう。

でも、直ぐに起きれるように頭の中くらいはしっかり起こしておくべきだろうか、目を開き天井を見詰める、寝覚めのボヤけた視界は徐々に鮮明さを取り戻し、不鮮明な脳に新鮮な映像を送り出す。

最初に目に飛び込んできたのは薄暗い部屋の木目の天井、ここで違和感……。

私の家は神社であり、至って純和風で普通、部屋の端から端に梁が張られ、それと対角に天井板が敷かれる。

だが、今私の目の前にある天井は市松模様に天井板が張り巡らされている。

特に建築に詳しい訳ではないので建築様式について話せる事はないが、少なくとも一つだけ確信を持って言える事がある。

ここは博麗神社じゃない。

お酒を飲み過ぎた次の日のように重い体に鞭を打ち体を起こす、
寝ているのはいつもの布団ではなくベッドで、下は畳ではなく床板、
隣にあるのは行灯ではなくランプであった。

「どうよ、ここ……」

そんな私のボヤキに答えるように部屋のドアが開く、現れたのは
私より背の高い女性。

銀色のボブにヘッドドレスを乗せ、白いミニスカートのワンピースに紫のエプロンドレスと腰にギャルソントイプのエプロンを重ね
片手にトレーを持ち、青い切れ長の目でこちらを見詰めていた。

「咲夜じゃない」

ああ……ここは紅魔館か……、どうりで暗いわけだ。

「あら、やっと起きたのね、お目覚めは如何かしら？」

「最悪よ……」

「でしょうね、湖で泳ぐには早すぎると思うわ」

「何？ あんたは夏になるとあの湖で泳ぐの？」

「まさか」

このへんで記憶が現実には追い付きだす。

そう、半魚人と戦闘になって音波攻撃にやられ、槍で体中に風穴
を開けられそうになったところで誰かが割り込んできて助けられた

のだ。

そして、そのまま気を失った。

あれは誰だったのだ？ 半魚人は王女様と呼んでいた、そしてその前には「王女様に楯突く賊は……」と言っていた、なら私を助けたのはその王女だろう、そして話から考えて、その王女は今回の黒幕。

変な話だ、私は異変の元凶、今回はその王女とやらを退治しにきたのだ、王女自身はその事は知らないだろうけど、少なくとも私は王女の部下と戦ってた訳だ。

私を助ける理由がまったく思い付かない。

よくわからないわね……。

博麗霊夢は一旦考えるのをやめた、どうせ理由なんてどうだっていいのよ、妖怪は退治する、それで十分。

「それはいいとして霊夢、これを飲んだら応接間まで来て頂戴、お嬢様がお話がしたいそうよ」

そう言っただけで咲夜はポットから赤い液体をマグカップを注ぎレモンスライスを浮かべシユガーポットから何か茶色い粉末を一滴まみいれ、軽やかに混ぜると私にそれを手渡した。

「何これ？」

受け取ったものの不審な液体を前に些かの不安はある。

「グリニューワインよ」

「グリユーワイン？」

「ヴァン・シヨールとも言っわね、温めたワインに香辛料を入れた物ね、今回はレモンとシナモンを入れてあるわ、温まるわよ」

「ふん……」

そう言っつて、そのなんとかワインとやらに口を付ける、ふむ、意外と飲めるわね。

「でも咲夜、私はワインは普通に飲む方が好きだわ」

「目的を履き違えないの、まあ私もあんまり好きじゃわね、水みだいにワインを飲む人の飲み方よね。」

それはいいと霊夢、飲んだらちゃんと来なさいよ」

「ん？ ああ……レミリアの事ね、いいわよ、飲んだら行くわ」

その返事を聞いて納得がいったのか咲夜は満足そうに頷くと踵を返しドアに向かった。

ドアを閉める手前で咲夜は振り返り言った。

「ちなみに応接間は部屋を出て右手に真っ直ぐ進み、突き当たりを左に曲がって暫く行くと正面に階段があるからそれを登って2階まで行く、するとバルコニーがあるからそのまま壁づたいに歩いてその並びで一番大きな扉を抜けると直ぐに左右に部屋が沢山ある大きな廊下があるから、その左手の28番目の部屋ね」

私はそれを聞いて頭を抱えた。

「あつ……いちよ歩いてって言ったけど、飛んできていいから」

「いや……そこじゃないわよ」

結局メモを書いてもらった。

コンコン

いつもの様にドアを2回叩くといつもの様に乾いた音が響く。

「入りなさい」

その返事を聞き、一拍置いてから静かにドアを開ける。

凡そ36畳程度のこじんまりとした部屋の奥、そこには私の主であるレミリアお嬢様が豪華な椅子に座り居丈高に出迎えてくれた、椅子は赤を基調とし座部と背もたれにベルベット地の弾性に富んだクッションを使い手摺や脚などには細かな装飾の入った櫛を使った

一級品である。

お嬢様が使うに相応しいものだ、特に櫛は非常に丈夫でお嬢様が怒って暴れても十回に一回は壊れないと言う優れものである。

ちなみに、お嬢様の目の前にある応接テーブル、これも櫛で出来ており二十回に一回は壊れない優れものである。

人が大していない幻想郷の家具職人が廃業しないのは一重にお嬢様のお陰と言えよう。

やはりお嬢様は偉大だ。

そんなお嬢様に一礼する。

「お嬢様、霊夢が目覚めました、暫くしたらこちらに来るかと存じます」

「そう」

手摺に肘をつき愉快そうにそう返される。

そして私はまた一礼し左手側の壁際に立ち、指示があるまで待つ事にした。

「なあ咲夜、私は今愉快的な事と不愉快的な事が一つつつある、分かるかしら？」

暫し黙考する、タイミング的に恐らくは霊夢に関わる事だろう……、不愉快なのは屋敷を半分水没させた水の事だろうか？ でも水の事は随分前から不機嫌の原因だし今更言うだろうか？

ならば……。

「愉快な事は霊夢がコテンパンにやられた事、不愉快な事は霊夢がそのまま死ななかつた事でしょうか？」

お嬢様は小さく鼻で笑う。

「惜しい、半分正解。

霊夢がコテンパンにやられたのは愉快よ、確かにお気に入りの方にフでお茶を楽しみたい気分だわ」

そう言ってティーカップの取っ手を持ち残り少ない中身を揺らす。

「でもね……その霊夢をコテンパンにしたのが私じゃないって言うのは気に食わないわ」

お嬢様の右腕、その肘から先が突然消え、それと同時にお嬢様の正面の壁でパンツと何かが破裂するような音がした。

そこには粉々になったティーカップの成れの果てが散らばっていた、推理するまでもないがティーカップをただ投げただけなのだろう。

単純にな話あまりに速すぎて手が消えたように見えた、私には手の動きどころかティーカップすら見えない程の高速でだ。

吸血鬼は様々な力を持っている、反射神経 集中力 第六感 身体能力 特殊能力 耐久力 吸血能力 変身能力 不死性 e t c

しかし最も恐るべきはその純粹な暴力……「力」だ。
人間達を軽々とぼろ雑巾の様に引きちぎる。

そう言う意味では幻想郷のスペルカードルで一番割を食っているのは吸血鬼であるお嬢様、そして妹様だろう。

何せ撃った弾よりもお嬢様の方が速いし、あらゆる面において並の妖怪とは身体能力の桁がそもそも違う。

そう言う意味ではスペルカードルが流行る切っ掛けとなったのが紅霧異変と言うのは多少皮肉なものだ、そもそもお嬢様が進んでルールを取り入れたのだから、納得の上なのだろうが……。

何だかんだ言ってもあくまで遊びの範囲と言う事。

でも、遊びでも敗ければ頗る不機嫌になるのはやはり、お嬢様の幼さ故……、私としては少々頭の痛い事ではある。

「そして、あの人魚も気に入らないわ」

自分の投げたカップの行方等意にも介した様子もなくお嬢様はそう嘯く。

霊夢と人魚の戦いは観ていた、水かさ上がり一階は完全に水没、吸血鬼であるお嬢様は流水を嫌うし、ましてや昼間な上に今夜は新月、吸血鬼にとって悪い条件が揃い過ぎている。

パチュリー様の結界のお陰で水の害は食い止めたものの半ば幽閉状態だ。

よしんば外に出られても敵は水の中、吸血鬼であるお嬢様の手の出せる範囲なはずもなくお嬢様のストレスは貯まるばかり、非常時にお嬢様の元を離れる訳にもいかず私も手が出せないのだ……。

ストレスと退屈を持って余したお嬢様が霊夢と人魚の戦いを見逃す

はずもなく、テラスで観ていた訳だが、その内容が更にお嬢様の癪に障るものだった。

スペルカードルールを無視した戦い、スペルカードルールの上で敗けたお嬢様にとってそれは許せない事、敗けた霊夢は湖畔に置いて行かれ、人魚は水の底に帰った後、お嬢様の指示で気絶した霊夢を回収、空きの部屋に寝かせ今に至る。

コンコン

乾いた音が2回響く、霊夢か？

ズカズカとノックの返事も待たずにその者は入ってきた。

「今度の犠牲者はカップみたいね」

闖入者は床に散らばったカップの成れの果てを一瞥しそう言った。

「ふん、私の近くにあるのが悪いのよ」

そもそも断り等いらないので闖入者ではないがその闖入者はパチユリー様だった。

パチユリー様は音もなく歩くとお嬢様の近くの席に座る。

音もなく歩くのは若干浮いているせいであり、正確には歩いていない、浮いているなら歩いている振りをする必要はないんじゃないか？ と前に聞いたら「ある程度身体を動かさないと長時間椅子に座るとお尻が痛くなるのよ」と言っていた、そういうものなのだろうか……。

「そんな事よりもパチエ、ここに来たと言う事は結界の方はもうい

いの？」

「ええ……結果は安定したわ、紅魔館が水に全部沈んでも明け方までは大丈夫よ。」

だから今夜中に次の手を打たないとアウト」

「で……次の手は何か見付かった？」

「ダメね。八方塞がりだわ、原因がわからないから手の出しようがないのよ。」

咲夜、時間を止めてる間にレミィとフランを安全な場所まで運ぶって言うのは出来ないのよね？」

「はい……止まった時間の中ではあくまで私以外は動かさせませんので……申し訳ございません」

そう言っって私は深く頭を下げた。

「気にするな咲夜、お前は良くやってくれてるぞ。」

それに私の預かり知らんところで動かされたり、担いで運ばれるのは虫が好かん、出来ても遠慮させてもらうよ」

「まあ、そんな訳よ。」

兎に角事情を知ってそんな霊夢の話聞いてからの話ね、咲夜、霊夢は？」

「先ほど目覚めましたのもうじきかと……」

ガチャ

ノックもなくドアが開き一人の少女が部屋に入ってきた。

「あら、お揃いね」

そう言いズカズカと闖入者は歩いてくる。

「やっと来たか霊夢、待ちくたびれたよ」

「500年も生きてるんでしょ、少しくらいいいじゃない」

「ふん、口が減らんな、まあ座れ」

「口よりも部屋を減らすべきよ、あんたの家はでかすぎるわ」

そう言っつて霊夢はお嬢様の向かいの椅子に腰を下ろす。

私はテーブルに付く三人に各々紅茶をだし、壁際へと戻った。

「まあいい、助けた礼を言えと言いたいところだが、霊夢がそんな愁傷だと気持ち悪いわ、その代わりに私の質問に答えてもらっつわよ」

手摺に肘を乗せ頬杖を付き視線を投げる。

「忙しいから、手短にね」

紅茶を啜り霊夢は答える。

「問題ない、じゃあ早速本題に入るわ……」

テーブルに両肘を付き指を絡め口元を隠しお嬢様はそう切り出した。

第十四幕 幼き暴君に紅茶の一時を 〈Parlor and vampiro

読んでいただき、ありがとうございます。

吸血鬼とはファンタジーにおいてあまりに使い古された設定であり、余りに王道でもあります。

no life king

不死の王

等とも呼ばれ様々な能力とそれと同じくらいの弱点を持ちます。

太陽光、にんにく、十字架、聖水、聖職者、流水、火、招かれないと入れない

等々あります。

これ等の弱点は伝承や映画等によって後から付いたもの等様々です。ドラキュラ伯爵やカミーラは太陽の下を平気で歩きます。

苦手ではあるようですが…

単純に聖なるもの全般がダメだったりします。

ちなみに

科学的な視点から見れば疫病が伝承に変わったものと見られています。

昔は狂犬病何てのがありましたしね。

狂犬病については一度調べてみるのも面白いと思います。

最後は今話のパロディ紹介

・博麗霊夢は考えるのをやめた

ジヨジヨ二部

・反射神経 集中力 第六感 身体能力 特殊能力 耐久力 吸血能力 変身能力 不死性 e t c e t c …

HELLSING 4巻

確かインテグラとお祖父さんの会話より

・テーブルに両肘を付き指を絡め…「問題ない

新世紀エヴァンゲリオン

碇ゲンドウの口癖

第十五幕 五百余年の吸血鬼伝説 〈Bright night and d

いつも通りの二次創作、東方の資料も東方以外の資料から持ってきてる部分がありますので、原作に忠実でない事は御容赦下さい。

生きるといふ事は退屈との戦いだ。

それはもう戦争と言ってもいい、御歳五百を数えてもその戦いに終止符を打たれる事はなく、またその気配もない。

我がライバル、積年の仇敵と言っても差し支えないだろう。

この幻想郷には五百と言わず千年以上生きていると言う気遣いじみた連中もいる、と言っても私もこのまま生き続ければその仲間入りをする事になる訳だが……。

永遠に紅い幼き月、紅い悪魔、紅色の世界、no life king、ナイトウォーカー、夜の王、不死王、ノスフェラトゥ

様々な名前で呼ばれ恐れられた不死者である吸血鬼は特定の方法で殺されない限り死なない。

吸血鬼は存外に丈夫だ、吸血鬼個人によって差異はあるものさう簡単には死なない上に、殺されるなんて事もなかなかない。

それは異名の中に王という字をよく見掛けるようにそれは超越者でもあるからだ。

恐らく私を完全に絶命させるにはホワイトアッシュの杭で心臓を刺すくらいじゃないだろうか？

試した事も無いので実際のところはどうかかわからない、無論試す程酔狂ではない……。

でも、私が退屈で退屈で死にそうになった時は私は一思いに自分を殺すかもしれない。

月の無い日はそんな弱気な事を柄にもなくなたまに考えてしまう。

退屈は人を殺す。

そう退屈は人を殺す。

吸血鬼すらも。

だから、私は常に娯楽を探してきた、吸血鬼の娯楽。

それは闘争だ。

私は宗教と戦った、同族とも戦った、ヴァンパイアハンターとも戦った。

そして幻想郷を見付けた、幻想郷に移り住み幻想郷を支配しようとした戦った、確か吸血鬼異変とか言われているらしい、その時は結局負けてしまった。

私も自分の事は化物だと思っているがあの子は存外にして化物だったな……。

ずっと争いを続けてきた私だがここにきてやっと争いを止めた、止めたと言うよりも飽きたのだ。

戦う事に飽き紅茶を飲み、静かに暮らす事を覚えた。

それは悪くなかった、寧ろ良かった、テラスで咲夜の淹れる紅茶を楽しむ、不思議と退屈だとは感じなかった。

血で血を洗う私の五百年は何だったのだと思った。

でも、それでいい、そう思った。

だが、違った、やはり違った。

私は吸血鬼だ、どうしようもなく吸血鬼だった。

争い戦い、血を啜り、他者の血肉を己の糧にし生きる吸血鬼だった。

憎い敵を倒したい、そう思うだけでこんなにも血沸き肉踊る。

そして今、霊夢の話聞き幻想郷の状況、敵を知った時に最初に思った事はそれだった。

手が出せない歯痒さよりも先にたったのは闘争心。

いや、闘争心と言うのは正しくない、それは闘争本能だった。

「まあ、こんな感じね、私の知ってる事は」

そう言って霊夢は空になったカップをソーサーに乗せる。

「じゃあ、私は忙しいからもう行くわ、とっとと異変を解決して花見がしたいのよ」

そう言い霊夢は席を立ち元来たようにたいした挨拶もせず、帰っていった。

負けて気を失って助けられたのだ。

今すぐにでも異変解決に行きたかったのだろうけど、手短にだがちゃんと話していった。

義理堅い性格なのかとも思ったが恐らく違うだろう。

借りを作りたくないのだ、

霊夢は恐ろしく公平だ、誰とも別け隔てなく接しているようだが実は違う。

誰とも必ず一定の距離をおいている、親しくなっても絶対に親しくなり過ぎない。

拾ってくれた代わりに情報を提供した、「これで私達の貸し借りはなしよ」「そう言う事だろう。

吸血鬼の私から見ても不気味なくらいにしっかりと線引きをしている。

そう言う意味ではわからない女だ。

客人が去った応接間に静寂が広がる。

「パチエ、どう見る?」

「霊夢、ついでに魔理沙が海の底で黒幕を退治しようとする限り私達に出来る事はないでしょうね。」

咲夜はわからないけど魔法使いである私や吸血鬼のレミィやフランでは手の出しようがないわ、そして咲夜を海の底に行かせる手段もない。

八方塞がりね」

パチエは溜め息をつきそう締め括る。

「そう……」

敵は目の前にいる、それなのに手が出せないと云うのは何だかんだ言っても歯痒いものがある。

思わず奥歯を鳴らしてしまう。

「でも、やれそんな事はやっておくべきね。

レミィ、蝙蝠を何匹か貸して」

「蝙蝠？」

吸血鬼が使役する動物は鼠等がいるが蝙蝠はその代表と言える。

「ええ蝙蝠よ、使い魔として貸して頂戴、幻想郷の要所に翔ばし情報を集める、今はきつと色々なところで私達と同じように策を考えているはずよ、寧ろもう動いてると思ってもいいわ」

「ふむ、確かに……そう考えた方が自然ね、なら善は急げだな」

左手を真横に伸ばす、腕によって出来た影から蝙蝠達が這い出し次々と飛び立つと天井に逆さに貼り付く。

闇に生き、影を操り蝙蝠や鼠を統べる吸血鬼の力だ。

「パチエ、このくらいでいいかしら？」

「ええ充分よ」

そう言つてパチエは立ち上がり二十近い数の蝙蝠の前で何事か小さく呟き指を振る。

使い魔使役の魔法だろう、古代ルーンの文言らしいが良く分からん、いまいち聞き取れない言葉なのだ。

そもそも普通の生き物には認識出来るような発音ではない、純粋なルーンでもなくて使いやすいようにアレンジされてるらしいので更によく分からん。

同時に複数の精霊魔法を行使する為に多重詠唱なんて離れ業までやつてのけるのだ。

私は身体能力も生まれ持つての力も恵まれ過ぎてるからそう言う技の部分は正直疎い、火は嫌いだし水の魔法くらい覚えてもいいかも知れない。

でも、流水が駄目だから結局はそれも駄目か、とは言つても越えられないだけなんだが……。

あー……魔法は向かんのかな……。

パチエが咲夜に目配せをすると咲夜はドアを開ける。

「さあ、行つきなさい」

その言葉に従い蝙蝠達は一齐に飛び立ちドアから出ていった。後は行儀良く玄関なり裏口なりから目的地に向かう事だろう。

本当は窓から出ていった方が早いのだろうが、生憎紅魔館には窓が無いのだ。

「ちゃんと着けるのか彼奴等は？」

大丈夫ではない、等とはまったく思っていないが聞いてみる、ただのネタ振りだ。

「大丈夫よ、半自律でコントロールしてるから、知覚共有である程度場所を把握出来るから途中で情報を送ってやれば目的地には着くわ、ついでに強化の魔法もかけたから早ければ三十分もかからないで着くはずよ」

席に戻り腰を下ろしそう言う。

「便利なものだな」

素直に感心するばかりだ。

「便利と言ってもあくまで出来る事しか出来ないわよ。」

咲夜、私の書斎に行つて小悪魔から水晶球を預かってきて、それとお茶の御代わりをお願い」

「かしこまりました」

そう言つて咲夜はお辞儀をし、私とパチエのカップにお茶を満たすと応接間を後にした。

「レミイ、一つ問題があるの、貴女も分かつてるとは思つけど黒幕を引きずり出すなり、黒幕のところに行く手段なりがあつたとするわ。」

まあ、その手段を見付けるのが蝙蝠の仕事なんだけど、もっと根本的な問題があるわ。

今夜は新月よ」

そう……、今日は新月だ。

吸血鬼にとつての一番不吉な夜、一切の月が隠れ天上を星と雲だけが支配する夜、月の満ち欠けは吸血鬼の力に大きく影響する。

満月の夜は無敵を体現するが逆に新月の夜は動きそのものに制約が加わる。

あらゆるパラメータにマイナスの補正がかかり自分の住処、つまり紅魔館から出られなくなるのだ。

吸血鬼によつてはクリスマスなどキリスト教の祝い事の日は外に出られないなんて制約もあるが、生憎私は無宗教派なのでその辺の制約は薄かったりする。

そう……今日は致命的な事に外に出られない夜なのだ。

「ああ……その事か、正直どうにもならんな……」。

どうにかしようにも地上からでは月は遠すぎる、文字通り手が出せんよ。

仮に黒幕を地上に引きずり出しても、紅魔館内からではパワーダウンした私の段幕では当たらんだろうな。

私のグングニルでもあまり現実的じゃない」

「本物のグングニルならいいんでしょうけどね」

「生憎ただのイメージなんでね」

「本物なら北欧神話最高神オーディンの持つ槍、真正正銘の宝具にして神器、一度投擲すれば必ず相手を貫き持ち主の手元に戻ってくる、必中の神槍、敵軍に矛先を向ければ味方に勝利をもたらす、と

も言われるわね」

「お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。知ってる事だけ」

「ふ……殊勝な事だ」

「そんな事はいいのよ、根本的な問題。

結局はレミイが叩きのめしてやらないと気がすまないんでしょう？

私や咲夜が叩きのめしても意味がないんだから、私の得意魔法も月火水木金土日の精霊魔法。

特に役には立たないわ」

「黒幕が駄目でもあの人魚は叩きのめしてやりたいんだがな」

実際は人魚の方を叩きのめしたいのだが……。

叩きのめせるなら黒幕も人魚も叩きのめしたいし……。

何と言つか、最初はパチエは幻想郷が沈む事を心配してるのかと思つたら、意外や私の事を考えてくれていたとはな、友達思いな事だ。

なら、その気持ちに伝えて自分の願いを叶えたいところだが、課題が多すぎるな。

そんな事を思っているとノックが二回、咲夜だろう。

「入れ」

いつも通りのタイミング、いつも通りの仕草、いつも通りの作法をもって、いつも通りに咲夜はやってくる。

その手には台に乗った人の頭より一、二回り小さいくらい
の水晶球が抱えられていた、静かにパチエの前に置く。

「ありがとう、咲夜」

咲夜は会釈をし定位置に戻る。

「何をするんだ？」

濁り一つない水晶球だ、覗き込むと歪んだ顔が写った。

「知覚共有で蝙蝠が見たり聴いたりした物は私はわかるけど、
貴女には見えないでしょ、だから、それを水晶球に写し出すのよ」

「便利だな」

「まあ、最初は情報を集めてどうにか策を練らないと、どのみち最
初は誘き出す事が課題でしょうね。
こっちから行くには分が悪すぎるわ……んっ……？」

パチエがピクリと何かに反応する。

「どうした？」

「一匹、面白そうな話を見付けたみたいよ」

パチエは水晶球に手をかざしルーンを紡ぐ、水晶球は薄く光ると
映像を写し出した。

木造の大きな建造物、造りは霊夢の家に多少似ていた。

「1111は？」

「守矢神社、最近幻想郷にやって来た神がいるわ」

映像は蝙蝠の視線をそのままなのだろう、上下に揺れながら映像が移って行く、茶の間だろうか四人の女がちゃぶ台を囲み何事かを話している。

ちなみに映像は逆さまで微妙に見づらい……。

その四人のうち一人、いや一匹は見覚えがある、たまに来てはどつでもいい事が書いてある新聞をもってくるヤツだ。

「あれは……新聞屋の天狗か」

「みたいね、あの髪が青いのと帽子を被ってるのがあの神社の神、もう一人が巫女よ。」

それにしてもあの天狗があのお神社の傘下にいるのは意外ね」

「山の代表で来てるんじゃないのか？」

「違うわ、山に送った蝙蝠から見た感じだと別行動みたいね。」

山の妖怪は混乱状態みたい、正直なんの期待もないわ、先ずは守矢神社を盗み聞きしましょう」

水晶球が微かに振動し音声を流す、蝙蝠の耳は人には捉えられない音を聞き分ける。

そのせいだろうか思ったより鮮明な音声だ。

そして私達は守矢神社の企てを知った。

「随分と大きな事をやるのね、一人は現人神とはいえ、神が三柱も集まってるだけあってスケールが大きいわ」

パチエはそうもらす。

「神力と言うやつか……確かに成功すれば黒幕を引き摺り出す事が出来るかもしれんな。まさかあんな方法で道を造るとはな……」

「ええ、作る造る創る、その点に置いては神の専門分野ですしね……。
ただ、レミイの問題自体には関係なさそうね……、

ん……？ 作る……造る……創る……」

何か考え事をするように指先を口に当て唸り出す。

「どづした？」

「もしかしたら……やれるかも……いえ、やれるわ」

「いったい、何がだ」

「ふふ、貴女の問題は私が解決してあげる、決行は夜、守矢の神達にタイミングを合わせるわ、それまでゆっくり休んでなさい、私は準備をする、後咲夜は借りるわよ」

そう言つとパチエは咲夜の腕を掴み引き摺りながら滑るように部屋を出るとどこからへ行つてしまった。

喘息持ちのくせに元気なもんだ、訳も話さず行つてしまった。まったく何かいいことでもあつたのかね。

まあ……、経験より知識に偏り過ぎてるところがあるがあれで頭は切れるんだ、友として信用する事にしよう、まったく……興奮したパチエを見てたら毒気を削がれた、何に怒つていたのやら。

あの人魚を叩きのめしてやる事は変わらないさ、それで充分。

楽しくなつてきた、新月の夜が楽しみだなんて初めての事だ。

読んでいただきありがとうございます。

吸血鬼と言う幻想はファンタジーの代表で基本的に物凄く強く描写されます。

作品によっては長生きしてて暇だから色々な魔法とか覚えました的な+ もあったりします。年の功です。

そんな感じのだと作品の都合とかで吸血鬼の弱点が省かれたりします。

実際はわりと近年の映画で作られた弱点も多いので省いてもいい気がします。

ちなみにレミリアは十字架は大丈夫だそうです。日の光で気化する設定がありますが日傘をさして歩き回ったりし、東方求聞史紀には昼間よく見掛けると言う記述があったりと相変わらずはつきりしません。

今回のパロディ

「お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。知ってる事だけ」

化物語より暦と翼のお約束

まったく何かいい事でもあったのかね。

化物語より忍野メメの口癖

第十六幕 海の深淵 〈Depth 8020〉 (前書き)

いつもの二次創作、いつも思う事ですが魔理沙の帽子は何故落ちないのでしょうか。

第十六幕 海の深淵 (Depth 8020)

風を切り感覚というものは何度感じても気持ちがいいものだ。

今切っているのは風じゃなくて水だったりするが気にしちゃいけない。

さて、何故水なのかというと今は水の中にいるからで、そのままだ。

紫の便利能力で霧の湖をズンズン潜って行く事が出来る、本当に空を飛んでいる時とまったく同じで不思議な感じがする。

最初は魚の群れが通り過ぎたりと見るものもあつたが今では暗黒の空間だ。

たまに見る魚は矢鱈に不気味で本当に魚か疑いたくなる。

さて、この道中の前は余計な御使いでアリスのところへ寄ったりしたもんだから余計な時間をくってしまった。

まったく本当に余計だ。

その後は家に戻って着替えて来たもんだから更に時間がかかってしまった。

霊夢の服はスースーして落ち着かないしやっぱり魔法使いは魔法

使いらしい格好をしないとな。

きつと霊夢は先に行ってるだろうし案外異変を解決し終わってる、なんて事もあるかも知れない。

そうなればまったくの無駄骨になってしまう。

それは御免被りたい、どうせなら自分の手で解決したい、異変を解決すればそれなりにお金が貰える、特に今回みたいに実害の大きな異変だとその額も大きくなる、まあ歩合制みたいなものなんだけど、なんでそんなにお金がいるかと言うと魔法の研究にはお金は入り用なのだ。

薬草や昆虫とか蛇とか動物の類いは自分で探せばいいんだけど、専門的な薬や水銀や宝石みたいな金属や鉱石になると買わないとなし、単純に魔法薬の保存の瓶なんかは買わない事にはどうしようもない、魔法使いつてのは意外とお金がかかるものなのだ。

魔法薬を里に売って稼いじゃいるけど研究の事を考えると十分とは言えないしな、機会があつたら出来るだけお金を稼いでおきたい。

お金持ちの魔法使いがないのはきつとそんな理由だろう、もしお金持ちの魔法使いがいたらそいつはお金持ちの魔法使いじゃなくてお金持ちが魔法使いなんだ、え〜と……卵が先か鶏肉が先か……だっけ？

まあいい兎に角異変だ願わくば霊夢よりも先に解決、そして賞金ゲットだ。

それにしても相当深く潜つたのに未だに底が見えて来ない、この海ってヤツはどれだけ深いのだ。

それにしてもこの暗さ、魔法の灯りがなかったら1センチ先も見

えないくらいだ。

光の魔法が得意なのがこんなところで役に立つとは思わなかったけど、霊夢のヤツは大丈夫か？

霊夢は結界作って空飛ぶぐらいしか出来ないし、結界つてのは良くわからないところが多いから何か良くわからない方法で解決するのもかもしれないな。

前に魔法研究の参考に霊夢の結界術について聞いた事があったがさっぱり要領を得なかった、見えないだけで物事の境目は何処にでもあるとか裏返し空間を更に裏返すとか意味がわからない。

結界とか境目とか兎に角謎だ。

そう言えば霊夢は私の描く魔方陣も結界だつて言ってたな、確かに言われてみればそうだ。

陣を描く事で区切りを作りその中で魔法を作り出す、確かに結界だ、でも私が知りたい結界つてのはそんなのじゃないから違うんだけどな。

さて……、かれこれ潜って30分は経つだろうか、風景も変わらない水中の旅だから体感時間は当てにならないがそれなりの時間はたっているはずだ。

景色が変わらないのはつまらないし目的地が定まらないのは少々辛い、正直飽きる。

マスタースパークでも撃てば向こうからやってきたりしないだろうか、炙り出し作戦、意外と行けるかも知れないな。

思い立ったが吉日、善は急げ、三十六計逃げるが如かず、さっそくやってみよう、懐からミニ八卦炉を取り出す、私の愛用のマジックアイテムでマスタースパークを撃つ時のデバイスとして使っている。

結構便利で鍋の火にも使えるし暖房器具としても使える、霖ノ助

は開運や御守りの機能もあるなんて言ってたな、効果があるかは知らないが……、他にも空気を綺麗にしたりも出来る優れものだ。そのうち喋る機能でも付けてみるのも面白いかも知れない。

さっそく撃ってみる事にしよう、ミニ八卦炉を前方に構え精神を集中させる、そして優しくミニ八卦炉に呪文をかける。

戦闘中じゃないので落ち着いて呪文を唱えられるのはいい、魔法は集中力、精神力つてのが大切だからな、呪文を唱えるとミニ八卦は光を放ち魔法の火を燃やす、仕上げは上々準備は万端最後はターゲットに向かつて恋の魔砲を放つだけ、今回はターゲットがないからその辺の横風ぎに放てばいいだろう。

『恋符……』

放とうとしたその瞬間前方に突き出した腕を掴まれる、一瞬何が起こったのか理解出来なかった、そして数瞬しやっと状況を理解し全身が栗立つ。

ヤバい、ヤバいヤバいヤバい。

手を振りほどき振り返りもせず全速力で距離を取り反転、魔力供給を失ったミニ八卦炉はその光を失い沈黙する。

ミニ八卦炉を逆の手に持ち換える、いざという時八卦炉をデバイスに使うと若干のラグが生まれるのでデバイス無しで発動させるシングルスペル等のショートスペルを利き手を使ってラグ無しで発動させる方がその分対応力に差が出たりするのだ。

戦闘態勢をとり、相手を睨み付ける。

こんなに冷や汗をかくのはヤバい薬の瓶を落として割りそうになった時以来だろう、敵陣に乗り込もうとしているのに何を油断していた、平和ボケもいいところだ。

「随分と慌ただしいですね」

私の腕を掴んだ相手はそう言った、相手を確認する、緑色の髪に薄手の服、その下に延びているのは足ではなく魚のようなヒレだった。

「人魚……？」

「あら、貴女は人魚を知ってるんですね。

それなりに有名な種族だと思ってましたがさつき会った方は人魚を知らないようでしたし、てっきりこちらの方々は人魚を知らないとばかり思っていました、認識を改める必要がありますね」

「私は勉強家で努力家なんだぜ」

不敵に笑うが、あの慌てぶりの後では些か演出としては三流だろう。

「そうですね、それは結構な事です。

私はシレネッタ、見ての通り人魚です」

そう言って丁寧に頭を下げる。

「へえ、私は霧雨魔理沙、見ての通り魔法使いだぜ」

「魔法使い？ 魔女ですか？」

「あ？ まあ、言い方次第ではそうだな」

「魔女には余りいい思い出がないのですよね」

「そうかい、ならもう一つ余り良くない思い出を増やしてやるのか？」

発動の速いシングルスペル、一節の呪文で魔法を完成させる単詠唱魔法で幾つか魔法陣を描き上げる。

「ストップ、私は争う気はありません」

だが人魚は広げた手を前方に突き出し静止を促す、一瞬弾が飛ぶかと思もい身構えたがその様子はない。

「あ？ 争う気は無いが弾幕で遊ぶ気はあるのか？」

「それも違います。」

私は貴女を招待しにきた、貴女の行きたい場所に」

「私の行きた場所？ 宗教の勧誘なら御断りだぜ」

「貴女を案内するのは水竜宮、貴女はこの海を止めにこられたのでしょうか？ この海を止める事が出来る方、我が王女様が貴女を招待したいと仰ってます」

「何だそりゃ」

意味がわからない上に出来すぎた話、いきなり目的地まで案内してくれるなんて虫が良すぎる。

それに……。

「お前はだれだぜ」

それが一番の疑問だ。

「私はこの海を呼び出したお方、王女様の家臣です」

「あ？ さっぱり意味がわからないぜ。

私はそいつを退治しに来たんだぜ？」

当然だ、敵の迎えなどあるはずがない、しかもその部下にだ。

「何だ？ 謀反なのか？」

「私は王女様の命令で貴女を招待するのです。

王女様をお守りする立場の私にはまったく持つて不本意な命令ではありますかね」

そう言つて人魚は強く、強く私を睨み付けてきた。

有りもしない恨みが込められたような、そんな目だった。

少し躊躇するような内容だ、意味がわからない、畏だろうか……、でも敵の本拠地に行くのは決定事項、虎穴に入らずんばどうのこうの、一つ乗ってやろう。

「わかった、いいぜ、招待されてやる。

ただし！ お前を倒してから自分でいくぜ」

順路通りに進んで、尚且つ力で圧倒する。これが文句を言わせないコツだ。

私は私のやり方でやる。

短い詠唱で魔力を紡ぎ魔法を完成させる、私を囲むように光の魔方陣が衛星のように回転する。

そこから更に呪文を重ね、重複詠唱からスペルを完成させる。

『魔符』 スターダストレヴァリエ

回転する魔方陣から高密度の星形の弾幕が放射状に広がり視界を埋め尽くす。

こういった数に物を言わせる弾幕は単純だが強力だ。

そして弾幕ごっこが出来るヤツと出来ないヤツのボーダーラインにもなるだろう。

そのヤツを見詰める。

だが様子が可笑しい、まったく動くどころか構える気配すらない、構える必要すらない程余裕で避けられる、と言う事だろうか？

スターダストレヴァリエは難しい弾幕ではないがそんな甘い弾幕でもない、少し警戒した方がいいかもしれない。

星屑達の行方を見守る、星形の弾幕は人魚を襲う。

「なっ!？」

人魚はどんな動きを見せるだろうと注視していたが人魚は結局何の動きも見せなかった、人魚は弾幕を避ける事もなくその直撃を受けた、避ける素振りすら見せず、それが当たり前であるかのように人魚は弾幕の直撃を受けた。

意味がわからない、意味がわからない。

何だ？ 何だ？ 何故避けない？

勿論、絨毯爆撃のような弾幕は一回の着弾ではすまず、幾つもの

弾幕が人魚の身体を蹂躪した、ダメージが無いはずがない、スターダストレヴアリエはマスタースパークのような破壊力はない、だが例え人間より遙かに丈夫な妖怪でもあれだけ被弾すれば痛いでは済まされない。
最悪の場合死ぬ。

私は発動中のスペルカードをキャンセルした。

これで既に放たれた弾幕以外は消滅する、そして空から墜ちるかのように暗い海の底へと沈んでいく人魚を全速力で追った、こんな後味の悪い弾幕ごっこなんて願って下げだ。

勝てばいいなんてもんじゃないんだ。

墜ちる人魚の先回りをし下からキャッチする、丁度お姫様だっことみたいな感じに。

「馬鹿かお前！ 死にたいのか！」

人魚は弱々しく首をこちらに向け言った。

「貴女の……弾幕じゃないですか……」

「そんな事を言ってるんじゃないぜ、何故避けないんだ！」

「言ったではないですか……争う気も……弾幕で遊ぶ気もないと……私は……王女様が招いた客人に無礼など出来ない……貴女が私を信用出来ないなら……こうするくらいしか……ないので」

人魚はそんな事を言った、自分が敵ではない事を示す為にあえて弾幕を受けたと

「わかった！ わかったから！ その水竜宮とやらはどこだぜ、直ぐに治療してやるから、早く案内しろ」

人魚は弱々しく笑い、丁度私の正面を指差した。

「彼方の方向に真っ直ぐ進んで下さい……暫く行けば明るくなってきます……そこにある建物が水竜宮です……」

その言葉に首だけで頷き人魚をおんぶするように担ぎ、指差した方向へと急いだ。

そう言えばさっきもアリスをこんな風におんぶした気がする。

「まったく、今日は厄日だぜ」

魔理沙はそう漏らすと水竜宮へと急いだ。

第十六幕 海の深淵 〈Depth 8020〉（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

私の中で、と言うかこの話での魔理沙は原作と違います。

他のキャラも違うじゃねえか！と思う方もいると思いますが、そっちの方は頑張っても駄目だったのです。

それは置いておいて、原作の魔理沙は『弹幕は火力だぜ』などと言ったりわりと豪快、勢い、何て言葉が似合う、口より先に手が出るようなイメージがあります。

私の中では、確かに豪快で勢いもありますが、一番常識的な人間だととらえています。

常識的と言うより私達に近い人間です。

口では馬鹿な事を言ったり冗談半分、非常識な事もしますが頭の中では真つ当な事を考えていると思います。

さとのりの台詞で『考えていないようで色々考えている』みたいなのがあったり、ZUN氏の話であくまで此方側の視点、なんてのがあったりしたのが理由だったりします。

普通の魔法使い

私はこれを魔法が使える普通の人と解釈しています。

勝手な解釈なんですけどね。

二次創作とはそう言うものだと思います。

じゃなければ二次創作は面白くない、ラブクラフトのクトゥルフの呼び声の様に、余談ですがニヤル子は無いかなと思います。

後、個人的意見を言うと魔理沙の服は非常に良い、後は聖の服とか可愛いと思います。

今回のパロディ

そのうち喋る機能でも付けてみるのも面白いかも知れない。

魔法のデバイスで喋ると言えばリリカルなのはです。

魔法少女ものには喋るステッキなんてのもありますね。

次回は今回の続き、魔理沙が水竜宮へ行きます。

ちなみに霊夢も潜ってますがまだ後ろです。

第十七幕 竜に九似あり ｝ P a l a c e o f t h e s e a g o d d e s s

いつもどおりの二次創作、ラスボス登場、そして魔理沙と第一次接近遭遇、魔理沙の運命や如何に

薄明かるいドーム状の空間。

薄気味悪い海底を人魚の案内どおりに進めば薄明かるい場所に行き着いた。

案内と言っても大雑把な方向を指差したら直ぐに気絶して案内と呼ぶには些か誇張表現な気もする。

それに気絶したこの人魚、馬鹿に重い、水中だと軽くなるイメージがあるんだけど……、アリスの時より苦労した気がする、まったく何の因果だか……。

そんなこんなで辿り着いた薄明かるい空間、近付けばそこはザルを逆さまにした様な硝子の様な半円球、つまりはドーム状の空間がある、広さで言えば白玉楼と比毛を取らない程広さがある、入り口を探してそのドームを迂回すると入り口を発見する事が出来た、だがその入り口が問題だ。

その入り口として構えられていたのは大きな白土の門。

非常に大きな門で白玉楼の結界の門と大差ない程巨大、屋根に瓦を使っているところを見ると和風なのだが屋根の微妙な曲線が余り見た事がないタイプで敢えて言うなら博麗神社、だがそれとも若干違うようなそんな門構え、扉は木で出来ており来る者が門を叩く事を躊躇わせるようなそんな威圧感がある、そんな門だった。

「どうやって開けるんだ？」

分厚い木で出来た扉は少なくとも私の細腕で開けるような代物には見えない。

門を押してみたら見た目に反し実は軽かったという落ちはなくビクともしない、勿論、押しても引いてもである。

ノックしても返事はおるか扉の向こうに誰かいる気配もない。

八方塞がりでも御手上げ状態、巨大な門の前で人魚を担ぎ箒に股がり途方にくれるしかない。

「それじゃあいつまでたつても中には入れませんよ」

直ぐ耳元、そんな距離から声をかけられる、勿論、こんな状況なら相手は一人しかいない、私におぶられた人魚のシレネッタだ。

「起きたのか」

「ええ、五分程前に」

「起きたなら直ぐ言えよ、結構重いんだぜ」

「母親におんぶされた時の事を思い出してたのです」

「そうか……」

母親の記憶……か……。

「嘘です」

「ちょっとしんみりした私の気持ちを返せだぜ」

「冗談はさておき」

そう言ってシレネッタは話を切ると魚の様にスイーっと私の背中から離れ、門の一番上屋根瓦の上へと移動した。

そして手招きをする、こっちへ来いという事か……。

その後を追い屋根の上に着地する、硝子状の結界、門の棟を境目にして門の中と外を区切っていた。

物理結界だろうか？ 中の様子は光が反射して良く見えない、中と外で屈折率が違う、中は水以外のモノで満たされているのだろう。

「ついてきて下さい」

それだけ言うとシレネッタはスルツと結界など無いかのように中へと入っていった。

あれ……？

暫し放心する、結界は？

「どうしたのですか？」

私のいつまでたっても来ないこので催促に来たのだろう、結界の中からシレネッタが顔だけを出す、硝子から首だけが出ている微妙な絵面、ちよつと引く。

「いや、何でもない」

そう言って私も結界を潜る、抵抗も無ければ違和感も無い、何だこの結界。

気をとりなおして回りを様子を伺う、広い、どうも本当に白玉楼並にでかいみたいだ。

砂を敷き詰めた地面、門から延びる石畳の道はそのまま真っ直ぐ奥に見える平屋の屋敷へと続いていて、その石畳の脇や結界に沿って木の様な形をしたピンク色の石が等間隔に並べられている。

先ず、そんな事よりも驚くべき事がある。

「光と空気がある……」

結界を通る時、違和感が無いとは言ったがあえて言うならこの事だろう、久しぶりに味わう空気、肺を満たすそれは冬の朝のようで頭が冴えるようなそんな冷たさ。

そして光、結界その物が発光しているようだ、陸の光と遜色無いと言ってもオーバーではない、昼の光そのものと言ってもいい、一瞬ここが暗い海の底である事を忘れる程に明るい。

「王女様も私もエラがある訳ではありませんからね」

水の中で生活してるわりに不便なもんだ。

この結界は中に空気を閉じ込める為の結界、選択結界……だろう
か……。

「不便なもんだな、でもあの門はいらなと思うぜ」

「作ってみたはいいものの、開ける手間と閉じる手間、そもそも私

しか出入りをしないんで、まったくもって無駄ですね」

本当に無駄なのか……。

「そんな事はいいのです。

王女様がお待ちです。着いてきて下さい」

そう言うとシレネッタは海を泳ぐのとまったく同じ調子でスイーと空中を泳いだ、いったいどんな理屈なのだろう、兎に角ついで行く。

シレネッタの後を追って箒で飛んだ。

「なあ、王女様つてのはいったい誰なんだぜ？」

館までは距離がある会話をするのも悪くないだろう、少しスピードを上げて横へと並ぶ。

「王女様は王女様です。

この水竜宮の王女様です」

だが、一瞥だけけると実に素っ気なくそう答える。

「いや、そりゃそうだぜ……」

「忠告しておきます。

王女様は竜王様の御令嬢、龍神の末裔、仇なそう等と思いがった考えは捨てる事ですね」

「竜王？ 龍神？ 何なんだぜそれは？」

「海を統べる神の一人です」

「ん……、龍神……龍神ね……、龍宮の使いとは関係あるのか？」

「直接の関わりはないですね、王女様は分家の御令嬢に当たりますし、龍の世界に住む龍神とは遠い遠い遠い親戚みたいなものだと思います。つて下さい」

「衣玖とは関係ないのか……」

「衣玖？ 永江の御息女の事ですか？ 久しく聞く名前ですね」

「多分そうじゃないのか？ アイツの家系の事なんか知らないからわからんぜ」

「少なくとも1000年は顔を見ていないと思います。」

龍宮の使いは龍神達の共通の部下みたいなものですからね、」

「そりゃ忙しい話だぜ」

そんな話をしていると屋敷に着く、改めてだが近くで見るとでかい、白玉楼と同じ平屋の屋敷だが違うと言えば高さが倍はある、白玉楼は平屋で遠くから見れば平べったい印象があるがこっちは高い、天井が高いのか屋根裏が広いのか分かんが兎に角掃除は大変そうだ。

「どうぞ中へ、一応言っておきますが土足で結構です」

そう言って足の無いシレネッタは押し戸をくぐり手で先導し招き入れる。

私はそれに無言でついて行く、玄関は至って普通、まあかなりでかくはあるが特に変わったところはない、掃除はちゃんとしてある。つて事、後は天井が高い、普通の二倍はあるだろうか？

お陰で飛びやすくて便利、外から見た時、屋根が高いと思ったけど見た感じ天井も高いが屋根裏も広いようだ。

その広く天井も高い廊下を進むと大きな扉に突き当たる。シレネッタは振り返り言う。

「魔理沙さん、この扉の向こうに王女様が居られます。

くれぐれも粗相の無いよう」

「へいへい」

私の生返事に気を悪くしつつも、言っても無駄だと悟ったのだから、前を向き直り扉をノックする。

「客人を連れて参りました」

「入れ」

シレネッタが扉を引き入れと促す、一歩踏み出し私は眉をしかめた。

暗い。

およそ灯りと呼べるものは幾つかの蠟燭しか見当たらず、暗黒とは呼べないものの部屋の様子すらうかがえるものではなかった。

「シレネッタ、真っ暗で何も見えないぜ」

振り返り不満をシレネツタに訴えるがそれに答えたのはシレネツタではなかった。

「おお、そうであったな、では……」

私は振り返る、部屋の奥、暗闇の向こうからその声は聞こえた。ぼうと光る。

最初は床だった、夜光虫のように発光しそして次第に壁、天井へと光は伝播していき最後は部屋の六面が光り出し部屋のシルエツトが浮かび上がらせた、やがて光はその強さを増し、昼の太陽のように部屋を照らしだす。

「すまぬの、私に光は要らぬ故、他人もそうなのだと思ってしまう」

声の主を目で確かめる、廊下の更に倍は高い天井、霊夢の神社が二つか三つ入ってしまったような広い部屋、その最奥、そこに声の主はいた。

随分とシルエツトの大きな女だった。

見た目は二十歳あるかないか、幾重にも重ねられた着物、四肢を持つ蛇体の龍が裾を一周するように描かれておりそれらは蛇の鱗の様な帯締めで致くられている、長い袖には滝と鯉が描かれ随分と重そうだ。

頭には内側に弧を描き枝分かれした薄い金の髪飾りは勇儀の杯くらい大きく何処と無く鹿の角に似ている、髪の毛はこれまた長い、その癖の無い黒髪は地面に着くほど長く根本で二つに分けられ三角形を丸めたような紙止めで結わい付けられていた、顔立ちは女の私から見ても美しく整っているが幽鬼の様に白い肌は余りにも人外じみて、血のように赤い瞳と二日月の様に引き延ばした口元が少し不気

味だと思った。

紫が余計な事考えて笑ってる顔も不気味だがコイツに比べれば普通に思えてしまう。

間違いない、コイツが黒幕だ。

「お主が魔理沙か、思ったより可愛らしいの、もう少し“ぼーいっしゅ”だと思っておったのにの」

「私も有名になったもんだぜ、見ず知らずの人が私の名前を知ってるなんてな」

動揺が隠せただろうか？ ヤツは私の名前を知っていた、見ず知らずの人が自分の事を知っていると云うのは気持ちが悪い、だが、知ってるだけなら問題じゃない、コイツはどこで私の名前を知ったのだ？

「フッフ……それにしても紫という者中々に凄いの、あんな力がこの世にあったとはな、海と空の境界かの、実に奇っ怪じゃ」

まただ、コイツは知ってるはずのない事を知っている、そもそも私の名前はシレネッタにすら教えてない、境界の話なんて私、紫、霊夢そして射命丸しか知らないはずだ。

いや……わからない、逆にそれだけの人、四人が知っているのだからとも考えられる。

最悪、霊夢が先に来ている敗北した、そう考えれば全て辻褃があう、問答無用の霊夢が悠長に敵と世間話をするとは考えにくいがそう考える方がまだ現実的だ。

「それにしてもあのアリスという娘、中々に可愛らしいの、慌ててお主らが頭をぶつけるところなど妾はとても愉快であったぞ、それ

にしてもお主も鈍感よの、フッフ……」

全身の筋肉が強張るのが分かる、今のは隠しきれない。

アイツは今なんと言った？ アリス？ 頭をぶつけた？ あれはアリスの家での事だぞ？ 私とアリス以外知ってるはずもない、私は誰にも喋ってない、あのプライドの高いアリスが自分の失敗談なんて人に話すはずがない。

コイツは“見ていた”とでも言うのか？

「ふむ、無駄話はもう良いかの、そんな事は後でもよい、お主達は妾を倒して花見をするのじゃろ？ なら急ぐが良かるう、もっとも妾に勝てたらの仮定じゃがな。

妾は綿津見 三幡

絶えても朽ちず衰えぬ竜神の末裔、竜王の血統ぞ。

天を翔れば天を裂き！ 一声鳴けば地を揺らす！ 振るう爪は雷を操り嵐を喚ぶ！ 幻想の高峰に頂く竜にして神、神にして王！

魔王たるお主がどこまで出来るか見物じゃ、海が濁るか、星が墜ちるか楽しみである、妾はとても退屈じゃ暫しの戯れとくと付きおうてくれ」

三幡の回りに霞が湧き、長い髪の毛がゆらりと浮かぶ、赤い目は一層赤みを帯び既に深紅、右手に持つ玉が輝き出す。

とうとう、始まってしまった。

第十七幕 竜に九似あり ｝ Palace of the sea goddess

読んでいただきありがとうございます。

ラスボス登場で物語も終幕に向かいますが、まだまだ暫く終わりそうにはないです。

多分折り返し地点な気がします。

まだ名前も出てないのがフラン、美鈴、ルーミア、レティ、プリズムリバー三姉妹、妖夢（正確には出てはいる）、幽々子、リグル、ミスティア、秋姉妹、雛、犬走、メディスン、小町、映姫、天子、リリー、幽香、巫求、三妖精
メジャーどころではこのくらい、実際ストーリー自体には何かあった時用の余裕が有ればリクエストがあれば出せます。

リクエストが無くても出す予定のキャラもいますが改めて見てみると全員は難しいと思ったりします。

さて…

ラスボス紹介

綿津見 三幡

わたつみ みはた

種族：竜王の娘

能力：ワタを操る程度の力

二つ名：忘れ去られた海神様

ワタとは海の事です。

竜王の娘という事で竜なのですが、幻想郷最高位の神である竜とは

少し離れたものとなります。

大昔に竜の一族から枝分かれした一族で三幡はその末代に当たり既に廃れた一族になります。

ですので水竜宮には三幡とシレネッタしか住んでません。

一族は跡絶え部下もいません。

三幡はそんな事については余り興味がないようでわりとどうでもいいと思つてます。

デザインについて

“竜に九似あり”と言われ、角は鹿、頭は駱駝、眼は鬼あるいは兎、体は大蛇、腹は蛟、背中の鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛にそれぞれ似るとされます。

三幡はそれを元にデザインし鹿の角は髪飾りで、大蛇は鱗の帯締め、爪は書いてないですが内側にちよつと反つて鷹の爪です。

蛟は中国の竜でまんま服のデザインに入れ鯉も一緒に袖に入れました、虎は書いてないですが重ね着している着物の中に虎のカラー黄色と黒の着物を重ねて使つてます。

紙止めが牛の耳の様に三角形を巻いたようなデザインになっています。最後の駱駝が悩みました、駱駝の特徴、睫毛が長いとか目が大きいだとイメージと合わないので、駱駝の瘤は脂肪の塊、駱駝と言えば二瘤駱駝、二つの脂肪の塊と言えば胸、そつだ胸を大きくしよう！と言つ訳で重ね着でわかりませんが胸がとても大きいです。

具体的なサイズは想像にお任せします。

これ等を持って九似

わりとどうでもいい設定を活動報告に書いてますので興味があればどうぞ。

さて、次回は魔理沙VS三幡

魔理沙の運命や如何に

第十八幕 黒い巨星と青い海 〈Shooting star〉(前書き)

いつもどおりの二次創作、普通の魔法使い霧雨魔理沙と忘れ去られた海神様、竜王の娘、綿津見三幡の対決です。

綿津見三幡良わたつみ みはたかつたら覚えていただければ幸いです。

第十八幕 黒い巨星と青い海 〈Shooting star〉

《スペルカードルール》

幻想郷において揉め事や紛争を解決する為の手段の一つであり、命名決闘法とも言われる。

命名しておいた名前の意味を体现した技をいくつか考えておき、それぞれの技名を契約書形式で記した契約書を任意の枚数所持、ただしそれら契約書に形式は無くスペルカードとは言うが必ずしもカードの様式を取る必要は無い。

対決の際には、決闘開始前に決闘内での使用回数を提示し体力が尽きるかすべての技が相手に攻略された場合は負けとなる。

たとえ余力が残っていても提示した全枚数を攻略されたら、負けを認めなくてはならない。

技の美しさにもウェイトがおかれていて、精神的な勝負という面がある。

竜王の娘、綿津見三幡は霞を纏いユラリと宙に浮き、右手に持つ赤い玉が煌々と光りを放つ。

「そうよのう……五つでどうじゃ？ 妾はこの“すぺるかーどるー”の決闘が楽しみでの、沢山考えたのじゃが余り欲張るのも品があるまい、適当なところじゃろ」

目を細め、口角を上げ笑っているが笑っているようには見えない、どこか作り物じみでいて不気味だ、笑顔というものがあんなにも異質なものだったのだろうか？

春雪異変が解決したすぐ後に紫と一戦した時も似たような感じだった事を思い出す。

余りにも対面するには巨大過ぎる敵、スペルカードルールというのはそういつた力の差を埋め争いが激化する事を防ぐ為のルールである。

一定以上の力が有れば単純な力の差は大きな差にはならない。

でも、でもだ、そんなモノでは心に空いた不安という穴は埋まらない、朝から黒猫が目の前を通りすぎたような、鼻緒が切れてしまったような、兎に角不吉な予感がする、魔法使いが不吉なんて表現するのはなんだか変な気もするが、私は生憎自分に素直な人間だ。

その気持ちを認めよう、ここまで来るのに余りにもほとんど拍子過ぎて、余りにも都合良く行き過ぎたせいもあるだろう、けど、何もこんな経験は初めてじゃない、今までにもあった、そしてこれからもだ。

私が魔法使いとして生きる為には避けては通れない道、平穩の裏

側を歩く者、生の裏側にはいつも死がある事を理解しないとけない、私は魔法使いになると自分で決めたのだ。

だから家を出た、覚悟は出来ている、覚悟なんてもうとっくの昔に出来ている。

だから、迷わない。

不安になんか負けない。

「たった五つでいいのか？ 私は足りなくらいだぜ」

私は不敵にそう返す、舌戦も戦いの内。

だが、相手はどこ吹く風と言うように挑発に乗ってくれる様子はない、三幡は斜め上の中空を見詰める。

そして何事もなかったように向き直る。

「増やしても良いのじゃが、もう一人こちらに来ておるようだな、余りお主に掛かりきりと言う訳にもいかんのじゃ」

もう……一人？ 霊夢か？

「連れないヤツだぜ」

「フフフ……すまんの、早速と行くかうか」

左手で口元を隠し不気味に笑う。

そして右手の玉が光り勝負が始まる事を告げる。
始まったのだ。

玉から光の帯が溢れだし三幡の周りを取り囲むように旋回し、何

の合図もなく襲いかかってくる。

速くはない、だが波打つような軌道の弾幕は非常にイヤらしい、丁度メルランの弾幕がこんな感じだった。

こういう弾幕は大きく避けしつかりと視界を確保し余裕を持ってかわす、まだ始まったばかり、この程度で苦戦なんかしない！

弾幕の薄い場所を探し最短コースでかわす、引き付ける必要などない、私の弾幕はパワー、真っ直ぐ、真っ直ぐに、弾幕を見て経路測と反射で回避する。

相手のリズムを読み合わせる事によってその回避は可能になる、幻想郷で生きる為に磨いてきた私の、私だけのスキルだ。

私は波打つ弾幕を危なげ無く回避し、確実に相手との距離を詰める。

「ほお………凄いの中々に華麗じゃ、では次と行こう」

『宝珠』 龍の頸の玉

スペルカードの宣言と共に右手の玉が光り出す、同時に黒・青・赤・白・黄、五色の光弾と五色の太い光の帯が発射される。

雨のように降る光の帯が横の動きを阻み、光弾が上下の動きを阻む、光の帯のスピードとワントンポ遅れた光弾の緩急を付けた波状攻撃、だがよく見れば必ず隙がある、上下左右の道が無いなら前へ出て自分の空間を確保する、ある程度距離を詰めたい私には寧ろこの弾幕はチャンスだ。

波状攻撃、その波と波の間に滑り込む、弾幕が空を切り視界の後方へ消えていく。

距離十分、空間把握、詠唱完了、タイミングも悪くない。

「次は私のターンだぜ！」

『魔符』 ミルキーウェイ

スペルカードを宣言し魔法を完成させる、自分を中心に回転しながら星屑が散っていく、この魔法は空気中の星成分を弾幕に変換、拡散し放つ。

自分を中心に拡散していくので相手との距離が近ければ近い程弾幕の密度は高くなり、それだけ回避は困難になる。

迫り来る星屑の弾幕を三幡は難なく避ける、慌てる事なく最低限の動きで避けている。

でも、これは予想の内、竜は最高クラスの幻想、身体能力が並の妖怪レベルでない事は予想済み、更に追い討ちをかける。

短い詠唱でスペルカードの宣言と共に完成させた魔法を発動させる。

相手の両サイドからまた別の星屑達が現れ挟み撃ちにし、視界全てを星が埋め尽くす、これで天の川を模したスペルカード『魔符』ミルキーウェイの完成だ。

人の手の少ないところの星成分は強い、予想通り中々の密度の弾幕になった。

初手として申し分ない。

三幡は挟み撃ちに対し上手く反応し避けているが如何せん動きが雑だ。

身体能力ではあちらが上だろうが経験値はこちらの方が上、十分に勝機はある。

弾幕に押され、三幡が後退する。

王女様には弾幕ごっこは荷が重いと云う事か、この勝負いけるかもしれない。

次のスペルの詠唱に入る、狙うはマスタースパーク、私が愛用する魔法。

弾幕はパワーと体現する魔法。

私が最も信頼する魔法だ。

ミニ八卦炉を取り出しスペルを詠唱する、八卦炉はそれに応え熱をおび、私の魔力を光と熱に変換し増幅する、呪文さえ完成させれば後はキーとなるスペルカードの宣言をすれば発動出来るようにデイスペルにする、さつきシレネットに腕を掴まれ魔法をキャンセルしてしまつた経験をいかす、油断はしない。

相手に照準を合わせる、いつでも撃てるように、最後の詰めを誤らないように……。

相手に狙いを定める、その時三幡はどんな弾幕でも必ず出来る弾幕のポケットにいた、どんな弾幕でも必ず薄くなる部分がある。

三幡が左手を後ろに構え半身を捻る、明らかに何かをするつもり、だが何だろうと構わない、反撃の弾幕ごとマスタースパークで吹き飛ばす、カウンターのマスタースパークで詰みだ。

三幡が動いた、捻つた上半身をバネに180度の半回転をし左手がまるで何かを引き裂く様に空を切る。

弾幕は……、出ない……？

脳のパルスがそれを伝える刹那、その数瞬、空気を引き裂いたような凄まじい音が鼓膜を直撃、更に数瞬まるでドミノ倒しを見るかのように三幡を中心に星屑の弾幕が吹き飛ばされ欠き消される、そ

の波は弾幕ごと私を飲み込んだ、烈風とも衝撃波ともつかないものに体を打ち付けられ吹き飛ばす。

視界が一回転、二回転、そこまで数えたところで脳の処理と平行感覚が回転に追いつかず上下を見失う、緊急事態用に体に仕込んでおいた魔法を発動させ、空間に自分の体を縫い付け強制的に停止させる。

直後に襲う内臓が捻れるような感覚、全身への衝撃、脳が悲鳴をあげ、視界が霞み吐き気を催す。

この代償もこのまま壁や床に激突しなかった事を思えば安い代償だ。

気付けば箒に辛うじて片手でぶら下がっている状態、よく見れば壁際まで吹き飛ばされたようで後方数メートルは壁だった。

直ぐに骨等に異常がないか損傷確認をする、重大な異常は見当たらない、不幸中の幸い。

でも、あのままなら死んでいた、間違いなく死んでいた、油断してカウンターする事だけを考え、防護を疎かにした。

障壁を張る暇がなかった訳ではない、完全に油断をしていた、これはそのツケが回ってきたのだ。

自分の失態に奥歯を噛む。

スperlカードルールは揉め事や紛争を可能な限り激化させず平和的に解決する手段、だがその実、平和的と言いながら殺しを禁止していない、あくまで幻想郷の均衡、“幻想郷の”平和を守る為のルール。

そして私は人間で人間は脆く直ぐに死んでしまう事……、私は死を忘れていた、一瞬でも死を忘れたその代償だ。

霊夢やアリス達とやるお遊びの弾幕ごっことは違う、幻想郷を水

の底に沈めようとするようなとんでもないヤツとの勝負なんだ。

「やはり、遠距離戦は苦手じゃな、妾はどちらかと言うと接近戦が得意じゃな」

その言葉に思考を中断させる、目の前には既に三幡がいた。

「そうか、気が合うな、私も接近戦は得意だぜ」

三幡はその答えに満足そうに頷く、でも妖怪相手に接近戦と言うのは避けたいと言うのが実際の本音だ。

「妾はまだ一枚しか見せてないので、もっと持ちこたえておくれ」

そう言って尖った爪の目立つ左手を振りかぶる、休ませてくれる気は余り無いようだ、箒を力の限り引き寄せ下に向ける、自由落下+加速の魔法で真つ逆さまに墜ちるかの様に真下に飛ぶ、三幡の爪はさつきまで私がいいた空間を横一文字に裂き、その余波は更に後ろの土壁を鎌鼬の様に引き裂き粉碎した。

全速力で降下する私に床が迫る、制動をかけ床に衝突するギリギリまで減速、そこから更に床に擦ろうかというスレスレを真横に飛ぶ、真後ろで床を破砕する音が響く、きつと三幡の追撃だ、さつきの方角転換が無ければ追撃を避けれずに詰んでいた事だろう。

身を翻しそこで初めて着地し相手を確認する、床に出来たクレーターの真ん中に砂埃を舞い上げ三幡が口元を袖で隠し立っていた。

「床を壊すとは随分とはしたない王女様だぜ」

そう歯を見せ笑ってみせる、まだまだ余裕はある、余裕を見せ付

けてやるのもいい。

そして、相手にバレないように口を動かさずに次の魔法を詠唱する、相手が接近戦を仕掛ける以上は地上戦の方がいい、少なくとも下方向への警戒をする必要がないからだ。

前後左右上下、自在に避ける純粋な弾幕とは違う、そもそも人間の身体は空中で活動するようには構造的に出来てない。

それらを踏まえても接近戦は分が悪い、どうにかして引き離さないといけない、相手の方が身体能力は上、ならば身体能力の底上げをする、その為の魔法だ。

この魔法も多重詠唱なんて離れ業の出来るパチュリーなら話しながら詠唱なんて事が出来るのだろう……。

三幡が片手を軽く振ると周りに風が起こり、舞い上がる砂埃が消える。

「私に意見出来るものなど、そうそうはおらぬでの、作法が至らぬは、まあ許せ。」

それより今はお主が唱えておる魔法の方が気になるの」

背中を冷たい影が這い上がる、まただ、また彼奴はおよそ知り得ない事を知っていた、詠唱がバレたのか？

魔法使いは解呪を避ける為に詠唱内容を巧みに隠蔽する、例えばパチュリーの独白言語、アリスなら事前に詠唱を済ませ本番では人形操作で済みます。なんて方法をとる。

戦闘中の解呪なんて一生に一度見れば運がいいレベルの物だが備えは怠らないに限る、その中でも私は詠唱自体を隠蔽する腹話術紛いの詠唱をした、自慢じゃないが鼻がつくような距離でやっと気付くレベルの隠蔽だ。

いや……そんな事はいい、見たところ彼奴は魔法に詳しいように

は見えない。

竜みたいに種族としての性能が飛び抜けた連中は魔法みたいなあの意味での小細工はしない、レミアなんかがそうだ。

だからディスプレイの心配はほぼ無いと考えていい、問題は何故バシたのか。

さとりみたいに心を読むのか？ だとしたら相当厄介だ。

私とアリスしか知らない事を知ってたなんて事もあるし確率として考えてもいいだろう。

もし心が読めるなら私のマスタースパークで切り返す作戦も読まれている可能性がある、そうなれば私の逆転の策は逆に私の首を締める結果に成りかねない。

カウンターで放ったマスタースパークに逆にカウンターで合わせられたら終わりだ。

だが、もし心が読めるならこれだってバレているという事、どうする、どうすればいい……。

そんな私の悩みに相手は付き合ってくれる様子は無さそうだ。

「どんな魔法を見せてくれるのかの楽しみじゃ」

滑るように移動し距離を詰に来る、しかも速い。

私は呪文の最後の文言を詠唱し身体能力強化の魔法を完成させる、これで何とか相手の動きに合わせられる。

左手を引き絞る様に構える、左の中段だ。

上位種族の慢心だろう、三幡の攻撃はやたらに大振りで隙は大きい、一つ賭けに出よう。

利き足で地面を弾き疾駆し間合いを詰める、魔法のバックアップを受け通常の三倍の速さを得た私の急な突進に反応が一瞬遅れる、チャンス、懐に入り込み間合いを潰す、密着状態から炸裂の魔法を

放射、魔力が白光を上げ弾け無防備な腹部に衝撃を叩き込む。

予期せぬスピード、タイミング、油断があつたのだろう、三幡はそのまま弾かれるように後方に吹き飛んだ。

いける、この一撃で主導権が交代した。

「弾幕はパワーだぜ！」

『星符』ポラリスユニーク

掌から大きな光弾を放つ、三幡は空中で体勢を立て直し紙一重で光弾を避ける。

かかった！

光弾は避けた瞬間に膨れ上がり破裂、その余波は三幡を更に横に吹き飛ばす。

主導権は握れた、そして心が読めると言う確率も潰れた、もし心が読めるなら身体能力強化魔法で虚を突かれる事も無いし、ポラリスユニークが炸裂する事も読めたはずだ、行ける！

体勢を立て直そうとする瞬間にマスタースパークでとどめを刺す。

八卦炉に魔力を流し炉に魔力を循環させ込めていた魔力を活性化させる、増幅された魔力が紫電を上げ溢れ出す、準備は上々後は放つだけ。

『恋符』マスタースパーク

循環する魔力の奔流は渦を巻き一点に集中する、魔力は光へと変換され室内を埋め尽くす程のレーザーとなって放たれた。

その時三幡の口角が持ち上がり薄く笑った。

えっ……？

『鏡符』 眩む水面の乱反射

三幡の目の前に現れたのは水で出来た鏡だった、マスタースパークの光を受けた鏡は波打つ水面が太陽の光を乱反射させるように光を四方に弾き返し床を破壊し壁を破壊し天井を破壊し、そして私の身体を直撃した。

視界は残像を残す様に欠き消え白い世界が脳を埋め尽くす、そして二三度の衝撃、最早痛みも感じない、背中に感じる冷たい感覚はきつと床だろう、そしてまとまらない思考で自分が仰向けに倒れている事を知った、霞んだ視界はかろうじて目の前に人が立っている事を伝える。

そして私は理解した。

私は負けたのだ。

第十八幕 黒い巨星と青い海 〈Shooting star〉 (後書き)

読んで下さった皆さん有り難うございます。

やたらに魔理沙がストイックに戦ってます。

私の書いてる話の仕様です。

と言った感じなんですが多目に見てもらえれば幸いです。

ちなみに戦闘の前半は普通の東方、後半は黄昏フロンティアのイメージです。

と言う訳で魔理沙にはストーリースペカの『星符』ポラリスユニークを使ってもらいました、緋想天の魔理沙の一番最初のストーリースペカですね。

『宝珠』 龍の頸の玉

元ネタは輝夜の最初のスペカ難題「龍の頸の玉 五色の弾幕」です。グリモアには輝夜の弾幕は道具による弾幕と言う事らしいです。

龍の頸の玉はそのまんま龍の頸の玉なんですが勿論竜である三幡は当然持つてる訳で一番最初と言う事で使ってもらいました。内容はまったく同じ弾幕です。

ちなみに常に右手に持つてる玉が例の頸の玉です。

『鏡符』 眩む水面の乱反射

まったく弾幕ではありません。

真夏の太陽が照り返す波打つ海面は直視出来ない程眩しいです。

そのイメージです。

今回のパロディ

タイトル

黒い巨星と青い海

青い巨星だったらランバ・ラル

三倍速い

赤くもないし、角も無いです。

と言うかパロじゃないですね。

次回は敗れた魔理沙の運命や如何に。

次回投稿は年始になりそうです。

第十九幕 ヘーパイストスの泥の女

（前書き）

久方ぶりです。皆さん明けましておめでとございます。
今年も何卒よろしくお願ひします。
さて、いつもどおりの二次創作、変わらずに御送りします。

《前回の粗筋》

水竜宮を突き止め、人魚シレネットの案内の元、水竜宮への侵入に成功する。

待ち受けていたのは水竜宮の主にして異変の元凶、竜王の娘、乙姫、
わたつみ みはた綿津見三幡だった。

魔理沙は三幡の謎の力に疑問を持ちながら弾幕戦と肉弾戦を繰り広げ、最後にマスタースパークを放つも跳ね返されその余波により地に墜ちた。

念のため…妾の読みは『わらわ』です。

第十九幕 ヘーパイストスの泥の女 〽

轟音が響く、戦闘の気配を感じ長い廊下を加速を付け更に進む。大きな扉をくぐると広い部屋に出た、そこは部屋と呼ぶには広すぎる程の部屋だった。

「博麗霊夢さん、ようこそ水竜宮へ、お待ちしておりました。」

そこには深くお辞儀をしてよこす湖の上で戦った半魚人がいた。

「もうすぐ終わりますので、暫しお待ちを……」

そう言つて半魚人は見上げる、私もその視線を追う、その時目映い光がほとばしり、私は目をすぼめた。

巨大なレーザーが何者かに向かって発射されたのだ。

だが、そのレーザーは当たる直前に跳ね返された。

白熱する光線が飛散し室内を蹂躪する、暴力を具現化したかのようなそれはまるで七つの首を持つと言う伝説の竜を思わせた。

その七つの首は壁を破壊し、床板を砕き、飾られた調度品を瓦解へと変え、そして一人の人間の体を破壊した。

回転をかけて投げた石が水面を跳ねるように人間の体は床を二回跳ね、最後には壁にぶつかり床に落ちた、ピクリとも動かない。

最初はよくできた人形か何かだと思った、人間があんな石の様に床を跳ねるなんて誰が思うだろうか？

ましてや、それがよく知った友達にそっくりなのだ、もはや趣味が悪いとしか言いようがない、だってそうでしょ？

いきなり目の前で友達が床や壁が凹むほど叩き付けられ糸が切れたマリオネットのようにピクリとも動かない。

そんな事があるはずがない、だからあれはよく出来た人形なのだ。間違いない、そうに違いない。

そう言いたかった、だがそんなはずはない、あれが人形なはずはない、人形は血を流さないし、何より友人の私が間違うはずがない。

あれは霧雨魔理沙だ、あれは霧雨魔理沙に間違いないのだ。

理解したくはなかったが理解してしまった、だから私は霧雨魔理沙の名前を叫び気付いたら魔理沙のもとへと駆けていた。

夢中だった、必死だった、だから気付かなかった、背後から忍び寄る影があった事に……。

頭部に衝撃、視界がぐるりと回り、そして背中への衝撃。

「ッあ！」

両のこめかみを挟み込むように頭を握られ引き倒された事を理解するには大きく一拍の時間がかかった。

背中 of 鈍い痛み到低く呻く、身の危険を感じ抵抗をしようとする、

そんな私を知ってか知らずか呆気なくもその拘束はとかれる、素早く立ち上がり距離を取る。

そこに立っていたのは重ね着した着物と大きな髪飾りが特徴的な女性、薄く不気味に笑う。

「お主が博麗霊夢か、ふむ、本当に紅白じゃの」

女は満足そうに笑顔を作ってみせた、私は無視して脇をすり抜け魔理沙の元へと向かう、悪いが付き合うつもりは無い。

だが、その私の反応も分かっていたとでも言うように滑り込むようにあっさりと目の前に立ち塞がる。

「どきなさい！」

不快感を隠しませず相手を睨み付けた、だが相手は気にもならないのか不気味に笑うばかり。

「フフフ……妾は綿津見三幡ワタツミミハタ、この水竜宮の主じゃ、こんなに客人が来る日は久しぶりでな、妾は機嫌が良いのじゃ、お主も付き合っておくれ」

「ふざけるな！ 魔理沙が大変なのよ！」

「ふむ、それなら心配いらぬぞ、それよりもお主はこの海をどうにかするのが目的なのじゃろ？ 妾がその黒幕じゃぞ？ 妾を倒す事が目的ではないのかの、そして魔理沙を倒したのも妾じゃ」

その言葉を聞いた瞬間に心が冷却していくのが分かる、あれだけ昂っていた怒りも焦りも嘘のように鎮まる。

彼奴が異変の黒幕……。

自分でも不思議な程に気持ちが悪く、彼奴は倒さなきゃいけない。

玉ぐしを握る手に力が籠る。

私のその反応の何が面白いのだろうか、女はクスクスと笑い言葉を続ける。

「魔理沙なら心配するな、シレネッタに治療に当たらせておる、あ……シレネッタはお主が負けた人魚の事じゃな。さ、お主は気兼ね無く妾の相手をしておくれ」

私はその言葉を最後まで聞く前に地面を蹴っていた。

こいつは今すぐ倒す。

『神霊』 夢想封印 瞬

空間にある境目を跨ぎ空間移動し、あらゆる角度から弾幕を発射する多角的弾幕攻撃、霊夢が相手を倒しにかかる時に使うスペルカードの一つ。

「ふむ……これが結界を操る力、あらゆるものから浮く力を利用したもののじゃな、凄いの」

右に移動したと思えば左から現れる、上に移動したかと思えば今度は背後、完全に世界の法則を無視した動き、決して速くはない霊夢の動きを三幡は捉える事が出来なかった、大量の弾幕によって包囲網は密度を増し、徐々に三幡を絡めていった。

「困ったの……」

弾幕避けが得意とは言えない三幡にとって視界を埋め尽くす程の弾幕を避けきる事は不可能。

「意外と大したこと無いみたいね！」

魔理沙を倒す程の実力と警戒していたが見る限り避けるのは下手で余り強そうに見えない。

そう思った、だが、あくまで妖怪退治のプロである霊夢は油断しない、手を弛める事なく、移動による攪乱と弾幕の展開を繰り返した。

三幡が身構え、そして反撃にでた。

『飛天』 天翔龍閃

霊夢が空間の境目を跨ぎ現れた瞬間、目の前には弾幕を掻き消しながら一直線に翔んでくる三幡の姿があった。

「嘘ッ！」

左手の爪が抉るように振り上げられる。

霊夢は天性の運動神経と身体能力で上体を反らし捻り、寸でのところをかわす。

目と鼻の先を尖った爪がかすめ、三幡はその勢いそのまま通り過ぎる。

どこから出てくるか事前に知覚する事が出来ない境目を使った移動の瞬間を叩かれる、そんな有り得ない事に仰天していた。

スピードが速いとか反射神経がずば抜けているなんてレベルじゃない、間違いなく出てくる場所が分かっていたのだ。

雲を掴むような確率に当てずっぽだと期待する事は間違い、霊夢は相手の特殊な能力によるものだろうと考え、一層警戒心を高める。

だが、その思考も脇腹への鋭い衝撃によって分断された。

「カッツハツアー!!」

肺を絞られるような呻きを上げ霊夢は地に落ちた。

何らかの弾幕による攻撃、霊夢はそう考えたが側胸部を襲う激痛の為に上手く思考がまとまらない。

恐らくだが、肋骨が折れている。

「天翔龍閃、天翔る龍の爪は例えかわしたとしても、その後には襲う烈風まではかわす事はできぬ。

もう『げーむおーばー』か？ 詰まらぬの』

人はやはり脆いの……最後にそう呟く。

起き上がるうと体を捻ろうとすると脇腹を激痛が襲い、心臓が血液を送り出す度にジクジクズキズキと痛み、呼吸も満足に出来ない、そんな霊夢を尻目に三幡は手で合図をしシレネットを呼びよせた。

「首尾はどつじゃ？」

「霧雨魔理沙の治療は完了しました、只今例の檻の中で寝ております。」

シレネッタは一礼し答える。

「ふむ、良かろう、霊夢にも一滴飲ませてやれ」

「はい」

そう答えるとナイフを取り出し人指し指の腹を切った、赤い血が滴り落ちる。

その指を私の口に直接差し込んできた、抵抗しようとしたが激痛の為に身を振る事も出来ない、芋虫のように這いつくばる自分の体を恨んだ。

口の中に鉄を舐めたような血の味が広がる、すると側胸部の激痛も和らぎ耐えられる程に落ち着く、だが、まだ痛みはあるが体を動かすのに大きな支障はない程だ。

「人魚の血には傷を癒す力があってな魔理沙もその血で無事じゃ、見てみよ」

立ち上がると三幡が指をさす方向を見る、そこには仰向けに眠る魔理沙がいた、落ちて着いた様子で不思議な事にさつき見た時は死んだと疑わない程の傷をおっていたのに、ボロボロになった服を除けば今は擦り傷一つ残っていないかった。

魔理沙が無事な様で霊夢は少し安心した、だが、その魔理沙の状況に霊夢は別の不安を覚える。

「あなた、魔理沙を檻に入れてどうする気よ」

静かに眠る魔理沙は黒く太い金属で出来た檻の中にいた、天井が丸く胴は長い、まるで鳥籠のようだった。

「たいした事ではない、妾の退屈しのぎの相手になってもらおうと思つての」

三幡は愉快そうに笑う。

「魔理沙をペットにでもする気」

「ふむ、その表現がしっくりくるかの」

三幡は臆面もなくそう答える、魔理沙をペットにする、その言葉に霊夢は苛立ちを覚える。

「ふざけないで！ 魔理沙をペットになんかせないわよ！」

その答えに、三幡は少し目を丸くする。

「何を言つておる、これからお主も妾の『ぺ』になるのじゃぞ」

三幡は自分の置かれてる立場が理解出来ていないのか？ とでも言いたげな若干の呆れを感じとれた。

「ふざけないでッ！」

霊夢が眉をしかめ叫ぼうと三幡は眉一つ動かさない。

「ふむ、威勢が良いの……お主には個人的に興味があつての、弾幕ごっこより話がしてみたかったのじゃ」

「私にあんたなんかに興味は無いし、話をする気なんてないわ!」

三幡はニヤニヤと笑う、余裕有り気に、不敵に、不気味に、嘲笑い、見下す、そんな態度が霊夢にとって堪らなく不快だった。

「お主は何故ここまで来たのじゃ?」

「はあ?! あんたを倒す為よ!」

「何故妾を倒すのじゃ?」

「あんたが異変の元凶で! 異変を解決する為に決まってるでしょッ!! 異変を止めないと沈んじゃうのよッ!」

「それは何故じゃ? 何故異変を解決するのじゃ?」

「何故? 何故も何も無いわよッ! さっきから言ってるじゃない! 異変を解決するのが私の仕事だからよッ!」

三幡は口角を吊り上げ、……笑う、霊夢は背中を舐め上げられるような不気味な感覚に身震いした。

「ふむ、……仕事、仕事の……と言つとお主は義務感で異変を解決しておるのじゃな」

「……そ、そうよ。」

霊夢は即答出来なかった、何か違和感を感じたのだ、義務感とまでは言わないが博麗神社の巫女としての使命感をもって異変に挑み解決をしてきた、それに間違いは無いし、そうずっと思ってきた。

異変の解決に伴って里からお金が入る、神奈子の時のように神社を閉業しろだなんて喧嘩を売られたりした時もあるが、基本的に使命を果たす為に異変を解決するのだ。

博麗神社の巫女だから……。

そう考えるし、いつも思ってる、なのに、霊夢は即答出来なかった、何故か分からないが霊夢は即答出来なかった。

三幡はその反応に満足気に笑う。

「義務感の……殊勝な事じゃの……その魔理沙の動機は単純じゃの、楽しそうだから、魔法の研究の為にお金がいる、魔法の研究の為にヒントが欲しい。

ふむ、分かりやすいの自分の目標に対しての努力じゃな、楽しむ為、目標の為、実に人間らしい。

実に勤勉で好感が持てるの、妾は魔理沙の事が気に入っておる。

そして、紫、直接あっておらんでの詳しくは知らんが、紫の独り言が嘘で無いなら動機は単純で分かりやすい、幻想郷を愛しておるかじゃ、愛するモノを守りたい、単純じゃがとても強い思い、理由は至って『しんぷる』じゃ、妾はこの者ともゆっくり話がしてみたいの。

そして、山の妖怪、こやつらは一番分かりやすいの不安と恐怖じゃ、死ぬかもしれない、生きる場所がなくなるかもしれない、実に単純じゃがとても強い思いじゃな。

それに対してお主は義務感、それらの気持ちを背中に受けてのお主の気持ちは義務感、ふむ、ちと……弱い」

「……な、何よ……、何が言いたいのよ……」

自信が揺らぐ、霊夢にとって初めての感情だった。

霊夢は天才だ、別段に修行などした事はないが様々な事は一通りこなす事が出来た、人が努力程度で出来る事など難無くこなす事が出来た。神仙術、神降ろし、身体能力に戦闘のセンス、空を飛ぶ力を使いこなし、生まれつき霊力をもち、神霊や魂を見る力がある。知る人ならそれは天から授かった才能、天才と言って疑わないもので、霊夢は自分には生まれつき様々な才能に恵まれている事をある程度自覚していた。

それでもけして自分を過大評価もせず鼻にもかけないが、実力相応の自信をもっていた。

人より上手くこなせる、自分なら出来る、その確信があった。

そんな霊夢にとって自分の発言に自信がなくなる、初めての体験だった。

「のう、お主よ、本当にそう思っておるのか？」

三幡は笑う、馬鹿にしたような笑い、とても不快で不愉快。

「当たり前じゃないのッ！」

不愉快を訴え不安を払うように霊夢は怒鳴る。

「……お主の子供の頃の事や親の事を覚えておるか？」

「………か、関係ないでしょ」

脈絡の無い問いかけだった、だがその内容を霊夢は無視出来ない。霊夢には幼少期の記憶、両親との記憶がなかった。記憶が無いというのはとても不安な事だ、人間という生き物は人生積み重ねであり、その積み重ねによって人格が出来上がっていく、それが記憶に無いと言うのはとても不安な事である。

三幡の口が三日月のようにつり上がり不気味に笑いの表情を作り上げる。

「……フッフ、記憶が無いのじゃろ？ 子供の頃も、親との記憶も、……フッフ、フッフ……。」
それはそうじゃの、当然じゃな、なにせ……

霊夢は直感した、この先は言わせてはいけない。

言わせてはいけない、その続きを聞けば必ず後悔する、だから、聞いてはいけない、絶対に聞いてはいけない、何故か分からないがそう思う。

話してもいない、魔理沙くらいにしか話した事の無い事を知らない女が知っている、見ず知らずの女が知っている、それが不快、堪らなく不快。

鼓動が速くなる、心臓は早鐘のように打ち、これから起こる良くない事を知らせるように。

いや……、良くない事はもう既に起こっている、目の前で、すぐ目の前で。

体にまとわりつくボタ雪が末端から体温を奪う様に、足の先から冷たくなっていくような感覚、四肢は末端より冷え、体の芯まで凍り付かせてしまうような悪寒。

それなのに目の奥と臓腑だけが熱い。

気持ち悪い……やめて……。

聞きたくない……聞きたくない……。

聞きたくない……聞きたくない……。

聞きたくない、だから、やめて……。

やめて……、聞きたくない……、聞きたくない……、聞きたくない……。

……、だから、だから、だから、だから、ワタシノシツテハイケナイコトヲシャベラナイデツツ！！

「……だ……、ダメ……や……」

霊夢の喉から言葉が漏れる、吐く息よりもか細く。

だが、綿津見三幡は言った、躊躇もなく後悔もなく、何も無いかのようだ。

「お主には、親も子供の頃も存在せんのだからな。

覚えて無いのではない、無いのじゃ、お主にはの過去が」

言葉はゆっくりと、死神の鎌のように降り下ろされた。

霊夢には理解出来なかった、理解してはいけなかったとも思う、だから、理解しない、理解しない。

霊夢はただ黙ってその場に立ち尽くした。

ここまで読んで頂きありがとうございます。

霊夢さんあつさりと負けてしまいました。

三幡のスペカ『飛天』天翔龍閃はピンときた人もいるかと思いが元ネタは『るろうに剣心』の『飛天御剣流 天翔龍閃』です。

漫画では超高速の居合い抜きを避けても、そこからの鞘の二の太刀はかわせないと言う事。

緋想天風に言うところグレイズ付きの突進技、突進後に弾幕が付いてくる。

と言う感じでした。

どうでもいい設定でした。

ちなみに

『飛天』天翔龍閃の読みが『あまかけるりゅうのひらめき』なのか『てんしょうりゅうせん』なのかは秘密です。

さて、本編の話。

オリジナル要素が特に強い部分です。

物語的には今は“転”であり、細かい視点で言えば“起”でもありません。

霊夢はいちよですがこの物語の主人公であります。

何故主人公なのかと言うところこの先の話を書きたかったからです。

さて、物語はまだまだ続きます。

この先の話が皆さんのお気に召せば幸いです。

と言う訳で、今年も亥紙辰巳と東方水竜宮をよろしくお願いします。

2010年1月4日 亥紙

第二十幕 人とは斯く在りき 〽Doubt〽 (前書き)

いつもどおりの二次創作、霊夢さんピンチです。

《粗筋》

墜ちる魔理沙、助けようとした霊夢も振り返り討ちにあってしまう、嘲笑う三幡の口から出た言葉は「お主には過去が無い」と言う意外な言葉だった…。

第二十幕 人とは斯く在りき 〱 Doubt 〱

その女は言った。

『お前には過去が無い』

そう言った。

理解出来ない。

過去が無い？ 過去が無いとはどういう事だ？

確かに私には親の記憶はないし、子供の頃の記憶、厳密に言うならここ4、5年前より昔の記憶はない。

確かに記憶はないが、それだけで過去が無いなんて言えるのか？

そんなはずはない、記憶がないだけなのだから、それだけで『過去が無い』などと呼べるはずがないのだ。

だってそうだろう？ 記憶がないだけで過去が無いって言うなら、普通の人は三歳くらいまでの記憶はまず無い。

じゃあ、その人に向かって過去が無いと言うのか？

そんなはずはない。

確かに普通の人のその三歳までの記憶がない三年間に比べれば私の記憶がない期間は何倍も長い、でもそれだけで過去が無いなんて言うのは無理がある。

私には過去が無いんじゃない、記憶がないんだ、親だって確かにいないけど、多分亡くなってしまったんだと思う、だから、私はその時のショックとかで記憶がないんだと思ってる。

付き合いの長い霖之介さん辺りなら私の憶えて無い頃、私の子供の頃の事とか知っているはず、私の両親の事だってきっと知っているはずだ。

霖之介さんが話さないのはきっと早くに親を亡くした事を私に気を使って話さないとかだろう、霖之介さんはあれで優しく真面目な人だから。

私もその意をくんであえて昔の事なんて聞きはしない。

私はちゃんとかうやって一人でもちゃんと生きていけている。

私は一人で何だって出来るし、親がいない事を心配される事なんてないのだ。

だから、だから、あの女の言ってる事は間違ってる、そんな言葉は聞くだけで苛々する、だから、私はあの女を怒鳴り付けた。

「うるさい！　うるさい！　うるさい！」

女は犬の遠吠えを聞き流すように、涼しい顔で嘲る。

「……ふむ、煩くしたつもりはないのじやがの」
「うるさいわ！ あんたの言ってる事は見当はずれよ！ 確かに私は昔の記憶はないし、親の事だつて憶えてない、だから、何だつて言つたのよ！」

玉ぐしを握り潰す勢いで握った、苛々する、脳を直に触られたような不快感、ただただ不快。

「さつきから言っておろう、お主は記憶が無いのではない、過去が無いのじやと」

「記憶が無いだけって言ってるでしょツツ！！」

私は間髪を入れずに怒鳴り返す、その言葉を聞き女は目を細め、ため息をついた。

「お主はやはり勘違いをしておるな、……まあ、そう創られたのじや、仕方もなかるうが……、お主は自分の歳が幾つか知っておるか？」

「魔理沙と同じよッ！ それが何ッ！」

正直な話をするとならない、今までの人生にそれを教えてくれた事が無いから、正確に言うならその記憶がないから……、紫が誕生日を祝ってくれた事があったので誕生日だけは間接的にだが教えてもらったっけ……、そんな理由で人に歳をきかれた時は魔理沙と同じ歳を言うようにしている、魔理沙の背は私より低いが歳が下と言う感じではない、勿論上にも見えない。

そんなに間違つてないはず。

「魔理沙と同じ？ 魔理沙と同じのはずはなかるう、お主と魔理沙は歳が三、四倍に近い程違うであろう、まだお主は数えて4つじゃろ？ 薄々は気付いておるのではないのか？」

胸がざわつく、妙に唇が乾くのがうつとおしい、この女は本当に私の過去が“無い”と言っている。

“無い”

意味が分からない、こんな大きな四才児がいるのか？ いるはずない、そもそも初対面のこの女に、今日初めて幻想郷に来たこの女に何が分かる？ 私の何が分かる？ 分かるはずがない。

訳の分からない事を言っつて私を混乱させたいのか？ 小賢しい、不愉快、不愉快、不愉快。

「あんたにそんな事分かる訳無いでしょッ！ 出鱈目言わないでッ！」

「残念じゃがな、妾には分かるのじゃ、妾の力はワタツミを操る力、ワタツミとは海じゃ。」

そして、生き物とは誰でも体の中に海を持つておる。

全ての生き物は海から生まれ、その体のほとんどが水分で成分は海に近い……、妾はな、触れた者の海を通してその者を理解する事が出来るのじゃ、だから、妾はお主の事は識つておる、お主の知らぬ事も……」

触れた者を理解する、そう言った。

馬鹿な事と思ったがその反面、最初に思い出したのは古明地さとりだった、“妖怪さとり”、“覚”と書いて“さとり”、心を読む妖怪。

そんな妖怪がいるのだから、触れた相手を知る事が出来ても不思議では無いかもしれない。

でも、そんな事はあってはいけない。

この女は言ったのだ、私はまだ生まれて4つだと、つまり私は人間では無いと言う事だ。

普通の四才児はいいところ私の胸が腹くらいの背しかない、こんな大きな四才児はいない、重ねて言えば四年前の記憶はある、その頃の私は歳が十と言われても違和感の無い見た目をしていて、少なくとも産まれたばかりの赤子でなどなかった。

嫌な想像をしてしまう、産まれた時から完成された存在、そんな存在に心当たりはある、とても身近な存在、人の倒すべき存在、それは妖怪だ。

じゃあ、私は本当は妖怪だと言うのか？

ふざけるなッ！

私が妖怪などではない、妖怪なんかじゃない、妖怪であるはずがない。

私は博麗霊夢、結界を守る幻想郷の巫女。

「有り得ないわ……。」

あなたの言う力なんて眉唾ね、私は人間よ、あんた達妖怪なんかじゃないわ」

「……有り得ないなんて事は有り得ない……、それが幻想郷ではないのかの……。」

まあ、信じられるだけの証拠を出してやろうかの。

まずは異変を解決したら宴会をして魔理沙と射命丸の取ってきた夕ラの芽を食べるつもり……、そうじゃろ？」

「　　ッ！」

「そして、お主が今日麓まで下りた理由は塩を買ったため、お主のその服は霖之助の作ってもらったもの……。どうじゃ当たっておるう？」

全て当たっている、悔しいが文句の付けようも無く、私は押し黙る事が精一杯だった、だがこの沈黙は女の言った事が正解である事、そして、それを認め、この女の能力も同時に認める事だった。

この沈黙は誤魔化し様がない、一種の敗北、勝者は嘲笑い、敗者は奥歯を噛む。

……………私は妖怪なのか？

「じゃが、心配はいらぬぞ、お主は人間じゃぞ」

「……………えッ！ ……当たり前よッ！」

女は私の反応にくすりと笑う、一瞬気が緩み、自分が人間であると言った言葉に安堵してしまった。

屈辱だった、言葉で弄ばれ、丸裸の精神をなぶるられる。

「フフフ……、本当は自分が妖怪かも知れぬ、そう思ったのである？ お主の不安も分からんでもないの、自分が分からぬと言っものはそう言うものじゃ」

この女は私は四歳であり人間であると言っ、両方正しいのなら矛盾する、人間と言っ梓の中で私と言っ存在は四歳とはたりえない。

矛盾する、でも、両方とも正しい、おそらく正しい。

何故か？ と聞かれれば答える言葉はない、でも分かる、この女

の言ってる事は正しい、認めてはいけなが正しいのだ。

じゃあ、私は何なのだ？ 矛盾を孕んだ人間、私は何だ？ 何なのだ？ 私はいったい何者なのだ？

今まで踏み締めていた地面が急に頼りないものに感じる、不安で不安で堪らない、自分のこの身体ですら何か空っぽの入れ物なのではないかとすら感じてしまう、不安で吐きそうになる、心が潰れる。

「じゃあ、何のよッ！ 言いたい事あるならいいなさいよッ！！ 私がいったい何だつて言うのよ！！！」

女は大きく一息つき…、そして、言った。

「言つても良いのか？」

そこには先ほどまでのいやらしい笑みは消え眼光だけで心臓を貫くような視線があつた。

「……………う……………あ……………」

気圧されたのではない、そう思うのは虚勢かもしれない。

あの女が生物として上である事は認める、そんな事は初見でわかつてた上位種への畏怖はないと言われないが私はそんなものには負けないし、負けた事もない。

じゃあ、何が怖い？

私はあの女の言葉が怖かつたのだ、私がなんなのか、知る事が怖かつたのだ。

私は人間だろうと妖怪だろうと、私は私、言うのは簡単だろう、そう思っている。

でも、それもきつと虚勢。

「お主は怖がりじゃの、まるで母親からはぐれた仔猫のようじゃ」

女は一步近づくと、私は後退ろうとしたら膝から崩れるようにストンとしゃがみこんでしまった。

……………え？ 何これ？

腰から下にまったく力が入らない、自分の体でないかのように動かない。

「フッフ…………、腰を抜かしてしまったのかの」

私が腰を抜かしたと愉快そうに女は笑う、その言葉でやっと自分が腰を抜かしたのだと理解した。

女は一步一步近づき目の前で立ち止まる。

長い爪が目立つ白い手で私の前髪を掻き分け、頬を撫でる。

私は女に触られる度にビクリと体を震わす、私の反応に満足そうに笑う。

私は震える以上は何も出来ない、心臓と肺は凍り付いた様に縮み上がり喉から細く、辛うじて自分が生きている事を示すように息が漏れる。

「お主は可愛いので、これから魔理沙と共に妾の退屈を消しておくれ……………」

女は一瞬、不似合いな寂しそうな顔をする。

「シレネッタ、霊夢を檻に入れよ」

「駄目よ、そんな事しちゃ」

まったく予想していなかった方向からの声、それは女にとっても同じであったようで女は驚いた様に声の方向へと顔を向けた。

女は後方に跳ぶ、その瞬間、閃光が走り女がさっきまでいた床を焦がす。

更に間髪を入れず大量の紫色の蝶が地面から沸きだしヒラヒラと宙を舞う。

「何者じゃ？」

女は謎の声の主に向かって問い掛ける。

「名を問われて答える名くらいはあるけれど、自分から名乗るべきじゃないかしら？」

何も無いはずの空間に暗いトンネルの様に穴がある。その前に蝶を侍らせその声の主女はいた。

「人の家に勝手に上がり込みよう言うの、生意気じゃ。ふむ……、じゃがちと心当たりがあるの、死蝶を操る亡霊、確か西行寺じゃったな。」

それに対し扇子で口許を隠し笑う。

「ご存知とは恭悦ね。」

私も高名は拝借しているわ、竜王の娘、綿津見三幡殿。」

「……………幽々子」

西行寺幽々子、白玉楼の亡霊少女、死に誘う妖蝶、私はその名を
呟いた。

「霊夢く、元気かしら〜？」

場の空気など知った事では無いと言う様にニコニコ笑いながらヒ
ラヒラと手を振ってくる。

「ふむ、不愉快な女じゃな、人の家に冥界の門を開くとは無礼であ
るっ」

「あら、万物は常に死と隣り合わせ、冥界の門なんて何処にでもあ
るのよ。

ただ、開いてるか開いてないかそれだけ……………」

「方便を……………、してお主は何をしに来た」

「大した事ではないわ、お友達をちょっと連れて帰りにね」

幽々子の脇を緑の疾風が走る。

狼の疾駆を思わせるそれは死蝶を縫うように移動し私の元へやっ
てきた。

「霊夢、無事ですか？」

「……妖夢」

半人半霊の庭師、西行寺幽々子の従者、魂魄妖夢だった。

「手を、脱出します」

そう言っただけで妖夢は手を伸ばさず、私はその手を必死に掴んだ。逃げたい、早くここから逃げたかった。

妖夢は私を引っ張った感触、あるいわ下半身の筋の弛緩でも見取ったのだろうか、黙って私を背中に乗せる。

「走ります、掴まっけていて下さい」

そう言い幽々子の元へと走った。

「では、御機嫌よう、三幡殿。

縁が有ればまた会う事を有るでしょう」

苦々しい顔で睨む女を残し、もう用は済んだと幽々子はあっさり
と冥界の門を閉じた。

トンネルの奥には光が見える。

糸が切れたように身体の力が抜け意識が遠退く。

「いつか……、とは思ってたわ……」

意識が切れかけるその時、幽々子がそんな事を呟いた。

そんな気がした。

第二十幕 人とは斯く在りき 〽Doubt〽 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

ご存知のとおり霊夢さんの過去についてはオリジナル要素です。

この話のテーマと言う程のものではありませんが私が意識して書いているのが“幻想郷の在り方”と言う部分です。

幻想郷の起こり等の幻想郷史記を資料に私なりの幻想郷の在り方の解釈に基づいて書いてます。

そしてこの霊夢さんの過去もその一環です。

現実と幻、霊夢さんの正体はさて何なのでしょう。

今回のパロディ

「うるさいーうるさいーうるさいー！」

灼眼のシャナより

有り得ないなんて事は有り得ない

鋼の錬金術師より

幽々子に「生きてるのなら神様だって殺してみせる。」なんて言わせようかと思いましたが自重しました。

殺してみせるなんて台詞では品が無いですね。

ちなみに元ネタは空の境界

余談

最後の冥界の門、臨死体験経験者に一番多いのがトンネルをくぐり奥には光があった、と言うトンネル体験です。死後の世界へのトンネル＝冥界へのトンネルと言うイメージで書きました。

第二十一幕 三日後のキリスト 〈revival〉(前書き)

いつもどおりの二次創作、変な世界観が跋扈。

《前回の粗筋》

綿津見三幡との戦いに敗れた霊夢は自分には過去が無いと言われる。追いつめられる霊夢、そこに現れたのは西行寺幽々子とその従者魂魄妖夢だった。

二人の働きにより冥界の門をくぐり脱出する、その途中、霊夢は意識を失ってしまった。

第二十一幕 三日後のキリスト { r e v i v a l }

目覚めて一番最初に飛び込んできたのは見慣れない天井と知らない布団だった。

若干の既視感に陰鬱さを覚え冴えない頭を振るが気分は晴れない。また、リボンを解かず寝たせいで後頭部が痛い……、こんな事してたら終いには禿げてしまふ、なんだろう、世の中は私に禿げる事を望んでいるのだろうか？ まったくもって迷惑甚だしい、禿げた巫女なんてどこに需要があるというのだ、素敵じゃなさすぎる、私は楽園の素敵な巫女なのだ、そんな事態は全力で避けなければならぬ。

重い体を起こし障子を開ける、目覚めには少しばかり厳しい日の光が目を刺激する、朝じゃなさそうだし、昼なのだろう。

そもそもなんでこんなところで私は寝てたのだろうか？

開け放った障子の向こうに見事な枯山水がある、その枯山水を囲むように廊下があり、これが建物内の中庭に設けられたものかどうかかわせる。

つまりは大きな枯山水を持つ大きな中庭があるような屋敷に今いると言う事……。

確かこんな中庭があるような屋敷の心当たりは一つしかなく、加えて言うと何度かここには来た事がある。

ここは白玉楼だ。

……あ……。

………思い出した。

そう私は異変の黒幕との勝負に負け幽々子に助け出されたのだ。

いや……、思い出したのはそんな事じゃない、あの黒幕の女が言っていた事だ。

私には過去が無い。

あの女はそう言っていた、あの言葉が本当か嘘かは分からない、ただ真実と言える材料も無いが疑う材料も無い。

今の私には自分の過去が分からないのだ。

縁側に差し込む春の光は地上も冥界も変わらない、春の柔らかい光は私の陰鬱な心とは対称的でつい目をそらしたい気分になる、玉砂利の作り出す流線を眺め俯く言い訳にする。

多分、私はあの女の言葉を疑ってないのだろう……。

あの女の顔を思い出すだけでも気分が悪くなる、出来れば二度と会いたくない。

でも、彼奴は異変の現況、絶対に倒さなきゃ……。

「霊夢、起きたんですね。」

自分の名を呼ぶ声に振り返ると手にお盆を持ち刀を差した小柄な少女、白玉楼の庭師、魂魄妖夢がいた。

「昼寝は早目に切り上げる方がいいのよ、それより今何時？」

妖夢は私の隣に腰を下ろす、お盆にはお茶の準備がされており、ヤカンの湯を急須に注ぎだす。

「4時を過ぎたくらいだと思います」

「……………いちよ聞いておくけど、二三日寝てたなんて落ちはないわよね？」

「大丈夫ですよ、日付は変わってません」

ならば、私が気を失っていた時間はかなり短いみたいだ。

妖夢は淹れたお茶を笑顔だけですすめてくる。

「ありがとう」

すると妖夢はやけに嬉しそうに笑う、何がそんなに嬉しいのだろう。

「やけに楽しそうね、私が負けたのが嬉しいのかしら？ それとも私に借りがつかれて愉快？」

更にふふふと笑う、何なのだ。

「違いますよ、普段霊夢はお茶を淹れたくらいでお礼を言わないですから、多分助けた事も含めて“ありがとう”なのですよね。まったく……、霊夢は素直じゃありません」

わりと凶星をつかれている、こう言うのを反応に困ると言うのだろうか。

「煩いわね……………、それよりこのお茶やけに苦いけど何？」

「薬湯です。」

打ち身に効くそうですよ」

「薬湯ね、ふん、有り難み三割減ね」

そう言って更に一口口をつけると、妖夢は嬉しそうにこっちを眺めてくる。

「……………ねえ、妖夢、あんたは私の過去の事とか知ってる？」

「いえ、私は知りません。」

西行妖の桜の一件までは霊夢の事は噂くらいしか知りませんでしたから」

「そう……………」

……………、妖夢は……………子供の頃の事覚えてる？」

「子供の頃……………ですか……………？」

祖父に剣術の稽古をつけてもらった記憶がほとんどです。お嬢様をお守りする為に色々教わりました」

「そうなのね……………」

妖夢にも昔の記憶はある。

当たり前だ、普通はそうなのだ。

妖夢には昔の記憶が無いかも、根拠も何もないのにそれを少しだけが期待してしまった。

考えるだけで馬鹿らしい、例え妖夢の記憶が無かったとしてどうだと言うのだ。

自分と一緒に安心していい？

自分だけじゃないと安心していい？

自分を慰めたいだけじゃないか、心が弱りきっているのだろう、正直柄じゃないと思う、そして今日何度目かの溜め息をついた。

「どうしたのですか？
何なら相談に乗りますよ」

「駄目よ妖夢、貴女じゃ無理」

予想外の第三者の声に私と妖夢は振り返る。

「お嬢様……」

音もなく背後から現れたのは、白玉楼の主、西行寺幽々子だった。

「妖夢じゃ、霊夢の疑問には答えられないし、気の効いた慰めも出
来ないでしょ？」

妖夢は凶星を突かれたようで黙る、でも正面を切って言われると
やはり腹立たしくはあるのだろう、ちよつとむくれた顔で拗ねてい
る。

悪いが妖夢みたいな真つ直ぐで迷いとか悩みとかなさそうな人に
相談しても仕方ないかなとは思う、顔にも言葉にも出さないけど…
…。

だから、私は代わりに幽々子に言葉を向ける。

「じゃあ、あんたなら大丈夫なの？」

「さあね、妖夢よりはましなんじゃない」

「ふん、あんたは私の昔の事とか知ってる？」

「幽々子は頬に手を当て、ん……、と考え事をしている。」

「私も知らないわね。」

「ほら、あんたも知らないじゃない。」

「だって、無いんでしょ？ 過去が、知るわけないじゃない。」

「……………ッッ」

言葉に詰まる。

文句を言いたくても言葉が出ない、それ以前に出す言葉すら思い付かない。

「私も貴女の正体については何も知らないわ。貴女が特別な存在だって人から聞いてただけ。」

「誰よ！ 誰に聞いたの！」

私は食ってかかるように幽々子に詰め寄った。

「紫よ、ついでに言うと貴女がピンチになったら助けるように紫と約束してたのよ。」

「だから、私は約束を守っただけお礼なら紫に言いなさい、どうしても私に言いたいなら聞いてあげるけど。」

「じゃあ、私はいったい何なのよッ！」

「だから、知らないって言うてるでしょ？ ただ特別な存在だって聞いただけ…………。」

でも、少しだけならどんな風に特別かわ分かるわ」

「何なのよッ！ 教えなさいッ！」

「どうしても知りたい？」

浅く溜め息をつき、幽々子は問う。

幽々子の言葉には『本当に知りたいのか？』と言う意味が込められてるのだろう、即答を躊躇ってしまう。

「……………、私の事何だから……………知りたい」

幽々子は表情の読めない顔で私を見詰める、自分の事は知りたい、私の事何だから。

「……………いいわ、気が進まないけど教えてあげる、何の解決にもならないとけどね」

「いいから、勿体振らないで」

幽々子はまた溜め息をつく、本当に気が乗らないのだろう、如何にも渋々というのが伝わってくる。

幽々子も縁側に座る。

「妖夢、お茶はいいから貴女も聞いてなさい……………、じゃあ、話すわよ？」

お茶の準備をしようと立った妖夢を引き止め、幽々子はそう切り出した。

「先ずは霊夢、貴女を助けた時の事覚えてるかしら？」

「……………、ええ、覚えているわ、妖夢に担がれて冥界の門で逃げた」

「私の活躍を流すとはいい度胸ね。

まあいいわ、問題はそこじゃないし……………。

霊夢は冥界の門を何だと思ってる？」

「冥界の門？ 現世と冥界も繋ぐ門かしら……………、どこでも繋がる扉みたいに言っただけかしら？」

「そうね、何処にでも繋がってるとは言ったわね。

正解よ、現世と冥界を繋ぐ門、でも、問題はそこじゃないの、問題は冥界の門の役割」

「……………役割？」

「冥界の門は死者を迎える為の門よ」

「……………えッ!？」

幽々子の言葉に驚いたのは妖夢だった、私にはどこに驚くところがあるのか分からない。

「待って下さい！ お嬢様それだとおかしいです。

迎える死者の魂がないのなら、冥界の門は開きもしなければ閉じもしないじゃないですか!」

「死者の魂なら通ったわよ、これよこれ」

幽々子は何かを指差す、それを見て妖夢は絶句する、そして私は遅れて幽々子が何を指差したのか理解した。

幽々子は私を指差したのだ。

「……………え？」

理解出来ない、幽々子は私が死んだと言うのだ。

勿論私は死んでいない、生きている、心臓は元気で律儀に動いているし、肌だつて温かい、足だつてちゃんとある。

呆気にとられた私の代わりに妖夢が喋っている。

「おかしいです。

私の目から見ても霊夢は生きてます」

「生きてるからおかしいんだけどね。

冥界の門は死者を迎えるのが条件、じゃあ、誰が死んだのか。

それは間違いなく霊夢よ、私が殺したんだもの」

吸った息が吐けない、体温が一二度下がったような気さえた。

幽々子は今何と言った？ 私を殺したと言った、文字通り幽々子にはそれが出来る、死に誘う能力、相手が生きているなら殺せる能力。

いや…………、おかしい冗談だ、だって私は生きている、死んでなどいない。

「……………じよ……………冗談でしょう？ 幽々子、おかしいわ、そんなの…

…」

私の動揺を余所に幽々子はいつもの表情のまま話す。

「冗談じゃないわよ。」

でも、おかしいのは私も思うわ。

確かに霊夢は死んだのに今は生きてるの」

「……………何よそれ……………、どう言う事よ……………」

「ん……………、元々紫が霊夢が危ない時は冥界の門を使って殺してから助けるように頼まれてたのよ。」

今回みたいな緊急時はね。

それを元に死んでる間に霊夢の魂をちょっと調べさせてもらって推理したの、あくまで推理だけだね、確信はないわ。

先ずは貴女は真正銘の人間よ、これは間違いない、何があっても魂は偽れない、そこは安心していいわ」

「……………うん」

いやな気分、唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえる。

「人間で死なない、それで最初に思い付いたのが蓬莱の薬みたいな後天的な不死性の付与、でもこれだとおかしいのよ。そもそも死なないんだから殺せてないはずなの、でも貴女は間違はなく一度死んでる。」

次に考えたのが紫の境界操作、どんな境界を弄ればこうなるかは分からないけど、これも違った、霊夢と言う世界の境界をいじる訳だからその作用はあくまで霊夢の中で作用する。

でも、これも違った、霊夢の内側からは何の働きもみられなかった、霊夢の魂はね、何か外からの力によって体に戻り生き返った、霊夢とはまったく関係ない、霊夢という世界の外側から干渉され生

き返った。

「そうとしか考えられないわ」

「……………、何よ……………それ……………」

啞然とするしかなかった、理解出来る出来ないじゃない、思考する事すら出来ない、今日と言う短い時間で意味の分からない自分の事を知る、でもそれは全部結果だけで理由がまったく分からない。

「霊夢は何か外の力によって蘇る、でも、貴女の過去が無い事とは繋がらないのよね……………」

そう、繋がらないのだ。

結局、謎が増えただけで何も分からない、頭がおかしくなりそうだ、自分は確かに存在するのに自分の存在を感じられない、心が遊離して体とバラバラになってしまったような不安感。

私は気付いたら飛び出していた。

無我夢中で飛んでいた、後ろから誰かが私の名前を読んだ気がした、もうどうだっていい、もういい、何も知らない、何でもいい、とにかく忘れてしまいたい、何でも良かった、逃げたかった。

幽々子達から逃げる事に何の意味もないのに、逃げ出してしまうたかった。

分からない、分からない……………。

「靈夢ーッ！」

私の呼び声にまったく振り返りもせず靈夢は飛んでいく。

後を追おう。

利き足に重心をのせ地を蹴る。

「妖夢やめなさい」

でもお嬢様に靈夢を追おうとする私を止めた。

「お嬢様ッ！」

「貴女が行って何をするの？ 何か出来るの？ 何が言えるの？」

「ですが……」

思わず柄を握り締める。

「貴女にだって出来ないし、……私にだって出来ないのよ」

確かにお嬢様の言う事は正しい、いざ考えると私にはかける言葉すら思い付かない、靈夢を追ってその腕を掴んで引き留めても私に

は言葉がないのだ。

「ですが……、お嬢様」

「妖夢、座りなさい」

お嬢様は自分の座る隣を示し私に座れと言う。

「……………はい」

私は少し躊躇いお嬢様の隣に座った。

モヤモヤともどかしい気持ちがあるがタールのように心にこびりつく。

「お嬢様……、霊夢には黙っておくべきではなかったのでしょうか……………」

「……………霊夢の問題は私が言わなくても、いつか誰かが言うわ、例え誰も言わなくても自分で気付く、それが因果と言うものよ。」

応報は如何にかわしたとしても決して消える事はないわ、必ずその身に降りかかる」

私は座りお嬢様の目を黙って見詰めた。

「妖夢……、貴女にもいつかそんな時がくるわ。」

貴女は半人にして半霊、生きてもいないし死んでもいない、その魂の在り方は歪よ。

必ず何かの報いがある、そんな時それを自分で解決しないとイケない、決して他人には解決出来ないものなの……………。

だから、貴女も霊夢もこれから自分と向き合えないとイケない、霊夢にとってそれは今で貴女にとっては未来の事なのよ」

「私には何も出来ないのですね……」

「そうね、でも霊夢は少し穏やかに考えればいいのに……。過去がない……。私にだって生きてた時の記憶はないのにね。例えば私が何であれ私は私でしかないのに……」

「霊夢は大丈夫なのでしょうか……」

「大丈夫よ、きっと。霊夢は強いわ。」

霊夢の場合はかなり厄介そうだけど……」

大丈夫とは言っても厄介だと言う、一抹の不安を覚える。

「厄介……ですか……？」

「ええ……。厄介よ。」

霊夢は蘇ったの、その意味が分かるかしら？」

「蘇る……。乖離した魂と体を元に戻す事……。ですか？」

「そう……。でも、それじゃ60点ね。」

この場合は結果じゃなくて過程が大切よ。死なない方法ならいくらでもあるわ、例えば藤原妹紅は知ってるかしら？ あれは変化を拒絶する薬、蓬莱の薬を飲んだ不死人よ。

人と言う存在そのものを世界に固定し、有りとあらゆる変化を拒絶する事で死と言う変化を拒絶する。

他には妖精、これは死んでも直ぐに蘇生するけど、あれは特別、根本的に死の概念が違う、生きるものにとって死は終着点だけど、妖精にとっての死はただの途中経過にしか過ぎないのよ。

妖精は自然の具現だから、そもそも生きていけると言う見解自体が間違っているかも知れないけどね。

軽く上げると死なない方法の例は幾つかあるわ、でもね、死なない方法なら分かるけど、死んでも生き返る方法は分からないのよ」

死なない方法は確かに多い、目の前のお嬢様もそうだ、亡霊であるお嬢様はこれ以上死なない、人間だって吸血鬼になり種を超越する事で不死性を手に入れる事も出来る、でも、生き返る方法は知らない、聞いた事もないのだ。

でも、一つだけ蘇生に近いものがある。

「……………、転生の類いはどうなんでしょう」

「輪廻転生は死者の蘇生とは別ものよ。

生前の意思を持って新しい魂を宿す、意思は同じでも、その魂と体は違うもの、また違うものよ。

私が死んでも生き返る方法が分からないのは、摂理の流れに逆らうものだから。

この世の全ての流れは一方通行に出来ているの、起きた現象は取り消せない、時間を逆巻く事は出来ないし、一度発生した死と言う現象は取り消せない、なのに霊夢は蘇った。

そんな世界の摂理に逆らったものは世界の意思が許さないわ」

「世界の意思……………ですか……………?」

世界の意思、聞き慣れない言葉に反芻する。

「世界の意思よ、世界、この場合は自然と言ってもいいわね。

自然は思考する事はないけど確固たる意思があり、常に安定しようとかくまで摂理に則ろうとするの流れの事、だから不自然なものは

必ず淘汰される」

「……………撰理を守る……………世界とは神の類いなんですか？」

「神とは概念そのものが違うわ、世界とは安定しようとするただ漠然とした意思にしか過ぎない、神のような現象とは違うわ」

「ん……………、難しいです……………」

「理解する必要はないわ。」

知って意味のある事じゃない、ただ今は死んだ人が生き返るなんて撰理に逆らう事は世界が許さない、必ず世界に修正される、それを理解なさい」

「世界が許さない……………ですか……………」

「そのはずなのに霊夢は蘇ったのよ。」

それが謎、多分、紫なら知ってるんじゃないかしらね」

「……………、難しいです……………」

話が途方もなくうまく理解出来ない、いや……………、出来ないと言っより飲み込めない。

「そのうち分かるようになりなさい、貴女はただの人よりも時間はあるんだから」

そう言ってお嬢様は俯く私の頭を撫でた、お嬢様の手は温かいとは言いがたいけど、何故か温かく感じた。

空を見上げると強く風が吹いて表から飛んで来たのだろう舞う桜の花弁が見えた。

雨に村、雲花に風、折角の見頃の桜もこれでは散ってしまう。

「お嬢様、風が強いです。

中に入りましょう」

「そうね……、風も止むといいのに……」

霊夢、貴女には乗り越えて欲しい。

私はそう桜に願うのだった。

第二十一幕 三日後のキリスト 〈revival〉（後書き）

閲覧ありがとうございます。

最近オリジナル設定がだいぶ多いです。
エヴァレットの多世界解釈で粒子が力学なのだと思いで受け止めていただければ幸いです。

思うに東方で異変物を書くときオリジナルキャラかオリジナル要素が必要になるかなと思います。

無くても出来るのでしようが私の腕では出来ません。

誠に遺憾です。

オリジナル要素と言いつつ結構他所の作品からいただいている部分があります。

今回の世界のどうのこうのも型月の世界と抑止力からヒントをいただいたものです。

話は変わって東方の世界に蘇生が出来るキャラはいたでしょうか？
ある意味での蘇生なら小悪魔や橙は出来るかも知れません。

悪魔は二度死ぬとも言いますし、猫は命を複数持つとも言います。
死者蘇生とは厳密には言えないと思います。

再生の象徴と呼べるのが蛇なのですが神奈子が蛇神と言う設定自体はありません。

そもそも東方の世界で死者の蘇生は可能なのでしょうか？

一度起きた死の運命は覆せない、因果律には逆らえないなんて設定は色んな話で聞いたりします。

さて…、どうなのでしょう？

次回は悩める霊夢がまだ悩みます。

第二十二幕 画けぬ水竜宮 (n・t talk) (前書き)

いつもどおりの二次創作、逃げ出す霊夢、その時もう一人の主人公
が目醒ます。

今回は場面を変え魔理沙の話。

ゴゴゴゴゴゴ

> i 4 2 4 9 | 3 6 8 <

何と春風夜風さんが三幡の絵を描いて下さいました。

それについては後ほど……。

第二十二幕 画けぬ水竜宮 (n・t talk)

目覚めて一番最初に飛び込んできたのは見慣れない天井と見知らぬ鉄格子だった。

……………鉄格子？

上体を起こし辺りを見回す、重厚な木の床に四隅に部屋を支える赤い柱、その柱や壁には竜の彫り細工がなされ、更には各所に金が使われており非常に豪華な造りだ。

すぐ近くに落ちているお気に入りの帽子を拾い上げ、胸に抱いて思案する。

どっだ？ こっちは……………。

「魔理沙、起きたのじゃな」

ゾクリ、心臓を氷で撫でられたような感覚、弾かれる様に声のする方向を向いた。

そこにはあの女がいた、女は細かな細工が施された赤いビロードの大きな椅子に腰掛けている。

マスタースパークを真正面から跳ね返し、私を撃墜した女、綿津見三幡がそこにいた。

お互いの視線が重なる、そして自分が囚われの身である事を改めて理解した、ごくりと喉が鳴る、文字通り化け物みたいな化け物達と何度も戦った事があるのでピンチくらいなら今まで何度でも経験してきた、でも、こういった類いのピンチは初めてだ。

「なんじゃ？ 何か憎まれ口でも叩いてくれるかと思ったのじゃがの、頭でも打ったか？」

女は何故だか心配そうに私を見ている、私を撃ち落としておいとその反応は違う気がする。

殴られた相手に「大丈夫ですか？」と心配されるようなものだ。

「お陰様でな、頭は打ったかも知れないぜ、乙姫様」

私は胡座をかき、頬杖をついて慇懃に悪態をついた。

「ふむ、よう妾の正体がわかったの、感心じゃ」

三幡はこれは驚いたとでも言うように表情を作る、余り驚いてない感じがわざとらしく胡散臭い。

「浦島太郎は読んだ事あったし、乙姫が竜王の嫁か娘つてのは何かの本で読んだ事あってな、分かって当然だぜ」

「有名人も考えものじゃの」

「分かったのはそれだけじゃないぜ、霊夢との会話盗み聞きさせてもらったけど、お前の触れた相手を理解する力、それだけじゃないだろ」

「……ほう、何故そう思う？」

「単純な話だ、私の後から霊夢が来てた事をお前は知ってた、でもお前の触れた者の海を通して相手を知る力、逆を言えば触れない限り分からないって事だぜ。

シレネツタの話だとお前は水竜宮の結界より外に出る事はない、そして水竜宮の中に海は無い、お前は海に触る機会がないんだ、霊夢が水竜宮に来てる事は知らないはずだぜ。

海に触れて知る力では分からない、つまり他にも何かあるって事だぜ」

「ふむ……正解じゃ、なかなか頭に回るの」

「ついでに言うとな能力の目星はついてるぜ、ズバリ超聴力だろ、最初に部屋に入った時は真つ暗だったからな、視覚に頼らない能力があると思っただんで、心眼か千里眼かと思ったが、最初にお前は『もっ少しボーイッシュだと思ってた』と言ったよな。

それはつまり、視覚及び疑似視覚以外で私を知ったと言う事、私の服はどこから見ても女の格好だぜ、私のボーイッシュなのは声と喋り方だけ、声だけを知ったからお前は私をボーイッシュだと思ったって事だぜ」

「当たつておるぞ、いや本当に凄いの、どこぞの探偵のようじゃぞ」

三幡は感心したように目を丸くして手をパチパチと叩く、わりと当てずっぽのわりに正解して嬉しいが、敵に素直に褒められても複雑な気分だ……。

と言うか隠すとかそんなつもりも無いのだろうか？ 案外聞いた素直に教えてくれたのかもとさえ思えてしまうあっさりさだ。

嘘という確率もあるけど、何だか気が抜ける……。

わりと憂さ晴らしのつもりだったのにまったく憂さが晴らせてない。

でも本題はこれから、脱出を考えるのが先決だ、どうにか探りを入れないといけない。

「そんな事はどうでもいいぜ、私を捕まえてどうするんだぜ？ まさか煮て喰う気か？」

「まさか……、お主には妾の話し相手になつてもらおうと思つての」

「……話し相手？」

意外な答え、てつきり食われるものと思つてた、竜の生け贄に若い娘なんてのはよく聞く話だ。

「そう……話し相手じゃ、見てのとおり水竜宮には妾とシレネツタしか居らんでの、暇で暇でたまらんのじゃ、死ぬ程の……」

「何だそりゃ、鯛や鯉の舞い踊りはどうしたんだぜ」

一瞬だが、三幡の表情に影がさした。

「もう居らぬ……」

「何だ？ 喰われたのか？ それとも喰ったのか？」

「喰われたのなら諦めも付くのじゃがな、魔理沙よ、少し長いが妾の話聞いてくれるか？」

「ああ、構わないぜ、私も暇だったところだぜ、死ぬ程な」

そう言って抱いていた帽子の皺を伸ばし被る、やっぱり帽子を被ってた方が落ち着く。

三幡は私の反応と言い回しが気に入ったのかニヤリと笑うと満足そうに頷き話しだした。

「お主は幻想郷の外の世界を知っておるか？」

「巨大な鉄の塊が空を飛ぶらしいな」

「ふむ、そうじゃ……、鉄の塊は飛ぶし山の様な家すらある、じゃがな、妾の様に神や妖怪、お主の様な魔法使いも居らぬのじゃ」

「ああ、聞いた事あるぜ、何でも住み処がなくて幻想郷にくるらしいな」

「そうじゃな、じゃがほとんどの者が幻想郷には行かぬ」

「……?? 何でだぜ、住み処がないならホームレスだぜ」

「ほとんどの者が消えて無くなってしまふのじゃ、神も妖怪もの…
…」

「消えて……無くなる……?」

消えて無くなる、どうも実感出来ない、でも何かほの暗いイメージがわく。

「幻想郷の外ではな神や妖怪なんぞ、誰も信じておらん、ほとんどの人間がそんなモノはいないと思うておる。

神や妖怪はの、人に敬い恐れられる事で存在する事が出来るのじゃ、それが存在意義、忘れ去られた神や妖怪に意味は無い、意味の無くなったものは消え去るしか無い、それが『幻想の意味の死』じゃ」

「……本当に消えてしまふのか?」

「本当じゃ、綺麗さっぱり消えてしまふ、水竜宮にはの、ほんの百年前までは鯛や鯉だけでは無い、口煩い鮫鰈もおったし、お調子者の蛸もおった、じゃが皆いなくなってしまった。

媚びておったのかも知れんが妾の話し相手によくなつてくれた、皆は口も聞けぬただの魚になり誰もいなくなった、今では妾とシレネツタだけじゃ」

「信じられないぜ……」

「そつじャの……、妾とて信じられぬ、幻想郷が羨ましい」

「何だ？ 羨ましいなら最初から大人しく幻想郷にくりゃいいんだぜ」

「妾は海神ぞ、海を離れは出来ぬし、海を守らねば妾の意味が無くなってしまふ、それに妾はこんな場所がある事なんぞ、今まで知らなんだ」

「じゃあ何で幻想郷に来たんだぜ？」

「自分で来たのではないがの……、気付いたらこっちにおつたのじや」

「……そう言えばそうだったぜ……。
でも、何でなんだぜ？ 正直海を持って来られたのは迷惑だぜ」

そもそも霊夢が結界をいじったのが原因だったのだ……。

「そうじゃな……確かに幻想郷の外の世界の海は幻想郷に馴染んでおらぬ、じゃが妾は幻想郷に来て思ったのじゃ。
ここでなら懐かしき妾の海が取り戻せるやもしれぬ、あの妾の愛した海をの」

「……………」

取り戻したい、三幡はそう言う……。

亡くしたものを取り戻したい、そう言う気持ちは分からないでもない、私にとって何かを亡くすなんて体験はいいところ物を無くすとか、子供の頃に捕まえてきた蛸がすぐに死んでしまったとかその程度、分かると言っても本の中の物語の主人公の苦悩に感情移入する程度のものだ。

ただその程度、だけど何か胸にズンとくる。
理解は出来ないけど、軽い気持ちじゃないんだと、そう思う。

「なんじゃ魔理沙、黙りこくって、お主らしくないぞ」

「あ？ 私は鳩や鶏じゃないんだぜ、黙る時だつてあるぜ。

それよりも……、やっぱり迷惑だぜ、海を取り戻しても今の幻想郷が変わっちゃう、結果的には死んでしまうヤツだっているぜ、それは困る」

「それを言われるとちと困るの……。

海神の妾がやる事じゃ、天変地異と思つて諦めておくれ、鯨に咬まれたと思うての」

「鯨に咬まれたら死んでしまふぜ、せめて犬にしてくれ、それに神様とサイコロは無口がいいんだぜ」

「確かにの……。

妾には心があるのじゃ、無口ではかりはいらぬの」

「私は貝になりたい？ 冗談キツいぜ。

私は御免だ、死んでしまふ。

貝にはならない、だから私はこの檻からから早く出たいぜ」

私は皮肉を言うように檻の武骨な鉄格子をコンコンと叩き言う。

「その願いは聞けんの、お主には話し相手になつてもらふのじゃからな」

「それで御座いました……」

溜め息をつく、勿論溜め息はただのジェスチャーで、解放してくれる望みなんて端から無い。

最初から期待してないのだ、落胆が無ければ溜め息も出ない、でも薄々感じてたがどうも三幡は本気で私を話し相手にしようと閉じ込めているようだ。

最初、話し相手になってもらうなんて言ってきた時は嘘だと思つて話を合わせてたがどうも本当に話し相手にするつもりらしい、言つてる事に特に矛盾は無いし、何より私を閉じ込めておく理由が無い。

最初は人質にでもするのかと思つたが、私には人質としての価値が無い、私を必死に助け出してくれるような心当たりなんて無いのだ。

霊夢も何だかんだで結構冷たい、異変解決のついででもない助けには来ないだろう、パチュリーやアリスなんて盗まれた本が取り返せると寧ろ喜ぶかも知れない……。

食べるんだつたらこの扱いは違う、食料に情をかけると殺しずらくなるものだ、竜みたいな超越種の考えてる事なんて分からないと言えは分からないから何とも言えないところもあるが……。

そうなる与本站に話し相手に私を捕まえたのかもしれない、これだけじゃ正直情報不足と言うか判断はつかないが、何となくだが話しをしている三幡はとても楽しそうに見える。

もつとも露骨に楽しそうにしている訳でなく何となくそう思うだけだが……、だからだろう本当に私を話し相手にする為に捕まえたのだと思うのだ。

「なに……、取って食おうと言っ訳では無いのじゃ、檻の中じゃが寛ぐがよい」

「寛ぐ……ねえ……、取って食おうで思い出した腹が減ったぜ、良
い事教えてやる私は朝から何も食べてないんだぜ」

「……腹が減る……？ ああ……そうであったな、シレネッタに何
か持ってこさせよう。」

シレネッタよ、魔理沙が食べられそうなものを用意いたせ」

すると扉の向こうに控えていたのであるうシレネッタが扉を開け、
かしこまりましたと頭を下げると、そのまま何処かへすいーと消え
ていった。

「なあ三幡、話し相手ってシレネッタじゃ駄目なのか？ それとも
シレネッタと話すのはもう飽きたとか？」

すると三幡は何か言いにくそうに押し黙る、そして何か諦めた事
のように小さな声で話し出した。

「……飽きたなどと言う事はない、そう言えばシレネッタとは
数十年は会話らしい会話はしておらん」

「あ？ 仲が悪いのか？」

「……仲が悪い……そうかも知れぬの……」

歯切れ悪く三幡はそう言う、仲が悪いのだろうか、そう言う印象
はなかった気はするが、そう言うならそうなのだろう。

どうも釈然としないがそんな事よりも脱出の方が大切だ、その為

の探りでもあったが、結論として分かった事は私は探りが下手、と言つ事くらい、どうも上手く会話を誘導したりするのは苦手だ、力業が身に染みているのだらう、小回りの効かない娘に育ったもんだ……。

部屋を見回しても鍵は見当たらないし、箒も八卦炉も見当たらない魔法薬の類いも全部取り上げられてるみたいだし……。

勿論八卦炉や薬が無くても魔法は使えるが火力に難がある、箒も無いとスピードも落ちる。

魔法使いの戦いは準備の段階で半分は終わつてると言つても過言じゃない、八方塞がりだ……。

などと思い悩んでいればシレネツタがやってきた、随分と早い。

大きな皿を抱えて相変わらぬ泳ぐような不思議な飛び方ですいーとやってくる、そしてテーブルを楹に横付けしその上に皿をおく。

大皿のところ狭しと飾られていたのは色とりどりのお刺身だった。量もさる事ながら赤身に白身、青身魚、烏賊、蛸、貝と種類も豊富だ、思わず感嘆が漏れる。

お刺身は幻想郷では超が付く程に貴重な食べ物だ、山と木に囲まれた幻想郷では生の魚なんて鯉の洗いくらいなもの、私も紫が持つてきたもの食べたくらいだ。

いや、まあそんな事はいい、お刺身つてのは美味しいのだ、そりゃもう魚を焼くのが馬鹿らしくなるくらいに、だってそうだらう、何も特別な事をしなくても切つて食べるだけで美味しいのだ。

大皿いっぱいのお刺身。

お前は魚じゃなかったっけ？ と若干の違和感を覚えつつシレネ

ツタの顔を拝む。

「地上の方は魚を小さく切って生で食べると聞いたので、作ってみました」

私、脱出しなくてもいいかも……。

でも若干の違和感。

「おいシレネツタ、箸はどこだぜ？ それと醤油」

「……醤油？」

シレネツタは何か知らない単語を言われたように首を傾げいぶか
しむ。

「醤油だけ醤油、醤油がないとお刺身は美味しくないぜ」

「醤油とはなんですか？」

嘘……。……。

そんな馬鹿な、醤油が無い？ 醤油が無いと言うのか？ あの日本最強の調味料である醤油が無いとお前は言うのか？ 醤油を知ら

ないなんて事この際はいい、こんなご馳走があるのに、その美味しさの半分も味わえないなんて。

これは拷問だ、そもそも箸も無いし、良く考えれば「飯も無い、お刺身だけ食えつてのかよ、この馬鹿野郎。」

呆然とする私の気持ちを猫の額程にも理解していないのだろう、シレネッタは「折角作ったのですから、存分に味わって下さい」などと戯けた事を言う。

結局私は手掴みでお刺身を食べた、不味いとは言わないが余りの無念に薄く涙が浮かんできた、それを見て三幡とシレネッタが満足そうな顔をしてたが、どうも本気で地上の食文化を理解してないっぽい、美味しくて泣いてんじゃないぞ、ふざけるな。

浦島太郎は白飯が恋しくて地上へ帰ったのだと私は思う、太郎はよく頑張った私は今すぐ帰りたいぞ。

何だか気が遠くなってきた。

ちなみに後日談になるが、気が遠くなったのは河豚の毒に当たったせいだと三幡に聞いた、シレネッタの血で一命を取り止めたこの事……………。

何が「顔が土気色で死んだかと思うたぞ、フッフ」だ。
ふざけるな！

第二十二幕 画けぬ水竜宮 (n・t talk) (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

今回は魔理沙の視点で今回の黒幕三幡にスポットを当てた話です。
お陰で霊夢の話が伸び伸びで構成云々についても色々考えさせられ
感じてなかなか恥ずかしい限りです。

さて……。

春風夜風さんが描いて下さった三幡の絵、活動報告に挿し絵って憧
れますよね。なんて書いたら、描きましようか？なんて気さくに申
し出してくれた聖人君子な人です。

光芒万丈な思いです。

きっと後光がさしていれ事でしょう、頭が下がります。
ラノベ作家の気持ちがあった気がします。

改めてありがとうございます。

> i 4 2 4 9 — 3 6 8 <

さて……。

次回は霊夢の話に戻ります。
霊夢の運命や如何に。

第二十三幕 里の獣と山の人 く Maiden and the Beast

いつもどおりの二次創作、白玉楼から逃げ出すように飛び出した霊
夢さんのその後。

幻想郷は広いようで狭い、白玉楼から逃げ出すように飛び出した私は広い幻想郷の空を当てどなく飛んでいた。

自分が何なのかも分からず、混乱し憔悴しきった心にも時間という薬は思いのほか有効のようで幾分か落ち着きを取り戻せた。

私は人間、人間のはず、妖怪じゃない、幽々子だってそれは保証してくれた、でもそれと同時に私は殺しても謎の理由で甦るという謎を増やした、そして過去の謎。

謎、謎、謎、私は普通の人間じゃなかったのか？ 信じられない、私は普通の人間のはず、でもそう思う自分を信じる事が出来ない。感情の袋小路に迷い込んだように自問自答する、紫に聞けば何か分かるかも知れない。

いや、何かが必ず分かるはずだ、そう思うが本当に分かっただけで事に不安がある。

世の中知らない方がいい事があるって事くらい私だって知っている、でも私には異変を解決する使命があるんだ、弾幕勝負で精神的コンディションは思いの外に影響が大きい、避けられる弾も避けられないのでは話にならない、迷いを断つ必要はある。

そうだと分かっただけでも心の弱さでも言うのだろうか、私は紫の元へは向かっていない、私が今向かっているのは里から外れた森

の手前にある古道具屋『香霖堂』だ、霖之助さんは古い付き合いだし、もしかしたら私の子供の頃の事を知ってってくれるかも知れない。

……大丈夫、……大丈夫、まだ希望はある。

早く異変を解決しなきゃ……。

香霖堂の回りは里から避難して来た人達の集落になっていた、御座を引き支柱を立て帆布を掛けて作った天幕が今は里の人達の仮住まいのようだ。

霖之助さんは妖怪と人間のハーフで人間とはかなり友好的な部類の人だ、何せ人間は客でもある訳だから無下には出来ない。

それと霖之助さんは争い事が好きな人ではないがかなり強いのだ、外の世界から流れ着いたガラクタを探しに結構危ない場所に一人で行ったり出来るのもその実力故の事、そんな理由からだろう、何かあったら霖之助さんが守ってくれるというのを期待して人が集まって来たのだろう。

早く異変を解決したい、私は香霖堂へと足を踏み入れた。

「霖之助さん、こんにちは」

店の奥で何か探し物をしていたのだろう、霖之助さんは埃にまみれながら顔をあげ私と目を合わせると店先に視線を移し、また私に向き直る。

「こんにちは霊夢、こんな時間に来るのは珍しいね」

そう言って立ち上がると体についた埃をパタパタと払いながら挨拶を返してくる。

「ちょっと寄ってみたくなくて……」

「そうかい、丁度探し物をしていてね、お茶も出せないし相手は片手間になるけど、ごめんね」

「いえ、大丈夫です」

私がそう言うと霖之助さんは変な物を見るような目で私を見ている。

「今日はやけにしおらしいね、どうしたんだい？」

「いえ……その……」

私の過去について聞くだけの事なのに何故だかとても躊躇われる、何故なんて分かってはいるが……。

私のそんな心情の吐露は第三者の声に欠き消された。

「霖之助ー見つかつたかー？ ……おや霊夢じゃないか」

声の主を確認する為に店先に視線を移すと各々の手に桶を二つづつ持った上白沢慧音がいた。

「すまない、もう少しで見付かりそうなんだ」

霖之助はそう言うのとまたガラクタの山に頭を突っ込み探し物を再開する、私は喋るのも億劫なので手だけをヒラヒラさせ挨拶にしておいた。

「異変はまだ解決しないのか？」

霖之助さんはもう少しとは言ったものももう少しで探し物は終わりそうにない、慧音も同じように感じたのだろう持っていた桶を下ろすと時間潰し程度の気持ちなのだろう、そんな事を聞いてきた。

「まだよ、これから行くの」

「頼むぞ、正直言つと里の皆も思ったより精神の磨り減り方が早い、突然里が沈んで追い出され妖怪のいる里の外だ、不安も大きい」

「……分かってるわよ」

「なんだ歯切れが悪いな、何かあったのか？」

そんな私の様子に慧音は片眉を上げいぶかしむ。

「なんでもないわよ……」

深く詮索するつもりはないのだろう、慧音は浅く息をつくと「そうか」と言っただけ以上は何も聞いてこなかった。

「あつた」

微妙な沈黙を欠き消すように霖之助さんはそう言つて立ち上がる、その手には埃にまみれたよく分からないものが握られていた。

随分と得意気な顔である、色は透明、筒と言えば筒のような形だが、何だかへチマにもにている気がする……、よく見れば筒の中頃に赤かつたり青かつたりする帯のようなものがあり字らしきものが書いてあるが読めない。

「何これ……？」

「これはね、ペットボトルと言つものさ、このキャップと言つ部分を捻る事で開け締めが出来て液体を保存するのに便利なのさ」

そう言つてキャップと言われる部分を捻つて開けてみせ、触つてみなさい、と言つ事だろう。ペットボトルの一つを差し出してくる、私は遠慮せずに触つてみる事にした。

軽い、一瞬ガラスの様なものかと思つたが驚く程軽い、少し強く握るとベコベコと凹むが壊れそうになく薄いわりに丈夫なようだ。

「便利そうだから大量に拾つてきたけど、醤油や油くらいにしか使わなかつたから余つてね」

肩をすくませて付け足した。

確かに便利そうだが、基本的に醤油なんかは焼き物やガラスの瓶を使う、ガラスは高いから大概は焼き物になるのだが、まあどちらにしても重い、この軽さと丈夫さは驚くところだ。

「そして私がお話の話を思い出してね、水の保存用に借りようと思ってお願ひした訳だ、必要になる度に沢に汲みに行くのは危険だしな」

そう言つて慧音が更に付け足し、霖之助さんから紐で束ねたペットボトルを受け取る。

「ところで霊夢はここに何をしに来たんだ？」

慧音は何の気なしにだろう思い付いたようにそんな事を聞いてくる。

「……別に大した……」

そう答えて私は少し思い悩む、慧音、上白沢慧音は獣人ワーハクタクである。

ハクタクとは白澤又は白沢と書き、九つの目、六つの角を持ち人語を解し万物に精通する人面の牛の姿をした霊獣だ。

慧音自身もその影響か沢山の知識を持ち幻想郷の歴史を書にまとめたりしている。

そんな慧音ならあるいは……。

「ねえ……」。

霖之助さんと慧音に聞きたい事があるんだけど……聞いていい？」

私の反応に霖之助さんと慧音は変なものを見たと言つような顔をしてお互い顔を見合わせる。

「お前が変に人に気を使うなんて逆に気持ち悪いぞ、聞きたい事があるならいつもどおりに遠慮なしに聞けばいい」

もの凄く失礼な事を言われてるなと思いつつ、普段私は人にそう思われてるんだとちょっと落ち込んでもいいのかもしれない。

「……二人とも私の子供の頃の事とか知らない？」

二人は少し考え込むように黙る、それは思い出そうとしているのか、知らない事をどう言おうか考えているのか……、それは分からない。

暫しの沈黙を破ったのは慧音だった。

「ん……、私は知らないな、永夜異変以前は里で買い物に来てるのを見掛けるくらいだな」

「見掛けたっていつ頃？ いつ頃から!？」

私は慧音に詰め寄り問い掛ける。

私の反応に驚いた様子で思い出すように唸りだし。

「最初に見掛けたのは……、……、うん、四年前だな」

四年前……。

綿津見三幡は言っていた、博麗霊夢は生まれて四年目だと、その言葉と不思議に一致した気がした。

「嘘だツツ!!」

私はただただそれを否定したくて叫んだ。

相当に面をくらったのだろう、霖之助さんと慧音は体をすくませ
一歩足を引いた。

「霖之助さん！ 霖之助さんは！？」

「えっ？ あ……いや……、子供の頃の事は知らないかな……」

「じゃあ！ じゃあ私の両親の事は！？ お母さんは！？ お父さ
んは！？」

霖之助さんは困ったような顔をする。

お願い、そんな顔をしないでまるで知らないとも言い出すよう
な、そんな申し訳なさそうな顔をしないで、お願い、お願い、お願
いだから、そんな事を言われたら私の最後の希望がなくなる、「あ
あ、知ってるよ」そんな何気無い一言が聞きたかっただけなのに、
いつもどおりに優しく笑ってそう言って欲しかっただけなのに。

霖之助さんが口を開く、その言葉はやっぱり私の望んだものでは
なかった。

「……ごめん、知らない」

「やあああああああ！！！」

叫んだ、霖之助さんの声を掻き消したくて叫んだ、耳から入り脳
に入ってきた言葉を追い出す為に叫んだ、でも無駄だった。

脳は律儀に霖之助さんの言葉を咀嚼し飲み込み理解する、私は立
つことも出来ず膝を折り、肩を抱き、顔をおおった。

「れつ 霊夢!？」

咄嗟に動いたのは慧音だった、私を抱き止め体を支える、でも私はそれを振り払い外へ駆け出す、ここには居たくない、でも慧音に腕を掴まれそれは叶わなかった。

「どうしたんだ!? どこへ行く気だ!？」

「異変を解決しに行くのよ! 黒幕を倒しに行くの!！」

「無茶を言うな、せめて今日はうちで休んでいきなさい」

やっと落ち着きを取り戻せたのか、それともやっと口を開く事が出来たのか霖之助さんはそう言う。

「いい! もういい! 異変を解決すればいいの!！」

慧音は子供の様に暴れる私の肩を強く握り正面を向き合わせる、正面から見詰める慧音の顔は無惨な亡骸を見るように何か辛さを押し隠したようだった。

直後に弾ける様な音と共に頬に鋭い痛みがはしる、ジンジンとした痛みが後を追うように表れ自分が頬を叩かれたのだと知った。

「霊夢! お前の言ってる事はおかしいぞ、何故そこで異変なんだ! 私はお前の事情は知らん! だがな、お前の事情が異変と繋がるなんて到底思えんだ! 何故だ? 何故なんだ!? 何故異変を解決しようなんて思うんだ!？」

頬を叩かれた痛みのせいか虚脱した思考に慧音の言葉が染み込む、

何故異変を解決するかだつて？ そんな事は勿論分かつてる、そんな理由は当たり前前の事、私が異変を解決するのは……………

……………あれ……………？

え？ 何で？

私はなんで異変を解決するんだろう？

博麗の巫女だから？ 違う、間違つてはいないが仕事意識なんかじゃ私は動かない。

幻想郷を守るため？ 違う、私はそんなに幻想郷に興味がない。

魔理沙を救うため？ 違う、今の今まで私は魔理沙の事を忘れていた。

どんな理由を考えても取って付けたような言い訳のようにしか聞こえない、でも心の底の方から異変を解決しようと強く思うのだ。

何だ？ 何だ？ 何なのだ？

この気持ちは何なのだ？

「分からない！ 分からない！ 分からないよ！」

「霊夢ッ霊夢！ 落ち着け！ いいから落ち着くんのだ！」

霊夢の様子は尋常ではなかった、平静を失いパニックを起こしている、一瞬騒ぐ生徒達みたいに頭突きの一発でもすれば大人しくなるかと思ったが、馬鹿な考えだ、私も霊夢に連られて平静を失っていたのだろう、頭を振り思考をリセットする。

余り嬉しい事では無いが霊夢に対する細かな事ではあったが一つの疑問の糸口を見た、霊夢が異変を解決しようとする動機だ。

噛み砕いて言えばやる気之源、最初はお金の為と考えてたが、霊夢は賽銭が無いとか言ってお金にがめついようだが、実際のところそうお金に執着はしていない、無いなら無くてもいいやくらいに思っている節がある、勿論正義感も職業意識も怪しい、霊夢はそもそも自分以外の物事に対して無関心なのだ、それが例え幻想郷の存亡に関わる事でさえ、この無関心さに対しての異変に対する執着心が霊夢と言う存在の歪さだ。

でも、ここにきて一つの仮説が成り立った、霊夢の異変への執着心は衝動では無いのか？ 喉が渴けば水が飲みたくなるように、人と人が惹かれ会うように、霊夢は異変が起こると解決したくなる衝動にかられるのではないのか？

そんな仮説が出る程にさっきの霊夢の発言は突拍子もなく不自然だった、でもそんな衝動はおかしい過ぎる、まったく意味が分からない、霊夢の最初の質問といい、いったいなんだ!?

私の腕を振りほどこうと暴れる霊夢、狂乱と言ってもいいだろう、振り回す腕は店の商品らしきものを地面にぶちまける、霊夢のその荒れ様に相応しく手から血を滴らせ、時折触れる私の服を赤く染めた。

一度眠らせた方がいいかもしれない、少々荒っぽいが、許せ霊夢。拳を下段に構え絞る。

「体罰はいけないわよ」

不気味な声に全身が栗立つ、霊夢の背後の空間から現れた腕、顔を掴むと一瞬にして霊夢の意識を奪う、そして崩れ落ちるその体を抱きすくめるようにその女は現れた。

「……八雲紫」

「久しぶりね。」

霖之助、奥を借りるわ」

そう言っつて紫は嘩然とする私と霖之助を尻目に香霖堂の奥へと向かっていった。

霖之助と共に紫の後を追うと普段寢床に使っているとと思われる部屋に霊夢は寝かされていた、日頃から使われているものらしき余り上等とは言えない布団がある、その枕元に紫は座っている。悲しげな表情をしていた気がした。

「紫、どう言う事だ？」

「どう言う事って言われてもね」

指を頬に当て困った様な表情で誤魔化そうとする。

「はぐらかすな、霊夢の不自然さは前々から気付いていた、今日になつてある仮説がたったが、それもお前が来た事で確信を得た、霊夢には秘密がある、そしてお前はその秘密を知っているだろ」

紫から表情が消え、視線だけで私を殺す様に睨み付ける。

私は正面からその視線を受け止めた。

「……いいわ、霊夢に話すついでに教えて上げる」

そう言つて霊夢の顔にそつと手をかざした。

間も無くして顔をしかめながら目を醒まし上半身を起こす。

「……は？ 紫？」

まだ、状況がうまく掴めないのかそれとも今までの事は全部夢だとしても思ってるのかもしれない。

「霊夢、落ち着いて聞きなさい貴女の秘密を教えてあげる」

そう言っただけの様に妖しげに笑いかける。

霊夢は状況を理解したのか、苦し気に奥歯を噛む。

「貴方達、ガイア仮説は知ってるかしら？」

……。
霊夢は黙って答ええない、多少なり冷静さを取り戻したのだろうか。

「知っているぞ、地球を一つの生命体として考える理論だろ？ それは何だと言うのだ」

誰も口を開く様子はなかったので私が口を開く事にした、紫は首肯し肯定を表した。

「ええ慧音の言うとおり、ガイア仮説は地球、この場合は世界と言う方が適切ね、世界と言うのは文字どおり一つの生命体なの、姿も形もないけれど……」

「まさか……」

「靈夢は信じられないと言っようにそう言っ、勿論私だってそう思っ。」

「まあ生命体と言っのは馴染めないかもしれんけど、世界には確固たる意思があるの、常に安定しようとする強い意思が……、姿も形も無いけれど意思があるならそれは生命と言っても言い過ぎじゃないわ」

紫は全員を見回す、沈黙を納得と取ったのか先を続けた、少なくとも靈夢は納得と言っより釈然としんないと言っ感じだったが……。

「本当は地球規模の意思なんだけど幻想郷は特別だったわ。」

総てを受け入れ忘れ去られた者が集まる、思いが強い意味を持つ幻想郷、本来地球規模でしか有り得ない世界の意思が幻想郷と言っ世界に宿ったのよ、幻想郷の世界の意思は常に幻想郷に安定をもたらそうと働くわ、こんな山奥の閉じられた世界で文明も氣象も食料も空も大地も神も妖怪も人も妖精も全て成り立っるのは大きな意思の力によるものよ」

「……わかつた、わかつたわ、わかつたけど、わかつたけどそれが私となんの関係があるのよ」

そう呟く靈夢は危うい雰囲気があつた、また暴れだすのかもしれない、その時は靈夢を抑えないといけんない、そう思ったところで紫に目で制された、任せろと言っ事だろっ。

「靈夢、貴女は幻想郷の意思によって創られた人間なのよ」

靈夢の体がビクリと動く、肩は小刻みに震え自分を抑え込むよう

に体を固くする、紫の言葉には答えない。

「今の幻想郷には様々なものが集まり過ぎてブラックボックスと化してるわ、幻想郷で将来何が起こるかなんて私にも分からない、今回の異変みたいだね。」

そんな異変に対して世界は対応したくても直接働きかける事は出来ない、そこで世界は自らの意思の代行者を創った、幻想郷のバランスーになる人間を……」

世界の代行者、それが誰を指すのかは紫が言わなくても全員が分かった事だろう、そしてもう一つの意味、霊夢が衝動で異変を解決しようとする理由、霊夢が世界のバランスを取る為に世界の意思によって創られたと言うならば、霊夢の心は世界の意思によって造られたものと言っ事だ。

……何だそれは……ふざけるな。

じゃあ霊夢の意思って何なんだ？ 霊夢は世界の意思によって心を操られているとも言っのか？

あんまりじゃないか、いつものほほんとしてる霊夢が手から血を滲ませる程に取り乱しても異変を解決しようと思っ自然にそう思っ理由がそれだと言っのか？

やり場の無い怒りを覚える、私の体の獣の部分が皮膚の下でざわざわと脈打つのが分かる、もし怒りをぶつけるべき相手がいるのなら全てを拳に乗せて叩き付けてやりたい、これが不幸と言っなら、霊夢は生まれてきた瞬間から不幸だと言っのか……。

「幽々子に一度殺されても生き返ったのは世界が貴女を生き返ら……」

「もついいわ……」

そう言って霊夢は紫の言葉を遮って立ち上がる。

また暴れる、そう思って動こうとしたが霊夢の姿を見て体は動かなくなった、紫も霖之助も……、それ程に霊夢の表情は息を飲むもなかった。

いつも活気に満ち溢れていた目は木の虚のように暗く沼の汚泥の様に濁り、感情豊かだった表情は能面のように弛緩し幽鬼のようだった。

余りのショックに言葉どころか息すら吐けなかった。

「わかったわ、ありがとう、霖之助さんも慧音も」

そう言って踵を返し部屋を抜けようとする。

「ま………待て！ どこへ行くんだ？」

止めなければ、そう思い霊夢の袖を掴んだ。

「異変を解決しに行くに決まってるじゃない」

「駄目だ、行くな霊夢」

「何？ 邪魔するの？ 殺すわよ」

凍りついた、比喻ではなく本当に霊夢が私を殺す気だとわかった

から、こんなにも恐怖を覚えたのは初めてだった、今の霊夢なら朝出掛ける時、靴紐を結ぶように何の躊躇も無く、抑揚も無く、当たり前のように私を殺す、そう直感させた。

悲鳴を押し殺し恐怖に手を引っ込める、何事もなかったかのように霊夢は床が軋むキイキイという音を残して消えていった。

家から霊夢の気配が消えた時、呪縛が解けたように忘れていた呼吸を再開した。

「……霊夢はどうしたんだ……」

私は紫に問い掛けた、表情の消えた顔で紫は答えた。

「………自暴自棄になってるのよ、たぶん」

「ふざけるな！ たぶん？ 何がたぶんだ！ 霊夢はお前の話を聞いてあんなになっただんぞ、それで何がたぶんだ！」

行き場の無い苛立ちが矛先を紫へと向けた、破裂しそうな心を抑えるにはそうする事より他はなかった。

「慧音！」

霖之助さんが私を羽交い締めにする、何でそんな事をするのだろう、せめて怒鳴るくらい許されるだろう、そう思ったが違った、私が拳を固め紫に殴り掛かるうしていたのだ、心より先に体が怒りに狂ったのか、まるで獣だ、でも私はそれでいいと思った。

「私だって、好き好んで教えた訳じゃない……」

紫の独白のような答えは今までに聞いた事もない声でその表情に流す涙は無いが痛みを堪えて無理に作るような無表情だった。

私の怒りはその矛を納めた、体の半分は獣だが残りは人、紫の気持ちを考える事だって出来るのだ。

霊夢が誤魔化して救えない事くらいは分かる、なら霊夢は全てを知って自分で折り合いを着けなければいけない事…… そうなのだろう。

「……………すまん」

私の謝罪の言葉を聞いて霖之助の腕がほどかれた。

「構わないわ……………、私は必ず幻想郷を守る、貴女は里を守りなさい……………」

そう言つと紫はゆっくりと立ち上がり、重い足取りで部屋を後にした。

私には守るべき人達がいる、霊夢の事は気になるが、それよりも優先すべき事がある、何だかとても悔しかった、握り拳を叩き付けたい気持ちを抑え立ち上がった。

「……………霖之助、私は澤に水を汲みに行く、その間、里の皆を頼んだぞ」

霖之助は黙って頷く、立ち止まってはいけない、やるべきを成さねばならない。

何気なく外に目を向ける、障子から夕闇が染み出し、時間は昼と夜の境目に差し掛かる逢魔が刻。

夜がやってくる。

紫が香霖堂を出て暫く歩くとどこかに控えていたのであろう橙が姿を現した。

「そろそろ蓬莱山輝夜との約束の刻限です。
飛びますのでお手を……」

そう言っつて橙はフワリと浮き上がり紫に手を差し出す、紫はその手にそつと手を重ねる。

「紫の波長の出所が突然変わったって言ってたけど、ウドンゲの言ったとおりね」

紫が振り向くとそこには一人と二羽の従者を従えた蓬莱山輝夜がいた。

「御機嫌よう、輝夜姫」

紫は妖しい笑顔で柔らかくそう言う。

「御機嫌よう、境目の魔八雲紫、貴女に私の永遠を貸しに来たわ」

輝夜は楽しげに微笑む、夜の帳が下りる、耳の長い従者の持つ提灯が影を長く引き伸ばす、橙はそれを気味が悪いと思った。

「協力感謝するわ」

紫は空間に指を差し入れる、縦一文字にスツと指を下ろすと空間がズルリと割れ赤黒いスキマが顔を覗かせる。

軽く一礼し紫はスキマへと消える。

「先にお入り下さい。

私は最後に参ります」

橙の招きに輝夜の一団は夜の闇と共にスキマへと消える。

今宵は新月

いつもは闇夜を支配する月が姿を潜め、星々が今夜は自分が主役だと一斉に瞬きだす、それは何かの始まりを告げる合図のようでもあった。

また一つ、歯車が填まる。

読んでいただきありがとうございます。

ガイア仮説

一般にはガイア理論と言い、1960年代に化学者ジェームズ・ラブロックによって提唱された実在する理論です。

要約すると地球と生物が相互に関係し合い環境を作り上げていることを、ある種の「巨大な生命体」と見なす仮説です。

型月関連作品でも採用されたり、最近で言えばハリウッド映画の『アバター』もそうです。

ググって見ればわりと解りやすく解説している所もあるので興味のある方はどうぞ……。

さて、我らの霊夢さんが困った感じになっちゃいました、どうなるのでしょ、ちなみに今回のパロディは『ひぐらしのなく頃に』より竜宮レナの台詞『嘘だッッ！』です。

竜宮繋がりで。

次話から時系列が夜に入り物語も詰めに入ります。
ではまた次回……。

第二十四幕 それぞれの幻想郷 〽 & you 〽 (前書き)

いつもどおり二次創作、15禁表示をしました但今のところ15禁ではありません。今後は15禁になる可能性は大いにあります。

今回は挿し絵が入ってます。春風夜風さんからの頂き物です。グレイト、春風夜風さんの『東方な日々。』もどうぞー！。

第二十四幕 それぞれの幻想郷 ～& you～

紅魔館のテラスは異界と化していた。

それはテラスの中央に立つ一人の魔女によるもの、大理石を敷き詰めたテラスには六芒星を中心に幾何学模様やルーンの様な文字が描かれた直径にして5mはある大きな魔方陣がある、その中心、年齢500を越える魔女の少女、動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジその人がいた。

手には何かの革で装丁が施された本が乗せられ、上手く聞き取れない発音の言葉と共に1ページ1ページと独りでに開かれていく、緩やかな風が魔女を中心に渦巻き、その装束の裾を揺らす、心持ち空気がひんやりとしている、それは大量のオドを吸い上げているからだと魔女は言っていた。

一介のメイドである私にはいつもの不穏な紅魔館の空気なのだが、お嬢様はこの空気は魔界のそれだと言う。

魔界を再現している、と言う事だそうだ。

儀式魔法、大魔法。

霊夢が紅魔館を後にしてすぐにパチュリー様はこの魔法の準備を始めた、血や水銀に宝石を使い、小悪魔に向かって、もっと真つ直

ぐ線を引け角度が違うだの細かい指示を出して約一時間をかけ魔方阵を完成させた。

その後直ぐにパチュリー様は魔法の詠唱に入り現在に至る事およそ二時間、日は沈みかけても未だに魔法の詠唱を続けている、長いとは聞いていたが予想を越えて遙かに長い、それを始まりからずっと私の隣で座っているお嬢様と伴に見ていた、本来なら退屈に欠伸を噛み殺す場面なのだが、短気で気紛れなお嬢様でさえパチュリー様の様子を固唾を飲んで見守られている。

喘息を患われているパチュリー様にとってこのような体力精神力魔力を多く消耗する大魔法の類いは禁忌と言える。

それを分かっている今パチュリー様は魔法を詠唱されているのだ、額に浮いた玉のような汗に荒い深呼吸と時々見せる苦悶の様相が身体への負担を如実に物語っていた。

パチュリー様が柄にもなくここまで身体を張る理由は一つ、それはお嬢様の為だ、歩く事すら億劫がるパチュリー様がここまでする程にお嬢様とパチュリー様の友情は厚かったと言う事。

今までそんな気配すらおくびにも出さなかったのに「いざと言う時に頼れる人を友と言うのよ」なんて、当たり前前の事のように言っている儀式を始めた時は二人の関係の認識を改める必要があるとさえ思った、二人の間には私が知らない事がもつといっぱい有るのかも知れない。

傾いた日が逢魔が刻を告げる、紅い紅魔館を更に紅く染め上げていた夕日は成りを潜め、長く伸びた影も闇に融け出す。

魔方阵を描く線がうっすらと夜光虫の様に光り、中央に立つ一人の魔女を照らし出す、その姿は美しくもあり、今すぐにも折れてしまいそうな危うさもあった。

今夜は新月、一番暗く、吸血鬼を始め、魔女や妖怪など夜の住人ナイトウオーカーにとつて最も相性の悪い夜、帳が落ちた。

夜がやってくる。

山から観る夕日は遮る物が無く、その眺めは素晴らしい、傾いた日の朱色が山肌や人里の風景に陰影を作り出す、大きくなりすぎた湖さえ今は幻想郷に彩りを与えていた。

守矢神社の境内から見下ろす幻想郷の景色と共に眺めるその景色は格別のもの。

私の好きな景色の一つだ。

「早苗、こんなところに居たのね」

振り返るとそこには八坂様が立っていた。

「もう時間でしたね、直ぐに行きます」

射命丸さんを取り込み幻想郷の危機を救う、その為の作戦開始の刻限は日没前、今がそうだ。

その作戦に置ける私の役割は極めて重要でそれは私にしか出来ない事、私は緊張の余り幻想郷の夕暮れに少し逃避をしていたのかも知れない、私達の作戦は誰が欠けても成り立たないものなのに……いや、だからこそだろう、誰が欠けても、それはつまり自分が欠ける事も許されないと言う事、自分の双肩に幻想郷の命運が架かっていると言っても過言ではない。

正直に言うとは怖い、怖くて怖くて仕方ない、私が失敗すれば人が死ぬ、死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、間違いなく死ぬ。

でも私はプレッシャーになんて負けてはいけない、何故なら私は現人神だから……、人にして神、神にして人、神らしくあるうと努力しているつもりだ、でも神らしくあるうとしても、自分は弱い人間なのだ、心がその重圧に押し潰されてしまいそうになる。

本当は逃げたい。

でも、出来ない……。

それはやはり、自分が神だからだ……。

ならせめて見た目だけでも神らしく振る舞おう、それが守矢神社を守る巫女のあり方だ。

八坂様には心配は掛けられない、私は気丈に振る舞い八坂様に笑顔
顔を向け軽い足取りで歩き出す。

笑顔も上手く出来たし動きにだって不自然なところなんて無い、
大丈夫……、上手くやれてる……。

そんな私を無言のまま片手で制し八坂様は私の隣に来るとさつき
私がそうしていた様に眼下に広がる幻想郷を眺める、そして少し微
笑んだ。

「……少しだけ時間があるわ」

私も倅い、同じように幻想郷を見渡した。

幻想郷は美しい。

そう思った。

「こうやって観てみると大きくなりすぎた湖も綺麗ね、不謹慎かも
知れないけど……」

沈黙を破るように八坂様はそう言う。

「……私も綺麗だと思います」

私も素直にそう感想をもらした。

「私はこの景色を観る度に幻想郷に来て良かった、そう思うわ……」

八坂様は独り言のようにそう呟き、先を続ける。

「早苗、私達はこの地に守矢神社を移しこの地に根付いた、私達はもう幻想郷の一部になった、私は幻想郷の神として必ず幻想郷を守るわ」

八坂様の言葉は力強く、強い意志と神としての使命感を感じた、それは同時に同じ神でもある私も持つべき使命感なのだ。

今の言葉は私にとってはプレッシャーにしかならなかった。

「はい……」

私は一言だけ、そう返事をした。

これが今の私に出来る精一杯の返事だ。

不意に視界が暗くなり、柔らかい感触が顔を覆う。

「やつ八坂様!？」

八坂様が私の後ろ頭を撫でる、正面から抱きすくめられている。

「……ねえ早苗、……怖い?」

「……………」

見透かされていた……、直ぐにそう悟った、まったく誤魔化せてなかったのだ。

「早苗……、貴方に重い役目を負わせている事は私も諏訪子も苦し
く思ってるわ、本当はもつといい方法があるんじゃないかと、今で
もそう思っただけなら……」

八坂様の言葉はどこか懺悔の様でもあったが、それ以上に弱音を
吐いている様に聞こえたのは、その時一際強く私を抱き締めた手に
弱さを感じたからだろうか……。

そして自分の愚かさを知った。

私に幻想郷の未来が架かっているように、八坂様にも洩矢様にも
射命丸さんにも同じものが架かっているのだ、八坂様に至っては私
の分までその気持ちを背負い込もうとしているのだ。

自分だけが苦しいような気になっていた、自分が人間だから、八
坂様や洩矢様は神だからと言い訳をして……、私にとって辛い事な
ら、八坂様だつて辛い事なんだ。

違うのは辛さに負けない心、意志。

その違いは神や人の違いじゃない、心ある者の根っ子の部分なん
だ。

ありがとうございます、八坂様。

その気持ちだけで私には力が湧いてきます。

言葉に出来なかったのは、言葉にすれば泣いてしまいうさだった
からだけど、今は言葉にしなくても伝わる気がした、だから、その
代わりに八坂様の背中に手を回し抱き締めた。

「早苗……」

八坂様の手が私の髪を優しく撫で、子供をあやす様にトントンと背中を叩く。

自分の中に強い意志が芽生えるのを感じた、私はきつとやり遂げてみせる。

そんな私達の雰囲気をぶち壊すように、強い閃光が照らす。

驚いた私達はハツとしたようにその閃光の主を見詰める。

そこにはニヤニヤと笑う洩矢様とカメラを手にした射命丸さんがいた。

「遅いな〜と思ってたら、何やってるんだかね〜神〜奈〜子〜」

「いや〜いい絵が撮れました、見出しは『守矢神社で密愛発覚!?!』悪く無いですね〜」

八坂様は目を白黒させて、私からバツと離れる。

「うっ煩いわね! 諏訪子! と言うか射命丸!! 何馬鹿言ってるのそのネガ寄越しなさい!」

八坂様と洩矢様と射命丸さんは暫く追いかけてここに興じられていた、流石に密愛は無いけど、あんなに慌てる八坂様もなかなかレアだ。

と言うか八坂様着痩せするんですね。

数分もするともう気がすんだのかむくれた洩矢様とばつの悪そうな顔の射命丸さんを両脇に抱え八坂様は帰ってきた。

「悪ふざけはここまでよ」

二人を下ろし八坂様はそう切り出す、洩矢様は衣服を正し既に表情を切り替えている、射命丸さんもだった、余りの切り替えの良さにさっきまでののは全部計画だったのかとさえ思える。

「皆、自分の役割は覚えてるかしら？ 一番大事なのは自分の役割を絶対にやり抜く事、『絶対に助けを求めない事』よ、誰かが誰かを助けると言う事は誰かが自分の役割を放棄すると言う事よ。それを肝に命じて……」

八坂様は皆を見回すと、三様に頷く、それを確認し八坂様も頷く。

「行きましょう……、夜がやってくるわ……」

木々の隙間から夕陽が漏れる、いつも見ている夕陽と違って何か毒のように感じられて目をそらし俯く。

私、犬走椋は普段は哨戒をその生業としている白狼天狗だが、今は兵として駆り出され屯所として仮設された大木の根本に座ってその出番を待っている、回りには沢山の仲間達、これだけ集まっているのだ楽しい話の一つでもあるものだが、雰囲気はとても良いとは言えない。

戦争が始まるのだ……。

開戦は日没を迎えてから……、山の妖怪の総力を持って湖に攻め入る、と言う事だ。

湖にどうやって攻め入るのか見当も付かないが、私の様な下っぱには思いも付かない策があるのだろう、ただその役割が回ってくるのを待つ。

周りを見回す、一様に皆の表情は暗い、恐れとおののき、不安がその表情からうかがえる、私も似たような表情をしている事だろう。

ふと射命丸さんの事を思い出す、全ての天狗に集合が掛かった時に射命丸さんは現れなかった、多少問題になりそうだったが大事の前の小事とその話題は喧騒の中に消えた。

でも、私にはとても気にかかる事だった、射命丸さんは組織のあり方を誤る様な人じゃないし、幻想郷最速と呼ばれるその翼は誰からも一目置かれる私の憧れの人だ。

なんでいないのだろう……。

そんな射命丸さんの事が私を一層不安にさせた、何かに巻き込まれたのか……、それはやはりわからない、ただ無事である事を祈るだけだ。

湖の見張りに回った仲間の白狼天狗の話では異変解決の専門家の博麗霊夢も一度湖上で迎撃され、二度目は湖に潜ったつきり浮かんでも来ないとの事、同じく霧雨魔理沙も行ったきり帰って来ないらしく、僅かな希望も潰えたと言うのが我々下っぱ達の共通見解だ。

人間達がこんな異変無かった事にしてくれたら良かったのに……、事態はそうそう上手くはいかず無かった事に等なる訳もなく、ただただ水位は増え続けた、水位が上がれば希望が沈む……、ただ今はその希望も盛り返しはしないでも最悪と言う事ばかりではない、最初の勢いから推測だと今頃は山の麓も水に浸かってしまうとと言う事だが勢いは最初だけで水位上昇は勢いは衰え牛歩の歩みだ。

かと言って牛歩の歩みでも間違はなくそれは前進である事に変わりはなく、徐々に、確実に、否が応もなく、幻想郷の緑を清んだ水色が蝕み続けている。

とは言っても話は全て噂話に過ぎない、私の目で確認した事など一つも無い、でも山はそんな噂話で溢れていた、それこそ耳を塞ぎでもしない限り嫌でも耳に入ってくる。

半ばノイローゼの様な気分だ、いや……そう思っているだけで既にノイローゼになっているのかもしれない。

こんな時に射命丸さんがいたらな、少しは前向きになれたかもし

れない……。

目を閉じ天を仰ぐ、瞼を透かして夕陽が目をじくりと刺激する、夕日を避ける様に下を向いていたから目が光に慣れていなかったのだろうか……。

それでもゆっくりと瞼を開け夕陽を見詰める、夕陽は既に半分を隠してしまっている。

あの夕陽が全て隠れた時、戦争が始まる。

そう……、夜がやってくる。

八雲紫に連れられスキマをくぐった先には赤とも紫とも付かないよく分からない色を水に落とした様な謎の空間があった。

兎に角気持ち悪い、精神的にもそうだが肉体的にも……、思わず長い耳をたたんでしまいたくなる、この空間は平均感覚がどこか曖昧で上下どころか左右すら上手く認識出来ない、距離感も曖昧だ。

辛うじてこの空間で無いもの、この空間の外から来た人を見る事でやっと自分が知覚出来る、観てるだけで波長が乱れそうになる。

空中、そう言っているのだろうか？ 三次元的に見れば私より高

い位置には何か祈る様に手を合わせ空中に座してひび割れた丸いガラスだか鏡だかと向き合った八雲紫の式、八雲藍がいる、そしていつの間に追い抜いたのか橙が八雲藍の隣に移動していた。

この空間はなんとも不気味だ、他の皆を見ると姫は眉を寄せ、師匠はわりと平然と、てゐは舌を出して「げ〜」と、さも不快と言う顔をしている、私鈴仙はと言うと心の中で「げ〜」と言うだけで姫に習って眉を寄せるだけにしておいた。

先頭を歩いていた紫が振り返る。

「座る場所も観る場所も無いけど我慢して、何せ急拵えだから」

「別に構わないわ」

姫はもう慣れたのだろうか、いつものすまし顔で受け答える、私は暫く慣れそうに無い。

「では早速話に入りましょう、話は二人きりがいいんだけど、いい？」

何故か一瞬だけてゐに視線を投げてからそう言う。

「…………ええ、そうしましょう、話をしてくるから貴女達待ってなさい」

そう言うって姫は師匠に視線を送る、師匠は承知しましたと会釈をして見送る、姫と紫はまたスキマをくぐってどこかの空間へと消えていった。

「……師匠」

「心配はいらないわ、これからの取引は密約にするって事でしょ」

密約、秘密の約束、秘密の盟約、不安気な眼差しを向けると師匠はそう答え先を続けた。

「紫は保険をかけた……、と言うよりも本当に何でも言う事を聞くってのを言いたかったんじゃない？」

「……どう言う事ですか？」

「八雲紫にしてみればどんな難題が飛び出すかわかったもんじゃないからね、正直私達以外にバレると不味い内容かも知れない、でも逆を返すと他所にバレると不味い内容の言う事でもきく、と言う意思表示でもあるのよ」

「……ん……私や師匠も他所になるんですか？ 姫が言いふらすかも知れませんか……」

「姫には口止め出来ると思うけど、一人口止め出来なさそうなのがいるでしょ？」

そう言うって師匠はてみをチラリと見る。

あ……、確かに……。

この口に蓋が出来るとは到底思えない、多分コイツに秘密事を教えたら次の日には尾ひれがついて幻想郷中に知れわたる、拡声器片手にビラを配って回るてゐの姿がありありと浮かんだ、別にそんな

事をされた経験は無いがコイツなら絶対にやりそうだ。

正直ろくなヤツじゃない、それに比べやっぱり師匠は頭が良いな、私は師匠の尊顔でも仰ごうかと見てみるとちよっと不審な点に気付く。

「……師匠、機嫌悪いですか？」

よく見れば、と言うより毎日顔を会わせている私がよく見ればと言う感じだろうか、そんな雰囲気をつかがわせた。

「……確かに機嫌が悪いわ、今回は間違いなく脇役だもの、異変が解決するまでは多分ずっとここに居る事になるわ」

「そうなんですか？」

脇役決定と言うのはいただけない、幻想郷はやっと見付けた私達の居場所なんだ、出来るなら自分の手でどうにかしたいとまでは言わなくても手なり足なり出したいとは思う。

「八雲の式の前にある鏡が分かるかしら」

八雲藍を指差し師匠はそう言う、私は頷き、てゐは欠伸をした。

「あれはね、幻想郷と外の世界を分ける結界の二重存在よ、別の言葉を使えば写し鏡」

師匠が一度視線を向けてくる意味が分かるか？ と言う事だろう。理解は……、出来ない事はない、多分呪いの人形みたいなもの……。

呪いの人形、人形に呪いの対象の体の一部を込める、例えばそれは髪の毛だったり爪だったり……、そして呪法を用いて呪いを完成させ、そして人形を対象と存在を共有させ人形を傷付ける事で対象を傷付ける、意味合的には近い事だろう。

私は分かる、そう意思表示する為に頷いた、師匠はそれを良しとし先を続ける。

「今回の黒幕は結界をこじ開けて外の海と湖を繋げた、紫も勿論黙ってない、あの写し鏡を修復する事で結界を修復してるんだけど、黒幕が結界をこじ開ける力と紫の結界を閉じる力が拮抗してるみたいね、写し鏡はヒビだらけ、いつ決壊しても可笑しくないわ、今回の姫への頼み事はあの結界関連よ、間違いなく……。」

そうなると結界をこじ開けようとしてる黒幕をどうにかするまではね……。」

腰に手を当て溜め息をつく、つまり、仕事は結界をどうにかするまで、そして結界がどうにかなるのは黒幕を倒すまで……、確かに出番はなさそうだ……。

「私も黒幕を一発殴ってやりたいけど、私は姫の側にいないといけないから……。」

私と師匠は顔を見合わせ同時に溜め息を、てゐはまた欠伸ををする。

師匠は見えない外を見るように中空を見詰める。

「夜もふけた頃でしょうね。」

今夜は新月、見る月も無いなら兎は跳ねず、月の民は大人しくするわ」

私は別に十五夜お月様を見ても跳ねはしないけど、私達は姫の従者だ、姫に従い今回は大人しくしてる事になるのだろう、たぶん……、やっぱり不満はあるけど仕方ないのだ。

てゐるは地面かどうかもわからないところに横になって寝ている、
どつと言う神経をしてるのかわからない、私は溜め息をつくど師匠も溜め息をついて溜め息が被る、何だか可笑しくなって二人で笑った。

いい明日がくればいい、そう思った。

その日のうちにここに来る事になるとは思わなかった。

冷たく頬を撫でる水が意識をクリアにさせる、視界がほぼ0に近い暗い湖を潜り、異変の現況、綿津見三幡の元へ向かう、一度目は不覚にも返り討ちにあつてしまったが今度は負けない、博麗の巫女の名にかけても……。

そんな事を思っていると少し虚しくなる、私のこの博麗と言う苗

字は多分神社の名前からそのままなんだろうし、普通の人のように代々受け継いだ名前じゃないし、私の霊夢と言う名前すら誰が付けたのか、そもそも誰かが付けたものかも分かったものじゃない……。

霊夢、霊に夢

実体も無く不安定な魂の形

現の陰、けして現実でない夢想

自分の名前すら気持ちの悪いものに感じる、今までは人からもらったもの、名前をくれた人の思いがこもったものと思って大事にしてきたつもりだが、何の事は無い、人の気持ちなんてこれっぽっちも詰まってもやいない、自分の名前すらこんなにも不快だなんて……。

私にはもう理解が出来ていた、私が異変を解決しようとするのは私の本能なのだ、私は異変を解決する、それだけの用途の為に造られた人間なんだ。

私は物事に固執しない性格だが、今回の事は人並みにショックな事だった、正直全部投げ出して家に隠ろうと思ったのに異変を解決しようと思う気持ちだけは止められなかった。

異変を解決しなければいけない、その気持ちだけが一人歩きをしている。

もう納得するしかない、私は異変を解決する為だけの存在なんだ、なら異変を解決しないなら私の存在価値なんてない、だから私は異変を解決する、絶対に。

私にはそれしか無い、それだけしか無い。

暫く進めば暗い水の底にうつすらと明かりが見え始める、ぼくと

発光する半円球の結界に囲まれた館、水竜宮だ。

> i 4 5 5 9 | 3 6 8 <

結界をすり抜け石畳に着地する。

「待っておつたぞ」

石畳のずっと先、距離にして100m、綿津見三幡は長い着物の裾をゆらゆらと揺らし佇んでいた。

その声が拳銃の引金であったかのように私はゼロタイムで御札を放つ、死ね、心の中でそう呟く。

蹴り脚で地面を抉り敵に向かって一直線に疾駆する、あらゆる雑音が消え私の目は敵だけを捉えていた。

敵は手に持つ玉から光弾を放ち御札を相殺する、弾幕と弾幕が引き起こした白煙はお互いの視界を奪い乾いた焼ける様な臭いが辺りに立ち込めた、その白煙に乗り飛翔の軌道をかえ敵の頭上を取る、飛行速度に重量加速度を加え白煙を突き抜け急加速急降下、こめかみに目掛けて蹴りを放った。

敵は片手で私の蹴りを受け止める、煙のブラインドは役には立たないらしい、そのうえ足を掴まれている、体勢的には不利は否めない。

「まったく……、挨拶もろくに出来ぬのか、と言いたいところじゃが……、なんじゃその目はつまりらぬ目をしよって」

敵の不愉快そうな視線が癪に障る。

お前なんかと喋る事なんて無い！

封魔針を放とうとした瞬間、ヒュツと何かが風を切る音が聴こえ、直後に背中を鈍痛が襲った。

気付いたら結界の天井を見上げていた、馬鹿力で強引に地面に叩き付けられたのだらう、肺の空気が全て吐き出された様に呼吸が出来ない。

「余り弾を飛ばさんで欲しいのじゃがの」

そう言つて指差した先には柱に縛りつけられた魔理沙がいた。

「言っておくが人質ではないぞ、じゃが弾に当たって怪我でもされるのは不本意での、お主もそうである？ 折角助けに来たのじゃから」

「……知らない」

何を言つておる？ とても言いたいのか、小首をかしげ眉を寄せる。

「知らないわよ、魔理沙なんて……、私はあんたを倒しに来たの！ それ以外の事なんて知らない！」

上半身のバネを使い空いた脚で敵の顎を目掛け蹴りを放つ、敵は半歩下がり蹴りを交わす、だが脚を掴んでいた手は緩んだ、そのまま手を引き剥がし蹴りの反動のまま空中で一回転し着地する。

第二十四幕 それぞれの幻想郷 〽 & you 〽 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

何だかじわりとお気に入り登録が増えてきてじわりと嬉しいです。

春風夜風さんの挿し絵もマーベラスな感じでブラボー、実にスパシ
ーバな感じです。

さて……本編の話

話がまとめに入ってる感じです。

予告！

海底に響く謎の地響き、地上では妖怪達の進軍が始まる。

パチエの大魔法、守矢組の作戦迷走する山の妖怪達、自分に迷う霊
夢、紫、そして魔理沙

その運命やいかに……。

募集事項

水竜宮の後に書くものの主人公を募集します。

募集しますと言うかりクエストです。

感想のついでなり、最新の活動報告のコメントなりメッセージなり
によりしくお願いします。

わりと悩んでるので人助けくらいの気持ちで言って下されば幸いです。
す。

いつもどおりの二次創作、山の妖怪達が動き出す、その先に待ち受けるものは……。

視点切り替え事に時間軸が前後します。 こういった事を書くのは妥協なのですが、ひとえに私の不足の致すところです。 御容赦頂ければ幸いです。

山の妖怪の連合軍と呼ばれば適切だろうか……、天狗や河童をはじめ、付喪神などの八百万の神から変化の類へんげいまで山に住む様々な妖怪達が一同に会し霧の湖に向かっていた。

目的は一つ、幻想郷を沈没させようとする輩を排斥する事だ。

あの幻想の存在を否定する海と言う存在、全ての妖怪や神でさえその存在に恐怖を抱いている、蛇に睨まれた蛙のように、それが当たり前であるように恐怖していた。

私、河城にとりもその一人だ。

辺りを見回す、皆が皆同じ目的の為に自分達の為に行動しているのに皆の足取りは一様にして重い、恐怖は沼の泥のように重く足に

まわりつく、行くなと言っ本能の警告なのかも知れない、でもそれは考えてはいけない事だ、私達は仲間なのだから、その結束を乱してはいけない……。

「にとり、早く終わるといいね」

私の目線より少し上、白髪に白装束、白狼天狗の犬走椀がフワフワと飛びながら話し掛けてきた、彼女は私の友人の一人でよく飲む相手の一人だ、行軍中暗い雰囲気嫌気がした時に偶然見付けて話し掛けて、目的地までは喋りながら行こうと誘ったのだ。

とは言ってもやはり暗い雰囲気はどうにもならない、私の足が重いように、彼女の羽根も重い。

「そうだね……」

そうとしか応えようがなく、私はそう応えた。

「……終わったら、一緒にまた飲みましょね」

彼女は笑ってそう言う、無理をしているのだろう、その笑顔はどこかぎこちない。

「ええ……」

私は力無くそう返事をする、その時だった、椀の大きな耳がピンと立ち何かを警戒するように瞳孔が広がった。

「どうしたの？」

探る様に両耳を正面に向けている、何かが起こった、あるいは始まったと言ふ事が……。

「……先頭の方で何かあったようです、少し急ぎましょう」

私は頷き椀と共に先を急いだ……。

暫く走り湖に近付くにつれ椀が感じた喧騒は私にも感じれるものになってきた。

そして湖畔に着いた私の目に飛び込んできた風景には困惑を示す他無かった。

羽根を持つものは空に、持たぬものは地にそれぞれが様々な様相で岸を囲む様に立っていた。

手に刃物を持つものもいれば素手のものもいる、怒鳴り声をあげるものもいれば口を一文字に結び耐える様に黙るものもいた、様々な妖怪達だったがただ一つ皆に共通している事があった。

それは表情だ。

何か怒りと戸惑いを混ぜ合わせたような、そんな顔。

「にとり、あれを！」

椛が指差した先、それは妖怪達の視線の先でもあった。

そこにあつたもの、いや、いたものと言つべきだろう、それに私は他の妖怪達同様に戸惑いを隠せないものだった、空中に浮く千年級の巨木程の太さがある数多の柱、その中心にそこに地面があるかの様に空中に方膝を立て胡座をかく妖怪の山の頂きに住む女神じよしん、風神、八坂神奈子がいた。

勿論、それだけではない、八坂神の隣にはもう一人の神洩矢諏訪子、守矢の巫女東風谷早苗、そしてもう一人射命丸文がいた。

「嘘……、なん……で……？」

守矢の神達は文字どおり立ち塞がっていた、どう考えてもこれから一緒に戦う為に待っていたというようには見えない、回りに浮く御柱があくまで標的として私達を捉えているからだ、それはつまり、敵として私達の前に立ち塞がったと言つ事……、でもそんな事はどうでも良かった、どうでも良かった。

「射命丸さんが……何で……」

呟いたのは椛だった、そう射命丸さんが何故かそこにいるのだ。人質では勿論無い、あんな堂々とした人質なんていないはずだ、裏切った？ そう言う事なのか？

それが私にとって一番シヨックな事だった、『私の友達が湖を調べに行つたつきり戻って来ない、自分達もそうなってしまうのでは』と不安をもらした時、私を励まして飛び立った射命丸さんが何故あんなところにいるんだ、まったくわからない。

椛のシヨックはきつと私以上だろう、椛は誰よりも射命丸さんを

尊敬している節がある、目には涙を浮かべ、嗚咽を漏らすまいと唇は強張り目の前の状況を受け入れたくない様に首を小さく横に振っていた、シヨックぶりは表情からも見てとれる。

見ているだけで痛ましい、でも椋には悪いが、その表情を見てみると逆に冷静になれた、慌ててはいけない、人が乱れた時こそ冷静にならなければならぬ、冷静に状況を見極めなければならぬ、私は味方の情勢を見極める為に辺りを見回した。

皆の怒りと戸惑いは見てとれるがあくまで待機をとっている、よく見れば指揮に当たる大天狗が一ヶ所に集まっている、事情が変わった為の作戦会議と言う事だろう……。

出来るなら、この行軍は無かった事になればいい、そう思った時だった、ゴゴゴゴゴと地の底から響くような低く大きな音が響き渡る、地震、あるいは火山の様な音だった、それは湖から響く、誰もがそこを注視していた、勿論私も、そして私達は驚くべきもの目撃した。

夕風が陸風に変わる、ゆっくりと目を閉じれば微かに頬を撫でる風がそれを教えてくれる、目を開ければ霧の湖の湖畔には山の妖怪

達が徐々に集まり始めていた、まるで陸風が妖怪達を連れてきたように少し愉快だと思った。

「神奈子、そろそろかな」

隣にいる諏訪子がそう話し掛けてくる、そして早苗と射命丸も私を見詰めている。

「ええ……そろそろね……」

岸辺で大天狗達が一ヶ所に集まり話をしている、私達の登場は予想外だったのだろう、出来ればゆっくりと話し合っていて欲しい、その方が私としても楽だし、その後の事もだ……。

ただ大天狗達も悪戯に話を先伸ばしにする事は無いだろう、むしろ結論は早く出してくる、おそらく我々への交渉役がすぐにくる。交渉内容は恐らくこうだ。

『我々に協力するならよし、そうで無いならこの場を去れ、もし去らねば……』

勿論、協力は出来ないし去る気もない、まあ協力してやらないのではないが……。

それは言えぬ事だ。

私は皆を見渡す。

「諏訪子、調子は？」

「感度良ー好ー」

「早苗、やれるわね？」

「はい！」

「射命丸、任せたわ」

「任せて下さい」

三者三様に決意を示す、私もそれに応え力強く頷いた。

「行くわよ、準備を始めて」

私の合図で皆が動き出す、早苗は私に背を向ける様に湖と向き合い私の背後に、諏訪子は早苗の隣に、射命丸はウォーミングアップをする様に軽く翼を羽ばたかせる。

私は大天狗達の動向に注視する、話はまとまったようだ、じきに交渉役がここにくる、私は交渉には応じる気は無いし、むしろ交渉の場すら作らせない、一匹の大天狗がゆっくりとこちらに向かってくる。

「……作戦開始」

私は皆にそう告げる、そして皆は動き出す。

諏訪子は合掌し目を閉じ、全神経を針の様に尖らせる。

「早苗、射命丸、黒幕を捕捉したよ、把握した？」

諏訪子の問い掛けに早苗と射命丸がはいと答える。

早苗は御幣を手に指で格子状にドーマンを切り、五芒星にセーマを切る、東風谷に風祝の口伝に伝わる秘術、早苗が持つ奇跡を再現する。

『開海』 海が割れる日

奇跡が完成する。

低い地鳴りの様な音は徐々に大きくなり驚天する程になる、地が動く程の地鳴りを響かせ湖はゆっくりと割れた、奈落に繋がる様な途方もなく暗い海の裂け目、その幅は凡そ3m、それが早苗の成した奇跡だ。

早苗の額に汗が滲む、けして楽な術ではない、本来そう難しい奇跡では無いのだが今回は規模が違う、並の湖の深さならせいぜい十数メートル、そんな湖を割るのは訳が違う、今回はその深さ八千と二十メートル、太平洋を日本海溝を割るのだ。

その必要とされる力や集中力は並大抵ではない、失敗出来ない精神的重圧もさることながら、単純な物理的重圧の桁が違う、ただそれを成すのが奇跡でもある。

早苗が積み重ねた修練と研鑽の結果なのだ。

「射命丸さん！」

早苗の合図を受け、射命丸がそれに応える、その手には洩矢の神具の一つ『鉄の輪』が握られている。

そして幻想郷最速の翼が駆けた、その翼に目一杯の風を集め風を操り空気が爆ぜる音を残り暗い海の谷底へと消えていった。

射命丸が見えなくなったのを確認し私は前を向く、皆が己の役割を果たすために動く、そして最後……、私の番だ。

ゆっくりと息を吸い吐く、覚悟を決めよう……、そう思つて苦笑する、覚悟なんてとつくの昔に決めたものと思つたのに随分今更だ、交渉にやってくる大天狗ではなく群れた妖怪達でもなく、私は妖怪の山を見詰めた、陸風がさっきより強くなっただろうか……、山からの吹き下ろしの風が気持ちいい。

いい夜になりそうだ……。

「よく聞け山の妖怪達！」

妖怪達の視線が私に集まりざわめきだす、交渉役であろう大天狗もその翼を止めた。

「私は風神、八坂神奈子だ！ 訳あってお前達を今通す訳にはいかない！」

ざわめきが一層強くなる、大天狗もそうだ、何かあるとは思っていても私達が邪魔をするとは思っていなかったはずだ、大天狗達も混乱している。

妖怪達の戸惑いが見てとれる。

でも……、戸惑ってもらっちゃ困るのよ……。

一本、大天狗達に御柱を投擲する、ヒュツという風を切る音と共に御柱は地面に突き刺さり、轟音と共に砂ぼこりを撒き散らす、私の御柱だ生き物ならまともにあたれば勿論死ぬ。

だが、当たってなどいない、当たらないようにしたのだ、そうこれは狼煙、わかりやすい、ただの合図。

用意ドンというヤツだ。

「怪我をしたくなければ大人しく山に帰りなさい、貴方達は山の隅で膝を抱えてガタガタ震えている方がお似合いよ」

我ながら安い挑発だとは思う、が、今なら充分に有効だ。

天魔と話がついたとは言え、その下に位置する大天狗達の中には新参である私達に不満を持つ者は勿論いる。

そういった連中なら、今なら、挑発に乗ってくる、そして一人が動けば二人が動く、二人が動けば四人、四人が動けば八人、倍々ゲームは最後の最後、行き着くところまでいく、それが群衆心理、結局集団の動く動かないは声の大きなヤツが動くか動かないかの差でしかないのだ。

大天狗達の意見も一致したのだろう、一匹の天狗が狼煙を上げた、

狼煙なんてもう上がってるのに……。

妖怪達が海のうねりの様に私へと押し寄せ、その数は千かあるいは万にも匹敵するだろうか？ ふと日本を一つにする為に空を駆けた日の事を思い出す、諏訪子との出会いもこんな空の下だった気がする……、諏訪子との出会い自体は殺伐としたもの、最初は敵同士、諏訪大戦の両軍の大将同士だったのだ、今ではお互いに背中を任せる関係、変われば変わるものだ……。

背後からは不安そうな諏訪子の波長を感じる。

ふふ……、安心しなさい、私を誰だと思ってるのよ。

本当は私より達観してくせに変なところは心配症だ、まあ私達の中で一番危険の少ないポジションってのもあるのかも知れない。

さあ、来るわ。

諏訪子にも早苗にも指一本、弾幕の欠片さえ触れさせはしない、お前達はせいぜい命の炎を燃やしなさい。

「神に挑むその意気や良し！　だがそれは蛮勇と知りなさい！　私は八坂神奈子！　乾を創造する風の神なり！　地から足を離れた時点で一分一厘、いや一毛一糸の勝機も無いと思いなさい！！」

始まった。

口火を切って放たれた天狗達の弾幕一斉掃射、神奈子を囲むような鶴翼陣形から放たれる弾幕は土砂降りの雨をそのまま弾幕に変えたようなものだった。

避ける等と言う選択肢は端から無く、正面から受け止めるしかない、神奈子はそれを御柱と結界の複合障壁で対処している。

私と早苗の背中を守る為に神奈子はその全てを防いでいた。

山の妖怪達の攻撃は実にイヤらしい。

いや、この場合は上手いと言うべきだろう……、弾幕の一斉掃射打ち手が疲れてきたら後ろに控えた第二陣が前に出て一斉掃射の繰り返し、休む間もない弾幕の嵐だ、織田信長が似たような戦法を使っていた気がする……、統率の取れた動き、あくまで淡々と敵を倒すと言う事を前提にした動きだ。

本来、単純に妖怪個々の戦力を足した場合、山の妖怪を全て足しても神奈子の方が上だ、でも戦争は足し算じゃない、山の妖怪の様に策を労する事によって、新たな加算が生まれる、実際にそれを太古の諏訪大戦で見せ付けたのがその神奈子自身なのだから皮肉な話だ……。

いくら神奈子でも防戦一方だと疲弊も見えてくる、まだ数分だと言うのに大きく肩で息をしている事が背後の気配から感じられる、

射命丸が戻るまで、それまでは持ちこたえないといけない……。

私達の作戦自体はシンプルなものだ、先ず私が黒幕の位置を捕捉する、海底であれ地に足をつけているなら私にわからない訳はない、それを早苗と射命丸に念で教える、それを元に早苗が海を割り道を作り射命丸をその道を通って敵陣に切り込み黒幕を捕獲、地上に引きずり出す、そして集まった妖怪達と共に黒幕を一気に打つ、神奈子はそれまでの間の時間稼ぎ役だ。

だが、ただ時間稼ぎをする訳ではない、妖怪達は海への恐怖に怯えている、怯えを残したままでは恐らく負ける、何せ八雲紫と博麗大結界に大穴を開けるような化物だ、妖怪達の怯えを消す為に神奈子はあえて敵として立ち塞がっている、苛立ちを向ける対象になったのだ。

それにしても作戦の立案者だからと言って神奈子は無茶をし過ぎだ、「一番かつこいいから」なんてふざけてたがそんなのは嘘なのは早苗だって分かっている、でも間違いないく妖怪達の矢面に立つの役は神奈子が一番なのだ、生憎だが私には出来ない役目。

問題はそれだけではない、神奈子も長くはもたないだろうが早苗も長くはもたない、神奈子同様に早苗の疲弊も見てとれる、なにせ水深8020mの日本海溝を割るのだから並大抵ではないのだ、正直10分も持たない、計算の上では幻想郷最速の射命丸で往復が可能と呼べる範囲、そのギリギリのラインも今夜と言うもつとも海の潮が引き、海が浅くなる新月だからこそ可能な作戦なのだ。

新月と言う星の巡り合わせにはツクヨミノミコトに感謝してやらないといけないうら……。

神奈子の作戦はベストのはずだ、海底に乗り込む方法は無くもな

いが海底はあくまで相手のフィールドだ不利は否めない、地上に引きずり出すのはこの作戦しかない、でも、本当にベストだとは思わない、性格なのだろうけど神奈子は自分で何でもやり過ぎ、と言うか……、私が楽すぎるのだ……。

自分だけ楽しちゃ大団円の後のお酒が美味しくないからね、私も少し苦労させてもらう、ある程度の余裕を加味してギリギリ使える神力を割り出す、神奈子も余裕は無いし、早苗も限界が近い、疲弊と言うより最早必死に耐えていると言う有り様だ、当初の計算よりも早苗は持たないかも知れない、そんな私の可愛い子孫の姿はやはり見るにたえない、私がやるしかない、計算がズレようとそれをカバーするのもやはり仲間であり家族だ。

『土着神』 洩矢神

私と早苗を中心に蛙を模した結界を作り出す、防御に特化しては無いが、射命丸が戻るまでの数分は持つ、自由に動ける様になれば神奈子も陽動をかけながら飛び回れるようになる。

私のスペルカードの意味を理解し神奈子は直ぐに飛び立った、高速で飛び回る神奈子を上手く捕捉出来ず山の妖怪達は相討ちを恐れ弾幕を張れない、個の能力差がある以上は群の利点を活かさせなければ神奈子に負ける道理は無い、後は油断しなければ大丈夫だ……。

そう思った時だった、水飛沫を上げ水面から何かが飛び出した。

射命丸？

え……？ 違う……。

光を背に舞い上がる人魚がそこにいた、手には三又の槍、その視線と矛先は早苗を捉えている。

視界がスローモーションの様にゆっくり、ゆっくりと動く、音など無いかの様に静まり返る、シンとも音がしない。

狩人が弓を引き絞る様に人魚が三又槍を振りかぶる、早苗を私の結界ごと貫く為に……、スローモーションの視界で人魚はゆっくりと動く、思考は普通なのに私の体はゆっくりとしか動かない、早苗は気付いてさえない。

そりゃそうだ、早苗は私や神奈子が守ってくれると信じているんだ、だから今の奇跡に全神経を集中している、気付くはずがない。

『海神槍』 スピア・ザ・トライデント

放たれた、心臓を、早苗の心臓を目掛け真っ直ぐと槍は放たれた。

間に合わない……。

槍は早苗の胸に吸い込まれる様に飛んでくる、嘘だ、こんな事なんて無い、早苗、早苗、早苗！

.....あ

読んでいただきありがとうございます。

山の妖怪達が動き出し、そして守矢組の作戦が発動、作戦も順調かと思いきや当然現れた人魚が早苗の命を狙う。

そんな感じの東方水竜宮第二十五幕でした、基本的三人称で進むこの話、このへんで視点が15くらいあつたと思います……。多いです。

様々な視点から一つの異変や物事を見ていく狙いなのと、普段二次創作で出てこないキャラに喋らせたいってのがあります。

でも流石にごちゃごちゃして分かりにくいのでは仕方ないです。次、書く時にいかしたいです。

さて……、今回の解説

霧の湖

チルノが出たりする紅魔館をレイクサイドマンションに仕立てあげるあの湖、常に霧が出ているそうです。一周に徒歩で一時間程度との事……そんなに大きくはありません。

ちなみに紅魔館は湖畔にあるとも湖にある島にあるとも言われ原作設定でもはっきりしていません。

付喪神

物に宿る魂や神、普通は神か妖怪、基本は非生命体が年月をへて成る、多々良小傘がそう、百鬼夜行絵図の妖怪は付喪神が多い。

付喪は当て字で本来は九十九、九十九とは長い年月という意味です。

ツクヨミノミコト

月讀命、ツクヨミ、月の神格化した夜を統べる日本神話の神、アマテラスの弟でスサノオの兄

『海神槍』スピア・ザ・トライデント

ギリシャ神話の海洋の神、ポセイドンの持つ三又の槍、三又の鉾、神槍スピアザングングニルのオマージュ

早苗は諏訪子の子孫

公式設定です。

じゃあ諏訪子って人妻？ って言われたりしますが、あの時代の神様は無機物と子供を作ったりするので我々の常識で捉えてはいけないのでしょうか……、ただ子持ちなのは間違いないはず……、ちなみに早苗は諏訪子が自分の祖先である事を知りません。

陸風と夕風

陸風は夜になって陸地と海の温度差によって起こる陸から海に吹く風、昼は温度差が逆になるので海風が吹きます。そして陸風と海風の中間の無風状態を凧と言い、陸風から海風に以降する時を朝凧、その逆を夕凧と言います。

日本海溝

日本列島の東にある海の谷間、水深8020m、超深い。

さて……次回、水竜宮へ向かう射命丸、そして狙われた早苗はどうなる？

追伸、水竜宮の次の話の主人公リクエスト募集中です。

第二十六幕 運命 く f a t e く (前書き)

いつもどおりの二次創作、始まる戦い、守矢組の思惑どおりに進むかに見えた局面は人魚の乱入により歯車が狂い出す、放たれた凶刃の行方は？ 早苗の運命は？

残酷な表現があります、そういった事に耐性の無い方はご注意ください。

第二十六幕 運命 く f a t e く

早苗に向かつて飛んでくる三又の槍は防ぎようが無い事を諏訪子は直感した、敵の強襲はあまりにも突然であり、奇襲と言いついで申し分ない効果を發揮した。

三又の槍の行く末を見詰めるのはただ二人、諏訪子と槍を放ったシレネッタだけ、他の誰も、神奈子も山の妖怪達も、狙われた早苗本人でさえ気付いてはいなかった、どうしようもない、どうする事も出来ない、三又の槍は早苗に命中する、それが運命であるかの様に、抗う事は出来ないと諏訪子は絶望した。

そして槍はやってくる。

槍は諏訪子の結界を紙でも破る様に貫通し、早苗の胸に突き刺さり人が生きる為に必要な臓器を引き裂きながら早苗の体を貫通した。心臓を抉り、肺を破き、左の腕を肩ごと奪い、瞬きをする暇すらもなく東風谷早苗を絶命に至らしめた、圧倒的な死がそこにあつた。

「いやあああああああ！……！」

諏訪子の絶叫が木霊する、余りの悲痛な叫びに神奈子は振り返り、それを目撃した。

手を伸ばせば届く程の距離にいたというのに、油断した自分のせ

いだという自責の念、大切な家族の死、それら全ての感情が叫びと
なつて絞り出される。

その瞬間だった、不思議な事が起こつた。
いや、起きていた。

上空から飛来した槍が早苗を襲う三又の槍を弾き飛ばし、早苗を
救つた。

三又の槍は早苗を貫通していない、傷一つ負っていない、早苗は
そもそも三又の槍その物の存在に気付いてすらいない、三又の槍は
早苗に命中する前に叩き落とされたのだ。

現象だけを端的に言えばそうなる、肺も心臓も左腕も奪われてな
どいない、でもそれは絶対の矛盾、早苗は確かに死んだ、生きてい
るはずがない、早苗の死をなんとかして否定したいと願つた諏訪子
でさえ、早苗が助かつた事が信じられなかつたし、三又の槍を投げ
た人魚でさえ何が行つたのか理解出来なかつた。

理解出来るのはその場でただ一人。

「ハッハッハッハッハッハ！」

闇夜に高笑いが響く、そこに居合わせた全ての者が空を見上げ、そして例外なく全ての者がそれを目撃した、それはその場にあるはずの無いものだった、あり得ないものだった。

それは天上に輝く巨大な“紅い満月”

新月である今日に絶対にあり得ないはずの月がそこにあった、血の様に紅く、世界を紅に染める。

「そつだ！ 仰ぎ見よ！ この紅い月を！」

居合わせた者は月が喋ったのかと誤解した、だが目を凝らせば異常なまでに大きな月を背に立つ者の姿が見える、紅のドレスに身を包む有翼の童女、紅い悪魔、運命の吸血鬼、レミリア・スカーレットがそこにいた。

死ぬ運命にあつた早苗を救つた、レミリアは早苗の運命をねじ曲げたのだ、普段なら不可能である程の運命への介入、因果律への介入、それをレミリアはやってみせた。

「私の親愛なる友の最高傑作だ！ 凄い！ 凄い！ 凄いぞ！ 力がみなぎる！ 最高だ！ 最高の気分だ！ ハッハッハッハッ！」

紅い月、血の様に紅い月を背に吸血鬼が笑う、その光景を居合わ

せ誰一人もが目をそらす事が出来ない、有り得ない月、有り得ない幻想がそこにあつた。

有り得ないなんて事は有り得ない、それが幻想郷であるというのに……、きつと紅い月が余りにも禍々しく、そして余りにも美しかったから。

時は数分遡る、ここは紅魔館のテラス、大魔法の釜と化したそこは何ら魔術の素養の無い者でも尋常ならざる自体である事が見てとれる程に異界。

この大魔法の術者であるパチュリー・ノーレッジを中心にそれは発生している、血と水銀で書かれた魔方陣は既にその構成成分としての形を失い赤く発光する光の魔方陣となつて中空に浮かび術者を中心にクルクルと回る、紫電は獣の様にテラスを這い回り草木を焼き、土を焦がす、最初は微かだった風も今では小さな竜巻の様に渦巻きパチュリーのドレスをはためかせた。

もうすぐ術式が完成する、その確かな手応えにパチュリーは満足していた、我が友のため最高の幻想を再現してみせる、パチュリーはそう心に決めていた。

完成の手応えを感じながらパチュリーはタイミングを図る、守矢神社の神達の計画は偵察に出した使い魔で知っていた、その計画に便乗し今回の黒幕を引きずり出すところで最高のコンディションのレミリアを送り出す、それがパチュリーの計画、それがこの魔法……。

「パチュリー様、守矢神社の計画が実行されました」

咲夜の報告にパチュリーは首だけで返事をする、タイミングも悪くない、日没後四半時に合わせて詠唱が完了する様にしたのも成功するだろう。

パチュリーが完成させようとしているのは月の魔法、通常の月魔法なら詠唱する小節は八小節、だが今回は月の三乗、八小節×八小節×八小節、詠唱五百十二小節の大魔法。

喘息を魔法で無理矢理抑え込んでの事なのでパチュリーは少し後が怖いと思った、でも、それでいい、レミリアを助けるのが一番だが、少しワクワクしている、自分はやはり魔法使いなのだ、手探りのぶつつけ本番だが新しい魔法を成功させるのは快感を感じる、きつと稗田のお嬢ちゃんの本にも今日の事は載るだろう、名を残したいなんて毛ほどにも思わないが何年かしてその本を読んで今日の事を思い出すのは楽しいだろう、愉快的気分だ、そう思って自嘲する。

さあ……………、頃合いだ。

無いなら、創ればいいだけの話。
しかと見なさいパチュリー・ノーレッジ、珠玉の魔法、幻想の月
を！

『月月月符』 マーブル・ファンタズム

そして現れた。

紅い月が、既にそこにあつたかの様に、雲を欠き消し紅い月が世界を深紅に染めた。

魔法の完成の直後にパチュリーは倒れる、膝を丸めヒューヒューと折れてしまいそんな息を吐く、喘息の発作だ、パチュリーは慌てる小悪魔や昨夜を尻目に魔法で無理矢理抑えたツケが回ってきたのだと諦めにも似た達観をしていた。

最後の方でレミアアを見る、下から見上げたレミアアは月を背にパチュリーと視線を交わす、そして親愛なる吸血鬼は頷くと空気を爆ぜらせ湖へと飛んだ。

やっぱり、レミィは月が似合う……、パチュリーはそう思う、死ぬ程苦しいが後悔はない、憂いもない、ただ満足だった。

「お前は確か霊夢を倒した人魚だな？」

レミリアは笑う、紅より紅い瞳は獲物を狙う狩人の目、その笑みは絶対的自信の表れ、満月の夜の吸血鬼は文字どおり無敵、それはシレネッタも理解していた、更に不意打ちに失敗し今は数の不利は否めない、海を割り王女に仇なそうとする輩を排除する事は困難となつた事を理解した。

レミリアの翼が風を巻き込み空を翔る、紅い槍そのものになつたかの様に疾駆し紅い瞳の残光は尾を引きシレネッタの元へと一直線に飛来する。

人の目ならその姿を見失う程のスピード、その場に居合わせた妖怪達ですら移動した事に気付く事すらやっと、妖怪達はそれを切っ掛けにざわめきと共に我にかえる。

シレネッタは視線を月から正面に戻し、居丈高に振る舞うレミリアと視線を合わせる。

「いい前座だ、お前を縊り殺せばボスも出てくるだろうしね」

シレネッタは奥歯を噛む、それは想定外の最悪のシナリオだった、

相手は明らかに格上で更に後ろには無数の敵、自分が死んでも海を割った人間さえ倒してしまえば内容はどうあれ勝ちだ、誰も王女に手を出せない。

王女を守る、三幡様に降りかかる火の粉は全て払う、全て受け止める、何としても守りたい、負けて王女に何かあつてはならないのだ。

シレネッタは短剣を取り出した、何の変哲も無い両刃の短剣、何かするのだろうか。レミアは思った、今のレミアなら例え頭に刺さると胸を穿とうとどうと言う事は無い、短剣程度なら引き抜くと同時に再生が完了する、恐る事は無い。

だが、次にとつたシレネッタの行動は意外なものだった、短剣を左手首に添えるとそのまま勢いよく引いた、動脈が裂け赤い血がスプリングラーの様に飛び散りシレネッタの頬を、髪を、服を赤く染め眼下の湖へとボタバタと注がれる。

自害したのか？ レミアは一瞬そう思ったが直ぐにそれは勘違いである事を悟る、敵の目は死んでいない、何も捨ててはいない、あれは何かを掴もうとする者の目だ、元より手首を切った程度で妖怪は死なないし人間ですらその程度ではそうそう死なない。

滴り落ちる血は湖に消える、大きく一息つき、シレネッタは宣言をした。

水面が盛り上がり人型を作る、成人した人間程のそれは子供が作った粘土の人形の様だった、だが特筆すべき事があるとしたらそんな事ではない、その水人形のディテールなんて人型をしている事くらの説明で十分と言える、問題はそこではない、その数は百や二百ではない、ここに集まった妖怪達の数より遥かに多い、下手をすれば三倍、いやそれ以上か……。

何か切っ掛けがあつたのだろうか、前触れも無く水人形達は次々に思い思いに飛び立つ、幽霊の様で何か緩慢、だがけて遅くなくむしる速い、岸边に集まる妖怪達へと殺到していった。

「ふざけるな――！――！」

レミリアは激昂する、人魚を捻り潰そうと出てきたのに、とうのシレネッタは妖怪達全員を相手取ろうとしているのだ、このレミリア・スカーレットと一緒に、まとめて相手をしようと言うのだ、プライドの高いレミリアにとってそれは愚弄に他ならない、怒りを爪に乗せシレネッタへと一直線に疾駆する、そして立ち塞がる水人形に引き裂こうとした、その瞬間レミリアは弾かれる様に後退した、冷たい汗が伝うその表情に焦りが見える。

あれはヤバい、何かヤバい、何がヤバいのか分からないがとても嫌な予感がするのだ、レミリアは直感でそう判断し後退した。

「うー！ 助け……！」

何者かの悲鳴、レミリアは振り返る、そこには二体の水人形にしがみつかれ振りほどこうともがく天狗がいた、最初は必死に暴れていたが直ぐにぐったりと力を失い、最後に消えてなくなった。

そう消滅、天狗は消滅した、跡形もなく、そこには最初から何もなかったかの様に……。

よく見ればそこかしこで同じ現象が行っていた、水人形にしがみつかれ消えていく、消える、消滅していた。

レミリアは自分の直感に間違いが無い事を確信した、あれに触れてはいけない、あのまま爪で水人形を引き裂いていたら自分がそうなってしまうたかもしれないのだ。

「灰は灰に、塵は塵に、土は土に、幻は幻に……、受け入れなさい、『幻の死』を……」

シレネッタはそう呟く、幻想に対する致死毒である外の世界の属性を持つ海の水、幻想否定の水を人型にし操る、外の世界にいて尚、幻想として存在しゆる幻想であるから出来る技、『幻と実体の境界』『博麗大結界』に守られた幻想達には触れるだけで存在を否定され、母なる原初の海へと消える。

レミリアは迫り来る水人形をかわしながら、紅い弾幕で消し飛ばす、水人形の耐久力など妖精にも劣る、一薙ぎで二桁にも及ぶ数を葬っていた、だがレミリアの顔には余裕は無い苦虫を噛み潰す様に苛立たしげに眉を寄せる。

切りがない、そう思った。

湖からは次々に水人形が湧いてくるのだ、それこそ湧水のようにこんこんと、レミリアが十倒せば二十、百倒せば二百、そう思わせる程しつこく、執拗に、水人形は湧いてきた。

山の妖怪達も最初の一波で多数の犠牲を出したが直ぐに態勢を立て直し被害を抑えた、指揮系統が優秀であったからと言える、だが多勢に無勢、防戦一方と言う状況は否めない。

あくまで肉弾戦を本領とする吸血鬼レミアも例外では無い、触れないというのは思った以上にやりにくい、無数の弾幕を持って一撃にして水人形を消し飛ばす、だがレミアアに向かってくる水人形の数は他の妖怪達とは明らかに数が違う、少なく見積もっても五十、しかも倒しても倒してもその数は減るところが増える一方だ、苛立ちとジレンマだけが鬱積していく、その雰囲気を感じシレネッタはほくそ笑む、それこそが狙い、相手を苛立たせ焦りで統率を奪う、力が足りないなら技で補うまで、普段なら何の役にも立たない水人形達も幻想郷の住人達には必殺の技となる、今や水人形達は最強の壁であり、最強の攻撃、妖怪達は自分の身を守る事で精一杯だ、今度こそトライデントであの海を割った女を葬り去る、シレネッタは再度スペルを編む。

『海神槍』 スピア・ザ・トライデント

確実に息の根を止める、この手で直接……。

「やっと敵のお出ましね」

いつの間にか……、そこにいないはずのモノが前からそこにいたかの様に目の前に、突然に現れた、認識出来たのは青い髪と赤い服、

それ以上の事を認識する前に体の側面を打ち付ける衝撃によって意識は欠き消される、横に流れる視界を何か不思議な事に理解出来ずシレネッタは吹き飛ばされた、受け身など勿論取れない、勢いそのまま鋭角に落下し水柱を上げて水に沈む、余りの痛み、既に痛みとすら認識出来ない程の痛みは気絶する事すら許さない、シレネッタは混乱しながらも自分が意識を保っている事を玉稿と判断する、いやそもそも自分が生きている事に幸運を感じるべきだったかも知れない。

瀕死の様相で水から敵のいる空へと向かう、幾つか潰れた内臓のせいだろう、口から大量の血をドボドボと吐く、普通の妖怪なら既に死んでいる傷を負っていたが、人魚の血が有ればこそ、吸血鬼程では無いが高い再生能力が素早く体の欠損を修復する、シレネッタは自分を襲った敵を睨み付けた。

「神奈子ごめん、さっきは油断したよ」

「本当よ、まったくびっくりしたわ、諏訪子、こついうのはもうやめてよね」

「ごめんごめん、結果オーライって事で許してよ」

海を割った人間、東風谷早苗の前を守護する様に八坂神奈子と洩矢諏訪子がシレネッタの前に立ち塞がっていた、不思議な事に水人形達はその三人を避ける様に通り過ぎている、神奈子は浅く溜め息をつくとしレネッタを見据えた、軽い感じで話をしていた二人だったがシレネッタはその二人と目が合った瞬間に戦慄をおぼえた。

最初はまた攻撃を受けて体を貫かれたと思った、実際は違う、余りにも巨大な殺気、怒気を浴び体は貫かれたと錯覚したのだ。

それは文字通り神の怒り、一度形にすれば全ての生き物を死に至

らしめる大自然の驚異そのものと言える。

「昔は崇りを怖れて神様を怒らせようなんて連中はいなかったのね」

「本当よ、さ……、落とし前をつけてもらおうかしら」

神奈子は何か挨拶をするかの様に片手を挙げる、それは合図だった、神奈子の背後の空間から無数の木柱が浮かび上がる、無数に浮かぶ木柱一つ一つに巨大な力が秘められ例え一つでも当たれば必殺は免れない。

「いつもは避けられる様に投げるんだけど、今回はそんなつもりは無いわよ」

『神祭』 エクスパンデッド・オンバシラ

手を振り下ろす、木柱がシレネッタへと投擲され様とした、その時だった、異変が起きた。

割れた湖が閉じたのだ。

「早苗！」

諏訪子が振り向くと真つ逆さまに落下する早苗がいた、意識は無い、投擲されるはずだった木柱は霞の様に消える、諏訪子は直ぐに追い水没するあわやというタイミングで早苗を受け止めた。

気を失いぐったりとしているが、呼吸はしつかりとし命に別状が無い事をうかがわせる、力を使い果たし力尽きたのだ、諏訪子は少しホッとしたが、同時に予想外の自体に動揺する、それは神奈子も

同じだった。

湖が閉じるのが早すぎるのだ、早苗が湖を割り、その限界が来るより早く射命丸が帰ってくる計算だった、けして余裕があるとは言えないがギリギリと呼べる程危険な賭けではない、だが、早苗は予想より遥かに早く力尽きた。

神奈子達が策を労し多数の戦力を揃えても敵を地上に引きずり出さなければ勝負にならない、ここで敗けが確定してしまうのだ。

だが、二人の神の思いとは裏腹に低い音と共に湖が閉じる。

射命丸は……………間に合わなかった……………。

第二十六幕 運命 (f a t e) (後書き)

読んで頂いた皆さん、ありがとうございます。

結局、早苗は助かると言うベタな展開です。

週刊少年跳躍じゃありませんがブリーチみたいにある意味では王道というか若干ワンパターンな展開です。

そして中二病成分は濃いです。

中二病なのは私の作風だと解釈して頂ければ幸いです。

そんな感じの東方水竜宮も最終局面に向けて動き出しています。

守矢組も思ってた様に事が進まず苦労しています。

シレネツタもジリジリしています。

今回は水の下のお話になります。

『月月月符』 マーブル・ファンタズム

ご存知な人はご存知のアルクエイドの空想具現化のパロディです。マーブル・ファンタズム

あくまでパロディですが固有結界の上位みたいこの技、何のバックアップも無い魔法使いが使うと大変だという事です。

本当は魔法使いではなく魔術師と言うべきですが……、ちなみに月が大きかったり真つ赤だったりするのはパチエのレミアアに似合う様にと言うイメージの影響です。

でかいのは自意識のせいだったりします。

実はテンション高めのパチエさんです。

神奈子の御柱投擲

ゲートオブバヒロン
王の財宝のイメージで書いてます。

最初はメテオリックオンバシラでも使わせようかと思いましたが如

何にも上位っぽい名前の技を使うのは安っぽいのでやめました。
ちなみに私のイメージの中の話なら地図がかわる勢いの威力があります、でも地図をかえる程度の事なら諏訪子の方が得意なんですよ
ね、全盛期なら……。

『拐符』妖精ニクス

ドイツの水の妖精で人を拐うそうです。

欧州の妖精は子供を拐う伝承は多いです、妖精に拐われた子供は頭が可笑しくなると言います、知的障害児に対して昔の人はそういう解釈をしたものという考え方をされています。

そんな感じですよ。

では、また次回東方水竜宮をよろしくお願いします。

第二十六幕 幕裏（前書き）

いつもどおりの二次創作、今回は本編の大筋から若干離れた、霧の湖での決戦の裏話です。

第二十六幕 幕裏

山からの風が白い尾を揺らす、今の私の気持ちを現すかの様だ……、私、犬走椀は目の前の局面に役目を忘れ立ち尽くしている。

陣頭指揮に当たる大天狗のもと鼻高天狗、烏天狗、白狼天狗、山伏天狗からなる編隊が鶴翼陣形を持って山の頂きに住む神、八坂神奈子に向かって弾幕の雨を降らせている。

戦局は八坂神奈子の防戦一方、障壁で弾幕を防いでいるが弾幕の雨に隙間も切れ目も無く反撃の余地も無い、寧ろ防戦でも勝負として成り立っているだけ凄いと思う、並の妖怪なら……、いや、名の有る妖怪でも正面から受け止めきれるとは思えない、それ程の弾幕なのだ。

質が足りないとしても量でカバーする、小石を持ち上げるのは簡単でも小石の詰まった俵を持ち上げるのは簡単ではない、そういう事だ。

少なくともこちらが攻撃を続ける限り戦局に変化は起こらないだろう、先陣を切った天狗の隊とは別に大天狗が河童を初めとする山の妖怪達に今後の作戦を説明している、即席でも簡単な連携の有る無しでは違いがあるはず、幻想郷の未来、自分達の未来の為に勝利の確率は一分一厘でも上げて起きたいのだ、檄を飛ばす大天狗やそ

れを聞く妖怪達の姿を見ていればそれは我が事のように理解出来た。

我が事のようにでは無く、本当は我が事なのだが、私はいまいち自分の事のように理解出来ないでいた、原因は分かっている、射命丸さんの事だ……、私達山の妖怪の前に立ち塞がる山の頂きに住む神、その神と一緒にいた射命丸さん……、少なくとも人質では無い、脅された等でもなからう、そんな理由であんな力強い顔が出来るはずがない、射命丸さんは望んであそこにいたのだ、自分の意思で自分の信念を持ってあそこにいたのだ、射命丸さんは自らの意思で私達の敵に回ったのだ。

射命丸さんが私達の敵に回った事は間違いない、事実として八坂神奈子と戦闘が始まった事に揺るぎはなく、必然的に射命丸さんも山の神側という事になる、その事実は私には重く、受け止める事は出来なかった。

本来なら私は天狗の編隊に加わり作戦に参加するはずなのだが、私はそれが出来ないでいる、射命丸さんが裏切った事が受け入れられない、そのせいで私は一歩前に踏み出す事が出来ないでいる、射命丸さんは私の憧れの人で誰よりも速く誰よりも真つ直ぐに自分の信念を貫く人なんだ、そんな人が仲間を裏切るなんて事は信じられない。

胸に穴が空くという比喻表現は実能的を射た表現だと思う、今の私はまさにそうだし、そうとしか表現出来ない、虚無感が心を支配し、体は鉛のように重い、果たすべき役目も果たせない私はただ立ち尽くす。

「射命丸さん……」

口から漏れた言葉は雑踏に消える、誰の耳にも聞こえてなどいな

い、ふと視線を上げる、二人は神と一人の人間が防戦をしかれている様子が目に入った、このままなら山の妖怪が敗ける事は無いだろう……、でも……あの神に勝って何になると言うのか？ 私達の目的は大きくなる湖を止めるために敵を倒す事、あの神達が敵だと言うのか？

そんなはずは無いと私は思う、仲間の中には今回の黒幕だと思っ
ているものも少なからずいるみたいだが動機が無いというのもある
が私にはあの三人が何より幻想郷に仇をなすとは思えない、一人の
少女を必死に守ろうとする二人の神の姿はとても真つ直ぐで迷いも
躊躇いも無い、間違いを犯している様には見えないのだ。

もしかしたら……、間違えているのは私達じゃないのだろうか？

あの三人は正しいんじゃないだろうか？

射命丸さんは正しいんじゃないだろうか？

気付いたら飛び出していた。

私は空を翔る、月の無い空は暗い、炸裂する弾幕の光だけがいや
に目についた、夏の花火の様な春の空、私はその中心に向かう、何
をするのか？ 勿論決まってる、あの馬鹿みたいな騒ぎを止めに行
くんだ、だって射命丸さんは正しい事をしているはずなんだ、間違
ってなんかいない、だから私は射命丸さんの力になる。

でも私の声はきつと誰にも届かない、山の妖怪達だって、山の神
にも届かないだろう、私のやろうとしている事は無駄かも知れない、
たぶん無駄だ、あの狂乱の中に一人で乗り込んで出来る事なんて無

い、それでも私はやらなければいけない、私は正しいから、射命丸さんは正しいから、どこまでも真っ直ぐなあの人の様に真っ直ぐでなければ私は翔べない。

私は翔ぶ、正しく、真っ直ぐに……。

第二十六幕 幕裏（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回のお話は続きは無くストーリー上の重要性は無く拡張性もありません。

この後、椛がどうなるかはわかりませんが、私の中では出来てはいませんが文章化の予定はありません。

余り話としては重要では無いと思うというのが理由です。

じゃあ最初から書くなよという話ですが椛の気持ちを書いてみたかったのです。

私の我が儘、身勝手に書いたものですが、温かい目で見て下されば幸いです……。

話は変わって若干原作ネタバレ

ダブルスポイラーが発売され射命丸と椛が仲がいいかも知れないという淡い期待が潰れてしまい原作との矛盾点が増えてしまいました。やっぱり出版関係で繋がりが無いからですかねー。

うーん……。

第二十七幕 幻想郷大戦（前書き）

いつもどおりの二次創作、交差する守山の神、山の妖怪、紅魔館、
そして人魚と竜神。

早苗は力尽き海は閉じた、そして戻らない射命丸、頓挫する作戦、
幻想郷に打つ手はあるのか。

第二十七幕 幻想郷大戦

暗い水の谷を谷底目掛けて翔る、下降気流を翼にはらませ亜音速まで至る、底冷えを起こしそうな寒さは頬を刺すように刺激し空気を引き裂く黒い風切り羽からはビリビリと痺れる様な感覚が伝わってくる。

極寒、真冬でもここまで寒くはならない、そもそも真冬なら厚着はするし寒いのでそんなにスピードは出さない、条件はさておいても私は翼を弛め徐行運転とはいかない。

私の目の前に開かれた道幅は三メートル程度の水の谷間、あの三人が作り守る道。

私はこの両翼に賭けて作戦を完遂させなければならぬのだ、早苗さんが開き、八坂さんが守り、洩矢さんが導き、私が黒幕を捕まえる。

この道の先にいる黒幕を守矢神社の神器『洩矢の鉄の輪』で捕縛し地上に連れ帰る、それが私射命丸文に与えられた役割だ。

『洩矢の鉄の輪』には洩矢さんのありったけの呪いとも呼べる祟りの力が込められどんな強力な存在でも短時間なら自由を奪う事が出来るとの事、かなりの優れもの……と言いたいところだが大きさは直径で1メートル半はあり、鉄製でとても重い、単純に飛ぶ邪魔になるし今は下りだからいいが、帰りは上りなので苦勞する事だろ

う……。

でも私がやって出来ない事では無い、何より私がやらなければならぬのだ。

早苗さんが湖を割り作った道は今回の黒幕の元まで続いている、左右からは水が落下する濁音が響く、感覚的には滝に挟まれてる感じだろうか……、既に真つ暗で目視で確認する事は出来ないが音の感じだとそんなところだろう、こんな真つ暗でも飛んでいられるのは洩矢さんが私に念話（？）を使って直接場所をナビゲーションしてくれるからに他ならない、左右の水の壁との間隔と黒幕までの距離が感覚としてダイレクトに頭に伝わり様々な過程を飛ばして理解する事が出来る、随分と不思議な感覚で最初は戸惑ったが慣れればどうという事は無い、何とも説明が難しい感覚だが長年住み慣れた家なら暗闇でもすいすい歩ける感じ、例えば一番違いかもしれない……。

今は私が飛び出しておよそ二十数秒、往路の半分はとうに過ぎた、地上から湖底（海底？）までは驚く事に妖怪の山を縦に二つ並べた高さに近いらしい、更に位置関係のせいで真つ直ぐ下に降りるわけにもいかず斜めに降りるので距離で言えば10kmを越える、話を聞いた時は信じられなかったが体感した今となっては信じざるを得ない、海という物は途方もなく深いのだ。

到着まで後十数秒、私に与えられた時間はおよそ数分、時間制限があるというのは思いの外プレッシャーがある、間に合わなければ幻想郷の未来は無いし山の仲間達も死ぬ、そして私は海に沈み存在を根こそぎもっていかれ消滅する……、導火線に火の着いた爆弾を抱えて走る様な気持ちだ。

こんな気持ちで翔ぶのは初めてかもしれない、本当は逃げ出してしまいたい気持ちもある、逃げてしまえばどんなに楽だろうと思う、自分がやらなくても霊夢達がいつもの様に解決してくれるのではと思ってしまう、でもそんな考えが甘い事は分かっている、今回は万全を期してもしたりないのだ幻想郷の存続、何より仲間達の命がかかっている、だから私は一步も引かない、足はすくまない、翼はぶれない。

ふと暗闇の先からボヤッと夜光虫の様な光が漏れ出す、どうやら目的地に着いたようだ。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す、不安な気持ちを吐き出すように……。

「ああ……、いよいよ本番ですね」

大きな地鳴りの様な音が響きわたりそこにいた三者が三様に戸惑いをしめしていた。

玉ぐしを握り締め博麗霊夢は驚愕の表情、柱に縛り付けられた霧雨魔理沙は大口を上げ端から見れば少し間抜けな表情、綿津見三幡は啞然としていた。

地鳴りと共に海がゆっくりと割れる、幅は大したものではない、海という大きな視点から見れば小さな隙間程度のものだ、だが小さいとは言え海を割るという事はとてつもないエネルギーが働いているという事、尋常の沙汰ではない、でも今注視しなければならぬのはそこではない、海は水竜宮の真上で割れた、更に言うなら綿津見三幡のちょうど真上で割れた。

三幡は確信した、何者かが自分に照準を合わせ海を割ったのだと……。

何かが来る、三幡はそう確信し来るべき敵を待ち受ける為に海の割れ目を見詰めた。

突然、パンツと何かが破裂する様な音が海の割れ目から響く、それとほぼ同時に何か重いものが地面に落下した様なズンという音が響く、三幡はハツとし音の正体を確認しようとする自分のすぐ下、足元に目を向けた。

そこにいたのは黒羽の少女、一本歯下駄を踏み締め立つ超音速の少女射命丸文、自然と二人の視線が交差する。

「おのれ……」

三幡は敵の術中にいる事を知る、そして抵抗が間に合わない事を射命丸の勝利の表情が物語っていた、射命丸の手には三幡の体をその輪に通す様に鉄の輪が握られている。

龍の眼をもつてしても捉える事が出来ない速さが存在するなどとは考えもしなかった、だがそれも仕方無い事だ、射命丸が水竜宮に強襲した際に叩き出したスピードはおよそ時速2000km、音を置き去りにする程の速さの前に何人の目視も許さない、それでも三幡は出し抜かれた屈辱に激昂する、竜神としてのプライド、超越種としての自負がそれを許さなかった、射命丸の頭を握り潰そうとその手を伸ばす。

「この下郎め……！　ぐっ！　があ！？」

鉄の輪から墨で染めた様な黒い瘴気が溢れ三幡にまとわりつきジユクジユクと締め上げる。

「地上への片道便、付き合ってもらいますよ」

射命丸が地面を蹴り飛び立つ、海の裂け目を目掛け重力に逆らいながら風を纏い加速を繰り返す、これからが射命丸文に与えられた役割の最後の詰め、三幡を地上に引きずり出す、射命丸は全てを賭け疾走した。

「啞然とした、地響きと共に海が割れただけでもびっくりしたが更に射命丸が三幡をかつさらって行った事には更に驚いた、私も霊夢も啞然とするしかない、鳶に油揚げをさらわれた様な気分と言えば適切だろうか？　さらっていったのは鳶ではなく鴉なのだが……。」

時間にしてみれば数秒の出来事、いや1〜2秒だったかもしれない、それくらいの一瞬の内に事は終わった、柱に縛られた私と違って戦闘中だった霊夢は未だに啞然としている、口をポカーッと開けて、私もさっきまでそんな顔をしていたと思うと少し情けない気分になる……。

「霊夢がやっつと気持ちを切り替えたのか腹立たしげに海の割れ目を睨み付けていた　私はそれを黙って見詰める。」

「霊夢が私の方に振り向き自然と目が会った、少し焦りや迷いや困惑をごちゃ混ぜにした様な顔が印象的だ。」

「霊夢、地上に行く前に縄をほどいてくれると助かるんだが」

「わ……私は！　私は……っ私は！」

「……私はじゃ分かんないぜ」

「私は！　異変を解決する為だけに造られた人間なの！　それだけ」

の！ それだけの人間なの」

だからどうした？ そう言ってやりたいが聞かなくても何となく分かる……、霊夢が世界の意思によって生まれたってのは三幡との暇潰しの会話で聞いているし早急の霊夢の様子を見ればある程度察する事が出来る。

霊夢との付き合いは長いとは言わないが短くも無い、それでもあんな霊夢を見るのは初めてだ……、何だか怯えた仔犬の様で見えない気分になる、凶太い女だと思ってたが……意外や意外、人間ってのは分かんないものだ、妖怪も分からんけど……、後魔法使いもだな。

霊夢は何か振り払う様に駆け出し海の裂け目へと飛び立った。

「やれやれだぜ」

私を柱に縛り付けていた縄がバサリと落ちる、少し痺れてしまった手をブラブラさせて誤魔化す。

種明かしになってしまいが私は最初から縛られてはいなかった、縄を胸の当たりに引つ掻けて後ろ手に持ってば端から見れば柱に縛られている様に見えるという寸法だ、ずっと同じ姿勢だと流石に手も痺れてくる、思ったよりきつかった。

最初は本当に縛られておくつもりだったけど三幡が「流れ弾に当たっても知らぬぞ」と言うし一度は負けた身分だし少しくらい言う事を聞いてやってもいいだろう、そんな感じでいつでも逃げられる様に縛られた振りをしていたが……、思った以上に霊夢は精神的にきているみたいだ……。

「私は幻想郷を助けに来たつもりだったんだがなー、後はうちの家

計も……」

どうも幻想郷よりも先に霊夢を助けてやらないといけならしい、三幡が霊夢に霊夢の秘密をばらした時の霊夢の様子は尋常じゃなかった。

自分の信じてた自分を否定された霊夢の気持ちは分かる

とは言えない。

でも、分からないとは言わない、霊夢は今、自分が分からなくなつて自分を見失つて、不安で不安で堪らなくて、そして自分の世界から与えられた役割とやらにすがりついいる、藁を掴む様に、それくらい霊夢は揺らいでいるんだ。

「馬鹿……相談しろよ、友達だろ」

悔しさと苛立ちにガリガリと頭を掻く。

「お前が何なのかなんてお前が一番知ってるだろ」

何が悔しいかなんて知ってる、何が苛立つのかも知ってる。

「霊夢は本当に人に頼るって事しねーんだよな」

そんな霊夢の何でも一人で抱え込んでしまうところが嫌いだ、今まで一度も悩みを打ち明けられた事なんてない、誰にも頼らず自分だけでどうにかしようとする、回りからは悩みが無い、頭が春だと言われるくらい、自分を誤魔化して悩みなんて無いふりして、年頃の女の子と変わり無いくらい悩みだつてあるくせに、私だつて気付いている、あいつが一人でつく溜め息が軽いか重いか分からないほど私も鈍感じゃない、私はあいつの友達なのに……、それが堪らなく

悔しい。

「まったく……、ふざけてるぜ」

そしてそんなあいつに何もしてやれなかった自分が一番苛つく。

拳を握る、指先の感覚が戻った事を確認し柱の影に隠しておいた筈を取り出す、長年使い込んだ筈はしつくりと手に馴染む、全身に編み上げられた魔力の回路を通して筈に魔力が伝わり筈と体が一つになった様な感じが伝わってくる。

私は魔法使いだ。

出来ない事を出来るようになる為に魔法使いになった、何だって出来るようになりたくて魔法使いになった、何でも出来るから魔法使いなんだ、だから今の私は魔法使いじゃないのかもしれない、誰が私を魔法使いと認めても自分は認められないかもしれない。

友達一人救えなくて何が魔法使いだ、それじゃあ地べたを這う団子虫の方がまだましだ、そんなものは魔法使いじゃない。

「じゃあ、なるしかないよな……」

柄を握り締め筈に股がる、意識を自分に向け集中する、回路を通して魔力が身体中を駆け巡り筈を介して推進力に換える。

「魔法使いに!!」

光の尾を残し魔理沙は駆けた。

帰りは行きに比べると段違いにキツイ、予想はしていたが残念な事に予想を越えてかなりキツイものがある。

幻想郷最速を自負する私の飛行能力は種族としての特性に加え保持する能力に由来する、風を吹かせ追い風に乗る爆発的な推進力を得る、だが幻想郷最速であっても常に最高速とはいかない、私の持つ風を操る力をフルに使って追い風に乗って翼が軋む程飛ばしても思う様に加速しない。

私は手にぶら下がるずっしりと重い地上への手土産の事を考えると苦々しく思う、今回の黒幕、諏訪子さんの念話による先導の元に辿り着き私の持てる最速をもって瞬きする間に捕縛した、順調と言える何の不手際も無く完璧な作戦の進行具合と言える。

地上への到着も予定どおりに行くだろう、あくまで計算どおりだ、黒幕を拘束する諏訪子さんの崇りの力の強さのせいかな黒幕は身じろぎ一つしない、暴れられたらこの幅約3メートルの海の割れ目を走破する事は不可能に違いない。

深呼吸を一つ、上空を見上げる、遠く夜の光が淡く降り注ぎ地上との距離を教えてくれる。

.....あれ？

そんな時、違和感に気付いた、おかしい、明らかにおかしい、絶対におかしい。

左右に目を凝らし違和感の正体を確認する、間違いない、狭くなっている、海の割れ目はこんなに狭かったか？

最初の頃は翼を左右の目一杯広げてても余裕があった、だが今はその余裕すらない、海の割れ目の幅、凡そ3メートル、3メートルのはずだった、それなのに今はいいところ2メートル強、狭くなっている。

何故？ 地上で何かあったのか？ 早苗さんの限界が予想よりも早くきたのか？

まずい、まずい、まずい、まずい、このままでは黒幕を地上に引きずり出す事なんて出来ない。

最後の詰で計画が頓挫してしまうなんて冗談じゃない、それでは幻想郷が終わってしまう。

それに このまま私が海に飲まれたら私は死んでしまう、紫さんは言っていた、妖怪だろうと例え神であろうとそれが幻想なら、この海に触れば消えてなくなる、『幻想の意味の死』を迎える、絶対的に消滅する。

悪寒にも似た寒気が全身を襲う、血管に氷水でも流された様なそんな異様な寒気、未知の感覚に戸惑う、何だろう、何なのだろう、この感覚は、こんな感覚は今までに味わった事が無い、千年以上生きてきたがこんな感覚は初めてだ。

もう翼と接触してしまいそうな程に……。

もしかして間に合わない？ 嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、間に合う？
間に合わない？ 分からない分からない分からない。

見上げれば赤い月の浮かぶ空をはつきりと確認出来る程の距離まで来ている、良くてギリギリ間に合うか、最悪の場合……、いや、最悪などと言わずとも間に合わないのじゃないか？

水の壁は確実に、着実に、目に見えて迫っている、間に合わない、きつと間に合わない……。

ふと……、手が白くなる程握り締めていたそれに視線をやる、この作戦の要にして目的、拘束した黒幕の姿を……。

ここでこれを手放せば私は助かる。

荷物さえ手放してしまえば私は全速力で飛べる、そうすれば地上までは楽勝で行ける。

確かに作戦は失敗する、最悪の場合幻想郷は水の底に沈むだろう、でも幻想郷が沈むだけじゃないか……、幻想郷が沈むだけなら別に誰かが死ぬ訳じゃない、幻想郷が駄目ならどこか別の場所に行けばいい、何も幻想郷にこだわる必要は無いはずだ、上手くやれば、ちゃんとやれば誰もしない、誰も犠牲にならない……、そうだ、なら私が犠牲になる必要なんて無いはずだ、誰も私を責めたりしない。

静かに左右を確認する、水の壁はさっきより更に近付いている、

間近にと表現して差し支えない……、一つ深呼吸をしてその両手にぶら下がる鉄の輪に拘束された黒幕の姿を確認する、右手の指がずるりと鉄の輪からほどける。

ゴツ、と岩と岩とがぶつかつた様な音がした、口元から線を引くように血がつたう、右手は諦めたのではなく、諦めようとした自分を殴つたのだ。

はっは……、ふざけてる、まったくもってふざけてる。

誰も私を責めたりしない、だって？ 馬鹿な、ふざけるな、ふざけるな

「ふざけるなッ！！」

例え誰が許そうと、例え誰もが責めなくても必ず一人それを許さない人がいる、最後の最後まで責め続ける人がいる、例え誰が許しても 絶対に私が私を許さない。

離れた右手でもう一度鉄の輪を握り直す、痛いほどに握り締めた手は血が出ているのかも知れない。

一瞬でも諦めようとした自分を恥じた、仲間を救おうという誓いを破ろうとした八坂さん達の信頼を裏切ろうとした、それは絶対に許さない。

「自らの汚名は自らの手で返上するしかないですね……、新聞は信頼が大切ですから、信頼の無い新聞なんて只の紙屑です」

もう迷わない、もう自分に騙されない、「私は前に進む」そう言った自分に偽らない、決意を新たに地上を見上げた。

地上まではもう少し、時間にして10秒強、水の壁は確実に狭まっている、ギリギリになるだろうが間に合うはずだ、いや間に合わ

せてみせる。

その時だった、そう決意したその時だった、ぐにやり……と水の壁がたわむ、糸が切れたかのようにその形を維持出来なくなり水の壁が崩れだした。

「……ッ！」

決壊が始まった、早苗さんが道を維持できなくなった、そういう事なのだろう。

海の裂け目に本来の形を取り戻す様に水が裂け目に雪崩れ込む、あつと言う暇もなく私は左右から押し寄せる水に飲まれた。

全ての計画がパーだ、文字通り計画は水の泡になる、このままで間違いなく……、だが咄嗟に体は動いた、円盤投げの様に半周を描き黒幕を正面に投げる、投げた黒幕は1メートルと進まず止まる、強力な水の抵抗の前に天狗の腕力を駆使しても地上まではまだ遠い、足りないのだ、まだ足りない。

足りないなら、まだ足りないのなら、足すまで！

回転の勢いを殺さず体を捻り一回転、腰に刺した葉団扇を抜き正面に向かい横凧ぎに振るう、呼ぶは烈風、走るは疾風。

『風符』 天狗道の開風

直後に水を攪拌する様に竜巻が現れ黒幕を地上へ向かって吹き飛ばした、水を螺旋に引き裂きながら『鉄の輪』に拘束された黒幕は

地上へと吹き飛ばした。

良かった……、全部無駄になんてならなかった……。

視界がぼやりと霞みだし意識が遠くなる。

何だろう……、これは……。

そして、私は紫さんの言葉を思い出した……。

ああ……。

これが死か……。

早苗は力尽きた、湖に落ちる早苗は辛うじて諏訪子がキャッチし無事だが早苗の術は失効された、既に海は閉じた、射命丸は上がって来ない、射命丸は間に合わなかった、作戦は失敗した。

「ッ！ 神奈子！ あそこ！」

諏訪子は何かを感知したのか静かになった水面を指差す、私が指先を追ったその時だった。

水面が裂け竜巻が発生した、螺旋を描き水を巻き上げ天を突くように様に竜巻は上へ上へと伸びる。

その途中、竜巻が爆た。

内側から強引な力によって竜巻は破壊された、その中心にその女はいた。

「……鴉風情め」

女は手に持っている『鉄の輪』を握り潰す、見た目は二十歳あるかないか、幾重にも重ねられた着物には龍が裾を一周するように描かれている、大きな金の髪飾りに二つに結わえた黒く癖の無い足首まで有りそうな髪、顔立ちは美しく黄金比で造られた彫刻の様だ、だがその目は血のように赤く、肌は幽鬼の様に不気味な程に白い。

間違いない、あれが黒幕だ、射命丸はやり遂げたのだ。

「諏訪子……」

私の問い掛けに無言で頷く、諏訪子もあれが黒幕と核心している。回りを見回す、山の妖怪達もただならぬ雰囲気を感じてか皆同じ様に黒幕を凝視していた。

「私は風神八坂神奈子、幻想郷に戦争を仕掛けようとはいい度胸ね、名前はなんと言うのかしら？」

黒幕は眉を潜めると自分を取り囲む妖怪達を一瞥し薄く笑った。

「総力戦……と言ったところかの……、ふむ、妾は竜神綿津見三幡、随分と丁重にもてなしてくれたものじゃの」

「ゲストをもてなすのはホストの務めだから、丁重に丁寧だね……。いちよ聞いてみるわ、貴女の目的は？」

「目的？ 幻想郷を海で塗り潰す事よ」

「そう……」

静かにそう言った、前触れも無く虚空から現れた四本の御柱が背後で二つのV字を作る、手加減無しの本気、そんな事は諏訪大戦以来かもしれない、竜神とはそういう相手なのだ……、でも最悪の部類だが予想の範囲かも知れない、予想出来ない程の巨大な敵ではない、そして竜神、綿津見。

文字通りに竜族の海神、海神の綿津見三神に縁のある者だろう、神では超の付く有名どころだ、だからこそ自ずと力も予想出来るというものだ。

私が天で諏訪子が地、そして敵は海、この勝負なら有利は有っても不利は無い。
絶対に勝つ。

もう一度諏訪子と視線を合わせる、そして周りを見回す。

「皆の者！ よく聞け！ あれが今回の真の黒幕、倒すべき我らの敵だ！ 幻想郷の存続の為、我々の未来の為に倒すべき敵だ！ 幻想郷の危機は幻想郷の住人たる我々の手で払わねばならない！ これより我々は災厄の主、綿津見三幡を掃討する！ 大天狗！！ 山の妖怪達の指揮は任せる、我らは先陣を切る！ それに続け！」

大天狗の指揮官は最初は戸惑いもあつたが自分の本来の役割を思い出すと部下に適切な指示を飛ばす、ほんの数秒、天狗達の編隊が一斉に三幡を包囲した。

地上では救護を担当する者達が一斉に退避と応急処置を済ませている。

様々な事があり混乱してるだろうと思っていたが山の妖怪達は機敏に行動をする、これならいける……。

三幡を睨み付け宣言する。

「さあ、戦争をしましょう」

空と空間を割る様に無数の柱が真っ赤な夜の空を埋め尽くす、諏訪子の周りに鉄塊や鉱石の塊が浮かび上がる。

三幡は薄く薄く笑う、圧倒的な数の有利など無いとでも言う様にもそんな誤った認識など優しく改めてやるつもりなどない、その体に直接教えてやるまでだ、この勝負勝つ。

一匹の竜を落とす為に妖怪達の戦いが始まる。
幻想郷大戦が始まる。

第二十七幕 幻想郷大戦（後書き）

読んで頂いた皆さん、ありがとうございます。

待ってくれてた人には有り難いと思いつつ申し訳ないです。

前話から凡そ三ヶ月の間を空けてしまいました……。

最初は一週間に一度更新してましたが、なかなかそう続かないものです。

大変申し訳ない……。

さて……、射命丸沈んじやいました、人は辛い時や追い詰められた時に、楽な道や逃げ道を見せられると自分に色んな言い訳をして逃げてしまうものです。それは妥協だったりします。

そもそも逃げる事自体は悪い事ではないのですけどね……。
そんなお話でした。

パロディ

「やれやれだぜ」

ジヨジヨの奇妙な冒険 第三部以降 空条承太郎の口癖

「戦争をしましょう」

化物語ひたぎクラブより戦場ヶ原ひたぎを助けようと追い掛けてきた阿良々木暦に対して放った台詞

次回はいよいよ守山山の妖怪勢と三幡がぶつかります。

第二十七幕 幕裏二（前書き）

いつもどおりの二次創作、主要キャラがわいのわいのやってる横で
繰り広げられる小さなストーリー、超妖怪弾頭 河城にとり 行き
ます！

第二十七幕 幕裏二

湖の裂け目が崩れる様に崩壊し今は既に静かな水面を湛えるただの湖でしかない、多くの妖怪達はその光景を呆然と眺めていた、あれは一体なんだったのか？ 妖怪達の頭に過つたのはその言葉だった、山の新参の神八坂神奈子は海を割り山の妖怪達と衝突し突然現れた下半身が魚の妖怪と戦い、そして湖の裂け目は閉じた。

下半身が魚の妖怪が実は黒幕だったのか？ 勿論疑問に応えるものはおらず呆然と立ち尽くすしかないのだった。

ただ一人、河城にとりを除いては……。

にとりは顔を真っ青にして凍り付いていた、湖の裂け目に飛び込んだ射命丸文が未だに地上に現れないからだ。

それはつまり、射命丸が湖に飲まれたと言う事、触れれば死ぬ湖に飲まれたと言う事……。

その事実がにとりの思考を掻き乱す、友人の椀は山の神達をそして射命丸を庇いに仲間達の前に立ち塞がった、たった一人の妖怪に何か出来る事もなくなただ叫ぶだけで大局に揺るぎなどない、そして紅い月と触れれば妖怪を消す謎の水人形、山の妖怪達の戦列は総崩れになった、そんな様々な要因がにとりの平常心をザクザクに切り崩してしまった。

「嘘……、射命丸さんはまだいるのに……」

指先はカタカタと震え膝から力が抜け地に膝をつく、誰に話し掛けるでも無い言葉に応えるものは勿論いない。

にとりの心を絶望がじわじわと侵蝕しだしたその時だった、湖面が弾けビュオツという風を切る音と共に竜巻が天を突く様に水中から発生した。

誰もが巻き上がる竜巻を目で追った、そしてその竜巻を欠き消し現れた一人の女を目撃した、ただ一人を除いて、河城にとりを除いて。

射命丸がまだ生きている、湖面を突き破った竜巻の意味をとりはそう捉えた、にとりは走り出す、自分がやるうとしている事が如何に無謀かを知りながら、それでも射命丸を助ける為に……。

河城にとりにとって射命丸文は命を賭けて助けたいと思える様な間柄ではない、親しくないとは言えないが普通に話をして酒を飲んだりするだけ、そこら中にあるありふれた関係と言える。

たったそれだけの関係でも、にとりにとって射命丸は仲間だった。様子を見に行つてそのまま消えてしまった飲み仲間の河童、水人形に捕らわれ消えた仲間達、もうこれ以上仲間達が死んで行くのを指をくわえて見ていたくなかった、見ている事が出来なかった。

だからにとりは走る、湖畔から湖に向けて一気に駆ける、無計画と言えるだろう、勝算なんて無いただ助けたいと思つたから、ただそれだけ計算も勝算も打算もない。

助けたいと思う気持ちだけを原動力にしてにとりはその足を力強

く前に進めた。

そしてその足が草の茂る海の水で少し湿った土を蹴り、そして飛んだ。

大きく高く跳躍しまるで水泳競技の高飛び込みの様に着水する、にとりはすぐに射命丸の姿を見付ける事が出来た、射命丸は眠った様に水深にして5メートル程度のところを漂っている。

「透けだしてる……？」

存在が消える兆候だろうか、海月の様に半透明にも見える射命丸の体は今にも消えてしまいそうだ。

にとりは魚の様なスピードで水をかき分け射命丸の元へ進む、河童にとつて水中での5メートルは地上での5メートルより遥かに近いものだ、一息に射命丸へと近付くとその手を掴んだ。

(よし！)

にとりは水上に向き直り一気に水をける。

そして水を掴む強い手応えを足に感じるはずだった、だがにとりが掴んだ感触はそんなものではない、豆腐でも踏み潰した様ににとりの足は空回りした。

(嘘！？ こんなに早いなんて)

にとりは四肢の先からまるで砂糖が水に溶ける様に力が抜けていく、にとりの存在そのものを溶かす様に。

しっかりと掴んでいたはずの射命丸の手も今は掴んでいるのかすら定かではない。

(……いけると思ったのにな……)

幻想の意味を殺す海の水がにとりの意識を溶かし、もう悔しいとも思う事も出来ない、海の底に石が沈んでいく様に深く深く意識は深層へと沈んでいく。

「手を放すんじゃない！」

沈んでいくにとりの意識を引きずり上げる様に誰かの叫びが聞こえた、その叫びは自己の認識すらあやふやになった意識を呼び起す、にとりは水面へと顔を上げた。

(!?)

にとりの意識が今はつきりと呼び戻される、そこには仲間の河童達がいた、沢山の仲間達が手に手を取りお互いの存在を確かめ合う様にその手を握りしめ地上から伸びる一つの鎖の様ににとりへと届いていた。

先頭の河童がにとりの手を掴む、一人で出来ない事も皆でなら出来る、仲間ならそれが出来ると言うかの様にとても力強いものを感じられた。

「引き揚げる！」

先頭の河童の合図で仲間達が一気に動きだす、にとりが地上に引き揚げられるのはあつと言う間だった、びしょ濡れで鉛の様に重い体は思う様に動かさず真つ赤な月を見上げる様に仰向けになっていた、隣からは息を切らして同じ様に仰向けになった仲間がいる、今でも存在を確かめる様ににとりの手を握りしめていた、一度「何でこんな危ない真似を？」と聞きたくなつたがその問い掛けをする事はなかった、そんな事はすぐに分かつたからだ、結局仲間達は私と同じ様に思い同じ様に行動したのだ。

自分が仲間である射命丸を助けようとした様に仲間達も仲間である自分を助けたかつたのだ。

そこまで考えてにとりはハツとする、そもそも自分の目的を思い出した、上手く動かない首を動かし仲間達の握る逆の方の手を向く、自分が助けたかつた者を探す様に。

にとりの目から涙が溢れる、そこにはぐつたりとした射命丸がいた、微かにだがちゃんと息をしている、握った手はちゃんと温かい。

(よかつた、本当によかつた)

にとりは溢れる涙を拭いてもせずに微笑んだ、自分の助けたかつた者の温かみが手から伝わってくる、そしてただただ重い目を閉じ意識をフェイドアウトさせる。

深い眠りに沈んでいく、戦場の真つ只中だったが不思議と不安はなかつた、自分の手に仲間達の温もりを感じる事が出来たから、そして次に自分が目覚めた時にはきつと皆が笑っている、何となくそんな気がしたからだった。

第二十七幕 幕裏二（後書き）

読んで頂いた皆さん、ありがとうございます。

神主曰く河童のイメージと言えばお酒の黄桜のCMのイメージだそうです。

ちなみに私もそうなのです。

そろそろ気付いている人もいるかもですが、この東方水竜宮のテーマは仲間です。

仲間と言っても色々ある訳で大雑把に言えば友人も家族も組織の構成員であろうと上下関係があるうと仲間と言えば仲間です。

反論されれば返す言葉も無いですが、私は相手の事を仲間と思うのがこの一点につきると思います。

皆さんには仲間はいますか？

第二十八幕 神が故に the good (前書き)

いつもどおりの二次創作、射命丸文はその役割を全うした、その意志を受け取り八坂神奈子、洩矢諏訪子、そして山の妖怪達が綿津見三幡の前に立つ、そして始まる。

第二十八幕 神が故に the good

ゴウツという音をたて長さ10メートル余りの御柱が強引に空気を引き裂き三幡を粉碎する為に射出された。

その数は16本。

地形を変える程の威力を内包するそれは容赦ない必殺の一撃、普段の弾幕遊びとは決定的に違う確実に当てにいく弾幕だ。

だがそれだけではない、御柱を縫う様に諏訪子が放つ鉄塊と鉾石塊の弾幕がその隙間を埋める、点攻撃ではなく線攻撃でもない面攻撃、回避という選択を最初から否定する絨毯爆撃だ。

下手をすれば霧の湖そのものが幻想郷の地図からなくなってしまふ程の攻撃である。

だが、それだけではない。

「大天狗！ 畳み掛ける！」

神奈子は更に大天狗に追撃の指示を出す、一分の隙もなく叩き潰す、手加減等有り得ないと言外に語っている。

指揮官の大天狗は神奈子と諏訪子の大質量攻撃に面をくらっていが直ぐに部下の天狗達に指示を出す、天狗達は鶴翼に広がる陣形から一斉に弾幕を発射した、奇しくもそれは神奈子に放ったものとまったく同じだった。

破壊の嵐と化した弾幕を目の前にしても三幡は眉一つ動かさない、むしろ楽しみに笑ってさえいる、その程度かと嘲る様に。

目の前に迫る御柱、キャッチボールをする様な気軽さで御柱を掴む、ドンツという怪音とギヂギチと御柱が軋む不気味な音が響き渡り霧の湖を細かく波打たせる。

初弾の一つとは言え地面にクレーターを作る様な威力の御柱を片手で受け止めた事に妖怪達は驚愕する、だが妖怪達の驚愕がそこで終わらなかつた、三幡は更に掴んだ御柱を小枝でも振り回す様に左右に振り弾幕を次々と叩き落としていく、何の技術でもなく能力でもなく正真正銘本当の力だけであの弾幕を払い伏せた。

「この程度かの」

つまらなさそうに粉碎した弾幕の白煙を掴んだ御柱で振るい払う。

「まさか」

三幡は背後からの声に振り返る、白煙の隙間をから紅い月を背に何者かが見下ろす。

『御柱』 メテオリックオンバシラ

頭上には無数の御柱、先程の攻撃より更に大きい、巨大なエネルギーの奔流は御柱の表面を陽炎の様に覆う、莫大なエネルギーを内包する無数の御柱が三幡の頭上より降り注いだ。

『復讐』 海幸彦山幸彦

三幡の宣言と共に宝玉が赤く輝き大小様々の杭や銛の様な弾幕が飛び御柱を迎撃する、着弾と同時に鼓膜が千切れそうな爆発音が響く、結果は相殺、威力は互角。

「なんじゃ、派手なわりに大した事ないのよ、妾はまだまだ余裕じやぞ、そちに妾の相手が出来るとかの」

三幡の顔に余裕が浮かぶ、神奈子は空中で片膝を立て胡座をかき類杖を付いて三幡を見下ろす、そして不敵に笑う。

「そうね、でもあんまり大きな口を叩くともっと大きな口に叩かれるわよ」

三幡の顔をしかめる、嫌な予感がした、咄嗟に横に回避する、その直後さつきまで三幡がいた場所を上下から挟み込む様な攻撃が飛ぶ、ほとんど勘による回避だった、何の音も気配もない、超聴覚を持つ三幡にとって不可解に他ならない。

だがその思考も真横からの打撃によって中断される、三幡の身の丈よりも巨大な何かが三幡の体を薙ぎ払った、そのままノーバウンドで軽く200メートルはある対岸まで吹き飛ばされそのまま勢いを殺さず森の木を幾つもへし折りやつとその勢いは止まった。

人間ならばまともな死体が残らない様な攻撃を受けても三幡はむくりと起き上がり不機嫌そうに服に付いた埃を払うと自分を吹き飛ばした者を睨み付けた。

そこには一匹の巨大な白蛇がいた、牛程度なら軽く一飲み出来る程に巨大、頭だけでも5メートルはあるだろうか、体長なら100メートルを超えるかもしれない、それが一切の気配も感じさせず

に突然現れていた、雪より白い蛇体はとぐるを巻き空中に漂う、赤い眼と赤い口からチロチロと覗く赤い舌が血の様に赤い。

（なんじゃあれは……、太さなら鯨よりもあるの、蛇……なんじゃろうな……あの様に大きな蛇がおるとは陸もなかなかよの、となると妾を叩いたのは尻尾じゃろうな……）

巨大な白蛇は蛇体をうねらせ音もなく移動して来た、よく見れば蛇の頭に誰か乗っている、市女笠に壺装束の童女、両膝を立てしやがみこんでいた。

（確かあの風神の隣におったの……）

白蛇は巨体にも関わらず音もなく風のように速く空中を滑る様に移動する、気が付けば既に目の前にいた、恐ろしいと感じる事も出来ない程心配がない、目の前にいるのにその存在が信じられない程に心配がない。

音もなく忍び寄る狩人としての蛇の特性の著現である。

「自己紹介が遅れたね、私は洩矢諏訪子、ただの地方神だよ」

友達の友達に自己紹介する様な気軽さで諏訪子はそう告げる、白蛇は三幡を取り囲む様に鎌首をもたげその周りをクルクルと回る。

「そしてこの子は『崇り神』ミツヤグシ赤口さま……だよ」

その言葉と同時に白蛇は真つ赤な口を限界まで開き襲いかかってきた、だが三幡は一步も動かない、そして有ろう事かその上顎と下顎をそれぞれの手で受け止めた。

「蛇が竜に勝てる道理など無かるう」

ギリギリと肉と骨が軋む不気味な音をもともせず、むしろ余裕の表情すら浮かべる。

「確かに干支でも巳は辰の後だしね
でも干支を決めたのって神様なんだよね」

そう言うつと諏訪子は柏手を打つ様にパンツと手を合わせた。

三幡の両サイドの地面が捲れ上がり巨大な岩盤が諏訪子の手の動きを模す様に押し潰そうと迫る。

両手を塞がれ身動きはとれない、挟撃、回避不能だ。

岩盤が衝突し重く鈍い音が地鳴りの様に響く、岩盤は砕け土煙が辺りに立ち込める。

「諏訪子、どう？」

土煙を睨み付ける諏訪子の背中に神奈子が声をかける。

「分かんない、もう少し強いと思ってたんだよね、正直心に引つ掛かるレベルであっさりといった感じ」

自分の攻撃が直撃したにも関わらず諏訪子の顔は渋い、廃れた海神とは言え竜神は神の中でも上位の神だ、こんなはずではない、そ

う思う気持ち強い。

「気持ちは分かるけど、こっちは三柱がかりよ、負けないわ、そして負けられないし負ける気もない」

神奈子の意志は固い、絶対に勝つ、そう告げる様に瞳は燃えている。

「まあ……想定よりも弱かったなら御の字だね」

その時だった、今まで聴いた事も無い様な音をたてて風が吹いた、風がそのまま空気の壁になり横殴りの風が吹き抜け立ち込めていた土煙を吹き飛ばした。

「お主らは随分と礼もわきまえぬ事を言うの」

三幡は変わらずにそこにいた、ダメージどころか傷一つ無い、大質量の岩盤の波を受けても潰れない、わざとくらってやったのだとでも言う様にただの一步も動いてすらいなかった。

「想定……想定じゃと？ この妾を想定じゃと？ お主らは妾をみくびるか？ 妾を誰と心得る！ 妾は海神、深き海の深淵の主、海そのものぞ！ お主らに海の深さを想定出来るとでも想像出来るとでも言うのか！ その思い上がり正さねばならぬの、妾の底を想像するなど烏滸がましいと知れ！」

三幡は激怒した、常人には理解しがたい理由が文字通りに三幡の

逆鱗に触れた、赤い瞳は怒りに燃えている。

そして空気が爆ぜた、神奈子と諏訪子の視界はホワイトアウトし、訳も分からぬまま吹き飛ばされ木に叩き付けられる。

全身を強打したせいで肺の空気が一気に吐き出され呼吸困難に陥った。

神奈子は肺に無理矢理空気を押し込む様に大きく息を吸い呼吸を整える、隣の諏訪子も同様だ、ダメージ自体は大したものではない、だが人型をとる以上その構造的な問題はやはり仕方がない、問題は無いが無視は出来ない。

二柱は三幡を睨み付けた、三幡と神奈子達の丁度間を爆心地にする様に地面が凹み焦げている、まるで蛇の様に紫電が地面を這っていた。

「……さっきのは雷か」

神奈子は眉を寄せ呟く、雷とは一億ボルトを超える超エネルギー、雷の絶大なエネルギーは一気に空気を膨張させ、その膨張スピードは音速を超える、そのエネルギーと音速を超える衝撃波が二柱を吹き飛ばしたのだ。

「妾は竜神ぞ、不思議ではなかつた」

「そうだったわね」

神奈子はヨロヨロと立ち上がり静かに空を指差した、紅い月は煌々と輝いている。

「私は八坂神奈子、風神はただ風を操る神ではない、天候を司る農耕神よ」

三幡はだからどうしたと薄く目を開け、神奈子を見下す。

ゴロゴロと空が唸った、三幡が見上げるとそこに紅い月は無い、煤を巻き上げた様に黒い雲が月を隠していた、まるで三幡の頭上を狙う様に極々小規模だが異様で不自然な積乱雲が発生していた。

ザツとバケツをひっくり返した様に雨が降りだす、機関銃の様な雨音が夜の静寂を塗り潰す、神奈子は苦い顔で三幡を睨み付ける、苛立ちと悔しさが混じったそんな瞳。

「農耕神は四季を読み、天を見、地を見、人を見、そして天候を操る、天候のバランスー、自然と環境の調律者」

「何を怒っておるのじゃ、それと妾は横文字は苦手じゃぞ」

「怒ってる……ね……」。

確かに私は怒ってるわ、でも貴方に対して怒ってる訳じゃない、だから気にしなくていい……」

そして大きく一拍間を空ける、言い訳の様な躊躇い、自分への言い訳を言った。

「この怒りはただの八つ当たりだから」

空が割れ空気が裂けた、体を引き裂くかのような衝撃が三幡の体を駆け抜ける、よろけ膝を付こうかというのを寸で堪えた、膝を付

くなんて事は三幡のプライドが許さない。

「流石に龍は丈夫ね……、普通なら体が爆散してもおかしくないのに」

そう言う神奈子の顔に余裕は無い、これで倒せなかったのが予想外だった……訳ではない、渾身の一撃で相手を倒せなかった訳でも力を使い果たす様な一撃だった訳でも無い、神奈子がやった事は落雷をぶつけただけに過ぎなかった、規模が大きい事や自然現象に過ぎない落雷を狙って落とした等様々な要素があるが神奈子にとってどれも些細な事に過ぎない。

神奈子の余裕の無さは苛立ちの表れ、農耕神である神奈子にとってこんな事に天候を操る力を使う事が腹立たしいのだ、神奈子にとって自分の天候を操る力はいくまで自然の流れに沿うもの、時に豊穣を与え、時に飢饉を起こし大きな流れの中で自然に恵みを与える、それをこんな事に使う事が腹立たしく、予想はしていたものの一撃で終わらなかつた事、つまりこの天候を操る力をまだこんな事に使わなければいけない事が腹立たしかつたのだ。

「でも良かったわ……、ちゃんとダメージは有りそうね」

立場は換わつたと言う様に神奈子は薄く目を開け三幡を見つめる。

「……何をこの程度でいきがる、腹が立つの」

「そうね、まだまだこれからだわ」

神奈子はもう一度天を指差した、乾を指差した。

三幡も二度も黙って見てなどいない、神奈子が天を指差して一拍もおかずに神奈子に接近しようとした。だが、それはならなかった。

「二対一だつて忘れてない？」

土で出来た手が三幡の足をつしりと掴んでいる、絶対的な拘束力があつた訳では無い、振りほどける、だが一秒数える間もないがラグが出来た、それは圧倒的な隙に他ならない。

そして神奈子は宣言した。

『神鼓』 御柱神龍大太鼓

ドン！ 閃光と共にそんな音がした、頭の中で太鼓を打つた様な音が地面と空気を振動させる、一億ボルトを遥かに超えた電撃が脳天から足先へと一気に駆け抜けた、大自然そのものの驚異。

だが、その程度だ、一つ二つ直撃しようとして三幡はこの程度なら多少堪える程度に過ぎない、一つ二つなら。

雷は一つ二つではなかった、太鼓の連打の様に雷が三幡の頭上に降り注ぐ、視界は閃光にまみれその役目を果たさない、鳴り響く音は絶音、既にそれを音と認識出来る者などいない。

神奈子はそれを黙って見詰めている、幻想郷を守る、その意志は固い、邪魔になる拘りやプライドなどは仲間達の手を取った時に捨

てた、その残りカスさえ今捨てた。

ズンツ 神奈子は雷の音とは違うそんな音を聞いた気がした、違和感があった、何か体の中から響く様な音だったからだ。

「神奈子！」

諏訪子が叫ぶ、青ざめた顔で自分を見る諏訪子に神奈子は不自然さを感じた、諏訪子は神奈子の顔を見ていない、普通は青ざめるにせよ人に呼び掛けるなら顔を見るのではないだろうか？ 人と視線を合わせるのが苦手な人もいるだろう、でも諏訪子はそんなタイプのヤツじゃない、それに諏訪子の視線は何かから視線をそらしている様では無い、むしろ何か一点を見詰めている、何か一点を見て青ざめている、そう……丁度胸の辺りだろうか。

神奈子の視線は自然と自分の胸に落ちた、神奈子はより一層の違和感を覚えた
胸に何か生えている。

胸の丁度左側、太さは手首くらいだろうか？ 生えているのは金属の棒、いや……既に分かっている、生えているはけじゃない、勿論刺さっているのだ、確認していないが背中も同じ様な感じだろう、ものも見事に貫通している。

咳とともに口から血が溢れた、妙に肌の白く花が高い連中が神の血だと言って赤い酒を飲んでいた、場違いにもそんな事を思い出していた。

全然似てないじゃないか……。

諏訪子が駆け寄って来る、それを片手で制し敵を睨み付けた。敵は衣服のあちらこちらを焦げさせ同じ様に神奈子を睨み付けている。

「よつもやつてくれたの……、折角の服が台無しじゃ」

余裕とも取れる口上だったがそれが虚勢である事は三幡の上下する肩が物語っていた、だがその程度、あれだけの落雷を受けまだ立つて口をきいている、神奈子は苦いものを感じた。

「……まあよい、そなたの負けじゃな、さて……後はお主じゃな」

三幡は諏訪子を見詰め厚く重ねられ着物の雷で焦げたものを脱ぎ捨てる、普通の着物程度の厚さになり肩が軽くなったのか呼吸を整え浅く抜ける様に息をつく。

「……残念、私は敗けてないわよ」

神奈子がそう言う、三幡は心底分らないという目で神奈子に振り向く。

神である神奈子にとって肉体の損壊自体がその存在に重篤な影響はない、たが肉体を持つ以上あくまで神としての存在も肉体に引張られる、神としての活動に大きな支障をきたす、胸を貫かれた神奈子を見た目同様に神としてのダメージを大きいのだ、同じ神である三幡にはそれが分かる。

神奈子にはもう何も出来ない。

「世迷い言を」

三幡はつまらなさそうに言う、だが自分が有利とでも言う様に神奈子は血の伝う唇を引き伸ばし薄く笑う。

「……貴女は勘違いしてるようね、大事なものを……見落としてる」

「なんじゃ、お主は前座であっちの娘が本命か？」

諏訪子を指差しそう言う。

「んっ……惜しいわね、……20点」

「20点は惜しくなろう」

「いや……惜しいわ、とても惜しい……」

そう言うって神奈子は自分の背後を指差す。

その指は湖の岸よりも先、湖よりも更に先、湖の対岸を指差していた、それを見て三幡は神奈子の思惑を悟った。

神奈子が指差したのは山を背景に描かれた安倍晴明セーマン紋、その五芒星とそれを囲む円が熾炎の様な光を放ち魔法陣を描いている、大きさが尋常では無い直径にして100メートルは有ろうか、巨大な円は陸の上の星座の様だった、その星座を作る一つ一つの星は山の神と妖怪達、山の神々と妖怪達はその体を使って作った魔法陣なのだ。

三幡の顔に初めて焦りが見えた、あれは不味いとその力の奔流を分析するよりも早く本能的にそう思った。

山の妖怪達の力は三幡に比べれば小さい、三幡が百だとしたら妖怪一人一人は一程度かも知れない、だが1+1も延々と足せば百を超える、一騎当千に非ずされど一騎当一、つまり千騎当千。

三幡は回避を最優秀にした、魔法陣は一つの陣形、あの規模なら方向転換は出来ない、その上で叩けばいい、どんな術も使わせなければいい、そうすれば千騎当千も一騎当一のまま叩きふせる事が出来る、そう横に移動するだけでいいのだ。

だがそれは叶わない、足に根が生えた様に地面から離れない、岩で出来た手が三幡の足を掴んでいた。

「逃がさないよ」

大地に祈る様に両手をつき諏訪子が言う。

「私が前座でも諏訪子が本命でもなく私達はただの囷……取るに足らぬと貴女が無視した者達の力を知りなさい」

体を維持出来ず半透明になった神奈子がそう言う。

霞とも区別がつかない程その体が薄らぐ、胸に刺さっていた杭がカランと乾いた音をたて地面に落ちる。

そして神奈子は最後に言った。

「最後に貴女をほふり去るものの名前を教えてあげる……」

『神妖習合』 魍魅妖怪神威災厄砲

深紫色の閃光が視界を埋め尽くした。

第二十八幕 神が故に the good (後書き)

読んで頂いた皆さん、ありがとうございます。
どうも亥紙です。

またまた長く空けてしまいましたでしたがなんとか投稿に漕ぎ着けました
……、次も長く空きそうです……。
申し訳ないです。

もっとテンポ良く御届けできればとは常日頃思うのですが、如何せんにともかんともです。

さて……、解説

『復讐』 海幸彦山幸彦

三幡のスペカ、海幸彦山幸彦の伝説にも竜宮城が出てきます。
詳しい話は省きますが、弾幕の内容は海幸彦の銚と山幸彦の矢をイメージした感じですよ。

『神鼓』 御柱神龍大太鼓

今年の四月の諏訪大社御柱祭にて奉納された大太鼓で胴の長さ2・5メートル胴回り8メートル余重さは1・2トンの巨大な太鼓です。
東方水竜宮が地霊殿の後の話なので時系列的におかしな気もしますが、この太鼓の製作構想が20年前からやってたそうなのでそれで勘弁してもらえると助かります。

『神妖習合』 魍魅妖怪神威災厄砲

その名のとおり山の神様達と山の妖怪達の合体技です。名前は適当です。

神仏習合の仏を妖怪に変えただけです。

どうでもいい隠しエピソードですがスペカの名前を決める際に妖怪と神のどっちを頭に持つてくるかで妖怪と神が揉めてます。

結局、符名の頭に神を持つて来る代わりにスペカ名の頭に妖怪を持つてくる事で治まりました。

悠長な暇は無いはずなのですがね〜。

では、ではまた次話で……。

第二十八幕 幕裏三（new）（前書き）

いつもどりの二次創作、三幡を山の妖怪達が放った閃光が塗り潰す、そんな戦いの影で行われたもう一つの戦い。

第二十八幕 幕裏三（new）

綿津見三幡とシレネツタは幼馴染みの様な関係であった。

様な関係と濁すのは竜と人魚という種族差による寿命や成長スピードの差、多少の見た目の年齢は弄れる為に幼馴染みと人間の感覚で定義して良いのか人外の幼いをどう定義するのかという理由があるからだ。

そんな前提を抜きにしても当時の三幡とシレネツタを見れば誰もが二人を幼馴染みと思う事だろう。

シレネツタは人であれば4歳頃に水竜宮にやって来た、これまた人で言えば4歳頃になる三幡の遊び相手として連れて来られたのだ。長い寿命、高い知能、美しい歌声、そんな理由だった。

幼かった二人は毎日時間も忘れて遊び、教育係の乳母に二人で怒られたりもした、従者であるシレネツタばかりが叱られシレネツタは不公平だと思い、三幡は申し訳なさそうに伏し目がちに謝る、そんな二人の関係は幼い幼馴染みの様であり仲の良い姉妹にも見えた。

そして時が経ちワタツミの次期候補として教育された三幡とただの従者のシレネツタの関係ははつきりとした主人と従者にならなくなっていき姉妹の様な雰囲気はなくなった、でも三幡にとってシレネツタは数少ない気を許せる相手であり大切な友達だった、シレネツタに

とつても、それは同じだった。

ワタツミを継ぎ竜王になる三幡の回りは常に賑やかだった、三幡を退屈させまいと様々な催しが開かれていた、四季を詰め込んだ三幡の水竜宮は楽園だったのだ。

でも……、三幡は今一人だった。

シレネッタは白蛇の一撃により対岸に吹き飛ばされた三幡を見て不安を抱いた。

本来なら不安を抱く様な事はないはずなのだ……。

綿津見三幡は強い、海を操る力も強いが何より竜という種族が強い、絶大な力を持ち、速く、強靱で、風を操り雷雲を呼ぶ。

シレネッタはそれを十分に知っていたので神が二柱くらい束になったところで不安はない……はずだった。

はずなのだが嫌な予感がした、どうもただの神では無いというのも不安を煽る要因だったが、それ以上に何かある様な気がする、漠然とした感覚を否定する事が出来ない、それにこの取るに足らない

妖怪達の放つ異様な熱気もまた不安を煽る。

三幡は巨大な白蛇の一撃を受け向こう岸まで吹き飛ばされていた、普通なら絶命必至の一撃も竜である三幡の丈夫さを知っているシレネッタに取ってさして不安は無い。

だが自分の大切な主を虐げられ愉快的な気持ちになる様な心は持ち合わせていない。

シレネッタは何故こんな事になってしまったのだろうと思った、そして二人の過去を思い出す。

三幡とシレネッタの二人は偶然この幻想郷に来た、神にも及びのつかぬ神がいるとしたらソイツの仕業に間違いないと思える程の偶然。

そして三幡はそこで希望を見た、もう取り戻せないと諦めたものを取り戻せるかも知れない、鯛や鯉達が舞い踊る水竜宮、薄れ消えたあの物言わぬ三幡を認識すら出来なくなっていった魚達ものたち、鯛鯉蛸烏賊鮪鯖秋刀魚鰯鯨鱒鮭鰻海老蝦蛄蛤鮫鰻蟹海月海豚鮫海星、数えるだけで切りがないくらい仲間を失った。

失うなんて思ってもいなかった、少しづつ魚達が減り喋らなくなりおかしいと違和感を感じ、気付いた時には手遅れでどうする事も出来ずに三幡はシレネッタと二人だけになっていた。

そしてその時シレネッタは誓った、自分は絶対に消えない、主に寄り添い悲しみを少しでも和らげよう自分が消える時は自分の主が消えたその後、天寿を全うされたその後だと……。

だが、三幡の考えは……三幡の気持ちは違った。

それは潮の暖かい日の事、とうとう三幡とシレネッタは二人だけになってしまった、シレネッタは悲痛な思いを隠す主の顔を見て自分への誓いを思い起こす。

その悲しみ寂しさ苦しさを和らげよう寄り添うだけでも出来る事ある、改めて自分に誓ったのだった。

シレネッタは悲しみにくれる三幡を見ていられずその手を取り慰めようとす、だが伸ばした手は届かなかった、三幡に払われたのだ。

訳が分からなかった混乱した、それは未だに理解出来ない事だった、困惑に染まった瞳で見詰めた先には氷の様に冷めきった水のように色の無い三幡の瞳があった。

「妾は部屋へ行く、何かあつたら報せるがよい」そう言い残し三幡は部屋へと去って行った、そして何も無い水竜宮に報せるべき知らせは無く食事を知らせる事ぐらいしか主の部屋に入る口実も無く、また三幡がシレネッタを呼ぶ事もほとんどなかった。

訳が分からず今までの様に極自然に当たり前に親しげに声をかけた、だがそれも「何か用があるのか」と拒絶された。

途方にくれたがそれでも三幡を信じた、自分の立てた誓いは忘れなかった。

そして今、希望を見付けた三幡は生き生きとしていた、笑った顔などあの日以来だっただろう。

シレネッタは静かに思い起こす、これが無事に終わればあの日の三幡様が帰ってくる。

「王女様を助けに行かないと」

シレネッタは加勢に加わるべくそのヒレで空気を蹴った。

「こんなに月が紅いから気分が高揚して踊り出したいのは分かるけど、いったいどこへ行くというの？」

シレネッタを呼び止める声は頭上から聞こえ上空を見上げるとそこにはレミリアがいた。

薄桃色のドレスは紅い月に照らされ闇夜に紅く滲む、紅い瞳は射貫く様にシレネッタを見詰めている。

(こんな時に……！)

「あれだけ血を流してもピンピンしているなんて人魚の再生力もなかなかね、やはり心臓でも潰さないといけないのかしら？」

シレネッタは一刻も早く三幡の元へ向かいたい、何とか撒こうとそのヒレを速めた。

「焼き直してみたいね、お前は私が倒すと決めているんだ勝手に行くな」

レミリアの紅い槍が投擲される、槍はシレネッタの目の前を掠め思わずヒレを止めてしまう。

「その人魚、人の話は聞け」

「私は鳥にも獣にも混じれぬ畜生に構う暇など無い」

レミリアは溜め息をつきゆっくりとシレネッタの目の高さに降りてくる。

「そうか……、意見のすれ違い価値観のずれだな。仕方ない、なら仕方ないな。」

厳正なる幻想郷のルールに則って白黒つけようじゃないか、スペルカードルールだ」

レミリアが払う様に横に手を振ると紅い槍が現れその手に収まる。

「勝手なヤツめ」

こんなところで足止めをくらう暇など無い、シレネッタも同じ様に三ツ又の槍をその手に出現させた。

「妖怪とは本来そういうものだろ？ 自分の価値を曲げてはその存在すら危うくなる、それが妖怪だ」

レミリアは槍を両手で持ち半身になり低く構える、右手は柄本に左手は添え柄の中程を緩く支える、矛先は地を這うかの様に低くその構えは臥して獲物を狙う豹を思わせた。

シレネッタも半身になり腰だめに槍を構える、三ツ又の矛先は敵の喉に狙いを定め例え避けようと横の刃が首を引き裂く、必殺の構え。

雷鳴をバツクに二人は空中で対峙する、片方は余裕と愉悅の笑み、もう片方は焦りと焦燥のに染まっている、すぐにでも三幡の元に向かいたいシレネッタにとってこの時間は異様に長く空気は鉛の様に重く感じた。

「何をそんなに焦ってるの？ そんなに汗かいて目に汗が入るわよ？」

「人魚は汗をかかない」

「あらバレた？ でも焦ってるのは当たってるでしょ、楽しみなさいこんなにも月も紅い楽しい夜なのに」

「煩い、口が多い」

「じゃあ、お前を完全に黙らせてお前の分も私が喋る事にするわ、さあ狙いはお前の心臓よ」

レミアの槍が更に低く引き絞る弓の様に体を絞り臨戦態勢に入った、シレネッタは背中に冷たいものを感じ体が強張る、それが悪手で有ったとしてもシレネッタは受けに回る事しか出来なかった。それだけのプレッシャーをレミアは放っていたのだ。

「いくわよ……その心臓、貰い受ける」

レミリアとシレネッタの勝負は呆気ないものだった、レミリアが心臓目掛けて放った刺突に対しシレネッタは反応する事すら出来ずその一撃を心臓で受け止める事となった、シレネッタは胸に刺さった槍によって木に磔にされている。

「ん……、パチエに見せてもらった漫画みたいに勢いを付けて突いたら上半身だけ千切れて吹っ飛ぶと思ったけど、そんな事はなかったわね、槍と刀じゃ違うのかしら……」。

それにしても……思ったよりしぶとい、心臓を突いても死なないなんて予想外よ、でも私の勝ちよね、貴方のゲームオーバー、フランじゃないけどコンテニユーは出来ないから」

レミリアは小さな翼をパサパサと揺らしもう興味が無くなったのか一瞥も無く、振り向きもせず三幡のいる方角へ飛んで行った。

シレネッタはそれを阻止する事も出来ない、一言呼び止める事も指一本すら動かない。

胸に大穴があき、肺に溜まった血を吐き出す体力も残っていない。それでもシレネッタは死なない、強靭な生命力と人魚の体内構造は人より魚によっている事もありレミリアが針を通す正確さで左胸を穿った為わずかに心臓をそれた事がギリギリのラインを守った。

もつと大雑把な一撃だったなら死んでいたかもしれない、それは不幸中の幸いだった、だが指一本動かぬ行動不能状態、悔しさと焦燥感が身を焦がす。

結局自分は何も出来ていない。

三幡の元に駆け付けける事も、その敵を排除する事も。

何も出来ない、何も成せない、自分の誓いを守る事も出来ない。

血ではない熱い液体が頬を伝う、己の無力を呪った。

ふと重力がなくなったのかと思うと地面に叩き付けられる、レミアの作り出した槍がその形状を維持できず消滅したのだ。

地面に叩き付けられてもシレネッタはもはや痛みも感じ無い、身体のような機能が異常をきたしている、そもそも槍で突かれる以前に神奈子の御柱による攻撃で既に身体は限界、それ程のダメージが蓄積されたのだ。

シレネッタはそのまま眠ってしまったいたい感覚にとらわれる、膨大な出血のせいで意識は朦朧としている、今も止めどなく流れる血は見るものに死を連想させるだろう。

意識が無い方が当然、意識があるだけで奇跡的、そう思ってもなんの不思議もない、現にシレネッタもそう思っていた。

意識が徐々に薄まっていく、でもシレネッタは諦めたくなかった、まだ何かあるのではと思わずに言われなかった。

状況は絶望、成す術は無い、そう思った　　が。

シレネッタは震える指を動かし胸に空いた穴に手を差し入れ赤黒い何かを取り出す、それは赤く弱々しくビクビクと動く物体、キモ、脈打つシレネッタの心臓。

そしてシレネッタは自分の心臓にかぶり付いた、林檎にでもかじりつく様に、グチュグチュと音をたて咀嚼する。

端から見れば狂気の沙汰、気が触れたと思うのが当然だろう、だがシレネッタは気が触れたのではなかった、賭けに出たのだ。

人魚の生きキモには不老不死を与える力、強い再生能力を与える力がある。

シレネッタは自分のキモを食べる事で回復をはかったのだ、それは勿論危険な賭け、回復する確証は無い、何せ自分のキモを食べる等という暴挙にでた人魚なんて存在しないからだ、だがそれしかなかったそれ以上の手段などなかった。

心臓を失えば死ぬという現実、キモを食べば不老不死を得る幻想、シレネッタはその幻想に賭けたのだ。

シレネッタは自身のキモの最後の一片まで咀嚼する、ほとんど飲み込んだ様なものだったが全て欠片も残さず食べた。

これから自分がどうなるのかシレネッタには分からない、後は天に任せるしかない。

シレネッタはこびりついた血を拭うこともなく、そのまま静かに意識を失った。

第二十八幕 幕裏三（new）（後書き）

読んでくださった皆さん、ありがとうございます。
どうも亥紙です。

今回はオリキャラメイン回でした。

世の中どんな形であれ力がないと、力が足りないと何も出来ないも
のです。

そんなお話。

今回のパロディ

「いくわよ……その心臓、貰い受ける　　！」

その心臓、貰い受ける

！が本当ですが『fate/stay

night』よりランサー　クーフリーンのゲイボルクの真名解

放時の台詞。

レミリアにもこの時のランサーの構えを取ってもらってます。

「ん……、パチエに見せてもらった漫画みたいに勢いを付けて突
いたら上半身だけ千切れて吹っ飛ぶと思ったけど、そんな事はなか
ったわね、　槍と刀じゃ違うのかしら……」。

それにしても……思ったよりしぶとい、心臓を突いても死なないな
んて予想外よ、でも私の勝ちよね、貴方のゲームオーバー、フラン
じゃないけどコンテニューは出来ないから」

分かりにくいですが『るろうに剣心』斎藤一VS魚沼宇水戦のシーン、斎藤一の牙突零式を受け上半身が千切れ壁に磔にされるシーンの事です。

ちよつと古い漫画ですしきつと幻想郷にもあるかも……非想天則の美鈴ルートで漫画があるのは描写が有りましたね。

後はEXTRAボスフランドールの「あなたがコンテニュー出来ないのさ」パロディというか真似というかネタ。

ちなみに

霊夢を倒したシレネッタを倒してレミリアは超ご機嫌です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6701h/>

東方水竜宮

2010年12月17日10時55分発行